

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

近代ギリシャのオリンピア競技祭の展開と変容
に関する研究

Development and Transformation of the Olympia
Games in Modern Greece

2010 年 7 月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

真田 久

Sanada, Hisashi

本論文の構成（目次）

目次	i
序論		
1. 本研究の目的	1
2. 用語の定義、先行研究の検討と本研究の課題	2
3. 本研究の意義	9
4. 各章の概要と本研究で用いる主な文献資料	10
序章 ドイツとイギリスにおけるオリンピック競技会復興の試み	18
第1節ドイツにおけるオリンピック競技会への関心	19
1. グーツムーツ(GutsMuths)とオリンピック競技会	19
2. ドイツ人体育家（Turner）によるオリンピック競技会	22
第2節イギリスにおけるオリンピック競技会復興の試み	24
1. ウェンロック・オリンピック	24
2. リバプール・オリンピック	29
第一章 ギリシャ独立と古代オリンピア競技祭復興の始まり	35
第1節 ギリシャの独立と古代文化の逆輸入	36
1. トルコ支配下におけるギリシャ人の生活	36
1-1. 独立前のギリシャ人の身体活動	36
1-1-1. 独立以前のギリシャ人の生活	36
1-1-2. 独立以前のギリシャ人の身体活動	37
1-1-3. ビシニア地方におけるオリンピック競技会	43
1-2. ギリシャ人の地中海交易の拡大	46
1-3. 文学における古代オリンピア競技祭への言及	50
1-4. ギリシャの独立による民族の覚醒	51
2. 新古典主義による都市建設	53
2-1. ヨーロッパ建築家による都市建設	53
2-2. ギリシャ人建築家による都市建設	54
3. 古代文化（古典言語）への回帰	55

第2節	独立直後の体育家と考古学者による古代オリンピックの再発見	56
	56
1.	ギリシャにおけるドイツ人体育家の活躍	56
2.	ギリシャ人体育家による古代オリンピック競技祭の宣揚	57
3.	ドイツ人考古学者の活躍	67
3-1.	オリンピックの調査	67
3-2.	ギリシャ国王のオリンピック訪問	67
3-3.	オリンピック発掘の声明	68
第3節	ギリシャ知識人による古代オリンピック競技祭復興の提唱...	71
1.	古代オリンピック競技祭復興に関する Soutsos の提唱 (1835 年)	71
	71
1-1.	Soutsos の提唱	71
1-2.	内務大臣 Kolettis の復興案	72
2.	「国家産業振興委員会」の設置-政府のオリンピック復興案 (1837 年)	76
3.	知識人による古代オリンピック競技祭復興の声明 (1838 年)	82
第4節	ギリシャ人による古代文化再発見	85
第二章	第一回オリンピック競技祭の開催	88
第1節	第一回オリンピック競技祭の理念	89
1.	E.Zappas による古代オリンピック競技祭復興の提唱 (1856 年)	89
1-1.	E.Zappas 登場の背景	89
1-2.	Zappas による古代オリンピック競技祭復興のための 財産供与	91
1-3.	政府と Zappas との交渉	92
2.	オリンピック競技祭の設立に関する王室条例	95
2-1.	オリンピック競技祭の設立に関する王室条例の内容	95
2-2.	オリンピック競技祭の目的	98
第2節	第一回オリンピック競技祭の組織と出場者	101
1.	オリンピック委員会の創設	101
1-1.	中央オリンピック委員会	101

1-2. 地方オリンピック委員会	101
第3節 第一回オリンピック競技祭の開催	103
1. 第一回オリンピック競技祭における産業博覧会の規定	103
2. 第一回オリンピック競技祭における運動競技の規定	105
3. 第一回オリンピック競技祭における産業博覧会の開催	107
4. 第一回オリンピック競技祭における運動競技の開催	111
5. 第一回オリンピック競技祭の国内的・国際的反響	113
5-1. ドイツでの反応	113
5-2. イギリスでの反応	114
5-3. ウェンロックオリンピックへの影響	115
5-4. ギリシャ国内の反応	119
第4節 第一回オリンピック競技祭の文化的特徴	122
-古代オリンピック競技祭と比較して		
1. 競技祭の理念に関して	122
2. 競技祭の運営（オリンピック委員会とヘラノディカイ）	126
3. 競技種目と出場者	125
資 料	130
1. 古代オリンピック競技祭と宗教	130
2. 古代オリンピック競技祭優勝者への賞	132
3. 古代の競技施設（スタディオン、ギムナシオン、パライストラ）	138
4. パンアテナイ競技場	146
5. ギリシャ競技の衰退とアマチュアリズム	147
第三章 第二回～第四回オリンピック競技祭の展開と変容	159
第1節 第二回オリンピック競技祭（1870年）	160
1. 第二回オリンピック競技祭の理念	160
1-1. Zappas の遺書と第二回オリンピック競技祭開催の王室条例	160
1-2. ドイツ人 Ziller による古代競技場の復元	166
2. 第二回オリンピック競技祭の規定と競技内容	170

2-1. 第二回オリンピック競技祭の産業展示会規定と製品の分類	170
2-2. 第二回オリンピック競技祭の運動競技の規定	172
2-3. 競技会の支出見積もり	178
2-4. 第二回オリンピック競技祭の産業博覧会開催	179
2-5. 第二回オリンピック競技祭の運動競技の開催	181
3. 第二回オリンピック競技祭の組織と出場者	183
3-1. オリンピア委員会	183
3-2. 産業製品カテゴリーと出展者	184
3-3. 運動競技の競技者	189
4. 第二回オリンピック競技祭の特徴	191
第2節 第三回オリンピック競技祭（1875年）	195
1. 第三回オリンピック競技祭の理念	195
1-1. アマチュアリズム的考え	195
1-2. オリンピア競技祭と若者のトレーニング	197
2. 第三回オリンピック競技祭の規定と競技内容	199
2-1. 第三回オリンピック競技祭における産業博覧会規定と オリンピック委員会	199
2-2. 第三回オリンピック競技祭における運動競技規定	203
2-3. 第三回オリンピック競技祭における産業博覧会と 芸術的競技	205
2-4. 第三回オリンピック競技祭における運動競技種目と 出場選手	210
3. 第三回オリンピック競技祭の特徴	215
第3節 第四回オリンピック競技祭（1888,1889年）	216
1. 第四回オリンピック競技祭の理念	216
1-1. ザッピオン博覧会場の設立	216
1-2. K. Zappasによる芸術・知的競技の充実	220
1-3. オリンピア競技祭と平和の観念	221
2. 第四回オリンピック競技祭の規定と競技内容	223
2-1. 産業製品競技会の分類	223
2-2. 運動競技規定（1888年）	224
2-3. 知的競技の規定	229

3.	第四回オリンピック競技祭の開催と出場者	231
3-1.	産業博覧会、芸術・知的競技の開催と出場者	231
3-2.	運動競技の開催と競技出場者	234
4.	第四回オリンピック競技祭の特徴	239
第4節	第二回から第四回オリンピック競技祭の特徴と変容	241
1.	競技理念の変容	241
2.	競技種目の変容	241
3.	オリンピック委員会	243
第四章 近代国際オリンピック競技会の受容と		
	Coubertin との対立	244
第1節	Brookes による国際オリンピック競技祭開催計画と 全ギリシャ競技会	245
1.	アテネでの国際オリンピック競技祭開催の計画	245
1-1.	Brookes による国際オリンピック競技祭開催の計画	245
1-2.	Brookes と Coubertin の邂逅	247
2.	ギリシャにおける全ギリシャ競技会の開催	249
2-1.	Phokianos によるギリシャ体育協会の設立	249
2-2.	全ギリシャ競技会の開催とその特徴	252
第2節	近代国際オリンピック競技会（アテネ大会）の受容	253
1.	近代国際オリンピック競技会開催の背景	253
1-1.	ヨーロッパにおける国際博覧会の発展	253
1-2.	オリンピック遺跡の復元	255
2.	近代国際オリンピック競技会のアテネ開催の決定	256
2-1.	1894年のオリンピック復興会議の開催	256
2-2.	第一回近代国際オリンピック競技会開催地の アテネ決定	257
3.	近代国際オリンピック競技会へのオリンピック競技祭の 影響	260
3-1.	オリンピック組織委員会と財源	260
3-2.	近代国際オリンピック競技会の競技種目	262
3-3.	近代国際オリンピック競技会の理念	264

第3節	近代国際オリンピック競技会のギリシャでの	
	継続開催の要求	267
1.	ギリシャ国王による近代国際オリンピック競技会	
	継続開催の発言	267
1-1.	ギリシャ国王の挨拶とその波紋	267
1-2.	Coubertin とギリシャとの対立	268
2.	中間オリンピック競技会開催案	272
2-1.	中間オリンピック競技会開催の構想	272
2-2.	中間オリンピック競技会開催の理念	275
第4節	ギリシャ独自のオリンピア競技祭と	
	近代国際オリンピック競技会	282
結 章	近代ギリシャのオリンピア競技祭の展開と変容	284
1.	オリンピア競技祭の理念の変容	285
2.	オリンピア競技祭を支えた組織の変容	287
2-1.	運営組織の変容	287
2-2.	競技会場の変容	288
2-3.	競技祭の財政	288
3.	競技種目と出場者の変容	289
3-1.	運動競技種目の変容	290
3-2.	産業製品競技の変容	290
3-3.	芸術的競技の変容	291
3-4.	賞の変容	292
年 表	295
文 献	297
謝 辞	304

序 論

1. 本研究の目的

本研究は、19 世紀に行われた近代ギリシャのオリンピック競技祭の文化要素（理念、運営組織、競技規則など諸規定、競技祭への出場者）が、各大会においてどのように規定されていたのかを明らかにすることで、このオリンピック競技祭の展開と変容を明らかにするものである。

1830 年代の初めにトルコからの独立を果たした近代ギリシャでは、文筆家 Panagiotis Soutsos (1806～1868 年) の提唱を契機として、バイエルン出身のギリシャ王室の積極的ななかかわりにより、古代オリンピック競技祭の復興が志向された。そして Soutsos やドイツ人考古学者らの活躍に刺激を受けたギリシャ人 Evangelis Zappas (1800～1865 年) による財産供与により、1859 年にアテネで最初のオリンピック競技祭が、政府の支援のもと、全ギリシャ的な規模で開催された。この競技祭は、産業振興を目的に行われ、運動競技のみならず、産業製品博覧会に力点が置かれているものではあったが、古代のオリンピック競技祭の復興をギリシャ市民は歓迎した。その後紆余曲折を経ながらも、このオリンピック競技祭は 1870 年、1875 年と開催され、1870 年にはドイツ人考古学者 Ernst Ziller (1837～1923 年) により復元された古代アテネの競技場で、盛大に開催された。さらに 1888 年と 1889 年にも、オリンピック競技祭がアテネで開催された。その後 1891 年と 1893 年には、オリンピック競技祭を引き継いだ全ギリシャ競技会が、アテネで開催された。

このギリシャ独自のオリンピック競技祭は、“ザッパスオリムピック” (Zappas Olympics) 或いは“ギリシャオリムピック” (Greek Olympics) とオリムピック史では称され、産業博覧会を優先させた小規模な祭典として扱われている。しかしながら、それらの多くの先行研究はギリシャの史料を吟味しないで述べられている面があり、ギリシャに残されているギリシャのオリンピック委員会の報告書や新聞記事などと、競技の内容や規模などの点で大きなずれが見受けられる。

近年になり、ギリシャの史料を用いての研究が少しずつなされるようになってはいるが、それらもギリシャ政府側の公式文書のみに基づいて考察されているため、的確な把握がなされていない点が散見される。

そこで本研究では、当時のオリンピック競技祭を主催したギリシャ国内のオリンピック委員会の報告書、オリンピック競技祭の諸規定などのほか、それらオリンピック競技祭について報じたギリシャ国内や国外の新聞記事などの史料や、ギリシャ王室とつながりの深いドイツの史料等を用いながら、近代ギリシャにおけ

るオリンピア競技祭について、その展開と変容を明らかにするものである。

史料による再構成については歴史学的手法を用いる。また、オリンピア競技祭を構成する文化要素として、競技祭の理念、運営組織、競技規則などの諸規定と出場者を抽出し、これらがどのように変容したのかを考察の視点とする。これらの点は、競技祭を構成する重要な要素であり、これらの変化を比較考察することで、競技祭の変容の過程を追究することが可能になるからである。

競技祭の理念とは、競技祭の目的であり、何のためにオリンピア競技祭を行おうとしたのか、古代オリンピックとどのような関連を理念の中に見いだせるのか、ということである。

運営組織とは、競技祭を実質的に運営した組織委員会やオリンピア委員会のことであり、どのようなメンバーがこの委員会に招集されていたのか、各地方の行政組織とどのように関連づけられていたのか、という運営面から各回の競技祭の特徴とその推移を推し量る事ができる。

競技規則などの諸規定は、競技祭全般に関わる規定や、運動競技や産業製品、文化芸術的競技種目など、競技種目ごとの規定のことである。これらの参加規定や勝敗の決定方法に関する規定などを競技祭ごとに比較することで、競技種目の推移とその特徴を追う事ができる。

出場者は、各競技種目に、ギリシャのどの範囲（地理的、階層など）から参加したのか、国外の参加者はどのような状況であったのか、ということを知る上で重要である。

以上の点は、競技祭を構成する文化要素として重要であると思われる。これらの文化要素の分析から、独立後に開催されたオリンピア競技祭の特徴の一つである、古代文化への回帰という面にも着目し、オリンピア競技祭の開催に際して、古代文化の何を継承しようとし、どのように当時のギリシャ社会に、定着させて生かそうとしたのか、ということについても明らかにしたい。古代の文化を当代社会に復興することの意味合いの一例を提示することができるからである。

以上のことを明らかにすることは、古代オリンピア競技祭の復興として始められた近代国際オリンピック競技会の特徴を相対化することにもつながる。Pierre de Coubertin（1863～1937年）によって創設された近代国際オリンピック競技会ではあるが、第一回近代国際オリンピック競技会が行われたアテネには、独自のオリンピア競技祭の経験があったのであり、両者の関係が示唆されるからである。国際的な規模で始められたオリンピック競技会の復興を、ギリシャ側の視点から見つめることにより、複眼的な視点でオリンピック復興の過程をとらえる機会を提供すると思われる。

2. 用語の定義、先行研究の検討と本研究の課題

本研究で用いる用語を次のように定義して用いる。

オリンピア競技祭：19世紀近代ギリシャで四回行われた競技会

(原語：Ολύμπια, Ολυμπιακοί αγώνες)

オリンピア委員会：上記のオリンピック競技会の運営組織

(原語：Επιτροπή Ολυμπιών)

オリンピア・遺産管理委員会：上記のオリンピア委員会が1869年に名称変更されたもので、Zappasの遺産管理も併せて行う委員会

(原語：Επιτροπή Ολυμπιών και κληροδοτημάτων)

古代オリンピア競技祭：古代ギリシャのオリンピアで行われていた競技会

(原語：Ολύμπια, Ολυμπιακοί αγώνες)

近代国際オリンピック競技会：(原語：The modern Olympic Games)

Coubertinの提唱により、1896年にアテネで始められた国際的なオリンピック競技会。通常は近代オリンピックと表記されるが、本研究では、ギリシャのオリンピア競技祭と区別するために、「近代国際オリンピック競技会」と表記する。ただし、前後の文章の関係から、「近代オリンピック」と表記する場合もある。

オリンピック競技会の復興に関する先行研究の中で、近代ギリシャの“オリンピア競技祭”に言及しているものには以下のものがある。

- 1) Bourdon, G.(1924) Athenes essai de faire revivre Olympie. Comité olympique français (ed.), Le jeux de la VIIIe olympiade. Paris. pp.19-21.
- 2) Diem, C.(1936) Pierre de Coubertin; Olympische Erinnerungen, Sportverlag: Berlin (reprint) .
- 3) Guttmann, A.(1992) The Olympics: A History of the Modern Games. University of Illinois Press: Urbana and Chicago.
- 4) Lucas, J.(1980) The modern Olympic Games. South Brunswick: New York.
- 5) MacAloon, J(1981) This great symbol; Pierre de Coubertin and the origins of the modern Olympic Games. The University of Chicago Press: Chicago and London.
- 6) Mahaffy, J.(1876) The Olympic Games at Athens at 1875. Macmillan's Magazine 36, pp.324-327.
- 7) Mandell, R (1976) The first modern Olympics. Berkeley: Los Angeles.

- 8) Mandell, R.(1984) Sport:A cultural history. Columbia University Press:
NewYork.
- 9) Redmond, G.(1981) The "Pseudo-Olympics" of the nineteenth Century.
Segrave, J.and Chu, D.(1981 ed.) Olympism. Human kinetics,Illinois,
pp.7-21
- 10) 斎藤正躬(1964) オリンピック. 岩波書店

上記の先行研究の中で、ギリシャのオリンピア競技祭に関する記述には、正確さに欠けたものが多い。例えば **Richard Mandell** は、その年代と種目に誤りを犯している。彼は 1859 年に、レスリングの勝者は乳牛を連れて帰ったと述べている。しかしギリシャの史料によれば、この時のオリンピア競技祭には、レスリングの種目も、乳牛の賞品も存在しない。また 1875 年のマスト登りの種目について、**Mandell** は、「高いマストの先端には太ったがちょうが鳴いていた。それは、がちょうを一番早くつかんだ競技者の賞品であった」と述べている¹。しかしオリンピア競技祭において、がちょうが賞品になったことは史料上見当たらない。また、**John MacAloon** も 1859 年のオリンピア競技祭の開催に至る経過に誤りを犯しているし、最も盛大であった 1870 年のオリンピア競技祭にはほとんど言及していない。そして多くの研究者は、これらのオリンピア競技祭をすべて小規模な、地方の祭り程度に過ぎなかったとしている。しかし例えば、第二回のオリンピア競技祭を取り上げると、3 万人近くもの観衆を競技場に集めて行われている。当時のアテネ市の人口は多く見積もっても 8 万人程度であり、この競技会を小規模な地方の祭りとは言えないであろう。

これらの誤りは、オリンピア競技祭についてのギリシャの史料を用いていないことに起因すると思われる。その点については **MacAloon** が、「現代ギリシャ語に通じた研究者が当時の新聞、雑誌、公文書、書簡などを調査したことはなかった。そのため当のギリシャ人達がオリンピア競技祭をどのように見ていたのかについて、知ることができない。」と述べている通りであろう²。彼らの用いた基本的な史料は、**Georges Bourdon** や **John P.Mahaffy** の報告であり、それらを引用して叙述されてきた。**Bourdon** や **Mahaffy** は、ギリシャのオリンピア委員会の史料などを用いていない点で問題があり、明らかにオリンピア競技祭を揶揄して述べている。**Bourdon** は「(1870 年の)オリンピック競技会は、

¹ Mandell, R(1976) The first modern Olympics. Berkerly: New York, p.32.

² MacAloon, J(1981) This great symbol; Pierre de Coubertin and the origins of the modern Olympic Games. The University of Chicago Press:Chicago and London. p.464.

スポーツ競技と言うより田舎の娯楽市(amusement forains)に過ぎない。……
オリンピア競技祭は存立できるものではないことを2回のオリンピックが証
明した。……世界を動かしたのはフランスの声明(appel français)であった」
と述べている³。MandellはこのBourdonの言をそのまま引用している。

Mahaffyの1875年のオリンピア競技祭の観戦報告では、会場になった古代の
競技場を「楕円形の巨大なシチュー鍋」、円盤を「パン皿」、槍を「箒の柄」に
例えている。そして彼らが“Hellanodikai (競技委員の意、原語:Ελλανόδικης)”
や“Olimpionikes (オリンピック勝者の意、原語:Ολυμπιονίκης)”などの
ギリシャ語を用いるのは場違いであると述べている。さらにMahaffyは競馬を
平行棒と取り違え、誤った競技種目を伝えている。

以上のように、オリンピック史の中では、ギリシャのオリンピア競技祭の記
述には史料的にみて問題があり、史実とかけ離れて論じられている一面が存在
していると言える。

ギリシャの史料を用いながらなされたオリンピア競技祭の先行研究には、以
下のものがある。

- 1) Chrysafis, I.E. (1930) Οι σύγχρονοι διέθνεις ολυμπιακοί αγώνες.
Ethniki Typografia: Athens.
- 2) Decker, W, Kivroglou A. (1997) The first Greek Olympics Games of Zappas
in 1859. Naul, R. (ed.) Contemporary studies in the national Olympic
Games movement, Peter Lang GmbH: Frankfurt am Main, pp.9-18.
- 3) Young, D. (1987) The Origin of the Modern Olympics. The International
Journal of the History of Sport 4-3, pp.271-300.
- 4) Young, D. (1996) The Modern Olympics; a struggle for revival. The Johns
Hopkins University Press: Baltimore and London.
- 5) Georgiadis, K. (2003) Olympic Revival; The Revival of the Olympic Games
in Modern Times. Ekdotike Athenon: Athens.

1)の文献の邦訳は「近代国際オリンピック競技会」であり、著者のIoannis
Chrysafis (1873～1932年)は、1889年の第四回オリンピア競技祭に選手とし
て参加し、ギリシャ体育協会の会長を後に務めた研究者である。ギリシャの体

³ Bourdon, G. (1924) “Athenes essaye de faire revivre Olympie”. Comité olympique français
(Ed.), Les jeux de la VIII olympiade. Paris, p.21.

育やスポーツの発展に貢献した人物であった。この文献には、独立以後の近代ギリシャにおける古代オリンピック競技祭の復興運動の歴史が記されており、特に近代ギリシャのオリンピック競技祭について、オリンピック委員会の報告書や公式文書、当時のアテネの新聞記事などを網羅して述べられている。その意味で彼はオリンピック競技祭やその後の全ギリシャ競技会について、史料に基づいて記述していると言えよう。

しかしその反面、ギリシャの側からのみの記述であるため、オリンピック競技祭の成立に与えた外国の影響や、オリンピック競技祭が外国に与えた影響などについては、ほとんど述べられていない。

2)の文献は、第一回オリンピック競技祭の開催過程について、Zappas とギリシャ王室との交渉内容を詳細に論じており、その点で価値は高いが、王室がオリンピック競技祭の産業博覧会に力点を置いていたことから、極めて異質のオリンピック競技会としている。しかしながらギリシャの市民は運動競技部門を熱烈に支持し、古代オリンピック競技祭の完全な復興を求めていき、第二回オリンピック競技祭では、その要求に応えるべく開催されていることなどから、そのような結論は慎重に再検討されるべきである。ギリシャのオリンピック競技祭の展開の全体を通して分析されなければならない。

Chrysafis の文献を用いてオリンピック競技祭の概要を明らかにしたのが、David Young による 3),4)である。ギリシャの史料に基づいてオリンピック競技祭を歴史的に考察した文献である。彼はオリンピック競技祭と近代国際オリンピック競技会との関連を主張し、後者よりも早く、アテネにおいてオリンピック競技会が復興されていた、と主張する。しかしいくつかの点で、問題を残している。Young は、オリンピック競技祭と近代国際オリンピック競技会との空白期間（1889年から1896年まで）については言及していない。また Young は、Chrysafis の文献を基本にしているため、やはりギリシャでのオリンピック運動に影響を与えたドイツなどの役割については言及されていないのであり、結果的に彼の論は、Chrysafis の域を出ていない。

また、オリンピック競技祭は、ギリシャ人の民族的覚醒として始められたという事実に着目するならば、独立以前、彼らはどのようにして民族的連帯感を維持し、身体活動にそれが具現されていたのかについても言及される必要があるであろう。これらの点については、先行研究では全く触れられていない。

5)の文献は、ギリシャ人の歴史研究者で、国際オリンピック・アカデミーの

主事でもある **Georgiades Kostas** による著作である。彼は、これまでに使われていない近代ギリシャのさまざまな歴史的な史料をもとにして、オリンピック競技会の復興は、多くのギリシャ人の努力が先駆的な下地になって復興されたものであることを示している。

ギリシャ人の立場による、オリンピック競技会の復興研究、という観点からすると、先駆的である。**Coubertin** 一人の功績に帰せられがちなオリンピック競技会の復興について、複眼的な視点でのとらえ方が必要であることを示唆している。

さらに、**Georgiades** の著作では、オリンピア競技祭の復興の中で、芸術的な競技にまで踏み込んでいる。この点でも、それまでのギリシャのオリンピック史研究が、運動競技の変遷のみに偏りがちであったのを改めて、幅広く、とらえようとしているのである。

優れた先行研究ではあるが、いくつか問題も残る。それは第一に、ギリシャの側の視点を強調しすぎている点であろう。ギリシャのみならず、当時のヨーロッパにおける新古典主義の影響やバイエルンの影響などは、どうしても触れなければならないであろう。

また実際のオリンピア競技祭では、運動競技と芸術競技も行われたが、そのみならず、産業製品競技または産業博覧会とともに行われたことについての考察が不十分である。ギリシャのオリンピア競技祭とは、それらすべてを包含したものを指していたのであり、このことの構造を明らかにする必要がある。産業博覧会と運動競技、そして芸術競技の三者の競技の関係性を明らかにすることが重要であると思われる。その意味では、**Georgiades** の文献をはじめ、先行研究では、そのことにまで触れられていない。それら全体を歴史的に分析することにより、ギリシャのオリンピア競技祭の文化的特徴が明らかになるとと思われる。

また、先行研究でのオリンピア競技祭の捉え方は、古代オリンピア競技祭の復興として開催されたこの競技祭が、果たして 1896 年から開催された近代国際オリンピック競技会よりも早く復興されたオリンピック競技会たり得るかどうか、という点に主眼が置かれている。**Chrysafis, Young** や **Georgiades** は、近代におけるオリンピック競技会の先駆としてとらえようとしている。つまり、1896 年の国際的な規模で行われたオリンピック競技会は、ギリシャのオリンピア競技祭の延長線上のオリンピックであり、民族的なオリンピック競技会が、国際的なオリンピック競技会と連動していたことを示そうとしている。

先行研究では、近代国際オリンピック競技会に先がけたオリンピックの復興なのかどうか为中心的な議論にされている。そのような視点も歴史的には重

要ではあるが、むしろ、当時の人々が、オリンピック競技会に何を求めて復興しようとしたのか、ということについて研究することは、その時々には生きている人々に、オリンピック競技会が、遺産としてどのような価値を投げかけたのか、ということをはっきりさせることになるだろう。このような視点は、過去の文化の復興を考える上で、重要ではないかと思われる。このような視点も考察に組み入れたいと思う。

さらに、先行研究では触れられていない重要な問題として、宗教的な問題が存在している。これは古代オリンピア競技祭の終焉と関係した問題である。

古代オリンピア競技祭は、紀元前 776 年から紀元後 4 世紀末まで継続されたが、最終的に終焉するのは、ローマ時代のキリスト教の国教化による、異教祭典禁止令の発令によるものであった。つまり、キリスト教徒が古代オリンピア競技祭を終焉に導いたのである。この意識は、近代のギリシャ人にも認識されていた。1896 年に第一回近代国際オリンピック競技会の報告書の中で、組織委員会の一員でもあったアテネ大学の教授 Spyridon P.Lambros は、次のように述べている。

「Theodosius 帝により古代オリンピア競技祭廃止の勅令が出された。同年かその翌年に Pheidias 作のゼウス像は、おそらくコンスタンチノーブルに運び去られた。8 世紀以上もの間、すべてのギリシャ人から崇められていたゼウス像がなくなっても、オリンピアへの信仰が絶えることはなかったが、キリスト教の振興とともに、まもなく完全に消失してしまった。⁴⁾

ここでは、キリスト教により、古代オリンピア競技祭が滅亡に導かれたことが表明されている。19 世紀のギリシャ人は、ローマ時代のキリスト教の正統と位置づけたギリシャ正教を国教としていた。自分たちの信じている宗教が、古代のオリンピア競技祭を終焉させ、そのオリンピア競技祭を、彼らギリシャ正教を信じる者が復興に関わろうとしたのであった。この宗教的な矛盾をどのように説明し、彼ら自身納得したのであろうか。

この点については、先行研究で触れられたものは管見の限り存在しない。この点についても本研究において考察を試みたい。

以上の先行研究の検討から、本研究で分析しなければならない点は次のよう

⁴ Lambros, Sp. P., Polites N. G.(1896) The Olympic Games B.C. 776. -A. D. 1896: Part First The Olympic Games in ancient times. Charles Beck: Athens. pp.12-13.

なものである。

- ・ 19 世紀におけるギリシャ独自のオリンピック競技祭に関するギリシャの史料、特に 19 世紀のオリンピック委員会などの基本的史料、オリンピック競技祭に関するこれまでの先行研究等により、ドイツやイギリスなど、諸外国との関係を明らかにしつつ、ギリシャ独自のオリンピック競技祭の展開とその特徴を明らかにする。
- ・ その際に、運動競技のみならず、産業製品の競技と産業博覧会、芸術競技の相互の関係を明らかにすること。
- ・ オリンピア競技祭が始められて展開されていく経緯とその内容を、史料に基づいて、そのオリンピック競技祭の文化要素（理念、運営組織、競技の諸規定、出場者）の変容という視点から特徴を明らかにする。
- ・ 理念的な課題に関わって、キリスト教とオリンピック競技祭の復興という矛盾をどのように相克したのか、という点も考察する。
- ・ ギリシャのオリンピック競技祭と、第一回近代国際オリンピック競技会（アテネ大会）との関連を明らかにし、近代ギリシャのオリンピック競技祭のオリンピック史における意義についても考察する。

3. 本研究の意義

近代ギリシャのオリンピック競技祭についてのこれまでの研究では、当時のギリシャのオリンピック委員会の報告書や競技会に関する王室条例など、客観的な史料に基づいて研究されたものが少ない。近年になり、ギリシャ人研究者などにより、ギリシャのオリンピック競技祭の研究がなされてはいるが、それらにおいても、オリンピック競技祭の全体像について研究されているものはない。例えば、産業博覧会の具体的な内容については、どの先行研究においても、ほとんど触れられていない。近代ギリシャのオリンピック競技祭は、運動競技のみならず、産業博覧会の要素もあわせて行われており、産業博覧会の中に、芸術競技的な要素が含まれていたと推測されるのである。芸術競技は Coubertin が、近代国際オリンピック競技会創設の折に、身体と精神の結合という意味で重要視した競技であり、その意味で、オリンピック競技祭における芸術競技の系譜を明らかにすることは重要であろう。従って、運動競技、産業博覧会、そして芸術競技の三者の内容をそれぞれ明らかにすることは、オリンピック競技会のもつ文化的な遺産を明らかにすることにつながるものであり、本研究は、そのような点で意義を有するといえる。オリンピック競技会の持つ文化的複合性を提示することができると言える。

史料による再構成については歴史学的手法を用いつつ、オリンピック競技祭

の文化的要素がどのように変容したのかを分析の視点に加える。オリンピア競技祭の開催に、古代オリンピア競技祭のどのような文化要素を継承しようとし、どのように当時のギリシャ社会に、定着させて生かそうとしたのか、について明らかにしたいからである。古代の文化や伝統を復興する際に、古代の遺産を、当該社会にどのように受け入れるべきなのか、ということ考察する視点を提示できると思われる。

また、Coubertin によって国際的な規模で始められたオリンピック競技会の復興に関しても、ギリシャ側の視点から見つめることにより、複眼的な視点でオリンピックの復興を考える場を提供するものと思われる。

それは、古代オリンピア競技祭と近代ギリシャのオリンピア競技祭との関係、さらには、それとの近代国際オリンピック競技会との関連について、これまでの歴史研究の成果を補完し得るものである。

本研究は、以上のような研究の意義を有するものと思われる。

4. 各章の概要と本研究で用いる主な文献資料

序章では、19 世紀末までのドイツとイギリスにおけるオリンピック競技会復興の試みについて叙述する。第一章では、ギリシャの独立後に、経済的發展を期すために、オリンピア競技祭が構想されたことを明らかにし、第二章では、1859 年の第一回オリンピア競技祭の開催にいたるまでの経緯と古代オリンピア競技祭の要素をどのように解釈して組み入れたのか、について明らかにし、第三章では、1870 年、1875、1888 年に開催されたオリンピア競技祭において、理念、運営組織、競技種目や競技規定、出場者などが、どのように変容していったのか、について明らかにする。さらに第四章では、1896 年にアテネで開催された第一回近代国際オリンピック競技会において、ギリシャ人のオリンピア競技祭の遺産がどのように引き継がれたのか、またそれが、近代国際オリンピック競技会開催後の展開にどのように反映されたのか、ということについて明らかにし、ギリシャのオリンピア競技祭の展開と変容を明らかにする。

本研究で用いる主な文献は次のようなものである。

4-1. ギリシャのオリンピア委員会およびギリシャ政府発行の史料（ギリシャ語の一次史料）

1) Εφημερίς τις κυβερνήσεως του βασιλείου τις ελλάδος. 1832-1869.
（ギリシャ王国発行の官報で、オリンピア競技祭に関わる王室条例や各競技種目に関する規定などが収められている）

2) Επιτροπή Ολυμπίων (1860) Ολύμπια του 1859: Α έκθεσεις τον ελληνικού προϊόντων εν αθήνες. Ethniki Tipographia: Athens.

（「1859年のオリンピア競技祭：アテネにおける産業製品博覧会」：オリンピア委員会が編纂し、第一回オリンピア競技祭に関する要綱を収めたもの。国家印刷局より出版）

3) Επιτροπή Ολυμπίων (1869) Βασιλ. διάταγματα, εγκύκλιοι, διαθήκη του Ευάγγελη Ζάππα και κανονισμός των Ολυμπίων δια το 1870 . Ethniki Tipographia: Athens.

（「Evangelis Zappas の遺言と 1870年のオリンピア競技祭の規定集」：オリンピア委員会が編纂したもので、Zappas の遺言とそれに基づく第二回オリンピア競技祭の規定が収められている。国家印刷局より出版）

4) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1872) Ολύμπια του 1870. Ethniki Tipographia: Athens.

（オリンピア・遺産管理委員会「1870年のオリンピア競技祭」に関する報告書で国家印刷局出版）

5) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1871) Λόγος απαγγελθείς υπο του αντιπροέδρου της επι των ολυμπίων και κληροδοτημάτων επιτροπής, Κυριού Δ. Χρήστιδου την 14 Μαρτίου 1871 ημέραν τις λήξεως της Εθνικής Εκθέσεως της Β'.Ολυμπιάδος του 1870. Ethniki Tipographia: Athens.

（「1870年の第2回オリンピア競技祭について 1871年3月14日に行われたオリンピア遺産管理委員会副会長 Christidos 氏による演説」：オリンピア・遺産管理委員会が編纂し、演説内容を収録したもので、国家印刷局出版）

- 6) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1874) Τα κατά την κατάθεσιν του θεμέλιου λίθου του Ζαπείου. Typographia ton adelphion : Athens.
(「ザッピオンの財政的基盤」：オリンピア・遺産管理委員会の編纂によるもので、新たに建築するザッピオンの財政的な基盤などについて収録したもの)
- 7) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Κανονισμός προς συγχρότησιν της Γ' περιοδικής πανηγύρεως. Athens.
(「第三回オリンピア競技祭開催に関する規定」：オリンピア・遺産管理委員会編纂によるもので、第三回オリンピア競技祭開催に関する規定を収録したもの)
- 8) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1878) Ολυμπίων περίοδος Γ' έτος 1875. Ethniki Typografia: Athens.
(「1875年のオリンピア競技祭」オリンピア・遺産管理委員会が編纂し、1875年開催の第三回オリンピア競技祭に関する要綱と報告書。国家印刷局出版)
- 9) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Βασιλείον τις Ελλάδος. Basiliki Tipographia : Athens.
(「ギリシャ王国」：第3回オリンピア競技祭に関わる国王の王室条例をおさめたもので王室出版局より出版)
- 10) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Ολυμπίων περίοδος 'Γ : Ποίηματα προς μελοποίησιν. Ethniki Tipographia: Athens.
(「第三回オリンピア競技祭：作詞について」：オリンピア・遺産管理委員会が編纂したもので、第三回オリンピア競技祭の芸術的競技の作詞に関する諸規定。国家出版局出版)
- 11) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Περιγράφε διάφορων μεταλλευτικών προϊόντων του Λαύριου και Ωρωπου εκτέθεντων κατά την 'Γ περίοδον των Ολυμπίων. Typographia adelphon perri : Athens.
(「第三回オリンピア競技祭の博覧会におけるラウリオンとオロポスの鉱業製品に関する記述」：オリンピア・遺産管理委員会が編纂したもので、第三回オリンピア競技祭における産業博覧会の鉱業製品に関する諸規定を収録したもの)

- 12) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων(1875), Ολυμπίων περίοδος Γ' έτος 1875 : Ειδικός Κανονισμός κατάταξης των έκθεματων κατά συναγωγάς και κλάσεις. Athens.
(Ολυνπια・遺産管理委員会「1875年の第三回オリンπια競技祭：博覧会の展示の分類に関する諸規定」)
- 13) Anagnostakis, A.(1875) Λόγος Ολυμπιακός : Εκφωνήθεις κατ εντολήν της ακαδημαϊκής σύγκλητου τη 4 Μαιου 1875, επι τη' Γ'. Εορτή των υπό του αοιδιμου Ευάγγελη Ζάππα ιδρυμένων Ολυμπίων. Tipographia adelphon perri : Athens.
(「オリンπικスピーチ：栄光に満ちた Evangelis Zappas により始められたオリンπια競技祭の第三回祭典の 1875 年 5 月 4 日におけるスピーチ」：アテネ大学教授 Anagiostakis によるオリンπια競技祭のあり方に関する演説を収録したもの)
- 14) Kaftanzoglou, L (1880) Τα Ολύμπια εν Φάληρω και το νυν μεταρρυθμιζομενον Ζάππειον. Tipographia Ermou : Athens.
(「ファリロにおけるオリンπιαとザッピオンの改築について」：作家 Kaftanzoglou によるオリンπια競技祭の今後に関する提言を収録したもの)
- 15) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Κανονισμός Δ' Ολυμπιαδός. Ethniki Tipographia : Athens.
(「第四回オリンπια競技祭の諸規定について」：オリンπια・遺産委員会が編纂したもので、1888 年開催の第四回オリンπια競技祭の諸規定を収録したものである。国家印刷局出版)
- 16) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Διαγώνισματα Δ' Ολυμπιαδός. Ethniki Tipographia : Athens.
(「第四回オリンπια競技祭の運動競技会」：オリンπια・遺産管理委員会が編纂したもので、第四回オリンπια競技祭の運動競技の諸規定について収録したものである。国家印刷局にて印刷。)

4-2. 当時のアテネの新聞・雑誌 (ギリシャ発行のもの)

- 1) ΕΣΤΙΑ (1835～1850,1895 年)

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 2) ΑΘΗΝΑ | (1859~1861 年) |
| 3) ΑΥΓΕ | (1859~1875 年) |
| 4) ΑΙΟΝ | (1859~1875 年) |
| 5) ΑΛΗΘΗΑ | (1870~1875 年) |
| 6) ΤΟ ΜΕΛΛΟΝ | (1870~1875 年) |
| 7) ΕΦΙΜΕΡΙΣ ΤΟΝ ΣΙΣΤΙΣΕΟΝ | (1892~1896 年) |
| 8) ΑΣΤΙ | (1892~1896 年) |
| 9) ΑΚΛΟΠΟΛΙ | (1892~1896 年) |

4-3. オリンピア競技祭に関連した主な文献（ギリシャ語）

- 1) Chrysafis, I. (1930) Οι σύγχρονοι διεθνείς ολυμπιακοί αγώνες. (前掲出) Athens.
- 2) Iatridi, D., Ksirogianni, G., Andreaki, G., Zappa, K., Joachimidi, I., Samartzi, P., Tsiami, G. (1989) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων, ΖΑΠΠΕΙΟ 1888-1988. Ministry of Economics : Athens.
(オリンピア・遺産管理委員会、ザッピオン 1888-1998 年)
- 3) Pagon, G. (1837) Περίληψις τις γυμναστικής. Basiliki Tipographia : Athens. (体育入門書)
- 4) Parasarakes, S. (1881) Ολυμπιακοί αγώνες εν Αγγλία. ΚΛΙΩ ; Athens.
(イギリスにおけるオリンピック競技)
- 5) Rangavis, A. (1999) Απομνημονεύματα ΡΑΓΚΑΒΗ. Vivliorama : Athens.
(Rangavis 回想記)
- 6) Vikelas, D. (1886) Απο Νικόπολεο εις Ολυμπίαν. Opeleimon Pion : Athens.
- 7) Vikelas, D. (1895) Οι διεθνείς ολυμπιακοί αγώνες. ΕΣΤΙΑ 19, pp.1-5, Athens. (国際オリンピック競技会)
- 8) Vonolinis, S. A. and Vonolinis, K. A. ed. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν 1. Ekdosis Biomechanikis Epiteoreseos : Athens.
(近代ギリシャの人物大事典。特に Zappas 兄弟についての項目で、オリンピア競技祭についての規定や関係者の演説内容などが収められている。)

4-4. オリンピア競技祭に影響を及ぼしたドイツに関する主な文献

- 1) Brossmer, K. (1931) Quellenbücher der Leibesübungen. Vol.6, Dresden.
- 2) Carl Diem Institut (1970) Dokumente zur Geschichte der Olympischen

- Spiele. Barz & Beienburg GmbH : Köln, pp.20-22.
- 3) Curtius, E.(1903) Ein Lebensbild. Briefen hrsg.von Curtius E. Berlin.
 - 4) Diem,C.(1960) Weltgeschichte des Sports und der Leibeserziehung.
Stuttgart Cotta : Stuttgart, pp.1079-1084.
 - 5) Deutsches Museum 1853. Schriften und Tagebücher. München
1913,Vol.1, pp.272-289.
 - 6) Deutsche Turn-Zeitung.1859-1860.Leipzig.
 - 7) Gasch, R.(1928) Handbuch des gesamten Turnwesens und der
verwandten
Leibesübungen. Verlag von A.Bichlers : Wien und Leipzig.
 - 8) GutsMuths, J.(1793) Gymnastik für die Jugend. Verlag der
Buchhandlung der Erziehungsanstalt : Schnepfenthal.
 - 9) Jahn, F.L. (1930) Die Briefe. Meyer Wolfgang, Quellenbücher der
Leibesübungen. Vol.5, Dresden, pp.229-230.
 - 10) Lennarts, K.(1974) Kenntnisse und Vorstellungen von Olympia und den
Olympischen Spielen in der Zeit von 393-1896.Verlag KarlHofmann :
Stuttgart, pp.125-184.
 - 11) Lennarts, K.(1981) Geschihite des Deutschen Reichsausschusses f r
Olympische Spiele,Heft1; Die Beteiligung Deutschlands an den
Olympischen Spielen 1896 in Athen. Verlag Peter Wegner;Bonn, pp.31-40
 - 12) National Zeitung (1895.12.24), (1896.1.3). Berlin.
 - 13) Ross, L (1848) Reisen des Königs Otto und der Königin Amalia in
Griechenland,Vol.1,Halle,pp.183-190.
 - 14) Umminger, W.(1969) Die Olympischen Spiele der Neuzeit. DOG :
Dortmund.
 - 15) Wildt, Kl.(1964) Auswanderer und Emigranten in der Geschihite der
Leibesübungen. Verlag Karl Hofmann : Stuttgart,pp.68-72.
 - 16) Ziller, E.(1870) Ausgrabungen am Panathenaischen Stadion auf Kosten
S.M. des Königs von Griechenland. Verlag von Ernst & Korn : Berlin.

4-5.近代ギリシャ史（独立以前も含む）に関連した文献

- 1) Christopoulos, G., Mbastias, I. ed. (1977) Ιστορία του Ελληνικού έθνους.
Vol.13, Ekdotiki Athinon : Athens.

- 2) Dontas, D. (1966) Greece and the Great Powers 1865-1875. University of Salonika : Thessaloniki.
- 3) Douglas, D. (1972) The Unification of Greece,1770-1923. Ernest Benn : London.
- 4) Harry, J. Psomiades, Stavros B. Thomakakis (1993) Greece, the New Europe, and the Changing International Order (Modern Greek Research Series, No 6).
- 5) Kiste, J. (1997), Kings of the Hellenes : The Greek Kings, 1863-1974. Sutton Publishing. NewYork.
- 6) Legg, K.R. (1969) Politics in Modern Greece. University of Stanford.
- 7) Louis, A., Jr. Ruprecht (1996) Afterwords : Hellenism, Modernism, and the Myth of Decadence. State University of New York.
- 8) Miller, W. (1936) The Ottoman Empire and Its Succesors,1801-1927. University of Cambridge.
- 9) Paul Sant Cassia, Constantina Bada (1992) The Making of the Modern Greek Family : Marriage and Exchange in Nineteenth-Century Athens (Cambridge Studies in Social and Cultural Anthropology 77) Cambridge University.
- 10) Boeschoten, Riki Van (1991) From Armatolik to People's Rule : Investigation into the Collective Memory of Rural Greece; 1750-1949. John Benjamins Pub Co. : London.
- 11) McGrew, William W. (1986) Land and Revolution in Modern Greece, 1800-1881 : The Transition in the Tenure and Exploitation of Land from Ottoman Rule to Independence. The Kent State University Press.
- 12) Wittek, P. (1938) The Rise of Ottoman Empire. London.
- 13) Woodhouse, C.M. (1986) Modern Greece : a short history. Faber and Faber : London.
- 14) Zakinthos, D.A. (1976) The Making of modern Greece:From Byzantium to Independence. Roman and Littlefield : Totowa.

4-6.初期の近代国際オリンピック競技会関連の主な文献

- 1) Brookes, P. (1894) Letters to Coubertin. Archives in Olympic Museum : Lausanne.
- 2) Coubertin, P. (1896) The Olympic Games of 1896. *The Century*

Illustrated Monthly Magazine 53, pp.39-53.

- 3) Coubertin, P. (1897) A typical Englishman : Dr.W.P.Brookes of Wenlock in Shropshire. *American Monthly Review of Reviews* 15:64-65.
- 4) Coubertin, P. (1890) Les jeux Olympiques a Much Wenlock. *La Revue athlétique* 12:705.
- 5) Decker, W., Doliantis G., Lennartz K. (1996) 100 Jahre Olympische Spiele : Der neugriechische Ursprung. Ergon Verlag : Würzburg.
- 6) Dimitriou, M. (1995) Leibeserziehung und sport in Griechenland 1829-1914. Academia Verlag : Sankt Augustin.
- 7) Gennadius, J. (1883) Letters to Brookes. Archives in Wenlock Olympian Society : Wenlock.
- 8) Lennartz, K. (1992) Die Olympische Spiele 1906 in Athens. Kasseler Sport Verlag Frankfurter : Frankfurt.
- 9) Lennartz, K. (1996) Die Olympische Spiele 1896 in Athen. Agon-Sport Verlag : Frankfurt.
- 10) Mallon, B. (1998) The 1896 Olympic Games: Results for all competitors in all events,with commentary. McFarland and Company : Jefferson,North Carolina, and London.
- 11) Mallon, B. (1998) The 1900 Olympic Games: Results for all competitors in all events,with commentary. McFarland and Company : Jefferson,North Carolina, and London.
- 12) Mullin, S. (1983) Dr.Brookes and the Olympics. *Olympic Review* 109-1:570-573.
- 13) Rühl, J.K. (1992) William Penny Brookes : the father of the modern Olympics. *ΑΕΥΚΩΜΑ* 1:94-111.
- 14) Rydell, R.W. (1984) All the World's Fair. The University of Chicago Press : Chicago and London.
- 14) Wenlock Olympian Society (1850-1892) Minute Books.1.2. : Wenlock.
- 15) Wyse, T. (1859) Letters to Brookes. Archives in Wenlock Olympian Society : Wenlock.

序章 ドイツやイギリスにおけるオリンピック
競技会復興の試み

第1節 ドイツにおけるオリンピック競技会への関心

1. グーツムーツ(GutsMuths)とオリンピック競技会

ドイツにおいては、早くからオリンピック競技会への関心が高かった。1793年、Johan Christoph Friedrich GutsMuths (1759~1839年)は、“Gymnastik für die Jugend (青少年の体育)”という体育の理論書を著した。この書は近代ヨーロッパで初となる体育の理論書で、当時の市民たちに受け入れられた。さらに、オーストリア、デンマーク、イギリス、フランス、オランダ、スウェーデンなどヨーロッパ諸国で翻訳され、ヨーロッパの近代体育の成立に多大な影響を与えたのであり、GutsMuths が「近代体育の父」と称される所以となった本である。彼のこの著書の第四章「体育の提案」の中で、古代ギリシャの体育やオリンピック競技会について、詳細に紹介されている。ここではまず、人類が数世紀にわたって古代ギリシャの体育運動についての研究をしながらも、体育を当時の教育の中に導入しなかった事に疑問を呈し、虚弱で不活発に育てられている当時の青少年に、ギリシャ的な体育の必要性を訴え、次のように述べている。

「(ギリシャの) 体育運動(Gymnastische Übungen)は青少年教育の重要部分を構成しており、身体鍛練、強化、巧みさ、美しい形成、勇気、危険の際の沈着、その上に作られた祖国愛がその目的であった。国家から給料が支払われる公的教師の任命や、ギリシャのあらゆる都市に設置され、時にはあまりにも大きくて目を見張らせるような見事な公共施設は、人々が体育に認めていた高い価値を示していた。……精神の運動と結合していたこの身体運動の公的な祭典、すなわち、オリンピア、イストミア、ピュティア、ネメアの競技会は、単なる競技会ではなく、民族の崇高な意志を神に捧げるものであり、まさに宗教をあがめるものであった。⁵⁾」

ギリシャの体育の目的の一つに祖国愛があげられている。また、民族の崇高な意志を神に捧げるとあるように、GutsMuths の考えたギリシャ体育の価値は、民族という観念と切り離されないものであったことがうかがえる。

さらに GutsMuths は、オリンピアでの祭典が、大観衆の前で身体の優秀さ

⁵⁾ グーツムーツ著 成田十次郎訳 (1979) 青少年の体育. 明治書院, p.82, GutsMuths, Joh. Chr. Fr. (1957) Gymnastik für die Jugend. Quellenbücher der Leibesübungen, Wilhelm Limpert Verlag, Dresden, pp.115-116.

を示すための単なる競技会ではなく、民族の誇りを神に捧げる宗教的なものであった、と次のように述べている。

「ギリシャのはてから、人々は陸路や海路で、ペロポネソスの最も美しい地、エリスのこの肥沃な楽園に殺到しに、シチリアやイタリアや小アジアからさえ、また特に本土からオリンピアに旅をしてきた大群衆がここにみられた。ここでは、しばしば王たちも市民と花冠をかけて競技をした。そしてこの花冠には、市民の心からの尊敬と不滅の名誉だけでなく、同時に祖国と市民の自由、祖国の祭日の有益な活用、個々の家庭の幸福、とにかくギリシャ人が彼らの神に願い得た最も美しく、最も善いものが編みこまれていた。⁶⁾」

そして政府が教育に干渉すべきという問題は肯定しないまでも、このような古代のギリシャのような発想の競技会であるならば、政府が祭典を奨励する際には、承認するべきであろうとしている。

また、古代オリンピア競技祭の競技の情景を詩的に描写した後、オリンピック競技会の意義を当時の時代人に引き寄せて述べている。

「この公共競技会は特に国民精神を保持し、青少年を柔弱からひきもどし、彼らに男性的精神を注ぎ込み、英雄にまで形成するものであった。この種の運動は青少年の間で一般的な傾向となり、多くの家庭は、身体を訓練できるように、住宅や別荘に私的な施設を備えた。文明化の暴力的な支配に完全に打ち敗かされたくはないと考えているすべての教養ある国民は、そのようにあるべきだと思う。⁷⁾」

GutsMuths は、文明化による人間の身体的な諸能力の低下を救うのが体育であると考えていたので、その意味では、古代オリンピア競技祭は、彼の考えた体育と同様の価値をもつものにとらえていた。さらに **GutsMuths** は、古代オリンピア競技祭のような国民的競技会の必要性を、国民教育の観点から明確に主張したのであった。

「もし-体育競技をあらゆる方法で促進すべき-警察と校長とがこれを勧めて援助し、君主がそれを後援し、この有益な運動を、われわれに全く欠如している国民祭にまで高めるならば、啓蒙された両親たちはほとんど取るに足らないそのための経費を、いかに喜んで前払いすることであろう。こ

⁶⁾グーツムーツ著 成田訳,前掲書,pp.82-83, GutsMuths, J.(1957),ibid.,pp.116-117.

⁷⁾グーツムーツ著 成田訳,前掲書,p.85, GutsMuths, J.(1957),ibid.,pp.122-123.

の国民祭は、国民精神に作用し、国民を導き、彼らに愛国心を注ぎ込み、彼らの徳と正義心を高揚し、ある高貴な感覚を最下層の階層にすら拡大する偉大なもの、感情を高めるもの、偉大な力というものを有しており、私はこれを全国民の主要教育手段と思っているのである。⁸⁾

GutsMuths は、体育競技を国民的な祭典に高めることが、国民をして、国民精神、愛国心、正義心を高揚せしめるのであり、全国民の教育につながると位置付けている。つまり GutsMuths にとってオリンピック競技会は、国民的な祭典ととらえていた。

さらに GutsMuths はオリンピック競技会の復興を暗示している。

「ヴェーリッツの近くに、ほとんど見渡すことができないような広大な草原がある。この草原の一方は美しい森で区切られており、もう一方はヴェーリッツになっているが、そこには高いポプラの木の下に、殿様の豪華な建物や静かな小屋が見える。9月24日にここに、土地の大部分の人達が押し寄せてきて、あたかもオリンピック競技会(olympischen Spiele)を再現するのを見るのは、すばらしい光景である。……そのような一日は何とすばらしい日であろう。地方の青少年はその日を待ちこがれ、その日のために前々から体力を練っている。この日は、ただ青少年の勤労と従属とを要求するだけではなく、彼らに喜びを与える祖国への愛を高揚させ、同時に善良な民を愛し、宮殿の中で彼らのことを忘れてはいないことをこの日に実証している国王への愛を鼓舞する日である。⁹⁾

ここでは、GutsMuths が、オリンピック競技会が、草原の中で再興される姿を思い描いている。そうすることで、青少年の祖国への愛を確かなものにし、国王も、それに応えて、市民たちとの関係を深くすることになると、呼びかけている。

以上のことから、GutsMuths は、古代オリンピア競技祭を、国民祭として行うことが、当時のドイツにおいて、重要な価値をもつことが示されている。その価値とは、青少年に男性的精神を注ぎ込み、国民としての愛国心を培い、彼らの徳と正義心を高揚する、というものであった。オリンピック競技会の復興に、国民教育と体育の実現を重ねていたのであった。

ギリシャにおいても、1837年に GutsMuths の著書の内容を参考にしたギリ

⁸⁾グーツムーツ著 成田訳,前掲書,p.87., GutsMuths, J.(1957),ibid.,pp. 125-126.

⁹⁾グーツムーツ著 成田訳,前掲書,pp.87-88., GutsMuths, J.(1957),ibid.,pp.126-127.

シャ語版の体育書がギリシャ王室により出版され、アテネの師範学校の教科書として使用されたことから、オリンピック競技会に関する **GutsMuts** の考えがギリシャ人に移入されていった。民族精神、国民精神を高揚するためのオリンピック競技会という発想は、古代文化とのつながりを模索した、トルコからの独立間もないギリシャ人にとっては、受け入れやすいものであったと考えられる。そして実際に、1859年に設立されたギリシャのオリンピア競技祭は、**GutsMuts** の提唱するような、ギリシャ政府の厚い支援による、国家の高揚をはかるための民族的祭典として始められた。その意味で、**GutsMuts** の考えるオリンピック競技会の復興が、近代ギリシャに引き継がれたと一面があった。

2. ドイツ人体育家(Turner)によるオリンピック競技会

GutsMuts の考えをさらに発展させ、トゥルネン(Turnen)と呼ばれるドイツ体育を考案し、普及させたのが **Friedrich Ludwig Jahn** (1778~1852年)であった。彼はドイツ体育を構築する一方、オリンピック競技会については、1825年に次のように述べている。

「時間のある時に、私の 30 年間の闘争を論じることはできよう。しかし私は過ぎ去った事を取り繕うとは思わない。トゥルネンもまた、それがアルフェイオスやケフィソスやユーロタスのもとにないならば、行おうとは思わない。もう二度とハーゼンハイデに足を踏み入れることはないだろう。¹⁰⁾

これはトゥルネンの活動に対して政府が反動的になり、**Jahn** が 1819年から1825年まで捕らわれの身になっていた時の書簡である。アルフェイオスはオリンピアに流れる川、ケフィソスはケフィソス川の神で、その息子ナルキッソスは美貌で多くの女性から愛され、ユーロタスは、ギリシャの絶世の美女ヘレンが誕生した川である。また、ハーゼンハイデは、**Jahn** が、トゥルネンを始めた場所である。この内容からは、**Jahn** がトゥルネンを、古代オリンピア競技祭の理想のもとに行おうとしていたことを示している。

一方、1848年には、トゥルネンと古代の競技会との関連について、**Jahn** は、「授業が終了して、海路や陸路でギリシャへの壮大な体育旅行を実施し、彼の地の古代の競技場で感謝と報酬に満ちた体育祭を祝いたいものである。」と述

¹⁰⁾ Jahn, F.L. Die Briefe, in Meyer Wolfgang, Quellenbücher der Leibesübungen, Vol.5, Dresden 1930, pp.229-230.

べている¹¹。

Jahn は、彼の考えたトゥルネンの祭典、体育祭を古代オリンピック競技祭の競技場で開催したいと、暗に古代オリンピック競技祭と彼の時代の体育祭との精神的な連続性に言及している。Jahn は、トゥルネンを国民教育の一環と位置付けて、その普及に生涯を捧げたのであるが、トゥルネンは古代オリンピック競技祭を理想として考えられていた一面が存在していたことがうかがえる。トゥルネンでは、民族的な記念日などに行われる体育祭がたいへん重要視されたが、これも古代オリンピック競技祭を指向していたことが示されているのである。それは次に述べるように、体育家たちの祭典が、時にオリンピック競技会として、描写されていることから理解される。体育家 (Turner) たちによって、オリンピック競技会が開催されたとする報告が今日確認されている。それは Umminger Walter という体育教師(Turnlehrer)による、次の報告である。

「1835年と1836年、体育教師 Grunber によりミュンヘンで“10月祭体育家祭典競技(Oktobertfest turnerische Festspiele)”が開催されたのであるが、この競技会は、古代ギリシャの精神に満ちていたと報告されている。また1850年には、体育クラブ(Turnverein)の活動が禁じられたため、この時の10月祭は、“職人のオリンピック競技会”として行われたのであった。そしてこの競技会が、文献上に現れる最初のミュンヘンでのオリンピック競技会である。¹²」

トゥルネンは、古代オリンピック競技祭と、その理念において一定の関連を持つようとしていたのである。

また、1859年のドイツ体育新聞 (Deutsche Turn-Zeitung) には、ライプツィヒの体育クラブ (Turnverein) によって、1857年、1858年、1859年に開催された競技の祭典について記されているが、ここでは、その競技のようすを、古代オリンピック競技祭と比較しながら記述されている¹³。これは、当時の体育家たちの、オリンピック競技会に対する関心の高さを示しているとともに、彼らの行っていた様々な祭典競技会を、古代ギリシャのオリンピック競技会に近づけようと努力していたことを表している。このように、19世紀半ばには、ドイツの体育家によりオリンピック競技会への関心が高まっていた。

¹¹ Jahn, F.L. Die Briefe (1930),ibid., p.230.

¹² Umminger, W.(1969) Die Olympischen Spiele der Neuzeit.DOG:Dortmund,p.9.

¹³ Deutsche Turn-Zeitung,1859 18, pp.73-74.

第2節 イギリスにおけるオリンピック競技会復興の試み

イギリスにおけるオリンピック競技会復興の動きは 17 世紀から始まった。それは、イングランドの中西部にコッツウォルト地区のチップング・カムデンにおいて、法律家 Robert Dover (1575～1641 年)により行われたオリンピック競技会 (Olympick) が、1612 年から 1641 年まで行われたのが最初である。この競技会は、Dover が、1612 年の聖霊降臨節の折に、行ったのが由来だとされているが、その意図は不明である。競馬、競走、跳躍、ハンマー投げ、槍の操作、レスリング、フェンシング、ダンス、チェス、曲芸、狩猟、ボーリング、うさぎ追い、などが行われ、優勝者にはベルトや銀杯、現金などが賞として出された。Olympick という名称を用いたことから、古代オリンピア競技祭を意識していたものとは思われるが、具体的に古代オリンピア競技祭の何を、当時の社会に活用しようとしたのかについては不明である。この競技は、1643 年に中断された後、18 世紀初めに復活、その後中断され、第二次世界大戦以降に、"Robert Dover's Cotswold Olimpik Games"として復興された¹⁴。

競技の理念や意図が明確にわかるオリンピック競技会の復興は、19 世紀に入ってから行われたリバプール・オリンピックとマッチウェンロック・オリンピックである。これらは、相互に交流し、ギリシャのオリンピア委員会とも交流していた。また、近代国際オリンピック競技会にも一定の影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

1. マッチウェンロック・オリンピック

William Penny Brookes の生い立ちとウェンロック・オリンピック協会の前身、「オリンピアンクラス」の設立については、ウェンロック・オリンピック協会の名誉委員、S. Mullins により明らかにされている。その報告によれば、以下の通りである¹⁵。

William Penny Brookes は 1806 年 8 月 13 日、シュロップシャー州のマッチウェンロックの町に、医者 William Brookes の長男として生まれた。やがて彼はロンドンとパリで、父の仕事を継ぐため、医学を勉強した。1831 年に故郷に帰るが、この頃より労働者階級の子供たちの健康について関心を抱き、

¹⁴ Rühl, J.K. and Keuser, A (1997) Olympic Games in 19th Century England with Special Consideration of the Liverpool Olympics. Roland Naul(ed), Contemporary studies in the national Olympic Games Movement. Peter Lang: Frankfurt am Main.pp.55-56.

¹⁵ Mullin, S.(1983) Dr.Brookes and the Olympics.Olympic Review 109-1:570-573.

彼らのための自由な運動(freedom exercises)、レクリエーション、レジャー、ゲームやスウェーデン式の身体訓練の重要性を主張したのであった。後に父の跡を継ぐと、労働者階層の人々の社会状況の改善のために多くの協会を設立した。Brookes は、労働者階層の人々の教養と社会的立場の向上を果たそうとした、チャーチスト運動に関わりをもっていたことが窺えるのである。そして1841年、「ウェンロック農業図書協会(Wenlock Agricultural Reading Society)」を設立し、図書室を設けて、植物学、地質学、音楽、体育などの図書を置き、労働者階層を初めとする地元の住民に開放したのであった。

そして1850年、Brookes は「オリンピアンクラス (Olympian Class)」という組織をウェンロック農業図書協会の一翼として設立した。この組織の設立の趣旨は、「戸外でのレクリエーション(outdoor recreation)を奨励し、運動競技(Athletic exercise)の技能と知的・職業的能力の熟練度を競う公的競技会(Public Meetings)を毎年行い、賞を授与することにより、ウェンロックの町や近郊の住民、特に労働者階層の人々の道徳的、身体的、知的な面での改善を促進することを目指す¹⁶⁾」というものであった。

この競技会で行われていた種目は、1859年7月27日に行われた第10回競技会のプログラムによれば¹⁷⁾、競走、10歳以下の少年の競走、11～14歳の少年の競走、クリケット、フットボール、輪投げ、幅跳び、高跳び、障害走、アーチェリー、槍投げ、馬上槍投試合、一輪車競走、鈴鳴らし、などである。そしてそれぞれの競技の勝者には、5シリングから10ポンドの賞金が授与された。競技種目について検討すると、古代オリンピア競技祭の復興を目指したというよりは、中世以来行われていたイギリスの伝統的なスポーツを中心に構成されていることが確認される。

規則については、酔態したり、異教の教義やみだらな言葉を使った者、および過ちを犯した者について、1から5シリングの罰金が課せられるか、“オリンピアンクラス”から除名されることが定められていた¹⁸⁾。

この競技会を主催したオリンピアンクラスでは、「オリンピアン (Olympian)」という語を使ってはいるが、当時は古代オリンピア競技祭を復興するという考えではなく、イギリスの貴族や富裕なジェントリーたちが考えていた、中世の良き時代への郷愁を意味していたと言える。この点について Rühl は、「その世紀の末には、イギリス建築界においてはロマン主義がはやり、また中世の馬上

¹⁶⁾ Wenlock Olympian Society (1850) The Minute Book.10,p.2.

¹⁷⁾ Wenlock Olympian Society (1859) The Minute Book.10,p.77.

¹⁸⁾ Wenlock Olympian Society (1859) The Minute Book. 10, p.78.

槍試合が上流階層で行われ、中流以下の階層では、イギリスの民族的な祭典が行われていた。つまり、Brookes がオリンピッククラスの競技会を始めた 1850 年 10 月 22 日の時点では、古代オリンピック競技祭の復興を目指したものではなかった¹⁹⁾としている。

さらに Brookes 自身、「祖先の競技会の復興は、上流階層と下層、金持ちと貧乏人との関係を良くするし、これは古きイギリスの国民的特徴であった²⁰⁾」と述べているように、彼の考えた競技会は、当初はイギリスの伝統への郷愁であったともいえる。イギリスではそのような各地方で行われるゲームが各地の祭りの中で行われていた。しかしながら、たとえオリンピックの復興という意識が薄かったにせよ、運動競技の競技会により地域住民の道徳的向上を目指すという発想は、スポーツの教育的価値を重んじていたという点で、オリンピックの教育的展開につながる特徴的な試みであったと言える。

イギリスの古き良き時代を恋慕して開催されたこの競技会は、1860 年から様変わりする。それは 1859 年にギリシャのアテネで開催されたギリシャのオリンピック競技祭と接触したことがきっかけであった。ギリシャでオリンピック競技会が復興されようとしていることを知った Brookes は、ギリシャの祭典の主催者である国王に賞を贈り、ギリシャとの交流を始めた。

やがて 1859 年のオリンピック競技祭のプログラムを入手し、競技会の内容の報告を受けると、Brookes は、自身の競技会に修正を加えることにした。それ以降、Brookes は努めて、オリンピック競技会という語を用いるようになり、彼の競技会の内容も、ギリシャ的な特徴をもつように修正した。

人々の行列が行われた Linden Field は「オリンピック・フィールド (Olympian Field)」と呼ばれ、ギリシャ文字の碑文(常にベストを尽くせ)を旗に書き込んだ。勝利の式典も月桂樹やオリーブなどの葉冠が授与されるなど、古代ギリシャを意識したものになった。

さらに、次のように競技会の競技種目が変更された。

1859 年 槍投げを導入

1868 年 五種競技 (綱登り、走り幅跳び、走り高跳び、右手と左手による力石、880 ヤード以上の障害走) を導入

アマチュア選手用の五種競技 (440 ヤード走、障害走、立ち幅跳び、

¹⁹⁾ Rühl, J.K.(1992) William Penny Brookes:the father of the modern Olympics.

ΛΕΥΚΩΜΑ 1, pp.94-111.

²⁰⁾ Wenlock Olympic Society (1854) Minute Book.10,p.14.

槍投げ、ハンマー投げ)を導入

1869年 少年用の五種競技(地理、文法、歴史、随筆の執筆、綴り)を導入

1868年 最初の五種競技と他の種目の優勝者に、ギリシャの勝利の女神
NIKEの肖像の描かれた銀製のメダルが賞になる

1870年 オリーブの葉冠が五種競技の優勝者の賞になる

これらの名称、競技種目、賞などの変化は、ギリシャのオリンピア競技祭や古代オリンピア競技祭を意識したものであったことは明らかである。こうしてBrookesは、彼の競技会をギリシャ的な競技会として発展させていくのであった。

Brookesの競技会をギリシャ的なものにしようとする試みは、彼のオリンピアンクラスの名義変更にもつながった。すなわち、1860年、オリンピアンクラスは「ウェンロックオリンピア協会(Wenlock Olympian Society)」としてウェンロック農業読書協会から独立した。そして毎年開催する競技会を、「オリンピアン競技会(Olympian Games)」という名称に変更した。

その前年の1859年、Brookesはシュロップシャー州オリンピアン協会(Shropshire Olympian Society)を設立し、シュロップシャーオリンピア祭を開催した。それは1860年(ウェンロック)、1861年(ウェリントン)、1862年(マッチウェンロック)、1864年(主ローズベリー)の四回行われた。

住民の道徳的向上をめざしたウェンロックオリンピア競技会は、古代オリンピア競技祭の精神を受け継ごうとする方向へ向かっていったのである。

さらにBrookesは、ウェンロック・オリンピアン協会とは別に、1865年11月6日、リバプールにおいて「イギリスオリンピアン協会(National Olympian Association)」を設立した。設立に携わったのは、ウェンロック・オリンピアン協会、シュロップシャー州オリンピアン協会、リバプール・アスレチック協会であった。さらには、個人として、Ernst G.Ravenstein(ロンドン・ドイツ体操協会会長で、その父はJahnの弟子)、マンチェスターの体操協会のAmbros Leeや、ロンドン、ウォーターフォスト、シュールズベリー等の都市の代表者等で、John Hulley(1832-1875年)がイギリスオリンピアン協会の会長、Keeling D.C.が書記になった。この協会の設立の趣旨と会議での決議事項については、次のように説明されている²¹。

(1) イギリスオリンピアン協会は、イギリスの幾つかの主要な都市や町を持

²¹ Wenlock Olympian Society (1865) The Minute Book.10,p.161.

ち回りにして、毎年開催される協会の総会の折に、金銭以外のメダルや他の賞を授与することにより、男らしい運動(manly exercises)の技能と強さを称えて奨励するために設立される。

プロの競技者は競技から除外される。

- (2) イギリスオリンピック協会は、精神的優秀さにも敬意を払い、文学、芸術や科学の分野で際立った人々、または明らかに人類に貢献した人々を名誉会員に選ぶ。
- (3) この協会は他のオリンピック競技会、競技、体操、ボート、水泳、クリケットなどの他の協会と、年鑑を媒体として連合センターを形成していき、相互に助け合い、身体教育(physical education)に関する情報の収集と普及に努める。
- (4) この協会の競技は国際的なものとなり、すべての人々に開かれる。
- (5) ~ (8) 会員の会費について (略)
- (9) 協会に加盟する各州は、定期会議に 3 名の代表団を派遣する。
- (10) この会議の任務は運営委員会を選出して規則の作成や、改正を行うとともに、次期の競技会の開催場所を決定する。
- (11) 第一回の定例競技会は、ロンドンで明年 7 月に開催される。
- (12) この協会の記章は樅の葉冠とし、『市民の身体的強さ(civium vires civitatisvis)』をその標語とする。
- (13) 本日の参加者は地方委員会を構成し、委員会は来年 7 月に行われるロンドンでの会議までに規則と規定の草案を作成する。

上記の 1865 年のイギリスオリンピック協会の決議内容を検討してみると、近代国際オリンピック競技会の開催が決議された、1894 年にパリ・ソルボンヌで開催された国際スポーツ会議の決定事項に一部、類似していることが特徴としてあげられる。オリンピック競技会を都市の持ち回りで行うこと、プロの競技者を除外していること、オリンピック競技会を推進する専門の委員会を組織すること、さらに、国際的な競技会の開催を明記していることなどは、1894 年の会議の結論とほぼ同じである。また、文学や芸術などの分野での競技も、Coubertin が当初から推進しており、これらの事を考えると、近代国際オリンピック競技会の方向性は、Coubertin の提唱より 30 年も前に、イギリスでは、先取りされていたと言えるであろう。

イギリスオリンピア協会主催のオリンピア競技会は、1866 年にロンドンのクリスタルパレスで開催されたことが報告されている。1866 年から 1883 年の間に、イギリスオリンピア協会は、6 回のオリンピア競技会を開催している。

開催年と開催都市は、次の通りである。

1866年（ロンドン）

1867年（バーミンガム）

1868年（ウェリントン）

1874年（マッチュエンロック）

1877年（シュールズベリー）

1883年（ハドレイ）

Brookes によって始められたオリンピック競技会は、当初は古代オリンピック競技祭の復興を意識した競技会ではなかったが、ギリシャのオリンピック競技祭と交流して以降は、ギリシャ的な競技会の開催へと向かって行った。そして 1865年のイギリスオリンピック協会の決議に見られるように、男性らしい身体的な資質を具えることをめざしたのであった。

その後、Brookes は Coubertin を自身のオリンピック競技会に招待して、見学させているので、イギリスのオリンピック競技会は、近代国際オリンピック競技会の形成にも一定の役割を果たした可能性がある。

2. リバプール・オリンピック

マッチュエンロックのオリンピック協会と提携して、イギリスオリンピック協会を Brookes とともに結成したのが、リバプール・アスレチッククラブ（Liverpool Athletic Club）であった。このクラブの会長の Melly Charles P. より始められた競技会が、「オリンピック祭（Grand Olympic Festival）」で、5回ないし6回のオリンピック競技会が開催された。明らかになっている開催年は 1862年、1863年、1864年、1866年、1867年である²²。

このオリンピック祭の競技種目については、Joachim.K. Rühl の報告によれば、次のようであった²³。

「この競技会は、リバプール・オリンピックとも呼ばれたが、このプログラムは、第一回アテネの近代国際オリンピック競技会のプログラムとほぼ同様の競技種目が行われていた。1862年から 1867年の競技会のプログラムでは、

²² Ress, R.(1968) The Development of Sport and Recreation in Liverpool in the 19th Century. Diss. Liverpool,pp.63-64, 72-75.

²³ Rühl, J.K.,Keuser A.(1997) Olympic Games in 19th Century England with Special Consideration of the Liverpool Olympics.

Naul, R(ed.) contemporary Studies in the national Olympic Games Movement.Peter Lang; Frankfurt am Main.

当時まだ開発されていなかった種目、サイクリング、マラソン、ローンテニス、射撃を除いた種目は、第一回近代国際オリンピック競技会の種目と同様のものであった。」

1862年、Charles Pierre Melly (1829-1888年) と Hulley がリバプール・アスレチッククラブを設立したが、その目的は青少年の体育の振興であった。Hulley はリバプール生まれで、リバプール体育学校の理事長に就任する。Hulley の学校の評判は高く、1866年には、Hulley のおかげで、リバプールの町の青年の身体がよく鍛えられ、精神的かつ文化的な面でも成長したことが称えられた²⁴。また彼は、女性の体育についても研究していた。後に彼は女性の体育クラスの設置を試みたが、それには非難が起こり、成功しなかった。

1862年6月14日、同アスレチッククラブは、Mount Vernon Ground にて第一回オリンピック祭(Olympic Festival)を開催した。ジェントルマン・アマチュアのみがこの祭典に参加することを許され、優勝者にはメダルが授与されたが、金銭的な賞はなかった。入場料は2シリングで22種目をみることができた。これら以外に、ボクシング、330ヤードフラットレース(flat race)、インディアン・クラブ体操 (Indian club exercise)、銃剣、1200ヤード障害物競走、4マイルウォーキング、棒高跳び、クリケットボール投げ、などが行われた。またこれら以外にも、クラブメンバーのみに許された競技がいくつかあった。

このオリンピック祭では、5つの金、25の銀メダルが授与された。観戦者は7000~10000人であった。Edgar Athelstane Browne がエッセイ競技で優勝した。ロンドンの新聞“Bell’s Life”では、このオリンピック祭とプログラムについて好意的に報道されている²⁵。

第二回オリンピック祭は1863年6月13日に同じグラウンドで行われた。すべての国のジェントルマン・アマチュアがこの年は参加でき、国歌が演奏され、2.5マイルの水泳で開幕した。エッセイの部門で3人の受賞者があり、12000から15000人が観客として観戦した²⁶。格闘技スポーツのための大きなステージと440ヤードの周回トラックが設けられた。リバプールの“Daily Post”はこの競技会のことを「すばらしく、真実のオリンピックの祭典である」と絶賛して

²⁴ Anthony, Don(2001),Organic Olympism: Or Olympic Orgy and the mystery of John Hulley: The Roots of Modern Olympism. Journal of Olympic history 2001,pp.15-16.

²⁵ Bell’s life in London, 1862.6.15,5.

²⁶ Daily Post, Liverpool, 1863. 6.12.

いる²⁷。また、新聞“Liverpool Mercury“は、「第二回の偉大な国際オリンピック祭」と評価した²⁸。

この競技会が一定の成功を収めた後、Melly と Hulley はイギリス・アスレチッククラブの結成へと向かった。

第二回の競技場であった Mount Vernon Parade Ground は、1863 年の末に売られてしまったので、第三回オリンピック祭は 1864 年 7 月 9 日に動物園にて行われた。数千人の人々が観戦に集まり、20 人の警察官がレース場に観客が入るのを防ぐために警備にあたった²⁹。

1864 年には二つの会場が設けられた。エッセイ競技にはたくさんの応募があったため、同日に優勝者を定める事ができなかった。競走と立ち幅跳び以外は、前年の競技種目と同様のものであった。”Liverpool Mercury”には、オリンピック祭の記事の中で、次のことが書かれている：

「オリンピアードの競技会復興の試みは、古代ギリシャの異教を認めるということに、恐怖心や臆病さを助長したりするものではないことを望む。そのスポーツは、古代のものと似てはいるが、修正された形になっていて、その祭典には、もはや、宗教的な意味はない……。この復興されたオリンピック競技会は『日の下に新しいものはない』ということわざがよくあてはまる。³⁰」

ここでは、宗教的な意義を具えた古代オリンピア競技祭と、当時のリバプールでのオリンピック祭とを対比している。古代のオリンピックとほぼ同じ競技会が復興されたことが示されている。その一方で、宗教的な祭典という側面をもっていた古代オリンピア競技祭のスポーツと、リバプールでのオリンピック祭とのスポーツは、修正されているので、宗教的な意義はないこと、つまり、彼らからして、異教の祭典に与するものではないことが、示されている。古代の伝統をそのまま継承したものではなく、近代において新たな側面を加味した祭典であることが示されているのである。

この解釈は、古代オリンピア競技祭のもつ宗教性、つまりキリスト教からは異教とされた Zeus 神に捧げられた祭典であることに対して、理屈をつけて、復興したことを正当化したのであった。近代社会におけるオリンピック競技会

²⁷ Daily Post, Liverpool, 1863. 6.20.

²⁸ Liverpool Mercury, 1863.6.15.

²⁹ Daily Post, Liverpool, 1864.7.11.

³⁰ Liverpool Mercury, 1864. 7.2.

の性格を特徴づけるものである。オリンピックの宗教性を排除することで、近代的なスポーツの祭典であることを明らかにした。この点は後の Coubertin にもあてはまる論理である。

第四回オリンピック祭（1865 年）はリバプールではない場所で行われた。どこの場所であるかは不明である。

第五回オリンピック祭（1866 年）は、それまでとは違う雰囲気で行われたようであった。というのは、ウェールズのスランドウドノで行われ、賞の授与式も含めて 1866 年の 6 月 25 日から 28 日まで続けられた。プログラムはリバプールからスランドウドノまでのセーリング競技が加えられ、さらにダイビングと水泳がデモンストレーションとして行われた。全部で 77 個の金、銀、銅メダルが授与された。

“Bell’s Life in London” では、イギリス競技協会が第五回大会を開催し、この 1866 年のオリンピック祭が、これまでで最もにぎやかな雰囲気であったと報じた³¹。

第六回オリンピック祭（1867 年）は 1867 年 6 月 28 から 7 月 1 日まで、三カ所の会場で行われた。ミルトル通りに 1865 年に建てられた大きな新しい体育館と、Sheil Park Athletic Ground、それに Birkenhead Great Float である。約 300 人が競技に参加し、前回の種目に、棒投げと走り幅跳びと立ち幅跳びが加えられ、28 競技種目が行われた。’Liverpool Mercury’によれば、パリやマルセイユ、ロンドン、マンチェスターからの大派遣団、そして各地域からの参加者もあり、国際的な雰囲気であった。8 個の金と銀メダル、それに 32 個の銅メダルが、英国では最も著名なジェントルマン競技者として評判の高いアマチュア体育家により授与された。

6 月 29 日の “Liverpool Mercury” には、次のように記されている。「1 マイルフラットレースの登録者は大変多く、競技者の中には一流のアマチュアのランナーが含まれていた³²。」

1867 年に Hulley と Liverpool Mercury は「イギリスアスレチック協会の定例の第六回オリンピック祭について次のように述べている。

「Duckworth は立ち幅跳びで 4 フィート 9 インチを跳んだが、Howard は 4 フィート 6 インチであった・・・最初にコールされた横跳びでは、非常に臆病であるように見えて、観客から笑われたが、いざ跳んでみせると、彼

³¹ Bell’s life in London, 1866.6.30.

³² Liverpool Mercury, 1867.6.29.

への賞賛に変わった。Duckworth は 5 フィート 6 インチをクリアした。³³」

この競技の紹介の数日前に、Hulley は、オリンピック祭の目的について、次のように宣言した。

「強調しておきたいことは、オリンピック祭は身体教育を行うことが目的ではないと言う事である。身体教育の普及こそが目的である。オリンピック競技祭はその目的達成のための手段である。³⁴」

身体教育（体育）を広くイギリスに普及させるための手段として、オリンピック祭が行われたのであった。

また、Hulley は女性もスポーツに参加させるべきと考えていた。

「多くの訪問者がいるし女性もいるが、はたして彼らはオリンピック祭に参加するであろうか？ そうなるように奮い起こさなければならない。³⁵」

また、彼は 1863 年に「無料で利用できて、青年のためには娯楽にもなり、年を重ねた者にはリゾートにもなるような競技施設が、男女双方のためにつくられるべきである」と述べている。さらに、政治や宗教の正しい教育システムには、適切な身体の運動と知的な部分が含まれなければならない、総合的な理解力がないと、完全な発達や強さ、そして人間の身体の調和的な発達なしには、健全なモラルと高い知性が開花しない、ということ信じられる温かい心と感覚をもった人々にならないのである³⁶。」

1867 年に Liverpool 紙は次のように結論している；

「より良く運営されたオリンピック祭は、リバプールではまだ行われていない³⁷」

これは、身体教育（体育）の普及のためにオリンピック祭が役割を持つことと、女性がそれに参加することが理想のオリンピック祭であり、それがまだ達成されていない状況を示していたと言えよう。

第四回オリンピック祭が 1865 年に開催された折に、Melly、Hulley とドイツ体操協会会長 Ravenstein とマッチウエンロックの Brookes により、イギリスオリンピック協会（National Olympian Association）が作られ、Hulley が会長に就任した。

³³ Liverpool Mercury, 1867. 7.1.

³⁴ Liverpool Mercury, 1867, 6.29.

³⁵ Anthony, Don(2001),ibid.,p.17.

³⁶ Anthony, Don(2001),ibid.,p.17.

³⁷ Liverpool Mercury, 1867.7.1.

イギリスオリンピック協会の会議により、先述した内容、つまり、都市の持ち回りで定例の競技会の開催、プロ選手の除外、国際的な競技会の開催をめざすこと、などが決められた³⁸。

しかし、**Brookes** によって始められたこのイギリスオリンピック祭は、1883年を最後に行われなくなってしまった。それは **Hulley** が病弱で、1867年からアメリカに療養に出かけるようになったこと、そして 1875年には病没してしまうからであったと推測される。体育の普及のために貢献した **Hulley** の死は、**Brookes** の国際的なオリンピック競技会開催の構想に打撃を与えたと思われる。イギリスアマチュアアスレチック協会と **Brookes** のオリンピック協会との連結役でもあった **Hulley** が他界したことにより、アマチュアアスレチック協会と、オリンピック協会との関係が薄れていったからである。

19世紀のイギリスには、さまざまな個人とそのもとで設立された組織により、オリンピック競技会が行われていた。**Brookes** とリバプールの **Hulley** との良好な関係により、国家レベルのオリンピック競技会が開催されたが、長くは続かなかった。しかしながら、その試みの中に、オリンピック競技会にどのような意味を当該社会に見だし、定着させようとしたのかを見いだすことができる。**Brookes** の場合は、男性的強さの資質と、それによる道徳的精神の向上であった。そして **Hulley** は、体育の普及と女性の参加を推進することであった。これらは、後の近代国際オリンピック競技会の理念にも含まれるものである。

このように、19世紀のヨーロッパにおいては、古代ギリシャのオリンピックを意識したオリンピック競技会の復興が試みられていたのであり、それらは、古代オリンピック競技祭を、近代社会に適応させた形での復興を目指したものであった。

³⁸ Wenlock Olympian Society. Minute Book 1, pp.161-162.

第一章 ギリシャ独立と古代オリンピア競技祭復興の 始まり

第1節 ギリシャの独立と古代文化の逆輸入

1. トルコ支配下におけるギリシャ人の生活

1-1. 独立前のギリシャ人の身体活動

1-1-1. 独立以前のギリシャ人の生活

15世紀半ばにオスマントルコにギリシャ人は征服され、19世紀初めに独立を勝ち取るまで、彼らの拠って立つ民族的アイデンティティは、古代ギリシャの文化というよりは、ビザンチン（東ローマ）文化の継承という面が、強かった³⁹。ビザンチンは、ヨーロッパ東部に発展した東ローマ帝国に起源をもつ国で、古代オリンピック禁止令が出された直後の395年、Theodosius 1世が、2人の子にローマ帝国を二分して与え、その東側が東ローマ帝国になり、西ローマ帝国がゲルマン民族の侵入により衰退してからは、ローマ帝国の正統を誇っていた。やがて7世紀に、皇帝教皇政治の体制⁴⁰を整える一方、ギリシャ語を公用語にするなど、ギリシャ的な性格を強めた。オリエンタ的な政治体制のもと、ヘレニズム文化を基軸に、ギリシャの伝統を保持するとともに、東地中海や中東の文化を融合させて、独特の文化を築いた。特に建築と絵画（モザイク画やイコン）に独特の様式を打ち立てた。イタリアのルネサンスにも大きな影響を及ぼしたのであった。

通常ヨーロッパ史においては、ビザンチンはギリシャ化した7世紀以降の帝国を指す。ビザンチン帝国は、15世紀にオスマントルコにより、首都コンスタンチノーブルが陥落するまで続いた。オスマントルコに占領されて以降も、ギリシャ人は、宗教的な連続性からビザンチン帝国の正統という感覚を持ち続けていた。ビザンチンの宗教は、ローマ・カトリック教会から分離し、コンスタンチノーブルの総主教を中心にした東方正教会（ギリシャ正教会）であった。東方正教会は、ロシアやバルカンのスラブ民族にも伝わり、彼らの宗教にも影響を及ぼした。ビザンチン帝国の皇帝が東方正教会の首長を務めるのが習わしであった。

³⁹ McGrew, W.W. (1985) Land and Revolution in modern Greece, 1880-1881. The Kent State University Press, p.22.

⁴⁰ 東ローマ帝国において、皇帝の権威がキリスト教会の首長の権威を凌いで、教会に影響を及ぼすようになった体制のこと

やがてビザンチン帝国は、トルコや十字軍の侵略をしばしば受けて衰退していき、内部的にも、傭兵の反乱や帝位争いが続いたこともあり、1453年にオスマントルコにより、征服されてしまう。この時から、ギリシャ人は、400年近くに及ぶオスマントルコの支配を受けることになった。

トルコの支配を受けるようにはなったが、ギリシャ地方は、北アフリカや西ヨーロッパに対する地中海交易上、地理的に重要な位置にあったため、ギリシャ人の交易活動は保証された。またイスラム教においては、異教徒に人頭税を課す制度があるため、ギリシャ人は改宗する必要はなく、人頭税を支払う義務を果たしさえすれば、ギリシャ人の財産権や宗教活動は、ある程度認められていた⁴¹。それ以外にも、ギリシャ語による教育や商業活動も自由に行えた。これらのことは、彼らの民族的アイデンティティをビザンチン文化に置くのに十分であったと言える。ギリシャ正教会の教会でギリシャ語が学習され、彼らの信仰とビザンチン文化が教えられてきたのであった。

1-1-2. 独立以前のギリシャ人の身体活動

オスマントルコ支配下のギリシャ人にとって、身体的な運動は遠ざかってしまっていたと考えられ、この時期のギリシャ人のスポーツ活動について叙述されることはなかった。これまでの多くの研究では、ギリシャ人のスポーツは1453年のオスマントルコによるギリシャ支配によって終わり、それ以降は1896年の国際的なオリンピック競技会がアテネで開催されるまでの間、きわめて簡単な叙述しかなされていない。

しかしながら、近年のギリシャ人の研究者によれば、トルコ支配下においても、スポーツ的な競技会が祭日や祝日に行われていた事例が報告されるようになった。例えば、Minas Dimitriou は、ギリシャ独立直後から1世紀間の身体教育の歴史を記したが、その中で、オスマントルコ支配下のギリシャ人の身体活動について記し、人々の間で行われた祝祭日でのスポーツ的な競技会は、円盤投げや競走、レスリングなどの種目や、葉冠の授与など、古代の競技祭に類似したものであったことを明らかにしている⁴²。それ以降、多くのギリシャ人の歴史学や人類学の研究者が、古代からオスマントルコ支配下の時代との連続性という視点から、身体運動の歴史を書いている⁴³。

⁴¹ McGrew, W.W. (1985) *ibid.* p.35.

⁴² Dimitriou, M. (1995) *Leibeserziehung und Sport in Griechenland 1829-1914*. Academia Verlag : Köln. pp.10-15.

⁴³ ギリシャでは、1996年のオリンピック競技会の開催地にアテネを立てて招致活動を1980

Georgiadis やその他のギリシャ人の研究によれば、オスマントルコ支配下のギリシャ各地で行われた祭りにおいて行われたスポーツ活動は、ギリシャ各地において、概ね、次の共通した特徴をもって行われていたとされる⁴⁴。

- ・ 毎年特別な場所（多くは教会の領内）において、決められた日（イースターデーや教会のネームデー）に行われた。
- ・ 毎年、同じ日に行われるので特に事前にアナウンスされることはなかった。
- ・ 競技会のプログラムは宗教的な儀礼が含まれていた。聖人を尊敬している信者は教会に到着する数日間旅をした。これは古代ギリシャの習慣の名残と考える節もある。
- ・ 審判団（ヘラノディカイ委員会）は祭典の数日前に任命されたが、この委員会には、その地域で名声の高い人が就任した。町村長や聖職者が含まれていることも特徴であった。
- ・ 競技会は明文化されていないが年長者が知っているルールがあり、競技者同士の争いを彼ら年長者が裁定した場合もあった。
- ・ コンテストは、教会の奉仕作業の後に行われることがあった。コンテスト前の奉仕作業後、すべての人々は友達や親戚が一同になって座り、楽器、歌や踊りなどで楽しんだ。
- ・ コンテストのプログラムには通常、レスリング、石投げ、ジャンプ、走、乗馬、射撃が含まれていた。
- ・ 競技会はローカルなものではなかったが、だれでも参加できた。勝者は審判団から賞をもらった。この賞は葉冠か月桂冠であることが多かった。聖職者に祝福された、ネッカチーフや笛、家畜の場合もあった。競技の勝者は観客からも特別に称賛された。勝者は、祝福された競技者として領内全土に知れ渡った。
- ・ 勝者の氏名とともに、出身地の地名も呼ばれて賞が授与された。
- ・ さまざまな競技の中で人気のある競技は、場所を交互に変えて行われた競技で、古代の全ギリシャ的な競技会で行われた五種競技に似ているものであった。

以上の内容を古代の競技と比較してみると、共通する点も確かに見いだされる。

例えば、優勝した人に月桂樹の冠や葉冠を与えたことは、古代の風習と同じ習

年代後半から行い、これと相前後して、多くのギリシャ人研究者によるオリンピック競技会に関する研究が進み、歴史を再構成しようとの試みが行われたと解釈される。

⁴⁴ Georgiadis, K.(2004) Olympic Revival. Ekdotike Athenon : Athens.pp.20-26.

慣である。

また、ヘラノディカイという委員会が時に審判団として競技の裁定を行っていること。さらに、優勝者の氏名の公表の際に、出身地も公表し、それが領内全域に知れ渡るほどの祝福されたこと。これも古代の競技会での伝統に通じるものがある。特にヘラノディカイ (Hellanodikai : ΕΛΛΑΝΟΔΙΚΑΙ) は、古代ギリシャのオリンピア競技祭の祭典を取り仕切っていた競技役員であり、この名称を用いていることは、古代との連続性を意識していたことを示唆する⁴⁵。これらの多くは、定期的に行われていた祭典であった。

これらの祭典が定期的に行われたのは、トルコ帝国の支配下にあっても、先述したように、彼らの文化を否定されることはなかったことに起因している⁴⁶。

また、当時よく行われた競技について、Dimitriou と Georgiadis は次のものがあつたことを、1930年から1940年代に Kl. Palaiologos (1935)や G. Karokis (1947)らの民族学者によって記述された報告からまとめている⁴⁷。

a. ジャンプ (跳躍競技)

一段跳び及び三段跳びは、教会の祭で行われたスポーツであった。特に三段跳びは娯楽として必要不可欠のものであつたので、この競技のルーツは古代の全ギリシャ的な競技会での五種競技のジャンプではないかと、彼らは推測している。(1896年の第一回近代国際オリンピック競技会でも三段跳びが陸上競技の種目になっている)

1、2、3と跳ぶ様子は、伝承されている歌の中に表現されているが、これは三段跳びを意味していると解釈されている。三回目のジャンプは、ジャンプが走って行われていることを示している。北部ギリシャのシアティスタ(トルコ占領時代にもギリシャ人が住んでいた地域)は「三回の」または「一回の」という表記の種目があるが、これは三段跳びと一回のみの跳躍であつたと考えられ

⁴⁵ 紀元3世紀の Pausanias によれば、ヘラノディカイは、当初3人であつたが、後に10人になり、競技の審判とともに運営そのものも管理する役員であつた。彼らはオリンピック競技祭が始まる3カ月前から、運営と審判について泊まり込みで特別の研修を受けて、祭典に臨んだ。

⁴⁶ オスマントルコにおいては、異教の祭りであっても、禁止されることはなかつた。基本的にイスラムでは、キリスト教や仏教文化を否定することはなく、キリスト教の異教に対する考え方より寛容であつた面が存する。古代オリンピックはローマ社会のキリスト教化により、異教の祭典として中止になり、神殿も異教神殿破壊令によりゼウスの神殿が破壊された。

⁴⁷ Georgiadis, K.(2004) *ibid.* pp.24-25. Dimitriou, M.(1995) *ibid.* pp.14-15.

ている。

また、スタートラインについても、明瞭にわかるように工夫されていた。教会の境内にラインを引いて、スタートがはっきりわかるように赤いベルトをその上に置いたことが、示されている。

詳細な技術や方法は不明であるが、このスポーツについての言い伝えはたくさんあり、例えば、4月24,25日に今日でもアラホバで行われる跳躍競技は、その名残と考えられている。

また、教会の境内の柔らかい土に、三段跳びのスタートのための一本のラインを引いて、3本の棒を手にとって走って足で跳び、最初の棒は足が着いた所、より正確には自分の足裏がついた所に置く。同様に、2本目と3本目を行い、なるべく遠くへ、前へ跳んだ者が勝者になったとの報告もある。交互に足を使ったり、別の足がついたら失格になったことも示されている。

これらの三段跳びは、盗賊 (Klephts) や義勇兵 (Armatoloi) の発明ではなく、辺境の地の伝統的な歌でうたわれていることから、古代のジャンプから引き継いだものではないかと主張する報告も紹介されている。研究者の中には古代の五種競技のジャンプは三段跳びであったと信じている者もいる。

b. ランニング

ランニングについての Georgiadis や Dimitriou の見解は次のようである。「辺境の地のうたや Klephts の歌の中にもスピード、強さ、足の美しさへの賛辞があり、これらは古代ギリシャ人と相通じるものである。Xenophanes(2.17) は足の速さを「身体の強さのなかで最も称賛すべきもの」と表現しているし、ホメロスも足の速さにしばしば言及している。

ランニングレースについて、民族学者 Loukatos は、距離は測られずに目測したが、距離は 300~400m であったとしている⁴⁸。

しかしドラマでのレースやマケドニア領内であった地域のレースは 500m 以上の距離で競った。エブロス川のマイストロでは、大人と十代の若者のみが参加し、それ以下の子どもは参加できなかった。この競走の距離は 1500m であった。競技者は自分の姓名、洗礼名、年齢、出身地を宣言した。スタートラインを引き、スターターはポールに結びつけられた旗を三回振り、三回目にポールを地面に叩き付けてスタートの合図とした。競技者の友人や親戚などが馬の背に乗ってゴールへ移動した。ゴール 100m 手前に若い女性が待っていて花を投げつけた。

⁴⁸ Loukatos, D.(1988) : Πασχαλινά και της άνοιξης. Athens.p.135.

アラホバでの St.George 祭では、今日、4月23から25日までの3日間続けられ、初日には教会での礼拝後、走競技のみが行われている。これは耐久レースで、St.George の丘の下から頂上までを走る。最初は60歳以上の人走り、その次に十代の若者が走る(Karaiskakis というトルコとの独立戦争における英雄の勝利(1826.11.24)を記念してアラホバの St.George の教会の中で感謝祭を開催し、競技会も行った)。アルゴス地区のメディアでは5km、教会から村の中までを走った。走者はスタートラインに並び、審判が一人ついた。

シアティスタでは険しい丘に建てられた町だが、そこには民族競技があり、約100mほどの距離のレースが行われていた。

c. 石投げ

石を投げる競技も比較的人気があったが、これは古代の全ギリシャ的競技祭の競技とは違うものであった。石投げはギリシャのいたるところで行われていたことが、多くの記述に残されており、技と石の大きさや重さを競った。例えばドラマ地方では、石の重さは決められていて、半オカ(古代の単位で1オカ1.28kg)であった。競技者は投げたいだけの数の石を投げた。これはイースター・マンデーに St.Demetrius 教会の奉仕活動の後に行われ、未婚者のための競技で、成功すると結婚することを意味した。

コリントス付近のアシキアでは、二つの競技用の石があり、1オカと1.5オカ(1.92kg)の重さがあった。競技者はこれらの石を、離れた小溪谷に勝敗を意識せずに投げる⁴⁹。かつては3kgの石であった。

シアティスタ(コザニ県の北東部)では、9kgもある尖った石を投げなければならなかった。(最も古い石投げの文献はホメロスのオデュッセウス 9-189. でパイエーケスの広場で、円盤を取って回転させ、手から離すと石がうなった。)そこにもスタートラインが引かれ、その後ろに競技者が立った。膝を開いて立ち、石を両手で頭から足へゆすって十分な力が得られた時、高く放りあげるが、手は石につけたままである。手を離れた時に、ラインを越してはならない。アラホバの聖ジョージア祭でもこの競技は行われるが、たいていは、1日目には行われず、4月24か25日に行われている。

d. レスリング

シアティスタとアラホバでは、レスリングは聖ジョージア祭などで行われた。

⁴⁹ Chrysafis, I. (1930) もアシキアでの石の競技に言及している。

Chrysafis, I. (1930) Οι σύγχρονοι διεθνείς ολυμπιακοί αγώνες. p.397.

レスリングはセレス近くのニグリタでも行われ、そこでは競技者は試合前にオリーブオイルを塗り、腰帯を着けた。相手を叩くことは禁止されていて、背中が地面についたレスラーが負けとなる。レスリングのルールは西トラキアと同じであったが、相手を空中に持ち上げることで勝つという西トラキアのルールはなく、ほかに頭、のどや急所へのかみつきなどの危険な攻撃は全て反則であった。審判は重要な役割を果たし、多くの観客が、選手が反則していると、皆で「ルール、ルール」と叫び抗議する。すると試合は最初からやり直しとなった。

e. 競馬

教会で行われた祭典では、通常、競馬が最後の競技として行われた。しかし、競技のようすは古代の競馬の内容からはかけ離れていた。メッセニアのバスタでは、St. Georgia 祭でトルコが侵略するはるか昔から競馬が行われていたことが報告されている。距離を競う競技では、350m から 500m を走るが、スタートラインは白い広い線で書かれていた。二人の男が、馬の胸にきつくしまったロープを持ち、スターターの合図でロープを放すと、騎手が出発する。二人一組の、4人の審判がジャッジした。彼らのうちの1組がスタート地点、もう一方がゴール地点に位置した。

古代の習慣を継承していると思われる祭典はレスボス島でのアギオス・ハラランボスで、そこでは、試合の数ヶ月前に騎手と馬主が押し問答をする。(騎手は最も良い報酬を求め、馬主は最良の騎手を雇おうとする。レースの距離は約 500m。賞を取ると勝者は儀式として友人たちに連れられて審判団の前に進み出た。審判は多くの場合、教会を運営する委員会であった。西トラキアの競馬には多くの賞品があった：ラムか牡羊、または村の娘たちが作った花の葉冠、彩色された大きなネッカチーフなどであった。

以上が、Georgiadis と Dimitriou による報告であるが、これらオスマントルコ支配下の時代に行われていた競技を古代との連続性という視点で見ると、次の点が注目される点であろう。

第一にジャンプにおいて、棒を持って跳んだことが注目すべきことである。

これは、古代のジャンプ競技と極めて似ている。古代においては、ハルテレスという、重りを持ってジャンプ競技は行われていた。重りの反動で遠くへ跳ぼうとするが、失速しないために、途中でこの重りを手から離すのが習わし

であったと古文献は伝えている⁵⁰。このことの風習が何らかの形で伝えられて、このように棒を持つてのジャンプになっていたとしたら、当地のジャンプ競技は、古代との連続性が存在していたことになる。

第二に、スタートラインを明瞭に示したことも、古代との連続性という点で、注目すべき点である。古代の競技祭では、いかに公平にスタートさせるか、ということに、知恵を凝らした面があり、それがスタート装置に示されている。古代イストミアで行われていた競技祭では、紐を各スタートラインにつなげてヘラノディカイがそれを持ち、スタートの合図とともにその紐を放し、各コースの水平な棒が下に落ち、走者がスタートできるのであった。

その意味で北部ギリシャのマイストロで行われている競走で、スターターがポールに結びつけられた旗を三回振り、三回目にポールを地面に叩き付けてスタートの合図とした、という点は、古代のスタートの風習に通じるものがある。そのほか、赤いベルトを置いて明瞭に示すことも、祝祭の中で行われる競走や競馬であっても、公平なスタートを保証する、という考えが受け継がれていたものと思われる。

1-1-3. ビシニア地方におけるオリンピック競技会

小アジアの北部（イズニックの南東 79km、イスタンブールから 170km の位置）に位置するビシニア地区で「ビシニア・オリンピック競技会」と呼ばれた競技会が行われたとの記録がある。この競技会に関しては、古代の競技祭とギリシャの近代における教会のスポーツ行事との関連で、19 世紀に報告されている⁵¹。報告者の G.Pakhtikos は、「オリンピック競技会（ΟΛΥΜΠΙΑΚΟΙ ΑΓΩΝΕΣ）」という競技名の由来については、実際に“オリンピック競技会と呼ばれていたものか、もしくは著者の考えでこの村の競技会にその名前をつけたのかどうかは、もはや確定できないと述べ、オリンピックの名称は、もともと当地の人が呼んでいたものではなく、Pakhtikos 自身が名付けたものであることをほのめかしている。

そして、「これらの教会の祭典と競技会は、ある意味ではローカルな祭典で大きな意義はないかもしれない。しかし古代の神々に捧げ、また英雄たちを記念して行われたかつての祭典に思いを馳せると、この祭典も大きな意味を見いだすことができる。なぜなら、ここでの祭典も自然性のもとに栄えた競技会を

⁵⁰ Pausanias 'ΕΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ. 5.12.5.

⁵¹ IOC の会報にもこの競技について紹介された。Les jeux Olympiques en Bithynie, Bulletin du Comité International des Jeux Olympiques, 3 1895.1. 2nd ,p.4.

行った栄光ある民族の直系にあたる祭典だからである。⁵²」と述べ、古代との接点を探った結果、古代との関連が浮かび上がってきたことがうかがわれる。

「これらの教会の祭典を注意深くしらべてみると、それらの中に古代のヘレニズム的な生き様を見いだすのみならず、ギリシャの宗教を反映した古代の考え方を発見し、何世紀も経て未だに受け継がれているホメロスの態度や習慣のモデルを発見できる。それゆえこのタイプの祭典が外国の同国人にも認められていたのである；一握りのろうそく、一握りの葬式の肉、地獄とカソック（黒色の服）などは、古代のギリシャ人と当時のギリシャ人とを区別するものである。⁵³」

Pakhtikos により報告された競技会の内容は、まとめると次のようになる⁵⁴。

毎年、St.George 祭の時に競技会が定期的に行われる。トルコ人など周囲の人々が、ギリシャ人への興味を示して、群れをなして教会の外側から覗き込んだ。教会の奉仕活動が終わると、厳粛さと輝きをはなつて、教会の旗とケルビの盤をもった行列が始まり、聖職者と聖歌隊が教会から出てくる。観客と生徒が街の外にある St.George の聖なる教会へ急いだ。

そこで行われた競技は次のようなものであった。

a. 競馬

最初の競技は 300m 前後を走る競馬であった。

b. レスリング

レスリングには、アルメニア人とトルコ人もギリシャ人とともに参加した。優勝すると民族の威信を高める事にもなった。笛奏者が音楽を奏でてから、競技者はレスリング場へ入り、オイルとほこりであらだをテカテカにする。オイルを塗ることであらだが敏捷になり、ほこりが身体についていることで、つかんだ時に滑るの防ぐとともに、発汗を抑えるものと信じられていた。相手の顔がグラウンドにつくか、降参の合図として、指か顔をあげさせれば、勝利することができた。レスリングの試合は2時間続く事が多かったが、途中で休む事

⁵² Pakhtikos, G.(1893,1995/96): Ολυμπικοί αγώνες εν Βίθυνια. Athens.p.2.

Pakhtikos は 1869 年にビシニアで生まれ、音楽学と古典学をアテネ大学で学んだ研究者。

⁵³ Pakhtikos, G.(1893,1995/96),ibid.

⁵⁴ Pakhtikos, G.(1893,1995/96),ibid.pp.4-12.,Georgiadis K.(2004) ibid.pp.25-26.

はなかった。

c. 競走

競走が次に行われた。3つの部門に分かれていた。最初はスタートとゴールが用意され、走者がスタートラインに並び、優勝を狙う。二番目は同じ距離を適当な重さの石を担いで走る。これは古代の武装競走⁵⁵のようなものである。三つ目のレースは古代のディアウロス走⁵⁶にいくらか似ている。そのスタートがたいへん興味深い。スタート地点で一人の大人が二人の走者の手をつかみ、スタートの合図とともに反対方向に走る。スターターは走者の手をつかむと、手を高くあげ、三つ数えてから同時に手を離してスタートさせる。走者達は反対方向に走り、時計回りと反対方向のように、二つの通過点を通り、スタートに戻る。ここでの方法は創意に富んだものであり、双方の走者は同じ競技条件が保証されているのである。

e. ジャンプ

まっすぐ跳ぶジャンプで、助走したかどうかは不明である。

f. 円盤投げ

円盤投げでは球状の石が使われ、年齢に応じた重さと大きさのものがあてがわれた。

g. 槍投げ

槍として使われたのは、平らで軽い棒である。競技者は槍を遠くへ投げることがを競うが、しばしば石を狙うこともあった。

h. ボクシング

競技者はパンチを応酬し、お互いにダメージを与え、顔から血を流した。戦いは一方が戦えなくなるまで続けられた。

⁵⁵ 武装競走とは、盾を持ち、ヘルメット、脛当てをつけて一往復する競走で、後には、盾のみを持って競走するようになった。紀元前 520 年に古代オリンピックに種目として導入された。

⁵⁶ ディアウロス走とは、古代オリンピックで行われた競走で、競技場のコースを一往復する。距離は 385m で紀元前 724 年にオリンピック種目として導入されたが、どのように回ったのか、については正確にはわかっていない。

すべての競技種目が終わると、勝利者と観客たちは、勝利を祝って祝勝会に参加し、踊った。

Pakhtikos は、この St.George のためのビシニア・オリンピックは長い歴史があり、19 世紀の初年にまでさかのぼれると書いているが、St.George の祭典は後に加えられたものなので、真の起源は古代にまでさかのぼる事を示唆している。

この競技の起源を突き止めるのは難しいが、槍投げやボクシング、そして武装競走に似た競技などが、ビシニア地域の競技会で行われていたことは興味深い。古代の武装競走は、盾を持って走ったが、ここでは、石を持って走っている。これらの競技会の宗教的、民族的な意味合いも見なければならないが、これらの競技プログラムは、明らかに古代ギリシャとの関係性がうかがえる。レスリングでオイルを塗ることはトルコのレスリングの系統を受け継いでいるのであろうが、古代ギリシャのアスリートも同様に、オリーブオイルを塗っていた。

さらに、古代のオリンピア競技者には、事前の訓練が行われていたし、競技の規則も存在していた。古代の競技選手は、一定期間、オリンピアでの練習が義務づけられ、出場する際の資格が確認されたり、さまざまなルールを学んだのであった。それと同じようなことが、このビシニアでも行われた形跡がある。さらには、公正なプレイかどうかを下す審判団（ヘラノディカイ）も存在していた。古代オリンピックと同様に、川の堤にある緑の中で行われた。熱狂的に優勝者を歓迎したようすも、古代のオリンピアの祭典の情景に似ている。

以上のことから、オスマントルコの支配下におけるギリシャにおいては、競技や身体活動が行われなかったのではなく、宗教的な祝祭日に、さまざまな競技会が行われていたことが明らかになった。宗教的な行事として行うことで、トルコ人からの干渉はほとんどなかったと思われる。

そのような祝祭で行われた競技には、古代の競技の風習を彷彿とさせるようなものも存在していた。ギリシャ人たちは、古代の競技文化を直接的に意識していなかったにせよ、それらは、古代オリンピックと容易に結びつくことができる要素が含まれていたのであった。

1-2. ギリシャ人の地中海交易の拡大

18 世紀からギリシャ人の地中海での交易活動の拡大とともに、商業上の移民地になったベネチアやローマにもギリシャ人の学校やカレッジが建てられ、そ

ここに通ったギリシャ人を通してヨーロッパ文化がギリシャ内に流入してくるようになった。

また、18世紀末から19世紀になると、地中海での貿易に携わっていたギリシャ商人の中には、学校や図書館を寄進したりするほか、ギリシャ人の若者がドイツなどヨーロッパの大学で学べるように奨学金を出す者も現れた⁵⁷。留学した彼らは、古代ギリシャの文化がいかにヨーロッパで尊ばれ、大事にされているかを目の当たりにした。時あたかも、ドイツ、フランスでは新古典主義が流行していた頃であった。新古典主義とは、純粋なギリシャ志向で、それまで支配的であったローマを拠り所とする古典主義を塗り替える考え方として出され、芸術や建築の世界でまたたくまに普及した。

たとえば建築では、ルネサンス時代以降、古代ローマ建築がその理想であるとし、それを模倣して建築物を造るのが常であったが、18世紀末から、ギリシャ時代の建築こそ、その本質であるとの出版が相次いだ。

また芸術でも、ギリシャ時代の彫刻に目を向けたドイツ人の **Johann Joachim Winckelmann** (1717～1768年) による著作が、芸術の見方を変えることになった。例えば次の一文は、**Winckelmann** が『古代美術史(Geschichte der Kunst des Altertums)』を著した際に、ギリシャ時代の男性彫像作品に与えた最大の賛辞である。

「このアポロは、破壊をまぬかれた古代の作品すべての中で美術の最高の理想である。作者は、この作品をまったく理想の上に築き、素材からは、目に見えるものとするに必要とされるものだけを取った。・・・体躯は人間を超えて聳え立ち、姿勢はこの神に満ちる偉大さを示す。至福の園に居すが如く、永遠の春は、完成された壮年の魅力である雄々しさを瑞々しい若さで覆い、四肢の誇らしげな構えの上で、繊細な優しさと戯れる⁵⁸。」

Winckelmann は、芸術作品の中で最も完全なものがギリシャの男性彫像に示されていることを宣言し、古代世界におけるギリシャ美術の卓越性を体系的に論拠づけた。

そしてそれらの理想的な作品が制作された背景に、ギリシャにおける体育の興隆があった。**Winckelmann** は『絵画と彫刻におけるギリシア美術の模倣に

⁵⁷ ニコス・スボロノス著 西村六郎訳 (1988) 近代ギリシア史.白水社.pp.31-32.

⁵⁸ ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン著 中山典夫訳 (2001) 古代美術史. 中央公論美術出版. p.330. **Winckelmann, J.J.**(1964) *Geschichte der Kunst des Altertums*. Wilhelm Senff ed. Herman Boehlaus Nachfolger: Weimar, p.309.

関する考察(Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Wercke in der Malerez und Bildhauer-Kunst)』の中で次のように述べている。

「ギムナシオンは芸術家の研究場であった。そこには青年達が日常来ている衣服を脱いで裸で体育に精を出していた。賢人や芸術家がこの場所に毎日やって来た。(中略) 彼らは、筋肉の運動や身体が屈曲回転するさまを学んだ。身体の輪郭を研究したり、レスラーが砂上に残した跡から、身体について研究したのであった。⁵⁹⁾」

「美術家は、美しい若さに、すなわち、その統一、多様、調和に、美の要因を見た。何となれば、美しい若々しい肉体の各部の形は、常にその中点を変え、けっして一つの正円を描くことのない線によって規定されており、従ってそれは、大きくても小さくても常に同じ形で、まさに中心をもち、他をみずからの内に含む、あるいはみずからが他の内に含まれる正円より単純であり、また多様だからである。この単純な、しかも一つの中心に規定されない多様さは、ギリシア人があらゆる種類の被創物に求めたものであった。

(中略) 各部分の形の結びつきに、また一つの形の他への移行に統一性があれば、全体の美しさはいっそう増す。このような個々形からつくられた美しい若者の体軀は、たとえば、絶えず動き、波打っているにもかかわらず、いくら離れるとあたかも鏡の如く平らで静かに見える大海原の水面と比べられる⁶⁰⁾。」

古代ギリシャの芸術の発展には、ギリシャ人の体育 (gymnastike ΓΥΜΝΑΣΤΙΚΗ) が大きく寄与していた。各種の運動競技の練習を行うギムナシオン (gymnasion ΓΥΜΝΑΣΙΟΝ) はじめ、格闘技の練習を主に行うパライストラ (palaestra ΠΑΛΛΑΕΣΤΡΑ) など青年たちが身体を鍛える公共の施設には、芸術家たちがこぞって作品の制作に従事した。ギリシャの若者たちは裸で練習したことから、芸術家にとって、人体の美を研究する格好の場となったのである。

⁵⁹⁾ ヴィンケルマン著 澤柳大五郎訳 (1974) ギリシア美術模倣論.座右宝刊行会.p.21.

Winckelmann, J.J. (1755) Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in der Malerez und Bildhauer-Kunst.p.18.

⁶⁰⁾ ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン著 中山典夫訳 (2001) 古代美術史. 中央公論美術出版. pp.126-127. Winckelmann, J.J. (1964) *ibid.*,p.132.

Winckelmann は、ギリシャ美術に貢献したギリシャ体育の存在を示した。

Winckelmann は、1717 年に北ドイツのシュテンダールに靴修理職人の息子として生まれた。苦学しながら故郷のラテン学校を卒業するとプロイセン王国の首都ベルリンに出て高等学校に学んだ。Winckelmann が 18 歳の時であった。そこでの副校長 C.Chr.T. Damm (1698～1778 年) はギリシャ文学の専門家で、Homeros や Pindaros の作品をドイツ語に翻訳した人物であった⁶¹。Winckelmann はここでギリシャの古書に出会い、古代ギリシャへの関心が急速に高まった。特に Pindaros は、古代のオリンピア、デルフォイ、イストミア、ネメアの四大競技祭の優勝者を称えた詩歌を作成した詩人で、彼の作品を通して、ギリシャ体育への目が開かれたと言える。ベルリンに滞在したのは 1 年ちょっとであったが、若き Winckelmann にとって、ギリシャ体育への知識を吸収し、後の大作完成の下地が築かれたと思われる。

フランス人の Marc-Antoine Laugier (1713～1769 年) による『建築試論 (Essai sur l'architecture)』も、1755 年に出版された。Laugier は古代ギリシャの建築について次のように述べて賛嘆した。

「建築は、そのもっとも完璧なところを、ギリシア人に負っている。彼らは天性に恵まれた民族で、科学を少しも無視せず、芸術においてあらゆるものを発明したのはもっぱら彼らによるものだった。ローマ人はギリシア人が彼らにわかち与えた秀でた規範に感嘆の念を禁じえず、それを写すことに成功したが、そこに自分たちのものを加えんとして、結局全世界に教えたことといえば、ただ完成の度合が一度達成されたならば、もはや模倣か失墜しかないということだった⁶²。」

Laugier は、建築については素朴ではあるが、柱と屋根という本質的なことを重視したギリシャ時代のものを模倣することこそ大切だ、との信念を持っていた。Winckelmann はギリシャ美術の模倣を唱え、Laugier はそれを建築の分野で主張し、ヨーロッパの各国語に翻訳されたのであった。

Winckelmann と Laugier は 1755 年という同じ時期に著作を著し、これらが各国に翻訳され、ギリシャの芸術や建築が見直され、それらの研究が進められ、ベルリンなどの都市づくりにも生かされていくようになった。

61 ヴィンケルマン著 澤柳大五郎訳 (1974) 前掲出.pp.100-101.

62 M.A. ロージェ著 三宅理一訳 (1986) 建築試論. 中央公論美術出版, p.30.

彼らの書が 18 世紀のヨーロッパで歓迎されたのは、ギリシャ芸術に「高貴なる単純と静かなる偉大」を発見し、それを規範とした理想は、美術を身分の飾りとするアンシャンレジームに代わって、近代市民社会が目標とした階級にとらわれない価値観に合致したためであろう。

ヨーロッパ各地に集ったギリシャ出身の留学生や文化人は、こうした空気の中で生活し、古代ギリシャの遺産の後継者が自分たちであることを、自覚していくのであった。本土ではビザンチン文化をその拠り所とする者が圧倒的に多かったが、ヨーロッパで学んだ彼らがギリシャに帰ると、古代ギリシャ文化を見つめ直し、そこに民族的アイデンティティを見いだそうとする知識人や中産階級が徐々に増えていった。トルコとの独立戦争が始まる頃にはヨーロッパ人の古代ギリシャ文化への傾倒ぶりがますます知られるようになり、古代ギリシャ文化に拠り所を求めようとするギリシャの知識人の動きが、いっそう活発になった。19 世紀の初め頃までに、古代文化の知識がヨーロッパからギリシャへ逆輸入されたといえる。

1-3. 文学における古代オリンピックへの言及

このような背景のもと、ギリシャに住む文学者たちに、古典文化復興の考えが伝わった。この時期、最初に“Olympia”という用語が使用されたのは文学の部門であった。

1797 年、近代ギリシャを再興するための要素を古典古代の様式に見い出そうとした知識人のうち、Rhigas Pheraios (1757～1798 年) は、そのような考えを持ちながら独立運動の準備をした。彼は学校の教師を務める傍ら、ギリシャの歴史や愛国的な詩を出版した。外国作品のギリシャ語への翻訳作業も行ったが、3つの作品を集録した『道徳性の鼎 (Ethikos Tripous)』を出版した⁶³。

3つのうちの最初の作品はイタリア人作家 Pietro Metastasis (1698～1782 年) の「L'Olympiade」で古代オリンピックについて触れた劇である。そこでは、競技者の宣誓、勝利者、賞、オリンピアとエリスの聖地について書かれている。この本のプロローグでは、Rhigas 自身が、古代の競技であるレスリング、円盤投げ、ジャンプ、パンクラチオン、ボクシング、競技場と走路について述べ、さらに古代のスポーツをわかりやすく説明するために当時のスポーツについても言及している。そこでは、円盤投げを「石投げ」、そしてジャンプを「三回跳び」と述べている。石投げと三段跳びはこれまで見て来たように、多くの民謡の中で述べられた近代（中世）ギリシャの競技会であり、わかりや

⁶³ Vranousis, L.I.(1955) Ο Ρήγας και εποχή του. Athens.1955.p.291.

すくするためにそのような表現を用いたものと思われる⁶⁴。

Rhigas が提示しようとしたのは、古代の競技の伝統と新しいギリシャのそれとの関係性を強調することであったと思われる。トルコ人による支配下の危機にある中で、文学を通して古代ギリシャ文明と当時のギリシャ人とのつながりを示したと言える。

愛国的かつ革命的な考えをもったケーファロニア島のヤコブ協会も同じ年にオリンピック競技会は復興されるべきと訴えたことが報告されている⁶⁵。

1797 年、ナポレオンの軍隊がイオニア諸島からヴェネチア貴族を追い出した際、ヤコブ協会がフランス革命の産物として設立され、次のように宣言した。「キリスト教の活動禁止、オリンピック競技会と古代の風習と先祖伝来の宗教の復興、そして近代のギリシャ人が古代ギリシャ人とすべてにおいて同じになるようにする⁶⁶」

イオニア諸島の解放はわずか数ヶ月にしか過ぎなかったのだが、このような声明が出されるほどに「オリンピック競技会」は古代と当時のギリシャ人とをつなぐツールであった。

「オリンピック競技会」ということばはイオニア諸島のフランスの占領期間（1807～1814 年）にも、人々を覚醒させるために使われた。”Academie olympique”がギリシャとフランス人の文学者により設立され、オリンピックの芸術競技について発表されたことが報告されている⁶⁷。

こうして、文学者や作家、のみならず政治的なグループにおいて、オリンピック競技会の復興、ということがしばしば用いられるようになった。これは、当時のギリシャ人を古代ギリシャの継承者であることを自覚させることで、オスマントルコからの支配を脱却することを意図したものであった。

当時の作家など知識人は、一般のギリシャ人に古代の文化の継承に気づかせることで、自信と勇気を与えて独立心を喚起するなど、ギリシャ人の民族アイデンティティの確立のため、古代オリンピア競技祭についての作品も出版したのであった。

1-4. ギリシャの独立による民族の覚醒

⁶⁴ Vranousis, L.I.(1955) *ibid.*pp.302-328.

⁶⁵ Vranousis, L.I.(1955) *ibid.*p.293.

⁶⁶ Vranousis, L.I.(1955) *ibid.*p.303.

⁶⁷ Georgiadis, K.(2004) *ibid.* p.27.

1814年ころから、ギリシャ人の間で、独立をめざす秘密結社が結成されていった。彼らは、ロシアとオスマントルコとの勢力が伯仲している地域で、反乱を起こすことにより、ロシアを見方にして、オスマントルコと戦おう、という作戦が作られていた。ギリシャ北西部において、Ali Pasha (1740~1822年) というアルバニア人の豪族が、1820年末にトルコに対して反乱を起こしたのを契機に、ギリシャ人の秘密結社が蜂起して、1821年に本格的な独立戦争が始まった。翌年、独立宣言が発せられた。これに対し1821年、オスマントルコは、エジプトの協力を得て、この鎮圧に臨んだ。ギリシャでの独立戦争のようすがヨーロッパ各国に伝えられると、ヨーロッパの知識人たちは、ギリシャ人を支援したのであった。当時のヨーロッパの知識人にとって、ギリシャ人は古代の英雄たちの直系の子孫であり、オスマン軍の暴虐が伝わるにつれて各国から続々と義勇兵が参集した。ロマン派の詩人 George G. Byron (1788~1824年) などはその代表で、独立戦争に参戦するためにギリシャにやって来たのであった⁶⁸。

当時はナポレオンによるヨーロッパの混乱を集結させるためのウィーン体制が決められ、新たな独立国は認めない、との空気が強かったのだが、ロシア皇帝に即位したニコライ1世が、ギリシャへの援助の姿勢を取ったことにより、形成が変わった。イギリスとフランスがロシアの南下政策を阻止するために、ギリシャの独立に干渉したのであった。ここで明らかのように、ギリシャの独立は、ギリシャとオスマントルコとの二者の関係ではなく、列強の干渉を受けつつ成し遂げられていくのであった。

イギリス、フランス、ロシアの三か国は、オスマントルコにギリシャの実質的な独立を認めるように迫ったが、オスマントルコはこれを拒否したため、戦争になった。1827年10月、ロシアの艦隊が、トルコ・エジプトの連合艦隊をナヴァリノの戦いで破った。1829年、アドリアノーブル条約で、オスマントルコはギリシャの独立を認め、翌1830年、ロンドン会議でヨーロッパ列国が、ギリシャの独立を承認した。その後、国家元首と国境の確定がイギリス、フランス、ロシアにより協議されて確定し、1832年、ギリシャ王国として出発することになり、ギリシャは400年にわたるトルコ支配から脱したのであった。

初代国王は、ギリシャ人ではなく、三か国により決められ、バイエルンの第二皇子 Othon が就任した。この経過から、ギリシャはギリシャ人により独立

⁶⁸ Byron はギリシャ独立のための義勇軍を募り、1823年にギリシャのミソロンギに渡り、トルコ軍と戦うが、翌年、熱病に冒されて死亡した。その死に対して、ヨーロッパでは、ギリシャの独立戦争を支持する動きが広がった。

を勝ち取ったのではなく、列強の監視のもと、それぞれの思惑をもって、独立へと導かれたと言える。このことは、独立後も、これらの国々の干渉を受けざるを得なかったのであるが、新古典主義を熱愛していたバイエルンの王室を国王として迎えたことは、ギリシャにおけるオリンピック復興運動に少なからず影響を及ぼした。

解放後、新たなギリシャ国に広まったイデオロギーは、当時のギリシャ人は古代ギリシャ文化の相続人であり、継承者であるという考えであった。古代のモデルは実際に、過去のどの時代においてもより強いものであった。

その一方、新しいギリシャ国家の最優先の課題は、人々の生活の質を向上させることと考えられた。この目的を達成するためには、ギリシャ人は自身の能力を信頼することをまず学ばなければならなかったと言える。そして外国で活躍しているギリシャ人の知識人の知恵を得ることで、未だ他国の領土になっている地域の解放をめざした。

400年ぶりのオスマントルコからの独立は、新しい近代国家建設のために、古代の文化をどのように取り入れたら有益なものになるのか、ということについて、為政者も知識人たちも取りかかる契機になった。その一環で、古代オリンピアで行われた競技祭についても、いろいろな試みが提唱されることになるのであった。

2. 新古典主義による都市建設

2-1. ヨーロッパ人建築家による都市建設

英国、フランスそしてロシアの三国により選ばれたギリシャの初代君主は、バイエルン王国の第二皇子、Otto von Wisterbach (1815～1867年)であった。バイエルン国王 Ludwig 1世は古代ギリシャ文化の熱烈な崇拝者であり、帝都ミュンヘンは、新古典主義の建築物やギリシャ彫刻であふれていた。その息子 Otto (ギリシャでは Othon 在位 1833～1862年)も、初代ギリシャ国王ながら、Ludwig 1世の影響を受け、むしろ父王の支援を受けながら、古代ギリシャ文化の復興を志向しつつ、近代ギリシャの国家建設に乗り出したのである。

Othon は、ナフプリオンからアテネに 1835年1月に首都を遷都すると、新古典主義の建築家として名を馳せていたドイツ人 Leo von Klenze (1784～1864年)、デンマーク人建築家の Hans Christian Hansen(1803～1883年)と Theophilus Hansen (1813～1891年)の兄弟を中心に、新古典主義の建築を主体にした都市づくりに着手した。Klenze は、Ludwig 1世にも仕えた建築家であった。彼らはアテネに王宮を作り、アクロポリスを修復し、考古学博物館、

アテネ大学、国立図書館などをギリシャ様式にて建造した⁶⁹。こうして、古代文化継承者としての自覚をもつべく都市建設が始められた。

ドイツ人主導のギリシャ政府は古代ギリシャ様式による近代国家の建設を進めたが、政府の要職をドイツ人に占められたギリシャ人は、ギリシャ様式を基調とした国家の建設に対して、必ずしも好意的に受け止めたわけではなかった。やがて、国の財政が破綻したことをきっかけに、君主制に対する不満が爆発し、1843年にクーデターが起こり、王宮を包囲して Othon に憲法制定を迫ったのであった。

2-2. ギリシャ人建築家による都市建設

ギリシャ人の要求に応じて 1843 年にギリシャ政府の公職から外国人が追放されると、ギリシャ人建築家も都市の建設に参加できることになった。その代表的な人物が Stamatios Kleanthis (1802～1862 年) と Lysandros Kaftantzoglou (1811～1886 年) らであった。

Kleanthis は、オスマントルコとの独立戦争に従軍した後、ベルリンで建築学を学び、ドイツ新古典主義建築を学んだ。建築学校の学生時代から民家の設計を手がけ、1830 年に卒業する頃には、プロイセン国王から表彰状が授与されたほどの、優秀な建築家であった。同年、ギリシャの臨時首都ナフプリオンに入り、無料奉仕を申し出て、エギナ島を中心に古代様式の家屋を建設し、1831 年 11 月にアテネに移り、アテネの市街計画にも関与していった⁷⁰。彼はパルテノン神殿に忠実に造られることが「もっともギリシャ的」とであると主張した。アテネの女子師範学校の上階部は、Kaftantzoglou によりイタリアのトスカナ様式で設計されていたのが、Kleanthis の意見によりギリシャ様式に修正された。この前 5 世紀の建築様式が新古典主義の建築としてギリシャでは受け止められるようになり、このことは建築界における古代回帰の現れというものであったといえる。

Kaftantzoglou は、イタリアのローマにある美術学校で建築学を学び、さら

⁶⁹ Christopoulos, G.,Mbastias I. ed. (1977) ΙΣΤΟΡΙΑ ΤΟΥ ΕΛΛΗΝΙΚΟΥ ΕΘΝΟΥΣ. Vol.13, Εκδοτική Αθηνών :Athens. p.517.

勝又俊雄 (1996) : シュリーマンと 19 世紀ギリシャの新古典主義建築 4 日本ギリシャ協会 会報 76 pp.6-7.

⁷⁰ Christopoulos, G.,Mbastias I. ed. (1977) ΙΣΤΟΡΙΑ ΤΟΥ ΕΛΛΗΝΙΚΟΥ ΕΘΝΟΥΣ. ibid. p.522
勝又俊雄 (1997) : シュリーマンと 19 世紀ギリシャの新古典主義建築 9 日本ギリシャ協会 会報 82, pp.10-11.

にフランスに移ってフランス建築学も学んだ。彼も早くから建築の才能をあらわし、1834年にはミラノ大学建築コンペで大賞を受賞した。彼はヨーロッパの古典主義建築が古代ギリシャの様式に由来していることに誇りを持ち、自らの手でギリシャの建築を手がけようと、1838年に首都アテネに入った。アテネに入ると、当時外国人建築家たちにより最終段階になりつつあったアテネ大学建築案とアテネの都市計画案に自案を提出した。彼の案は認められなかったが、バイエルン出身のドイツ人により支配されていたアテネの市民を活気づけ、新聞はこぞって彼の才能と勇気を称えた。彼は1844年にアテネ工芸大学の学長になり、学生たちに建築学を講義しながら、篤志家の寄付を受け、大学の校舎を彼の理想に近い形で建設することができた。Kaftantzoglouは、基本的には、新古典主義を基調としながらも、ビザンティン用式も考慮に入れた建築様式を志向していたといわれる。

Kaftantzoglouの手がけた代表的な建築物は、アルサケイオン学校（建築期間1845-52年）、アテネ工科大学（1861-76年）、イレーネ教会（1846-92年）、コンスタンチン教会（1869-93年）などがある。

3. 古代文化（古典言語）への回帰

バイエルン出身の国王やその政府に主導されたギリシャ国内の新古典主義建築志向は、ギリシャ人の古代文化への回帰を強調することになったといえる。これは建築のみならず、言語や文学などにも共通に見られる傾向であった。

言語は民衆語（demotiki）という大衆語が使用されていたが、文献学者や文法学者により、古典古代に使われた言語に純化しようという運動が起こっていた。古代ギリシャ語を復活させようという運動は一時広がっていった。文学や言語分野では、ひたすら古代ギリシャに結びつこうという方向が模索されたのであった⁷¹。この運動は最終的には途絶えてしまうが、独立直後には、古代文化とのつながり、古代文化へ回帰しようとする傾向が特徴的であった。それを近代国家建設の精神的・文化的な支柱にし、また民族的アイデンティティを見い出そうとしたのであった。

この文化における古代回帰の傾向は、体育・スポーツの面でも現れる。それが古代オリンピック競技祭の復興へとつながるのである。外国人主導の政府は、古典主義を近代化に利用しようとした。ギリシャ人は古代文化をそのまま復興しようとする意識が強く、その両面が併せ持つてギリシャの近代国家が形成されていき、オリンピックの復興もその狭間で展開されていくのであった。

⁷¹ ニコス・スボロノス著 西村六郎訳（1988）前掲出.pp.67-68.

第2節 独立直後の体育家と考古学者による古代オリンピアの再発見

1. ギリシャにおけるドイツ人体育家の活躍

近代ギリシャの初代の国王 Othon はバイエルンの Ludwig 1 世の皇子時代に彼の兄とともに、ドイツ体育 (Turnen) の授業を受けたことがあった。その時の教師は、ドイツ体育の創始者 F.L.Jahn の後継者、Hans Ferdinand Maßmann (1797~1874 年)であった。Maßmann は Jahn の高弟で、1848 年にはプロイセン王国の「中央体育教師養成所」の校長に就任した人物である⁷²。Maßmann は 1827 年に、バイエルン国王から軍隊と皇室の体育指導を依頼され、その年の 10 月に、2 人の皇子に体育授業を教授した。そのときの様子を彼らの父、Ludwig 1 世が詩に残している⁷³。

「若者が座して過ごし、身体を破滅させようとしているのを、体育と呼ぶべけんや！ 否、身体を訓練することこそ体育なり。そはギリシャ人の功績なり」

バイエルン王 Ludwig 1 世は、古代ギリシャの体育を評価していた。新古典主義を標榜し、ギリシャ体育も重要視していたバイエルン王の考えは、Othon にも影響を及ぼした。

Othon はギリシャ国王になるべく、1833 年の初めにギリシャに入ったが、その際に考古学者や体育教師も一緒に連れていった。その中に、後にアメリカ合衆国に渡って活躍する Louis Blenker (1812~1863 年)らの体育教師も含まれていた。彼らはギリシャ政府の要請を受けて、当時の首都ナフプリオンで熱心にドイツ体育の実演を行っていた⁷⁴。そして 1834 年には、ナフプリオンに体育クラブを創設し、平行棒や水平棒、ブランコなどのドイツ体育の器具を置いたのであった。

また 1834 年 6 月には国王 Othon により「初等学校令」が發布され、教師の指導のもと、週 2 時間の体育の授業を行うことが望ましい旨、発令された⁷⁵。1836 年 12 月には「中等学校令」が出されると、授業の休憩時間の合間と毎週

⁷² 成田十次郎(1977) 近代ドイツスポーツ史 1 学校・社会体育の成立過程
不昧堂出版, pp.453-454.

⁷³ Diem, C.(1960) Weltgeschichte des Sports und der Leibeserziehung.:Stuttgart,
pp.1079-1084.

⁷⁴ Wildt, Kl.(1964) Auswanderer und Emigranten in der Geschihite der
Leibesübungen.Verlag Karl Hofmann;Stuttgart,p.68.

⁷⁵ Diem, C.(1960) Weltgeschichte des Sports und der Leibeserziehung.ibid., pp.1079-1084.

水曜日と土曜日の午後、他の授業に割り込むことなく、その道に明るい教師の指導のもと、体操や他の運動を実施することが発令された。これらの条例に基づいて、実際に体育の授業がなされたかとなると、現実にはかなり難しかったようではあったが、初代のギリシャ王室の出した条例の内容は、明らかに **Maßmann** の体育を手本としていたことがうかがえる。そして、このギリシャ王の体育志向が、オリンピック競技会への興味と現実的な活動に一定の影響を及ぼしたと推測されるのである。

また、**Blenker** のほかにドイツ人の体育教師でギリシャにおいて活躍した者の中には、**J.Henning** や **Offendorf** らであった。**Henning** は **Schreiber** の「室内体操」をギリシャ語に翻訳し、アテネの女性体育クラブで体操を指導した。**Offendorf** はアテネ体育クラブで **Pagon** とともに体育を指導した⁷⁶。

さらに **Friedrich W. Thierschs** (1784-1860 年) も近代ギリシャの体育に強く関与することになった。彼は 1831 年 8 月に **Jacob Philipp Fallmerayer** (1790～1861 年) とともにオリンピアを訪問した文献学者であり、バイエルン王国の皇子であった **Othon** を、ギリシャ国王に抜擢することを最も主張した人物である。**Thierschs** はギリシャ国王 **Othon** の一行に、彼の体育学校の教師 2 人を随伴させている⁷⁷。

2. ギリシャ人体育家による古代オリンピア競技祭の宣揚

こうして、ドイツ人体育教師から、近代体育を積極的に導入する一方、ギリシャ人の学生がプロイセン王国の首都ミュンヘンにある **Maßman** の「中央体育教師養成所」に派遣された。1834 年ミュンヘンに派遣された **G.Pagon** は、帰国後の 1837 年 3 月、本国ギリシャで「体育入門書」(ΠΕΡΙΛΙΨΙΣ ΤΗΣ ΓΥΜΝΑΣΤΙΚΗΣ) と題するギリシャ語の専門書を王室出版局より出版した。この本の内容は近代体育の父といわれた **GutsMuths** の著書 “*Gymnastik für die Jugend*” の 1804 年版と **Jahn** と **Ernst Eiselen** (1793-1846 年) の合作 “*Die deutsche Turnkunst*” (1816 年) の内容を中心とし、さらには **Francisco Amorós** (1770～1834 年) の “*Manuel d'éducation physique, gymnastique et morale*” (1834 年) を参考にして、書かれたものである。当時のヨーロッパの体育理論を先導していたこれらの諸説をもとに集大成した彼の著書は、アテネの師範学校や体育学校の教科書として使用された。

⁷⁶ Wildt, Kl.(1964) Auswanderer und Emigranten in der Geschichte der Leibesübungen. ibid.,p.69.

⁷⁷ Wildt, Kl.(1964) ibid.,pp.71-72.

Pagon の「体育入門書」は以下のような章で構成されている⁷⁸。

- 1章 体育の概念と目的
- 2章 経験による体育の必要性
- 3章 人間の本性と体育の原理による体育の必要性
- 4章 文明化された市民の状況と柔弱な生活様式の結果による体育の必要性
- 5章 我々の生活様式の結果に対する政治的、教育的対策の欠如
- 6章 体育の運動による身体の調和的発達理論
- 7章 体育の効用
- 8章 体育の障害と反論
- 9章 身体運動の特性と分類
- 10章 体育教師、体育長官の任務
- 11章 生徒の観察
敏捷性・柔軟性の運動、手仕事
- 12章 歩行と走運動
- 13章 跳躍運動
- 14章 運搬運動
- 15章 剣術
- 16章 登攀運動
- 17章 兵式運動
- 18章 水平棒、平行棒運動
- 19章 平均運動
- 20章 感覚（触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚）の訓練
- 21章 水浴と水泳（背泳ぎ、平泳ぎ、潜水、飛び込み）
- 22章 体育に関する質疑応答
- 23章 裸体競技、競技種目と競技場
オリンピック競技会
ピュティア祭、ネメア祭、イストミア祭

体育の定義について Pagon は、「若々しい喜びや快活さを身につけるための活動であり、身体的な運動により、これを完成させるための方法である⁷⁹」としているが、この定義は GutsMuths の「青年らしい喜びを表出するための活

⁷⁸ Pagon, G.(1837) Περίληψις τῆς Γυμναστικῆς, Athens.

⁷⁹ Pagon, G.(1837) *ibid.*,p.102.

動」および、「身体の完成を目指した身体の運動の体系⁸⁰」とする考えに依拠している。

他方、体育の目的は Jahn に依っている。Pagon は、「体育は忘れられた人間形成の均衡を再び作ることが目的である⁸¹」としているが、これは Jahn の、「体操術は、忘れられてしまった人間形成の均衡を再構成することである⁸²」という部分に匹敵する。また、運動の記述については、GutsMuths のものを転用した水平棒と平行棒以外は Jahn のものを転用している。

ところで、この本の中の最後の章には、「裸体競技」(ΓΥΜΝΟΙΚΩΝ ΑΓΩΝΩΝ) として、古代の競技祭についての記述が 26 ページにわたってなされている。その中では、古代の競技種目と競技場 (ΣΤΑΔΙΟ)、オリンピック競技会、そしてピュティア祭、ネメア祭、イストミア祭という四大競技祭について書かれている。ここでは、それぞれの競技の方法や、休戦協定などのオリンピック競技会の理念、そして古代のギリシャ体育の目的などが詳細に説明されている。そこには古代の文化的遺産を当時のギリシャ人と結びつけようとする跡を見いだすことができる。また、当時のヨーロッパで行われている体育の源流が、ギリシャ人の祖先から発していることの自覚を促すとともに、古代ギリシャ人の民族を文化的、精神的に統一する事に大きくオリンピック競技会が寄与したことを強調しているのもであった。ここにも、ギリシャ人による古代文化へ回帰しようという傾向を見ることができよう。

Pagon の書は、近代ギリシャにおける初めての近代ヨーロッパの体育と古代ギリシャの体育を解説した書であった。この書は、ギリシャ語で初めて書かれた体育の授業の教科書として、アテネの師範学校や体育学校で教科書として用いられた。Pagon は、アテネに体育学校を後に設立し、古代の体育や近代ドイツの体育について、この書を用いて講義したのであった⁸³。

Pagon は、1855 年に「体育入門抄録」を出版するが、これは、スウェーデン体操をも参考にして、体育の生理的効果についても述べられている。こうし

⁸⁰ GutsMuths, J.(1957) *Gymnastik für die Jugend. Quellenbücher der deutschen Körperkultur*. Reprint of the 1793 ed. published by Buchhandlung der Erziehungsanstalt, Schnepfentha. p.3.

⁸¹ Pagon, G.(1837) *ibid.*,p.18.

⁸² Jahn,F.L.(1930) *Die Briefe*,in Meyer Wolfgang, *Quellenbücher der Leibesübungen*, Vol.5,Dresden, p.209.

⁸³ Chrysafis, I.E.(1930)*Ibid.*, pp.16-18.

てヨーロッパの先進的な体操の理論を積極的に紹介していくが、そこでも古代の祭典競技会や体育について言及されており、当時の新しい体育理論も古代ギリシャの体育から派生していることを強調している。つまり近代体育の源流には古代ギリシャ時代の体育があり、そのことをギリシャ人は認知することばかりではなく、彼らギリシャこそ、その伝統を復活させなければならない、との思いが行間にはじみ出ている。

以上のように、近代ギリシャの体育の世界では、ドイツの体育家により、ドイツ体育が移入されたが、それはギリシャでは、古代ギリシャの体育について知る機会になったともいえる。つまり体育の世界でも、ギリシャの知識人により、古代文化への回帰ということがはかられていたといえることができる。

以下に Pagon の書の 23 章「裸体での運動競技」の中の、古代のオリンピア競技祭に関する記述の一部を示す⁸⁴。

「オリンピア競技は Zeus が設立したものであるが、彼は王座をめぐる Kronos と争った。あるいは Zeus がティタン族を打負かした後、ペロポネソスのエリス地方オリンピアにオリンピック競技を設立したとも言われる。

Apollon はボクシングで Ares に勝ち、ランニング競走では Hermes に勝った。そこから彼らはアポロン神殿であるピュティアのフルート演奏を五種競技の中に取り入れた。なぜなら、Apollon は競技者で、オリンピック勝者であるからである。そこで跳躍の競技が行われるたびに、フルート演奏が行われるようになった。

また、ある人々によれば、イダのダクテュロス達がエリスにやってきて滞在したと言われる。

最年長の Herakles が競走において他を制し、冠を勝者にかぶせた。このイダの Herakles が競技を欲し、5年ごとに競技を祝うことを誓った最初の人であると言われる、何故ならばイダのダクテュロス達は5人兄弟であったからという（他の人々によれば、競技は4年ごとに祝われたという。しかし、5年なのか4年なのか、5年目の第2月であったのか正確には、はっきりしない）。

その後 Kronos が打負かされた後、ゼウスはこのような競技に参加した。何故ならば、競技が制定された時、Zeus は、イダのダクテュロス達によって養育されていた幼児であったからであった。しかし、競技は後に中

⁸⁴ Pagon, G.(1837) *ibid.*,pp.137-145.

止された。Deukarion の治世に起きた洪水の後、クレタから Karudios の息子であり、イダの Herakles の子孫である Klimenos がやってきて競技を再開し、彼の祖先とヘラクレダイ（ヘラクレス一族）を「パラスタティン」（側に立っている人）と名づけた。その後、競技が祝われることは中止になり、そして Iphitos までの断絶の後に再び祝われた。

Kimenos の後、Endemion が王座を巡って彼の息子達の間で競技を開催し、Epios が勝った。1 世代後に Pelops が比類なき輝かしさでもって競技を祝した。Amisaon もこのように競技を祝し、Perias と Nereus はともに競技を行い、後に Augias、そして最後にアルクメニダイ（アルクマイオン一族）の Herakles が、エリスを支配した後で競技を輝かしく行った。そして Ioraos が Herakles の馬の戦車で勝った。

アルカディア出身の Asios は競馬で勝ち、ディオスクリダイ（ディオスクロス一族）の Kasol は競走で、Polideukis はボクシングで勝った。そして Herakles はレスリングとパングラティオンで勝った。また、ピサの人々がより早く競技を祝ったとも言われる。

ある人々は、テーベの Herakles がオリンピアのゼウスに榮譽を払って、ピサの地の祭典をオリンピアと名付けたという。後に Oxylos が競技を祝い、Iphitos まで断絶があった。内戦とその他悪い出来事がギリシャで起こり、Iphitos は競技を再開せよ、というピュテュアの神託（デルフィ）を得た。

こうして Iphitos は Lykursgos の時代に競技を再開した。そしてそれ以来、競技は定期的に祝われるようになった。その当時の人々は古代の習慣と競技を忘れ、少し後にそれらを導入した。しかし、彼等は競技者の名前も競技において特筆すべきその他の事柄も書き留めなかった。第 27 回目のオリンピア競技祭後、最初の競走を制定したのは、エリスの Koroibos であったので、それ以来、彼等はオリンピック開催期間中に年代記を定期的を書くようになり、このオリンピックは Koroibos のオリンピックと呼ばれた。これが最初のギリシャ人の年代記であり、また歴史時代の最初の年代記でもある。

これらの後、第 14 回オリンピア競技祭にてディアウロス走が導入され、ピサの Ipinos が勝った。次のオリンピックではラケダイモン（スパルタ）の Akanthos が勝った。第 18 回オリンピア競技祭ではレスリングと五種競技が加えられ、五種競技では Lanpis が勝ち、レスリングでは Euribathos が勝った。両者ともラケダイモン（スパルタ）人であった。第 23 回の競技

ではボクシングが導入されスミルナの **Oenomastos** が勝った。第 25 回の競技祭においては、成長馬によるレースが導入され、テーベの **Pagondas** が戦車競走で勝った。第 28 回オリンピア競技祭においては、競馬とパンクラティオンが加えられ、**Klaxidas** の息子 **Klanios** が競馬で、シラクサの **Lykdamis** がパンクラティオンで勝った。**Lykdamis** は雄々しく勇敢で体格の立派な男性であった。第 37 回競技祭では、少年の五種競技が導入され、ラケダイモン（スパルタ）の **Eutaeridas** が勝った。しかし、エリスの人々は考えを変え、それを再び行うことはしなかった。第 41 回競技では、少年のボクシングが導入され、シバリスの **Phylytas** が勝った。

第 65 回競技祭においては兵士による競走が導入され、イレアの **Dimaratos** が勝った。第 70 回競技祭では、雌馬による戦車競走が、その一つ前の第 69 回競技祭では、騾馬による戦車競走が導入された。第 84 回競技祭では、口頭による命令で、それらの競技が不作法であるという理由で中止した。第 77 回競技開催中には、夜にパンクラティオンの競技が行われ、アテネの **Kalias** が勝った。何故ならば日中には馬と人間による全ての競技が行われたため、パンクラティオンの選手のための時間がなくなってしまったからであった。第 93 回競技祭では二頭立て戦車競走（cf.Paus.10.7.8, Paus.5.8.10）が導入され、エリスの **Evagoras** が勝った。第 99 回においては子馬の四頭立て戦車競走が導入され、ラケダイモン（スパルタ）の **Sybariades** が勝った。後の第 131 回競技では、子馬による二頭立て戦車競走と子馬競走が導入され、後者においてはリキアの **Tripolemos** が勝ち、前者においてはマケドニアの女性 **Velestich** が勝った。第 145 回では少年のパンクラティオンを導入し、トロイの **Phedimos** が勝った。

競技はエリスの地で開かれたのでエリスの王 **Iphitos** が法によって定期的に競技を開催した。彼は最初の主催者としての立場を得、エリスの人々は競技開催の権利を持つこととなった。**Iphitos** の後、**Oxylos** の子孫達が競技開催者となった。

競技はピサの近くで開かれており、ピサの人々は実際嫉妬深く弱かったのでアルゴスの僭主 **Pheidon** と同盟を組み、第 80 回オリンピア競技祭で彼等は勝ち、祝した。同様に第 34 回競技祭においても彼等は王 **Pandaleondas** とともにやって来た。第 104 回競技祭ではアルカディア人が競技を祝ったが、エリス人に対して暴力を振るった。そのためエリス人は、これらの 3 つのオリンピックは行われなかったと言って記録しなかつ

た。

第 50 回のオリンピック競技祭で、彼等は 2 人の競技主催者を命じ、第 105 回オリンピック競技祭まで 2 人であった。ギリシャ人選手を審判するためのものとして 9 人のヘラノディカイ（ギリシャ人選手の審判）を配置することを決めた。ヘラノディカイはヘレネス（ギリシャ人）と審判という語からこのように呼ばれた。

オリンピック競技祭が全ギリシャ的なものになったので、至る所からギリシャ人はやって来た。3 人のエフォロス（監督官）が五種競技に、馬のレースに 3 人、そして残りの他の競技に 3 人命じられた。この後オリンピックの 2 日目には 10 人の競技審判者が加えられた。第 103 回競技祭ではエリスの人々 100 部族の中から 12 人が選ばれた。第 104 回競技祭ではわずか 8 人であったのはアルカディア人らが勝ち、4 部族を支配したためであった。第 108 回ではヘラノディカイは再び 10 人になり、最後まで続いた。しかしながら、いつもそうとは限らなかった。それゆえ、ヘラノディカイとなるべく選ばれた人々は 10 ヶ月の間、ヘラノディケイオン（ヘラノディカイが会合を持つ場所）に滞在させられ、法制官によって守られなければならない競技のルールやその他の取り決めごとが教えられた。競技の監督が行われたところではどこでもそうであった。ヘラノディカイの一人が責任者となり、エリス人のアゴラにある議場でも教えられた。彼等が勝利の判定を行い、議員に結果を述べ、秩序を守らなかった卑怯な競技者を罰した。例えば、ラケダイモン人の **Rihas** を鞭打ちに処したように。**Tyukidides** と **Xenophon** が言及しているが、後にそのことにより戦争につながったという。

任命されたヘラノディカイはそうであったが、さらに、他の公僕らも原則的な秩序維持に務め、エリス人達によって警察的な動きがなされ、彼等は他のギリシャ人達から「鞭を持つ者」「杖を持つ者」と呼ばれた。

祝祭はヘカトンバイオンの月の第 11 日から 15 日まで 5 日間祝われた。それは満月にあたる最初の月にあたった。

競技者達はまずエリスにやって来てエリスのギムナシオンで 10 ヶ月の間ずっと事前に予備訓練が行われた。そしてそこに滞在して、指導を受けたヘラノディカイらと競技者らは勝利の判定においていかに技術、勇敢さそして経験などの面から長所と短所を認識するかを教えられた。というのは、嘆願においては個人であるし、もし、勝利判定が正しく決せられなか

った場合には、不公平な判定を受けた競技者によって議場に召還されるからであった。

競走が行われた時、スタディオンの最後方に3人のヘラノディカイが立っていて、エリス人の Eupolemos とアンブラキアの Leon との間の勝利判定で、2人が Eupolemos に勝利の判定を下し、残り1人が勝利は Leon のものであると主張した。しかしながら、議場では Leon が勝者であると認められ、Eupolemos に勝利判定をした2人のヘラノディカイに対して処罰が下された。

9ヶ月の間、特に競技試合のために、ある時は1種目、ある時は他の種目のために訓練された。10ヶ月目にはオリンピック競技について事前に学ぶものであり、全種目が毎日行われた。なぜならば、そこで競わなければならなかったからである。その後オリンピアにやって来て、議場の中のゼウス・オルキオスの前で、犠牲を捧げて誓いを立てた。選手とともに、その父親、兄弟、指導教師らも競技の犯さざるべき法の遵守を正しく守ると宣誓した。

競技選手達はこれらを誓い、決められた10ヶ月の間、必要とされる全ての事前の予備訓練をした。事前の予備練習に間に合わなかった者は競技参加の許可を受けることができなかった。それゆえ、間に合わなかったアレクサンドリアの Apollonios は帰された。

ヘラノディカイらは人間と馬の勝者を正しく判定するために、賄賂を受け取らない、中立であること、価値があると考えられる勝者の利点も、また敗者の弱点も決して暴露しないと誓った。

競技選手達は合意によって競技することは許されず、くじによって闘わされた。所謂ゼウス・カルピスの神殿の中には銀の壺があり、その中に文字のしるされた小さなくじが入っていた。2つのくじには α が、他の2つのくじに β が、さらにその他2つには γ といった具合にしるされていたが、もし偶数であれば、レスリングやパングラティオンといったような、あるいは他の体育競技の競技選手は α 組みが最初に闘い、そして次の組みが、というふうに闘われた。しかし、もし奇数だった場合には、投票箱に無記銘のくじを一つ入れた。その後、競技選手達は Zeus に祈りを捧げ、組みごとにやって来て、各自1つだけくじを受け取り、それから組みごとに後ろに下がって立ち、どのくじを引いたかということを行うことは許されなかった。実際に各選手の側に、手に鞭を持った者が立ち、記載された文字が読まれないように掌中にくじを握っていた。その後、アリタルヒス

(Alutarchos:オリンピック競技会の審査官) がやって来てくじを見て、 α を引いた者同士、 β を引いた者同士というふうに対戦者が組み合わせられた。無記載のくじを引いた者は対戦者がいなかったので、1回戦の勝者と対戦するまで待たねばならなかった。それゆえ、その選手は不戦勝者と呼ばれ、幸運であると考えられた。何故ならば、すでに1試合終えて疲れている対戦者と戦うからである。喜ばしい例としては、対戦が4回行われるか、競技者が8人で競われることであった。そして第1試合の勝者は第2試合の勝者と、第3試合の勝者は第4試合の勝者と戦わなければならなかった。それぞれの試合で引き分けた場合には、後で最後の試合の勝者と対戦しなければならず、不戦勝者が戦った。

従って、一人の対戦者のみに勝つことは苦ではなかったが、全競技に勝利することは大変なことであった。ゆえに、パンクラティオン、レスリング、スタディオン競走で勝利した場合、全てのパンクラティオン競技者、レスリング競技者、スタディオン競走者の中での勝者として記名されているのである。

そして、勝者が決定されると、全ての祝祭における触れ役が勝者の名前、勝者の父親の名前、出身ポリス名を告げてまわった。例えば、エフェソスから来た Helanikos の息子である Amindas がパンクラティオンで勝った、というふうに。

1人のヘラノディカイの前に、黄金と象牙でできた机が立てられ、その上に競技者の冠が置かれた。このような冠は、オリンピアの野生のオリーブの枝から作られたもので、最北に住むヒュペルボレオス人から Herakles によって運ばれ、そこに植えられた。また、ある人によれば、このような最初の植物はアルフェイオス川の側で見つかったといわれている。

女性は競技試合を見ることも、アルフェイオス川の側を通ることも許されなかった。というのは競技者は裸体で戦ったからであった。それゆえ、女性の存在が競技の場で発覚したり、アルフェイオス川の側を通った場合、その女性をティペオス山の頂きから投げる、という法律をエリス人は発令した。しかし、ある人によれば、Kalipatela あるいは Pheleniki の場合を除いては、一度としてそういうことは起こらなかった。彼女は男性の衣服を着て競技者を装って、彼女の息子 Peisidoros が戦うのに付き添ってきた。そして Peisidoros が勝ったために、母親はスタディオンにいる彼女の息子に近付こうとしてフェンスを飛び越えたのだった。それゆえ、姿がばれてしまい訴えられることとなった。しかし、被告 Kalipatela は父親、兄弟、

息子もオリンピック競技の勝者であったために釈放された。それ以来、競技者は裸でスタディオンに入場するようという法が制定された。デメテル・ハミニの女神官だけが競技を見ることを許された。

しかし Pausanias は、Velestich やラケダイモン人の王 Alkidamos の娘 Kyniska のようにオリンピック勝者になった女性について言及しているが、彼女らは最初に馬を飼育し、オリンピアで勝利した最初の女性と、もう一人はマケドニアの匿名の女性であり、そのことによって、時々女性も競技を行ったと思われていた。しかし、自前の費用で馬を走らせ、調教し、その後御者を送り戦わせるのは、ただ功名心のある女性達のみであった、と言われている。馬と御者の所有者である女性あるいは男性に勝利は与えられた。例えば、他の人々と同じように Lichas が御者を送り、彼の戦車で競技に参加させたりした。神官は決してスタディオンの中で競技に参加することはなかったが、しかし馬と御者を送り戦わせた。Alkibiades も他の神官も競技に参加することはなかった。Sylon がシケリアで犠牲を捧げ、オリンピアで彼の馬が勝利を飾ったと知らされた。祝祭の3日目は、メガロプレペスタティ（多くのお金や物を見せること）が開かれたが、これは所謂、富者のコンテストであり、各人が持ち寄った馬や戦車のテントの装飾や食事などについて、展示したのであった。Plutarkos が述べているように、Temistokles もこの競争に参加し、Kimon を凌いだと言われる。一方、Alkibiades は競技に7頭の戦車を準備し、そのような素晴らしいものを送れる人は他に誰もいなかった。私人であれ王であれ。」

以上が Pagon の体育入門書に書かれたこオリンピア競技祭についてであり、近代ギリシャではじめて出版されたテキストであった。古代のオリンピア競技祭の華やかな情景が、よく描かれている。このオリンピック考案して行っていたのが、ほかならぬ彼らギリシャ人の祖先だったことは、彼らをして古代と近代を結ばせる役割を果たしたのであった。この本は、アテネの師範学校のテキストとして使用されたので、これを通して、師範学校に学ぶ人々が、古代のオリンピア競技祭の概要を知ることができたとし、また彼らが教師として学校に勤務した際には、古代の祖先の偉大な伝統的な祭典について、次世代に伝えることとなった。

この本の「裸体での運動競技」では、オリンピック競技会の華やかな歴史のほかにも、イストミア、ネメア、ピュティアの祭典競技会の競技の内容などが説明されている。そこには当時のヨーロッパで行われている体育の源流が、

ギリシャ人の祖先から発していることの自覚を促すとともに、古代ギリシャ人の民族を文化的、精神的に統一する事に大きくオリンピック競技会が寄与したことが示されている。トルコからの独立を果たしたばかりのギリシャにとって、古代ギリシャのオリンピック競技についてギリシャ語で書かれたこの本は、古代オリンピア競技祭の栄光を呼び醒すのに、一定の役割を果たしたものと思われる。

3. ドイツ人考古学者の活躍

3-1. オリンピアの調査

1833年以降、ギリシャがトルコからの独立を果たした頃から、多くのドイツ人考古学者や古典学者がオリンピアの地へ調査に訪れるようになった。彼らによる、オリンピア発掘のための喚起も、オリンピック競技会復興に一定の影響を及ぼしたと思われる。考古学者の中で重要な人物は1834年にオリンピアに出掛けた Jacob Ph. Fallmeyer (1790～1861年)、1834年と1840年にオリンピアに旅行した Ludwig Ross (1806～1859年)と1851年に旅行した考古学者 Ernst Curtius (1814～1896年)らであろう。

Fallmeyer は、1831年から1834年までの旅行中の、1834年1月4日にオリンピアを訪れ、日記に次のように記している⁸⁵。

「険しい丘陵の上、西側の山腹に羊飼いの小屋があり、美しい陽光がオリンピアの平原に降り注いでいる。沼地の真ん中にある松林から、小川が流れており、その川岸も気高く感じられる。神殿の跡、丘、アルフェイオス川、荒れ地、川岸があり、さらには丘の麓に広がる農地、Othon 国王の山小屋、古代の建築物などが見られる。」

ここには、Othon 国王専用の山小屋がオリンピアに用意されている様子が書かれてあり、国王がオリンピアに関心を抱いていたことがうかがわれるのである。

3-2. ギリシャ国王のオリンピア訪問

一方 Ross は、古典文献学者で1833年にギリシャ政府より、古代の遺物の管理者に任じられていた。1834年の旅行後の報告書では、オリンピアの遺跡の

⁸⁵ Lennarts, K.(1974) Kenntnisse und Vorstellungen von Olympia und den Olympischen Spielen in der Zeit von 393-1896. Verlag KarlHofmann : Stuttgart, pp.125-134.

紹介と、オリンピック競技会の紹介がなされ、全ドイツ人の民族祭として、オリンピック競技会を導入することを提唱している。彼はその後 1837 年から 1845 年までアテネ大学の考古学の教授としてアテネで活躍したのであった。その間 1840 年には、ギリシャ王 Othon と王妃 Amalia の案内役として、再度オリンピアに旅行した⁸⁶。

この 1840 年という年は、Othon にとっても重要な年であった。というのは、1837 年に農業・工業及び古代の競技を含んだ国民競技祭の設立を目指した条例を通した後であり、オリンピアへの旅行は、オリンピック復興運動に対する積極的な王室のかかわりに一定の影響を及ぼしたと推測されるからである。

3-3. オリンピア発掘の声明

さらに考古学者 Curtius は、1838 年に最初のオリンピア調査を行った。その後、ギリシャとイタリアの各地に残る遺跡を訪問し、1841 年半ばにドイツに帰国し、1842 年学位を取得後、1844 年ベルリン大学の教授に就任した。同年彼はプロイセン政府の皇太子 Friedrich Wilhelm (後のフリードリッヒ皇帝) の家庭教師となる。この皇室とのつながりが、後のオリンピア発掘計画の実現に結びついたのであった。1845 年から Curtius はギリシャでの研究成果をまとめる作業に入り、1851 年と翌 1852 年に「ペロポネソス第一巻・第二巻」として出版した。そして 1852 年 1 月 10 日にベルリンで、オリンピアの発掘を訴える講演を行った⁸⁷。

「他の神の使者が世界中を走ってオリンピアの休戦よりも高い平和を宣言したとしても、われわれにとってオリンピアは依然として聖なる地である。そしてわれわれは、清浄な光に照らされたこの世の中に、感激の波、献身的な祖国愛、芸術の尊厳、生活のあらゆる苦難を支える喜びの力を、そこから受け継がなくてはならない。」

彼はこのように述べて、人類の遺産であるオリンピック競技会の精神を当時の社会に復興するべく、オリンピアの発掘を提唱したのであった。

彼の講演を聞いた Fallmeyer は、同年「オリンピア」と題する論文を発表した。この論文には副題として、「1 月 10 日ベルリンの学術団体における E.

⁸⁶ Ross, L.(1848) Reisen des Königs Otto und der Königin Amalia in Griechenland, Vol.1,Halle,pp.183-190.

⁸⁷ Diem,C.(1960) Weltgeschichte des Sports und der Leibeserziehung.Stuttgart, pp.1079-1084.

Curtius の講演について」と記されていた。しかし Fallmeyer にとって、執筆の目的はオリンピアの発掘ではなく、再興されるべき古代のオリンピック競技会の教育的な理念を強調することであった。彼はそこに中世的な隠遁的な価値と古代のヘレニズムの価値との矛盾を相克した、人間精神の調和のシンボルを見いだしたのであった。そしてこの理念こそが今後の教育に導入されなければならないと主張した⁸⁸。ドイツでも、イギリスと同様、オリンピック競技会の教育的な価値ということが、Coubertin より 40 年以上も以前に論じられていたのであった。

このオリンピア発掘の講演は、アテネ大学の教授を務めて帰国した Ross にもその反響を及ぼした。1853 年 5 月 4 日、Curtius の名を挙げて、オリンピアを発掘するための募金をドイツの新聞紙上で次のように呼びかけたのである⁸⁹。

「……この計画の後援者たちには実利的な利益は何ら約束されないことは自明のことであって、オリンピアで発見された物はすべてギリシャの国に留められなければならない。発掘の成果は出来る限り早く学問的、芸術的に公表されるよう尽力しなければならないし、発掘の成果の概要は、毎月文芸や学術の一般雑誌に公表されるべきである。ギリシャ国王は、発掘の監督と指揮を、私の後任で Othon のアテネ大学 R.Rangavis 氏に委ね、副責任者として、アテネにいる建築家と図案家を選ぶことを願っている。」

この Ross によるオリンピア発掘のための募金の声明は次の理由で重要な意味を持っていると言える。

第一に、ギリシャ国王は元アテネ大学の教授であった Ross から、Curtius のオリンピア発掘の講演を知らされており、発掘事業に当初から積極的であったということを示していることである。

第二に、ベルリンで行われた講演が、すぐにアテネの王室まで情報として伝わってきていたのであり、それほどドイツ特にプロイセン、バイエルンとギリシャ王室は、オリンピアをめぐる親密な関係をもっていたということが確認される。Ross は前述したように、1840 年にギリシャ国王 Othon とオリンピアに旅行しており、ギリシャでは王室や政府に影響力を持った古典学者であった。これらの要素は、後のギリシャ独自のオリンピック競技会の復興に対して、ド

⁸⁸ Lennarts, K.(1974) Kenntnisse und Vorstellungen von Olympia und den Olympischen Spielen in der Zeit von 393-1896. *ibid.*, pp.177-179.

⁸⁹ Lennarts, K.(1974) Kenntnisse und Vorstellungen von Olympia und den Olympischen Spielen in der Zeit von 393-1896. *ibid.*, pp.180-183.

イツ人の関連を強く示唆するものである。

この Ross によるオリンピア発掘のための募金の声明に、Curtius はたいへん喜び、1853年5月23日付けでロスに手紙を送っている⁹⁰。そして Curtius はオリンピアの発掘事業の着手をプロイセン政府に強力に働きかけたのであった。プロイセンとギリシャとの交渉の結果、1875年より81年にかけて第一次のオリンピアの発掘がなされた。この発掘の年次報告は、学者やジャーナリストたちのオリンピック競技会への関心を高めることになったのである。

19世紀に半ばにおける近代ギリシャでは、ドイツとギリシャの王室との血統的親密さに加えて、Jahn・Maßmann 派の体育家たちのギリシャでの活躍と、ドイツ人考古学者の活躍の影響が考えられる。一方で、ドイツの考古学者によるオリンピアへの調査、旅行がギリシャの独立以後、頻繁になされ、オリンピア発掘の動きが開始されたのであった。ギリシャ王室には、このようなドイツの体育家や考古学者が従事していたのであり、古代文化や古代オリンピア競技祭についても一定の理解がなされていたといえる。しかしギリシャの国家的な基盤を確立しなければならなかった彼らは、ギリシャ人のオリンピック競技会復興の意図にそのまま従うのではなく、産業の振興という、近代国家の政策の一つとして活用されていくのであった。

⁹⁰ Brossmer, K.(1931) Quellenbücher der Leibesübungen, Vol.6, Dresden, p.152.

第3節 ギリシャ知識人による古代オリンピック競技祭復興の提唱

1. 古代オリンピック競技祭復興に関する提唱（1835年）

1-1. Soutsos の提唱

ギリシャ人によるオリンピック復興の提案は、1830年代半ばからなされた。最初は作家 Panagiotis Soutsos（1806～1868年）による提唱であった。Soutsos はコンスタンティノーブル（現イスタンブール）に生まれ、1820～23年にパリ、ウイーンで教育を受けた。ギリシャの独立以後は最初の主都ナフプリオンに渡り、新聞「イリオス」を1833年から出版した。彼も古代ギリシャの文化に民族的アイデンティティを求めた知識人の一人であった。1833年7月4日の新聞に、Soutsos 自身が「死者たちの会話」という詩を書き、その中でオリンピック競技会の復興を明瞭にうたっている。それはプラトンの言として、次のように述べている。

「汝の影は大地に飛び出し、王室政府に大胆に呼びかける。

つまらない欲望を捨て、無駄な争いをやめよ。

汝のギリシャは昔と同じと考えるのは不幸だが、

古代のオリンピック競技会やパンアテナイア祭はいずこに、

荘厳な儀式や古代の劇場は、

美しい絵画、彫刻、聖地はいずこにあるのか。

昔はどの都市の神殿も飾り立てられていた。

汝の祭壇は外国人の篤志により、金で飾られていた。

クロイソスは壺や銀のプレートや宝石で装飾されていた。

輝かしいオリンピックを始めようではないか。

奔流の市民たちよ、競技場で楽しもうではないか。

Hieron, Gela, Philippos がかつてそうしたように、4万人のギリシャ人の前で、国王が競技者に敬意を表すのだ⁹¹」

Soutsos はギリシャの独立直後に、オリンピック競技会の復興を彼の機関誌を通して、広く提唱した。また、歴史上の史実を引いて、古代の王が競技者を尊敬したように、当時のギリシャ国王もそうするであろうと、述べている。これは、ギリシャ人の古代文化への回帰とともに、外国人の国王や政府に対する

⁹¹ *ΛΙΟΣ*, 1833.7.4.

民族的な対抗意識とも受け取れよう。

Soutsos は 1835 年には古代オリンピック競技祭の復興を新政府に正式に提案した。すると当時の内務大臣 Kolettis Ioannis (1773~1847 年)は、彼の案を修正した内容で内諾した。Soutsos の提案は、独立戦争が始まった 3 月 25 日を国家の祝日にし、その日に古代のオリンピック競技会を復興して行うという内容であった。それに対して内務大臣 Kolettis が同意した内容は、オリンピック競技会には、産業製品展示会も含めて行うというものであった。

1-2. 内務大臣 Kolettis の復興案

Kolettis は、国王 Othon に彼の所信を添えて競技会復興に関する報告書にして提出していた。この報告書は内務大臣 Kolettis の公文書館に内蔵されているものであるが、ギリシャ人の歴史家 Diamantis により、その内容が明らかにされている⁹²。

それによれば、競技会は、オリンピア、ネメア、イストミア、ピュティアなどの古代の全ギリシャ競技会のように、隔年ごとにギリシャのいろいろな町で交代に行われることが提唱されている。開催地はペロポネソス半島のアテネとトリポリ、それにイドラ島とミソロンギであった。トリポリやイドラ島、またミソロンギは、独立戦争の折に激戦になった場所であった。ミソロンギはイギリスの詩人 George G. Byron (1788~1824 年) がギリシャの独立戦争に身を投じて死んだ地であり、Byron を尊敬するフランスのロマン派の Eugène Delacroix (1798~1863 年) が『ミソロンギの廢墟に立つ瀕死のギリシャ』を描いて、ヨーロッパ人のギリシャ支援を高揚させた場所であった。このような独立戦争に関係した場所を巡回して、古代の競技会を運動競技、文芸・芸術の分野で行うことが考えられていた。都市の巡回を考慮していたことは、後の近代国際オリンピック競技会の都市持ち回り制を先取りしていたといえる。

Kolettis の報告書では、競技会は古代の全ギリシャ競技会の栄光と荘厳さを失わないようにすることが書かれている。ここでは古代と同様の荘厳さをもった内容を、現代のギリシャに適した形で行うように次のことが提唱されていた⁹³。

⁹² Diamantis, K (1973) Πρόταση καθιέρωσης έθνικων έπετειών και δημοσίων αγώνων κατά το προτυπον των έορτων της αρχαιότητας κατά το έτος 1835. Athens. (1835 年における古代の祭典をモデルとしての国民的祝日と公開競技会の設立案)

⁹³ Georgiadis, K. (2003) Olympic Revival; The Revival of the Olympic Games in Modern Times. Athens. pp.28-29.

- 1) 競技会の開催中は外国に住むギリシャ商人が、この行事に彼らの商品を展示できるように、輸入の税金を引き下げる。
- 2) 国王と側近の大臣、高官や軍事的指導者たちが公的式典に参列することで厳かなものにする、また人々の前に参列することで、民衆に好感を与え、支持を得られる。
- 3) 各自治体は最低3人の代表を競技会に派遣する。
- 4) 各自治体は二頭立て戦車1台、競走馬2頭、走者4人の代表を用意する。彼らはすべてどの自治区に所属するかがわかるようにバッジを身につける。
- 5) 政府はその競技会を、アテネ、イドラ、トリポリ、ミソロンギにおける「ギリシャ公式競技会」と名づけて組織し、競技場と走路の建設を援助する。それらの建設にあたっては、ロイヤルボックスと審判席を用意する。二本の柱をロイヤルボックスのために設置し、一本の柱には独立戦争で亡くなった人々の氏名を刻み、二本目の柱には自由獲得のためのすべての戦場名を刻むこととする。それらには絵画や彫刻が施されるようにする。
- 6) 各自治区はギリシャ公式競技会において、24人の少年と少女の混声合唱団を用意し、「自由の歌」(Solomos 作詞)を歌う。
- 7) 6000人収容の劇場が、競技会の各開催地に建設される。

最初に書かれているように、海外に住んでいるギリシャ人が、彼らの商品を展示できるように、税制の面で配慮されていた。これは、競技会の復興を産業振興につなげようとする Kolettis の意図が含まれていた。

各自治体が最低3人、出席することを呼びかけているように、全ギリシャからこの競技会に参加することが含まれていた。全ギリシャでは、2000人の役員が競技会復興の式典に集うことになる。

Soutsos は、彼らが宗教的な式典においてギリシャの再生と発展の役割を担うことになるので、宗教的、政治的な行為は同時に、ギリシャ人の中で良いコミュニケーションがはかられることになるであろうと考えていた。同様にそれぞれの種目の勝利者は国民全体の前で勝利することになるので、勝利はひじょうに重要な意味を持つことになると考えていた。

Kolettis の報告書には、国王が8名の審判団を大会の始まる2か月前に任命することも提案されていた。審判団は競技会の準備と賞品の授与の責務を担うものであった。

各競技の賞品は次のように定められた。

- 第1位：哲学書に対して 10000 ドラクマ
- 第2位：古典文献学の最優秀作品に 8000 ドラクマ
- 第3位：絵画と彫刻の最優秀作品
- 第4位：戦車競走に 4000 ドラクマ
- 第5位：競馬に 3000 ドラクマ
- 第6位：競走に 2000 ドラクマ

この賞金の金額から、運動競技よりも、知的、芸術的な分野に手厚い競技を企画していたことが窺われる。これは Soutsos の影響が大きかったことは明らかである。Soutsos は作家であったことから、そのように提唱したのだろうが、運動競技に対する評価は、芸術ほどには高くなかった。

賞金 10000 ドラクマという金額は相当高額な金額である。当時の労働者の賃銀が、月に 20～30 ドラクマ程度であったので、その高額さは相当な額であった。ただこれは実行に移されることはなかった。この数字は、運動競技と芸術競技とを比較する際に有効であろう。

Kolettis の報告書における祭典でのプログラムについては、次のように記されている。

- 第1日目：宗教的な式典
 - 第2日目：競走種目
 - 第3日目：競馬
 - 第4日目：戦車競走
 - 第5日目：戴冠式
 - 第6～8日目：悲劇と喜劇の上演、音楽と舞踊
- 競技選手はその名声が有名なものに限る。

この最初のオリンピック復興案に、ギリシャ政府の姿勢が現れている。そこには、競技会を通して、古代の栄光を呼び覚ませ、近代国家建設の礎にしたいと考えていたのであった。そのために宗教的な儀式も含まれていた。ここで問題となるのは、古代オリンピア競技祭のように、Zeus 神に捧げた祭典は、宗教的には異教であったため、キリスト教を国教と認めたローマ皇帝からオリンピア競技祭禁止の憂き目にあったことである。19世紀のギリシャ人はギリシャ正教という、ローマ時代のキリスト教の正統であ

るため、自分たちの古代の祭典の基盤をなしていた異教に対して、どのように向き合うのか、ということが近代において、重要な課題となったはずである。この点をどのように説明したのか、について書かれた資料は発見されていない。今後の重要な課題であろう。

また、Kolettis の案には、産業の振興に結びつけようとする意図も含まれていた。Kolettis の記録の最初に、輸入製品の関税の引き下げについて書かれていることが、それを示している。これはやがて、産業製品の競技を、運動競技や芸術競技とともに行うことに移行するのであった。

また、すべての自治体から参加させようとしていることも、特徴的であろう。運動競技のみであれば、そのようなことは書かれていなかったかもしれないが、すべての自治体の代表者が、式典に参加することを促すことで、全ギリシャでの産業の振興に結びつけようとする意図したものと思われる。

Kolettis と Soutsos とは、独立戦争時代の戦友同士であったことから、両者は、十分に話し合ったものと思われる。

この、運動競技と芸術競技、産業製品を基軸として、以後のギリシャのオリンピック競技祭は進められていくことになる。これらの競技で、後に政府が最も重要視したのは、産業製品であった。近代国家を建設するために、産業の振興政策を掲げていた政府にとっては、これこそが近代のあるべきオリンピックの姿と主張していくのである。外国人主導のギリシャ政府の、古代文化をギリシャの近代化に利用するという意図がみてとれる。その政府の意図と古代に忠実に復興させようとするギリシャの知識人たちとの間で、さまざまな論争を巻き起こしながら、ギリシャのオリンピック復興運動は進められていくのであった。

ここで重要なことは、独立を果たした近代ギリシャ人が関わっていくオリンピック競技会は、運動競技のみならず、産業製品、芸術や文芸の競技も合わせて行われて行くので、これらの三者のその後の関係性と内容を追わなければ、ギリシャのオリンピック復興運動の全容を見ることができない、と言える。

この点では、これまでのギリシャのオリンピック競技祭に関する先行研究では不十分であり、本研究では、そのような三つの競技に焦点を置いて進めて行くものである。

Kolettis と Soutsos の案が作られてから 2 年間は、実行に移されなかったが、1836 年までに、芸術部門が実現した。それはアテネで初の劇場が完成したからであった。開幕時に上演された作品は、Metastasis の

“L'Olympiade”で、Rhiga の作品を翻訳したものであった。その上演は成功し、その後数年間にわたって、何度も上演された⁹⁴。

ギリシャ人の構想は教育にも波及した。1834年の王室条例で、「教師の指導のもと、週2時間の身体運動の授業」が規定された。その条例では、生徒は教師の指導のもと、休憩時間や休日に体操や身体運動を行うことが定められた⁹⁵。体育の授業が1834年の早い時期に定められたことは特筆すべきであろう。

2. 「国家産業振興委員会」の設置-政府のオリンピック復興案（1837年）

政府は Kolettis と Soutsos の考えを採用して、競技会の復興を計画した。

Soutsos の提案に対する内務大臣 Kolettis の修正案に基づいて、オリンピアという名称は用いてはいないが、古代の競技会の復興が法律的に定められることになった。それは1837年1月25日（ギリシャ暦2月9日）、ギリシャ国王 Othon により発布された、『国家産業振興委員会設立』に関する王室条例（ΕΠΙΤΡΟΠΗ ΕΠΙ ΤΗΣ ΕΜΩΥΧΩΣΕΩΣ ΤΗΣ ΕΘΝΙΚΗΣ ΒΙΟΜΗΧΑΝΙΑΣ）において示された。政府は王室条例による全ギリシャ的な競技会の開催を発表した。

この条例の前文には、「我が国の農業と工業の振興をはかり、各地域の特産品を多様に育成することにより、ギリシャの国家的富を増加させることを願うものである。」と、その目的が産業の振興にあることが明記されている。そして、内務省主導のもと、12名の委員を任命して、毎週一回会議を開催し、農産物や工業製品の改良と振興をはかるための祭典の開催を協議することを定めた⁹⁶。

ここに示されているように、ギリシャの農業や工業などの産業の育成を目指すための条例であるということである。そして、内務省により、以下の事が決定されるとし、36カ条が書き記されており、第34条に古代の競技の復興について、わずかではあるが、言及されている。

この条例の1から5条までは委員会の構成について述べられている⁹⁷。

⁹⁴ Georgiadis, K.(2003) Olympic Revival. *ibid.*, p.29.

⁹⁵ Dimitriou, M. (1995) *Leibeserziehung und Sport in Griechenland 1829-1914*. Sankt Augustin, pp.24-25.

⁹⁶ Εφημερίς τις κυβερνήσεως του βασιλείου τις ελλάδος（官報）,Athens,1837,5, p.17.

⁹⁷ 以下の条例文は次の資料による。Εφημερίς τις κυβερνήσεως του βασιλείου τις ελλάδος（官報）,Athens,1837,5,pp.17-20.

- 1 条：委員会は国家産業振興委員会の名称で 12 人の委員で構成される。
- 2 条：委員は、政府の職員や物理関係の協会などで定められた特別の条例に基づいて、目標の達成に必要なことを決定する。委員はギリシャに住む外国人を排除するものではない。
- 3 条：委員になった者はその任を全うし、委員会が価値あると認めたことをその都度、公表する。
- 4 条：委員会は委員長一名、副委員長一名、書記一名、会計一名を擁し、任期はその年を充て、役職は委員の中の志願者を募る。委員会は多数決により決定する。投票で決まらない時は、委員長の投票が優先する。
- 5 条：これらの役職は名誉職であり、委員に手当は支払われない。

先の Kolettis の報告にあるように、祭典の委員数は 12 名で同数である。

また、役職者の報酬は支払われないこと、などが決められている。

特徴的なことは、この 12 名の委員には、外国在住の者が加わっても良い、という点である。当時のギリシャは独立したとは言え、いまだトルコ領に属するギリシャ人の地域が多く残されており、それらの地域出身者であっても、この委員に就任する道が開かれていたことになる。

これは、ギリシャ政府が、この古代競技の祭典により、ギリシャ人の解放も、意図していたことと受け取れる。

委員会の名称が「国家産業委員会」という点が、政府のねらいを端的に表している。すなわち、オリンピック競技会の復興そのものというより、それにより、国家の産業を振興する意図があったということである。

次の第 6 条から 12 条までは、委員会の大きな仕事である産業振興のために開催される競技会の賞について述べられている。

- 6 条：委員会は毎週一回の定例の会議を開き、ギリシャの祭典と産業の興し方、また各地域の特産品の奨励、振興と改良の方法について協議する。産業を識別できる人々の会議をできるだけ多く招集する。
- 7 条：委員会は産業のカテゴリー別、地域の産物の改良の度合いに応じた優秀な産物や製品に対して与える賞を決定する。そして新しく導入された器具、植物、共生可能な有益な小動物、優れた機械や手芸品などは個人の費用で製作される。
- 8 条：賞は以下のものとする。

a. 50 以上 500 ドラクマ以内の報酬

b. 金と銀の硬貨を第一位と第二位に与え、さらに委員会発行の賞状を授与する。硬貨には国王の像と「産業に優れしもの」という碑文を刻む。

9 条：金の硬貨は、100 ドラクマ相当の価値のものを第一位に、50 ドラクマ相当の価値のものを第二位に授与する。

銀の硬貨は、10 ドラクマ相当の価値のものを第一位に、5 ドラクマ相当の価値のものを第二位に授与する。

10 条：委員会は、牧畜、機械や器具を選別し、それらをさらにカテゴリー毎に分類して賞を決定する、そして硬貨の収集と植物の庭園を確保する。

11 条：委員会はプログラムについて、新聞を通して声明を発表し、委員長の論文を掲載して、製品の種類や適切な賞が与えられる事について広報する。

12 条：委員会の提案する賞については、公表される前に委員会で認められなければならない。

ここでは、祭典と産業の興し方や、各地域の特産品の振興と改良の方法について協議する会議を毎週一度開催することが明記されている。産業製品の博覧会と製品の競技に力が入れていることが明らかである。

また、産業製品の競技の賞品として、第一位の者に 100 ドラクマ相当の硬貨を与えることが明記されているが、100 ドラクマというのは、一般の労働者の 3,4 ヶ月分の給料に相当するもので、Kolettis の報告書に比べると、かなり現実的な賞金に落ち着かせたと言える。実行可能な金額と言えよう。

次に出展される産業製品の関税と製品の分類について、次のように規定している。

13 条：農業と工業の促進のためにそれらの契約者の輸入や輸出の際の税関の税金を軽減する。委員会はそれ故、大蔵省とその点について協議する。

14 条：製品は委員会の注意に基づいて準備されなければならない、その種類は以下の通りである。

a. 農機具の改良

b. オリーブなどの植樹

c. 牧畜業一般、羊、山羊、馬などの改良、外国産の輸入

d. チーズの改良

e. ワインの改良

f. オリーブ製品

- g. 羊毛製品
- h. 絹製品
- i. 皮なめし所の製品
- j. セラミック製品
- k. 石鹼
- l. 乳香樹の植樹
- m. 石板の製造
- n. ガラス製品
- o. 紙製品
- p. 砂糖とビートの根で作った手細工
- q. 紡いだ木綿、絹、羊毛、麻などで作った工芸品
- r. 鉄、銅や他の金属の製造
- s. 農機具や他の工業機械の輸入
- t. 地域の農業、工業製品の国外への販売の方法の発見

輸入や輸出の際の関税を軽減することを示唆しているが、これも Kolettis の報告書と同様の内容であり、海外のギリシャ人との交易も意図していたと言える。また、ここに示された産業製品の分類をみる限り、工業製品の類いよりも、農産物や農業製品、手工業製品などがほとんどであり、産業という観点で見たとき、当時のギリシャは、農業が主で、工業面では決して発展している状況ではなかったことがうかがえる。

第 15 条からは、産業製品の事前の調査や、参考資料の紹介、ヨーロッパにおける同様の組織との連携などについて言及している。

15 条：委員会はあらかじめ、製品の展示費用や進歩の度合いを最初にテストする。新しい製品は展示の際に高価なものであってはならない、なぜならそのような製品は、売ることが難しく我々の目的が失敗してしまうからである。

16 条：委員会は政府の職員である K.Grignorios Paleologos の著した農業の学術文献を、著者の了解を得て、印刷し、確定した部数を国内に配布するよう手掛ける、同時に農業、工業のカテゴリーの分類をわかりやすく説明した資料を配布する。

17 条：委員会は、ギリシャの発展を目指した今回の計画のために、ヨーロッパにある同様の組織と密接に連絡を取るよう努める。

17 条に見られるように、かなり早い時期からギリシャはヨーロッパの同様の

組織との連携を模索していたのである。既にプロイセンやバイエルンはヨーロッパの産業博覧会などにこの時期から積極的にかかわっていたのであり、この事から、ギリシャ国王がドイツ出身であったことが、このような産業製品の競技を開催しうる要因であったと言えよう。

18条から33条までは、貸付金の交付や支出の項目など、会計職の任務と書記の任務がについて述べられている。

18条：委員会は内務事務局に直接陳述し、我々の適切な決定と条例を用いる。

19条：報告書やプログラム、および他の委員会の書類は、委員長、もしくは副委員長と書記が認めたものでなければならない。

20条：委員会は特別に、銀製の硬貨で、第2条で定められた碑文の意味する文字の入った国家の勲章を身につける。

21条：委員会は公式に国家の当局と連絡して、農業と工業の情報やプログラムについて出版しなければならない。

22条：委員会の文書は、委員会のスタンプの押されている封筒は、すべて郵送料が免除される。

23条：選ばれた植物、機械や器具に与えられる金銭の報酬、硬貨の製造、書籍とプログラムの印刷費については、国家の予算の範囲内で、内務事務局の整理のもと、必要な貸し付けを認める。

24条：事務所の設立に充てる貸付金については、毎月3000ドラクマを支給し、賃貸料と文書費用や他の費用は後の条例で定める。

25条：貸付金については、委員会の発行する文書にて要請し、内務事務局の承認のもと、認められた国家の予算の範囲内で支給される。委員会の委員長の証明を持った委員会の会計がそれを受領し、帳簿に基づいて使用する。

26条：支出の項目については、少なくとも2,3カ月前に採決されていなければならない。すべての支出証明は、委員長と書記による全額払い込みの前に整えられなければならない。

27～28条：会計職について

30条：書記は委員会の文書と議事録を管理する専門的な責任者である。

31条：委員会は各年の末に設置され、農業、工業の展示会の詳細と結果、およびそれに関する資料の出版、印刷について営む。

32条：毎年5月の第1日曜日に、委員会の特別会議を設ける。その会議において、委員長が演説し、書記が委員会の年間の仕事を読み上げ、賞の金額と受賞者の氏名を述べる。

33条：その会議においてすべて解決した後、アテネ近郊に移動して国旗のもと

に、農・工業製品の博覧会を開催する、その博覧会は完全にギリシャ製の
もので、新しく登場したものであり、その会場で賞を、民主的な我々の君
主より授与される。

33 条に示されているように、外国在住のギリシャ人でも構わないのであるが、
産業製品は、ギリシャ人の手によって制作されたものに限られていた。この意
味で、古代の全ギリシャ的な意味は継承されたと言いうるであろう。

この後の 34 条で、古代の競技の復興について言及している。

34 条：このような特徴を持つ祭典を常に開催できるように、委員会は内務事務
局と協議して必要な方法を講じなければならない。そして今後は祭典中の
3 日間に公的な競技会を開催し、競馬、レスリング、競走、円盤投げ、跳
躍、槍投げ、民族舞踊や他の運動種目を実施し、その他に、音楽、演奏、
交響曲、歌などの実演も行うものとする。最初の競技は、祭典のプログラ
ムに則り、委員会の定めた規定に適したものを実施し、月桂樹の賞を授与
する。

35 条：農工業やその技術のさらなる発展を目指して、条例の目的を達成するよ
う、関係各位は努めなければならない。

36 条：内務省事務局のもと、本条例の施行を命ずる。

アテネにおいて、1 月 25 日（2 月 6 日） 1837 年
偉大なる国王の名において命ず 閣議

ここでは、産業製品の競技が開催された後において、古代の運動競技と芸術
や音楽の競技を開催すること、そこでは月桂樹の賞を授与することが述べられ
ている。この条文から、運動競技や芸術の実演などは、産業製品の競技に比し
て、軽視されていたと言える。

以上の条例の内容から、以下のことが言えるであろう。

- 1) 1837 年の王室条例は、Kolettis と Soutsos により話し合った 1834 年の報告
書の内容に比すると、運動競技と芸術競技は軽視されていた。
- 2) ギリシャにおける農業や工業の振興をはかるため、それらの産物や製品の
展示会を競技形式で行うことを中心に考えられていた。
- 3) この産業博覧会には、将来の課題として、円盤投げ、槍投げ、幅跳び、走、

レスリング、競馬などの古代の競技を行うことが言及されていた。この点は当時の他のヨーロッパの産業博覧会などには存在しない独自性であったと言える。

- 4) 芸術競技については明確には言及されていない。民族舞踊や音楽の演奏などについて触れているにすぎなかった。
- 5) この祭典を企画するために特別の委員会が設置されたが、それは内務省に属するものであり、ギリシャ王室や政府が積極的に関わろうとしており、国家的な政策として出発している点も大きな特徴である。このような路線を継承していくことにより、オリンピア競技祭も国家的な規模で開催される道が開かれたと言える。

この王室条例に基づいて、12人の委員が任命され、王室政府の内務秘書局にその委員会が設置された。しかし現実にはこのような祭典は、すぐには開催されなかった。それはこの祭典を開催するための予算が、財政上の理由で、計上できなかったからであった。

この法案は、オリンピック競技会の名称は使用していない。しかしながら、古代の競技の最も中心的な競技会はオリンピック競技祭であり、古代オリンピア競技祭をこの34条が志向していたことは言うまでもないであろう。また、このような条例の内容から、農・工業の器具の展示会の人集めの手段として、古代の競技を利用したのではないかと、運動競技の復興についての関心は薄かったと言える、先行研究では語られている。

しかしながら、産業製品を競技のカテゴリーに含ませたということも言えるのであり、その意味では、ユニークな古代オリンピア競技祭の解釈を施したとも言えよう。これらの条例の内容から、独立直後のギリシャ政府は、オリンピック競技会の復興を産業振興ということに結びつけて行おうとしたことは明らかであり、古代の競技の開催は、その一部として考えられていたといえる。つまり、独立直後のギリシャ政府は、古代の競技祭の伝統について、産業の振興という近代的解釈を施して実践したとみることができる。

3. 知識人による古代オリンピア競技祭復興の声明（1838年）

「国家産業振興委員会設立に関する」王室条例が出された翌年の1838年、ギリシャの地方においてオリンピック競技会の復興宣言がギリシャ人自身の手により出された。それは、ペロポネソス半島にある、オリンピアとピルゴスの間にあるレトリーニという地域であった。ここに住む住民たちが、ギリシャ

のオスマントルコからの独立を記念して、1838年3月25日にオリンピック競技会を復興するとの声明を発表した。この際の声明書の内容は、公文書313号によれば⁹⁸、オリンピック競技会の復興委員会の特別委員として、A.Augeros (後の文部大臣)、P.E.Yanapoulos (1875年の第三回オリンピア競技祭におけるオリンピア委員会副会長)を初めとして、のちのギリシャ独自のオリンピア競技祭のオリンピア委員会委員になる K.Gkika, P. Acholos, Th. Theodorides など、オリンピック運動に携わる委員が5人も含まれている。

この復興委員会における最初の会議では、競技会の運営、賞の授与などについて話し合われた。それによれば、競技会は「オリンピック競技会(ΟΛΥΜΠΙΑΚΟΙ ΑΓΩΝΕΣ)」との名称で、ヘラノディカイという競技委員によって運営され、競技種目も古代オリンピア競技祭で行われていた、競走(スタディオン走、ディアウロス走、ドリコス走)、跳躍、槍投げ、円盤投げ、レスリング、ボクシング、競馬、戦車競走などであった。産業博覧会のようなものは含まれていないので、古代の競技会に近い形で行おうと計画されたと考えられる。

このオリンピック競技会はエリス地方のピルゴスで行われることになっていたのだが、実際に行われた、という記録は、ギリシャの史料からは確認できない。何らかの理由で、実現には至らなかったと思われる。

このオリンピック競技会の復興宣言が出された経緯について、ギリシャ王室より出された条例の不徹底さを補おうとして有志が計画したことを当時の委員であった Yanapoulos が述べていたことが伝えられている⁹⁹。このレトリーニにおけるオリンピック競技会の復興委員の中に、前述したように、後にオリンピア競技祭に携わる重要な人物が関与しているところから、財政的な理由で頓挫した古代競技会の復興を、何とかギリシャ人自身の手で、実現しようと試みたのではないかと推測される。つまり産業の振興を目指した古代の競技の復興という外国人政府の姿勢に反発したギリシャ人知識人たちが、古代オリンピア競技祭の伝統を強く継承したオリンピック競技会を復興させようとしたものと思われるのである。つまり、政府の方針とは別にして、知識人たちが、オリンピック競技会の復興を着想しだしたのであった。

この点について Chrysafis は、「たとえこのオリンピックが実現されなかったとしても、近代ギリシャにとってその試みは特別の意味をもっている。とい

⁹⁸ Εφημερίς τις κυβερνήσεως του βασιλείου τις ελλάδος .Athens, 1838,pp. 26-27.

⁹⁹ Chrysafis, I.(1930) Οι σύγχρονοι διεθνείς ολυμπιακοί αγώνες. Athens.p.17.

うのは、オリンピック競技会の復興は、この最初の素晴らしい発想の中に既に生まれていたからである。¹⁰⁰」と述べているが、確かに、1837年の王室条例や1838年のオリンピック復興宣言など、近代ギリシャは、オリンピック競技会の復興へ向けて、着実に歩み始めていたと言えるであろう。つまり、政府の方針とは別にして、知識人たちが、オリンピック競技会の復興を着想したのであった。

¹⁰⁰ Chrysafis, I.(1930) *ibid.*,pp.16-18.

第4節 ギリシャ人による古代文化再発見

古代ギリシャ時代における運動競技の習慣は、ビザンチン時代に入るとともに行われなくなってしまうと一般的には扱われてきた。しかしながら、さまざまな祭典の場において、規模や継続性は古代ほどではないにせよ、一定の運動競技は維持されていたのであった。

オスマントルコの支配下においても、言語の使用や宗教（ギリシャ正教）の実践については、厳しくは制限されなかったため、彼らの民族的なアイデンティティは維持された。そのことは独立への意志と行動が瞬く間に伝わることに繋がった。

彼らを独立へと駆り立てたのは、ヨーロッパ人の古代ギリシャ文化の再発見であった。芸術や建築様式などに新古典主義といわれる様式が注目され、古代ギリシャへの憧憬が広がると、ヨーロッパに在住していたギリシャの知識人や留学していた若者を通して、本国のギリシャに逆輸入された。古代の芸術の発展の背景の一つに競技文化が存在していたのであり、このことは、ギリシャ人に古代の競技文化への復興を意識させる契機となった。

イギリス、フランス、ロシアなどの後押しで、1832年にトルコ帝国からの独立を果たしたギリシャは、ギリシャ文化に興味を抱いていたバイエルン王の第二皇子、**Othon** をギリシャ国王として迎えたことも、古代のオリンピック競技祭の復興に弾みをつけることになった。**Othon** 国王が首都アテネの町に新古典主義の建物を建設し始めると、ギリシャ人にとって、偉大な過去としての古代ギリシャ文化をギリシャ人の遺産として拠り所にしようとする主張が文化人や知識人の間で登場したのであった。

そして1833年には、作家 **Soutsos** が古代競技会への復興を提案し、内相 **Kolettis** とともに、その原案が作成された。それが1837年の「国家産業振興委員会設立に関する」王室条例となったが、ここでは、その名称に表れているように、国家の産業振興を促すことに主眼に置かれていて、各地の農業、工業製品の博覧会と産業製品の競技を行うことが示されていた。同時に古代の競技と芸術と音楽の実演が行われることが明記されていたが、これは今後の課題とされていた。ギリシャの国家として、産業製品の祭典を行うことが決められたのであった。

これらのことから言えることは、近代国家として出発したギリシャ政府が選択したのは、産業の振興を第一義においた競技会の設置、ということであった。そのために、産業製品の博覧会と優れた製品への賞の授与を考えたのであった。

それは、産業を古代の競技の範疇へ組み入れるというものであった。

このことは、古代ギリシャには存在しなかった独自の競技会を考案したとも言える。独立直後のギリシャにおいては、近代国家の建設という視点から、産業製品の競技、それに付随して、古代の競技と音楽の実演が考えられた。彼らは古代の伝統を近代国家の建設に活用するために、思い切った競技（つまり産業製品の競技）を考案した。古代の競技の伝統を、産業製品の競技として、近代的に再解釈したとも言えよう。

しかしながら、このような産業製品の博覧会と製品や産物の競技に異議を唱える知識人は多かった。それは古代の競技とのつながりが薄く、何よりも運動競技が軽視されたことに対する反発であった。

古代学の知識人らは、独自のオリンピック競技の復興をペロポネソス半島のレトリーニで宣言し、古代の運動競技中心の祭典を行おうことを企画した。

この事実から言えることは、ギリシャ政府と古代の伝統に造詣をもつ知識人たちの考えるオリンピック競技会の復興案には、かなりの相違があったと言える。この両者を比較すると次のように言えるだろう。

それは第一に、古代オリンピックの伝統をどのように近代国家に生かすかということの基本的な考えの相違が底流に存在していた、ということである。ギリシャ政府は、産業の振興をはかるために、古代の競技の伝統を利用しようとしたと言える。産業振興を目的とするために、古代の運動競技は付属物的なものとして最初から認識されてしまった。農業、工業、鉱業、牧畜業などの産業製品の優劣を競い合い、賞品を授与することで、それらに携わる人々に動機を与えて、ギリシャ全体の産業の振興、つまり当時考えられていた近代国家のありように近づこうとしたと言える。

その一方で、古代史や古代文献学の学者らは、古代の競技そのままの復興をめざした。そのため、オリンピアの場所に近いピルゴスで競技祭を行おうと計画したのであった。古代の競技を復興することが、古代の偉大な文化と独立間もない近代のギリシャとを結ぶものであったし、それが人々に自信と誇りを与えると考えたからであった。

政府と知識人の双方とも計画はされたが、実施までには至らなかった。その理由は、ともに財政的な裏付けが得られなかったためであったと思われる。

このように古代の競技の伝統をどのように独立後のギリシャに生かして復興させるか、ということについて、当初は政府、さらに知識人たちなどの間で、様々な思わくが働いていたことが確認できる。政府は、競技会の近代的な解釈のもとにオリンピック競技会を考え、古代学の知識人たちは、伝統に基づいて

のオリンピック競技会の開催をめざした。そうした中で、政府側の案の作成に関わっていた Soutsos は、文学や芸術の復興もオリンピック競技会の一部に含ませることを考えていた。

19 世紀のギリシャにふさわしいオリンピック競技会のありようについて、多様な意見が交錯しながら、復興が考えられていたと言えよう。

第二章 第一回オリンピア競技祭の開催

第1節 第一回オリンピック競技祭の理念

1. Zappas による古代オリンピック競技祭復興の提唱（1856年）

1-1. Zappas 登場の背景

1839 から 1844 年までの間、ギリシャでは、未だギリシャ領になっていないギリシャ人居住地での紛争が相次いだ。ギリシャ人によるクレタ島での武装蜂起とともに、北部においても蜂起があった。多くの新聞はテッサリア地方、エピロス地方、マケドニア地方の独立を主張した。そうした中、1843年3月、人々と軍が憲法の制定と国王の追放を求めた。これは憲法制定革命とも呼ばれた。

このような出来事が起きたが、Soutsos は、オリンピック競技会復興の考えを主張し続けた。1842年、国王に対して「アテネにオリンピック競技会の復興」を呼びかけた¹⁰¹。さらにその1年後にも Soutsos は新聞でオリンピック競技会の復興を呼びかけた¹⁰²。

1844年、Soutsos は当時外務大臣に就任していた Kolettis に対して、1835年の古代の競技会復興に関する報告書とオリンピック競技会の計画を思い出させ、古代ギリシャの遺産を再興しようとした。Soutsos と Kolettis との関係は薄いものではなかった。二人には、メガリ・イデアという共通の理想があったからである。メガリ・イデアとは、ギリシャ古代の栄光の時代にまで遡って領土を広げるという考えで、Kolettis により、1844年1月の議会で表明された¹⁰³。その考えによれば、ギリシャ人は全時代を通じて文化的な継続性（時間的結合）を持っているので、すべてのギリシャ人は独立しようとしていようとするのでなく、もともと一つの民族である（空間的結合）というものであった。アテネでのオリンピック競技会の開催により、本国と異国のギリシャ人の祖先と宗教は共通なので、相違を乗り越えられると信じていた。Kolettis は古代よりも当時の方がヘレネスの国民意識が強いので、より理想的であるという見解であった。

¹⁰¹ Young, D. (1996) *The Modern Olympics : a struggle for revival*, Baltimore and London, p.25.

¹⁰² *AION*, no.481, special edition 1941.1.28.

¹⁰³ Dimaras, K.Th. (1955) *Ο Κοραΐς και η εποχή του*. Athens, p.190.

国家の統合としての精神的、文化的紐帯を求めることは、散り散りになった当時のギリシャの状態からすれば、当然のことであっただろう。このような時に Soutsos は、国家と民族の統合の象徴として、オリンピック競技会の復興を主張したのである¹⁰⁴。

Soutsos の提案の一部である芸術部門は、アテネ大学で実行された。1851年5月、大学の公式行事として、多くの議員、政府関係者、外国に住むギリシャ人を招いて、詩歌競技の表彰が行われたのである。国王が月桂樹の冠を優勝者に授与した。参加した人々は詩歌の朗読を聞き、賞の授与式を見学することができた¹⁰⁵。

1850年代のギリシャでは、詩歌は多くの社会階層の人々に影響を及ぼすメディアであった。賞の授与式もギリシャ国家の式典として行われた。そのようすは、次の報告に示されている。

「アテネの人々は騒がしい。社会階層のあらゆる人々が同じ興味を持っている。カフェや店は人影がなくなり、公園に人々は集まり、身振りをつけて大声で、熱く議論し、しゃべっている。競技に参加した詩歌が読まれると、勝利者が読み上げられ、国家の名により賛辞が贈られる。大きな声で朗読され、月桂冠が授与される。群衆はその詩歌を歓呼の声で歓迎し、式典が終わると彼の家まで凱旋して連れて行った。¹⁰⁶」

詩歌競技で月桂冠が授与されることは、古代のデルポイで行われていたピュティア祭と同様である。勝利者を歓呼し迎え、凱旋したようすも、古代の競技会の勝利者と同じ習わしであった。彼らの生活の中に、古代の風習が息づいていた様子がわかる。オリンピック競技会復興の考えは、新しいギリシャ国家が成立した後、眠りから覚めたように生き続けた。

やがて Soutsos のオリンピック競技会復興の考えは、Zappas に受け入れられることになった。

1851年、Soutsos は、再度オリンピック復興案を政府に提出した。そこでは運動競技を中心として、芸術競技（叙事詩・叙情詩・悲劇など）や産業博覧会を行うことが明記されていた¹⁰⁷。ここで明らかなように、Soutsos は、運動競技のほかに、芸術競技、産業博覧会の3つの部門を行うことを早くから考えて

¹⁰⁴ *IAIOΣ*. Athens, 1856.1.13

¹⁰⁵ Dimmaras, K.Th.(1955) *ibid.*, p.190

¹⁰⁶ Dimmaras, K.Th.(1955) *ibid.*, p.191

¹⁰⁷ *IAIOΣ*. Athens, 1856.7.15

いたのであった。産業の振興ということは、19世紀のギリシャにおいては、緊急の課題であることは、多くの知識人にも共有されていたのであろう。

その後、Soutsosの思いに賛同する貿易商人 Evangelis Zappas (1800~1865年) が現れた。Zappasは1800年にオスマントルコ支配下のギリシャ北西部のテペレニ近くのラボブという小さな村に生まれた。青年時代からオスマントルコとの独立戦争に身を投じた愛国家であった。13歳から20歳まで、彼はギリシャの独立運動の契機となった Ali Pasha (1740~1822年) の軍隊に傭兵として加わり、Aliの護衛の任を全うした。21歳になった時、1821年の独立戦争に従軍し、1824年には旅団長の地位を与えられた。30歳になるまで、オスマントルコからの独立を目指して、戦い抜いた。ギリシャ北部の独立戦争が終結すると、Zappasは北部のワラキアとモルダビアの辺りに移り住み、短期間のうちに、貿易商や農業などで財産を形成した。彼は1848年に政府から農業委員に委嘱された。

Zappasは地方のギリシャ修道院に資金を貸し付けて大きくした。1845年頃までに、彼は急速に富を増やし、それまで借りていた広い土地を買い上げた。それらのうち、ブロステニという町に家を建てて、従兄弟の Konstantinos Zappas (1814~1892年) というルーマニアに移住した身内と一緒に住んだ。土地を耕して交易をしながら Zappas 兄弟はさらに資産を形成したのであった¹⁰⁸。

1-2. E. Zappas による古代オリンピック競技祭復興のための財産供与

ルーマニアに移住した後、ZappasはSoutsosのオリンピック競技会復興計画を知り、興味を抱いた。ギリシャの外務大臣 Rhangavis が記した資料によれば、「すばらしい愛国家は(Soutsosの論文の)誇大な宣伝に酔いしれていて、その計画に夢中になった、そして彼は古代の栄光の時代を復興できるのではと期待した。¹⁰⁹」と書かれている。

独立後のギリシャでは、富を持っている篤志家のギリシャ人が、学校や公共施設の建設のための費用を拠出する者が少なからずいたのであった。Zappasも蓄えた富を故国ギリシャの発展のために尽したいと考えていた。そこで Zappasは、Soutsosの主張する、民族や国家の威信を回復するためにオリン

¹⁰⁸ Iatridi,D., Ksirogianni,G., Andreaki, G., Zappa, K., Joachimidi, I., Samartzi ,P., Tsiami, G. (1989) Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων, ΖΑΠΠΕΙΟ 1888-1988. Ministry of Economics : Athens, pp.71-78.

¹⁰⁹ Rangavis A.R.(1895) *ibid.*,Vol.2,p.377.

ピック競技会を復興しようとする考えに共鳴し、彼の財産の一部をオリンピック競技会の復興にあてることを決意した¹¹⁰。

その後、ギリシャ政府によって Zappas の提案が実行されるのは数年後のことで、ブカレストのギリシャ領事館を通して事が進められることになった。領事館はギリシャ外務省に対して、1856年6月6日、Zappas の申し出として、パンアテナイ競技場に、広くて印象的な展示ホールの建設と、競技場においてオリンピック競技会を1857年3月25日に開催するための基金を提供するという書簡を伝えた。3月25日は、ギリシャのオスマントルコからの独立祝祭日であった。Zappas はまた個人的にその祭典に参加したいとも伝えていた。

オリンピック競技会復興に対する返答は1856年7月までなかったので、Zappas は、2000 オーストリアフランをブカレストの領事館に預け、彼の決意を示した¹¹¹。同時に、1856年7月13日、彼は日刊紙の“*ΗΛΙΟΣ*” 特別号の「ギリシャの基金提供者」というコラムに寄稿した。この一文は、この紙面の編集者、Soutsos の知るところとなった。Zappas と接触をもった Soutsos は、オリンピック競技会の内容について、次のように語っている。

「これらの競技会に、農業の生産や農耕器具と、詩や文学作品の賞の授与を結びつけて、産業の業績を向上させる¹¹²」

ここで明らかなように、Soutsos も、詩や文学作品とともに、産業の振興を念頭に置いて、オリンピック競技会の復興を考えていたのであった。

1-3.ギリシャ政府と Zappas の交渉

この Zappas の財産供与の申し出は、新聞“*ΗΛΙΟΣ*” に直ちに掲載された。ここでは、「新しい国家の威信を高めるために」オリンピック競技会の復興を提唱し、それを開催するため、古代アテネの競技場の復元の費用も含めて、それらの資金をすべて供与すると、申し出たのであった¹¹³。国王はその申し出を、当時の政府の外務大臣で Ross の後継の古典学者でもあった Rangavis に検討させることになった。

こうしてギリシャ外相 Rangavis は、Zappas と交渉することになり、彼の提

¹¹⁰ Chrysafis,I.(1930) *ibid.*p.24.

¹¹¹ Kivroglou, A. (1981) Appendix Document 2.pp.13,16.

当初 Zappas は 1200 オーストリアフラン 3 年間で提供するとしたが、総領事の Skouphos S. との契約で、3 年間で 2000 フランに増額することになった。

¹¹² *ΗΛΙΟΣ*. 1856.7.13

¹¹³ *ΗΛΙΟΣ*. 1856.7.15

案を吟味した。ここで、Rangavis と Zappas は、基金の期間の決定に関して話し合いが持たれたのであった。

Zappas は彼の存命中にオリンピック競技会の復興が達成されるかどうか、心配だったので、1857年3月、Rangavis に「オリンピックの展示ホールの計画と予算」を送るよう要請した。彼はまた競技会を広報して開催を保証すること、そのために、ギリシャの蒸気船会社の株を寄付するという方法を講じた。そして第二に展示会のための建物の建設費用も、自身の財産から拠出することを申し出た。Zappas は、ギリシャ政府が一部を負担するという提案を拒否し、全学負担する、と主張したのであった。

Rangavis 自身は後に、「今日の文明社会において、ふさわしい競技は、レスリングやボクシングではなく、産業や社会の発展に寄与する精神的な競技である¹¹⁴」という論理で、Zappas を説得したと述べている。

Rangavis は、Zappas に産業博覧会を行うように説得したのは彼自身であると言うが、それは疑問が残る。鉱工業や農業製品の博覧会を運動競技とつなげて行うことは、既に Kolettis のメモと Soutsos の意見に見いだされる。またこれは Zappas 自身も同意していたことは、彼がオリンピア競技祭を実施する際に、展示ホールの建設に言及していることから明らかである。Rangavis との交渉に入る前に、Zappas は、Soutsos の意見に従い、運動競技と芸術競技、さらに産業博覧会の構想をもっていたものと思われる。

彼らの意見が一致したので、Zappas と Rangavis は4年に一度のオリンピック競技会開催のための規定の策定に乗り出したのであった。

運動競技のみならず、農・工業製品の競技も行うという発想が出て来たことは、注目に値する。

Zappas は外務大臣になった Rangavis と交渉し、最終的には産業博覧会と運動競技が行われることが決められた。

当時は、Curtius らがベルリンでオリンピアについて演説し、オリンピック競技会の復興とオリンピアの発掘を呼びかけ、それに呼応するかのようになり、Ross が発掘のための資金援助の声明を発表するなどしていた頃であった。ギリシャの言論界も当然そのようなドイツでの動きは伝えていたであろう。1855年4月15日発行の“*ΗΛΙΟΣ*”でも実際に、当時のギリシャを取り巻く諸外国では、オリンピアの発掘を行おうとする交渉がギリシャ政府になされているとする記事が掲載されている¹¹⁵。ギリシャ自身が自分たちの伝統を継承するような活

¹¹⁴ Chrysafis, I.E. (1930) *ibid.*, p.46, *ΕΣΤΙΑ*.1888.10.11, Athens.

¹¹⁵ *ΗΛΙΟΣ*. 1855.4.15.

動をしなければならないとして、オリンピック競技会の新たな設立とそのため
の資金援助を呼びかけ、それに呼応した人物が **Zappas** であったのだろう。

Rangavis は 1837 年に制定された後、まだ実施されていない「国家産業振
興委員会」についての王室条例で定められていた競技会の実現にその資金を充
てようと、**Zappas** に同意を求めた。**Zappas** は 1857 年 3 月 25 日の国民的祝
日に最初のオリンピック競技会を古代オリンピア競技祭の復興として開催し
ようとの考えをもっていたために、なるべく早く実現させたいと思っていたよ
うである。**Rangavis** との折衝の結果、1856 年 10 月に **Zappas** は **Rangavis**
に同意し、彼の寄付金は国家の一般予算に組み入れられ、オリンピック競技会
の準備が進められることになった。

その際のギリシャ当局の発表は、オリンピック競技会は、公共の利益のため
の活動として、ギリシャの産業の発展に寄与するべく行われる、ということが
示唆されていた。そのためにオリンピック競技会の競技場よりも、博覧会のため
の建物の設計が、まず始めに着手されたのであった。そしてこれは後に「ザ
ッピオン(**Zappeion**)」とう名称がつけられて、建設され、近代ギリシャのオリ
ンピア競技祭の博覧会場として使用されることになる。

Zappas は、新しいギリシャの特徴的な考えと古代文明の考えとを融合させ
てオリンピック競技会を復興したい、との希望から、産業博覧会の案を受け入
れたのであろう。この寛大な寄贈者による競技祭の計画は、当時のヒューマニ
ズムの考えにより定着したが、それはドイツの王室を出自とするギリシャ王室
であったから、浸透したとも言える。

オリンピア競技祭を運営する役員であるヘラノディカイについて、**Zappas**
は、ギリシャの外務大臣 **Rangavis** や **Soutsos** などのような彼の信頼できる人
物が加わるべきであると考えていた。さらに **Zappas** は、委員会のメンバーと
して、アテネ大学の評議員とアテネ科学アカデミーの創立者を加えることを提
案した¹¹⁶。

Zappas が、オリンピア競技祭の開催と産業博覧会のための建築物を受け入
れたことについて、先行研究では、**Zappas** が現実主義的に変化していったと
している。

「1858 年 3 月 25 日の国家の祝日に、**Zappas** から **Rangavis** にあてた手紙
では、年内に第一回オリンピア競技祭が実行することを促している。当初の

¹¹⁶ Kivroglou,A.(1981) Appendix Document 2,pp.14-17.

提案では、1857年の3月25日に行われるよう提案していた。そうこうするうちに Zappas は、オリンピック建築物について完全に現実主義者になっていた。彼は、第二回オリンピック競技祭で、オリンピックの建築物が使用されることを確認するために、計画書と予算書を送るよう要請した。¹¹⁷」

Zappas が現実主義的に対応していった様子がうかがえる。

オリンピック競技祭の開催は更に遅れて 1859年の11月になった。産業博覧会用の会場建設の遅れも、Zappas は容認した。結果的に、第二回のオリンピック競技祭の際に、オリンピックの建築物は、ザッピオン展示会場として完成した。

そのほか、Zappas は賞となるメダルの製造費用も負担した。賞については、フランス人彫刻家に依頼し、5500フランを支払った。

2. オリンピア競技祭の設立に関する王室条例

2-1. オリンピア競技祭の設立に関する王室条例の内容（1858年）

1858年8月19日付けで、「ΟΛΥΜΠΙΑの設立に関する」王室条例が発表された。この条例は以下のように記されている¹¹⁸。

「内務省の提案と議会の見識により決定された。提出された Evangeris Zappas 氏の財産供与を検討した結果、国家の発展を目指して“ΟΛΥΜΠΙΑ”という名の懸賞競技会(ΔΙΑΓΩΝΙΣΜΟΣ)を設立し、内務省にその任を置き、1859年に第一回“ΟΛΥΜΠΙΑ”の開催を目指す。Evangeris Zappas 氏の勇敢な申し出に感謝する。この条例の規約を次のように定める。」

具体的な条例は次のようなものであった。

第1条：四年周期の最後の年にアテネで総合的な懸賞競技会を行う、それは“ΟΛΥΜΠΙΑ”の名称を持ち、ギリシャの活力あふれる作品、農産物、工業製品、畜産製品が展示される。

第2条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の主宰と監督権は内務省に置き、内務省は国家の産業の

¹¹⁷ Decker, W., Kivrogiou A.(1997) First Greek Olympic Games of Zappas in 1859. Naul R. ed. Contemporary studies in the National Olympic Games Movement. Frankfurt am Main, pp.12-13.

¹¹⁸ Εφημερίς τις κυβερνήσεως του βασιλείου τις Ελλάδος. Athens. 1858. p.2.

奨励を目指した委員会を管理し、委員会に内務大臣の推薦する 4 人のメンバーを加えるものとする。その委員会の会長は内務大臣により選出される。

第 3 条：ギリシャの製品の展示の承認についてはあらかじめ公表する。展示は公共施設のホールで行い、外国の輸入機械については、一定の制限のもとに決定される。

第 4 条：各郡の委員は県知事により任命され、各行政長官は地元の“ΟΛΥΜΠΙΑ”を所轄し、地元の製品を公表された規定に基づいて展示する計画を立てる。

第 5 条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の展示は、産業委員会の動議に基づき、内務大臣により任命された競技委員(ΕΛΛΑΝΟΔΙΚΑΙ)または 3 人の特別委員により、評価される。

第 6 条：製品の表彰については競技委員が、とりわけそれらの用途や生産の希少価値や完成度について検討する。

これらの 6 条から言えることは次のことである。

ア. 1859 年のオリンピック競技祭は、近代国家ギリシャの産業振興をはかる目的で、産業博覧会の色彩を強くして行われようとしていたことを示している。“ΟΛΥΜΠΙΑ”を統括するのが内務省であり、政府が主導しての祭典であることが明白である。

イ. 政府は、近代国家にふさわしいオリンピックとして、産業製品の競技こそ、ふさわしいと考えていた。それは、近代国家に付与された産業力を育成する、という政治的な理念に基づいていた。

ウ. 政府は地方行政区（郡）から産業製品を出展させるために、各群や各県にも同様の産業博覧会の委員を設置することをよびかけている。全国的な範囲に及ぶ“ΟΛΥΜΠΙΑ”の開催になることを意図していたと言える。

エ. 産業製品の優劣を判定する委員には、古代オリンピック競技祭の競技役員に与えられた ΕΛΛΑΝΟΔΙΚΑΙ（ヘラノディカイ）を用いていることも特徴である。

“ΟΛΥΜΠΙΑ”という名称とともに、古代オリンピック競技祭の伝統を継承した祭典であることを示唆していると言えよう。

第7条～第11条 (略)

第12条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”は10月の第一日曜日から最終の日曜日までの各日曜日に続けて開催する。

第13条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の第一日目は、ギリシャの知的、経済的發展を目指しての宗教的な儀式で始まる。

第14条：第二日曜日には畜産製品の賞を決定する。この競技は葉冠競技として行われ、午後には賞金競技として、競馬場で国産馬の競技が実施され、一位には500ドラクマ、二位には300ドラクマを授与する。

第15条：第三日曜日には農産物の賞を決定する。この競技は葉冠競技として行われ、午後には賞金競技として、競技場で裸体の競技が適切に行われる。

第16条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の最終日には工業製品の表彰を行う。葉冠が授与される。この日の晩には、新しい劇場で劇を上演し、アカデミーでギリシャ人の作曲による音楽の演奏が行われる。これらに引き続いて、葉冠が賞として授与される。

第17条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の後、内務省は産業部門の所有権に関与し、有益な製品については資源を後に送って豊富に生産し、そのための教育に関わる。

第18条：最初の“ΟΛΥΜΠΙΑ”の集会は1859年10月の日曜日に行われる。専門の公共施設の竣工まで、工科学校の講堂で製作が行われ、畜産品はその別館で行われる。

第19条：特別の規定は、“ΟΛΥΜΠΙΑ”の準備と実施の状況に応じて産業委員会が決定し、内務大臣により発令される。

第20条：内務省がこの規約を公表しそれを遂行する責務をもつ。

12条以降からは、具体的な協議内容について記されている。それらから、次のことが言えるであろう。

オ. 考えられた競技種目は産業製品部門と運動競技の2つに分けられていた。前者では、畜産製品、農産物、工業製品の3つに分類されていて、葉冠が授与されることが決められていた。後者の競技は、競馬と裸体競技であり、その勝者には、賞金が授与されることになっている。また、有益な製品については、内務省が主導して豊富に生産し、さらにその教育に関わることが記されている。このことから、政府は産業製品に力を入れていたことがうかがえる。

また、賞についてみても、葉冠を与える産業製品の部門の方が、重視されていたことがわかる。なぜならば、古代ギリシャにおいては、葉冠が授与される競技会は、オリンピア、デルフォイ、ネメア、イストミアなどの四大競技祭に代表されるような競技会であり、神聖な競技会（**Αγώνες ιεροί και στεφανίται**）とされ、賞金や物質的な賞を出すその他の賞金競技会とは別扱いされていたからである¹¹⁹。

カ. 芸術部門では、ギリシャ人が作成した劇の上演とギリシャ人により作曲された音楽の演奏であり、それらにも葉冠が授与されることが決められていた。またこれらの作成は、ギリシャ人自身によるものでなければならなかった。芸術部門においては、**Soutsos** が主張していた文学、詩歌についての競技は行われなかった。

キ. 運動競技は、競馬と裸体競技が行われることになっていた。裸体競技とは、古代のギリシャ人が競技を行う際や、練習をする際に、裸で行ったことからそのように名づけられるようになったのだが、レスリング、ボクシングなどの格闘技や、競走、そして五種競技などであった。ここ記されている裸体競技が、どのようなものであるか、ここでは明記されていないが、運動競技の規定では、跳躍、競走、円盤投げ、レスリングを行う事が記されている。

ク. 産業製品、芸術、運動競技の3部門が考えられていたことから、1837年の王室条例に沿ったオリンピック競技会の開催をギリシャ政府は考えていたと言える。**Soutsos** の提案した文学や詩歌に関する競技は実施されなかったが、概ね、最初に構想されていた内容が、第一回のオリンピア競技祭に規定上は盛り込まれていたのであった。

ケ. 産業の振興を目指していたために、政府自らが推進する国家的な規模で構想されたオリンピック競技会の計画になったと言える。

2-2. オリンピア競技祭の目的

産業振興による近代ギリシャの発展をめざしたオリンピア競技祭であると同時に、経済的発展のみならず、芸術的な面での発展も目指すことが謳われて

¹¹⁹ Pleket, H.W.(1973) Games, Prizes, Athletes and Ideology. *Stadion* 6, p.56.

いた。一方、体育や競技の発展については、この規定には、特にうたわれていなかった。

オリンピック競技会に関する詳細な情報や体育やスポーツに関しての知識は、政府には十分にあったはずである。古典古代を専門とするドイツ人知識人や体育家たちがギリシャ内に随行しているにもかかわらず、体育・スポーツに関わる目標が定められていないことが不備であったと言える。

ギリシャ政府はバイエルン出身のドイツ人により構成されていたので、彼らは、古代オリンピア競技祭の復興というギリシャ人のアイデンティティを刺激しつつ、近代国家の建設を急ぐことで、国民からの支持を取り付けるねらいもあったと解釈される。そのために上記の「オリンピア規定」で示された目的を持つオリンピア競技祭が計画された一面もあったと考えられる。

1859年の第一回オリンピア競技祭の財源のうちの一つは、宝くじ税の実施で、これは国家経済の促進を目指す委員会の政策として導入された。その値段は5ドラクマで外務省の特約店で売られ、オリンピア競技祭の博覧会の賞品として活用された¹²⁰。

産業博覧会を含ませたオリンピック競技会に対する批判は、Soutsos と Minoidis によってなされた。Soutsos はこの問題について、多くの新聞で政府の政策に反対した。

フランスに住むギリシャ人の作家 Minas Minoidis は、古代ギリシャと同様に、体育を普及させるためのオリンピック競技会の復興を主張したのであった。

彼の著作『Philostratos の体育論』はパリで1858年に出版された。その中の「オリンピア競技祭のギリシャでの設立」の中で、Minoidis は、オリンピアと工業、農業の博覧会を結びつけて行う Zappas の考えを批判した。パンアテナイ競技場は、高貴な場所であり、オリンピア競技祭の開催地にふさわしい唯一の場所であると力説した。Zappas の意向は単純で、競技会は古代に行われていたときと同様のものを復活させなければならないと Minoidis は考えていたのだ¹²¹。しかしオリンピア委員会は Minoidis の主張を取り入れなかった。

Minoidis の批判は Chrysafis の本の中に書かれている。Chrysafis の意見では、Zappas は Rangavis により、修正を余儀なくされたとの見解を取っている。

この点については、Decker と Kivroglou も同様の見解である。

「しかし驚くべきは、創設者 E. Zappas の信念と当初の競技的理念が最小

¹²⁰ Decker, W., Kivrogiou A. (1997) *ibid.*, p.13.

¹²¹ Chrysafis, I.(1930) *ibid.*,pp.26-29.

になったことである。当初の目的がなおざりになったのは、彼が同意したときからのことである、なぜならこの変更についての不満の痕跡や反対意見は、少しもなかったからだ。経済的発展の博覧会のもとに、最新の国民競技会の競技はおこなわれなければならないとする、外務省の Rangavis の意見が、明らかに効いていたのである。Zappas は進行しつつある産業時代に対して派手にならざるを得なかった、従って、彼はイデオロギーの一部修正に耐えたのである。¹²²」

こうした点については、一部疑問が残る。確かに、パンアテナイ競技場の修復が進まずに、運動競技が古代の競技場で行われる見通しがつかなかったことは批判されるべきであろう。それほど、古代のパンアテナイ競技場について、古典学者はじめアテネ市民は深い思い入れがあった。

ただし、産業博覧会と産業製品の競技を行うことは、Zappas は既に Rangavis の提案を受けるまでもなく、Soutsos らと合意していたのである。産業博覧会を導入したことが Zappas の考えを変更させた、というのは誤りである。Soutsos の批判は、文学に関する競技が、規定の中に取り上げられていない点についてなされたのであった。

Zappas は、産業製品の競技会を博覧会として行うことに同意していた点を見落とすと、産業博覧会についての評価が難しくなってしまう。というのは、産業博覧会も含んだオリンピア競技祭は、古代のオリンピック競技会の復興とは言いがたいということで、結局、産業製品の競技を検討せず、オリンピア競技祭の運動競技のみを検討することになってしまうからである。

19 世紀におけるギリシャ独自のオリンピア競技祭は、運動競技、産業製品競技、そして芸術競技（文芸も含んで）の 3 つからなり、特に芸術競技は、後述するように、産業製品競技の中から、発展していったからである。その意味で、産業博覧会と産業製品競技の中身を検討することは、重要な点であり、本研究はその点で、先行研究とは異なる分析の視点を有するのである。

¹²² Decker, W., Kivrogiou, A.(1997) *ibid.*,p.14.

第2節 第一回オリンピック競技祭の組織

1. オリンピア委員会の創設 (ΕΠΙΤΡΟΠΗ ΤΩΝ ΟΛΥΜΠΙΩΝ)

1-1. 中央オリンピック委員会

上記の「オリンピック規定」に基づいて、中央オリンピック委員会と地方オリンピック委員会が結成された。前者は会長1、副会長1、幹事1、事務局長1、委員11名、全員で15名からなっていた。

地方委員会は各郡6名程度選ばれた委員から構成され、各県に属した。中央オリンピック委員会の構成員は以下の通りである¹²³。

中央委員会会長 N.G. Theoharis . 副会長 P. Ipitis
幹事 S.A. Spiliotakis 経理 X. Landerer
委員 P. Kalligas, Th. Orphanodis, G. Lassanis,
Th. Zaimis, N. Kostis, S. Krinos,
A.G. Douloutis, P. Yiannopoulos,
A. Papadakis, M. Misoudakis , I.Proxis

1-2. 地方オリンピック委員会

設置された地方オリンピック委員会の県と委員の数は以下の通りであり、総計で、地方委員会委員は274人にのぼる。各郡あたり6人のオリンピック委員を選出することが基本であり、すべての郡からオリンピック委員を選出されていたことがわかる。

- ・アッテイカ県：アッテイキ、メガリドス、テーベなどの4郡で24人
- ・エウボイア県：ハルキドス、カリストスなど3郡より18人
- ・フォキス 県：スコペロス、ロクリドスなど5郡より30人
- ・アイトリア県：メソロギオン、ナウパクトスなど5郡より30人
- ・アルゴリス県：アルゴス、コリントスなど5郡より30人
- ・アカイア県：パトラ、エリスなど4郡より24人
- ・メッシニア県：カラマタ、メッシニなど5郡より30人

¹²³ Vovolinis, S.A.and Vovolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν.Vol.1, Athens, pp.399-400.

- ・アルカディア県：メガロポリス、ゴルティノスなど4郡より24人
- ・ラコニア県：ラケダイモン、ギシオンなど4郡より24人
- ・キクラデス県：シロス、ナクソスなど5郡より39人

これら地方オリンピック委員会の構成から、当時のギリシャの国土のすべての県（10県）から委員を選出していることが確認される。政府の意図として、首都アテネ近郊だけではなく、オリンピック競技祭が全ギリシャ的な規模になるように配慮されていたと言える。

各県の委員長の中には、アッティカ県のように、県知事（G. Lassanis）が自ら、地域のオリンピック委員会に就任するなど、中央政府主導による委員会の設立であったことが理解される。

一方、中央委員会の構成員は政治家、官僚、古典学者などが含まれていた。その中でも、Yianopoulos は1838年に政府により結成されたオリンピック競技会復興のための委員会の構成員の一人であった¹²⁴。このオリンピック委員会の任務は、先述したように、各地方の産業製品、特に農産物などの地方の特産物を集めて、アテネの中央委員会に出展することであった。

各地方の自治体にまでオリンピック委員会が配置されたことは、国家的な規模で、オリンピック競技祭を浸透させようとする政府の狙いが読み取れる。産業博覧会への出展を意図してのことではあったが、それを通して、オリンピック競技祭の開催が、全ギリシャに伝わることになった。

運動競技のみであったら、各自治体にオリンピック委員会を設立することはなかったであろう。その意味で、産業博覧会を含めた競技祭を開催しようとしたことは、結果的に、運動競技の選手も全ギリシャから参加する道が開かれたことになるのであった。

¹²⁴ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, p.17.

第3節 第一回オリンピック競技祭の開催

1. 第一回オリンピック競技祭における産業博覧会の規定

1858年12月30日に内務大臣 K. Proveleggios により、オリンピック委員会（国家産業委員会）のまとめたオリンピック競技の設立のためのプログラムと規定、「オリンピック規定」が公布された。この規定の前文には、委員会会長の Theoharis と幹事の Spiliotakis の署名があり、次のように述べられている¹²⁵。

「我が同胞よ、何世紀もの中断の後、我らが国王の庇護と雅量のある同胞 E. Zappas の温かい申し出によって、8月19日の条例に基づき、今日の新しい形で、つまり新しい国家と理念の発展を志向して、祖先の栄誉の聖なる回想を保持しながら、古代と新しい文明を結び付けて、オリンピック競技祭を祝福することになった。目下のこの国家的祝祭について、委員会は意欲的に取り組んでおり、真の豊かさと国内の力と発展をはかるために、国のすべての産業を代表して、その技術の発展と必要性を適切に評価するものである。」

この文では、古代の伝統であるオリンピック競技会を、1859年に復興すること、産業の振興と結び付いたオリンピック競技祭が近代的なオリンピック競技会であること、新生ギリシャの国家の発展を期すこと、などが述べられており、第一回のオリンピック競技祭の目的と性格が明確に語られている。

「オリンピック規定」の具体的な内容は次の通りである¹²⁶。

第1条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の祭典の開始を1859年10月の第一日曜日とし、公共施設において月末まで実施される。

第2条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の主催と管理は国家産業委員会が司る。

第3条：県知事によって任命された地方委員会は、“ΟΛΥΜΠΙΑ”の設立についての第4条で定めているが、郡の長官により、その地域を担当してそ

¹²⁵ Vovolinis, S.A. and Vovolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν 1. Ibid., pp.397-398.

¹²⁶ Εφημερίς τις κυβερνήσεως του βασιλείου τις ελλάδος. 1858., Vovolinis, S.A. and Vovolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν 1, ibid. p.398.

れぞれ“ΟΛΥΜΠΙΑ”を組織して必要性と専門性に基づいた地元の製品の選別の任が課せられる。

第4条：それらの委員会は2月10日までに設立される事を望む。各委員会は県知事により任命された5人のその道に明るい住民から構成されることが望ましい。当日は農業会議所、商工会議所、特に教育会議所や公立と民間の工場の会議所が設立され、それらは委員会の形成と活動について検討していくものとする。

第5条：委員の名簿については、県知事が管理しできるだけ早く中央委員会に送ること。

第6条：地方委員会は行政区の長官を通して、“ΟΛΥΜΠΙΑ”のプログラムの内容について公表する。

第7条：委員会はあらゆる細心の方策で実業家や農産物の生産者の熱意と競争心を高めるよう努力する。

第8条：委員会は40日以内に展示物の目録を送付する。

第9条：委員会は目録に次いで展示物の注記と推薦の意見を述べたものを提出する。

第10条：“ΟΛΥΜΠΙΑ”の展示品は国産のものとする。

第11条：展示会において優秀な製品はすべてギリシャの物産となるよう要求される。

第12条：賞を得た製品はパリでの国際的な博覧会に地元の審査なしに出展される。

第13条：展示施設の特別部門は機械器具の外国人輸入業者により決定される。

第14条：次のような展示はふさわしくない。

- a ; 決められた用途や運用のない機械
- b ; 展示の期間中、管理しないと支障を来す機械
- c ; 設置するのに危険なもの
- d ; その他委員会が展示にふさわしくないと決めたもの

第15条～18条：博覧会の本について

第19条：展示物は6月1日までに集めること

この「オリンピア規定」は、産業博覧会に関する内容を規定したものである。この産業博覧会の組織は次のように構成されていたことが確認される。

まず内務大臣が最高責任者であり、そのもとにオリンピア委員会が設置され、そこが産業博覧会を管理する。実務的な仕事は、アテネにある「オリンピア中央委員会」であり、各県には、「地方オリンピア委員会」が設置されていた。

地方オリンピック委員会は各郡の代表者から構成され、各郡の農産物などの特産物が、選別されて中央オリンピック委員会に送られるのであった。

このような組織で、ギリシャの全土に、産業博覧会への意識を持たせ、国全体の産業意欲を向上させる事がねらいであったことが確認させる。

特に第 7 条で、「委員会はあらゆる細心の方策で実業家や農産物の生産者の熱意と競争心を高めるよう努力する」と記されている点は、当局の“ΟΛΥΜΠΙΑ”という名の産業博覧会にかける意気込みが伝わって来る。

さらには第 12 条で、優秀な製品はパリでの国際博覧会に出展されるとの内容も、ギリシャの製品をヨーロッパの進んだ国に追いつく事を意図していたと思われる。

このような国際的な規模での産業博覧会の開催は、1850 年代初めよりヨーロッパで行われた国際産業博覧会の影響も関与していたと思われる。1851 年にロンドンで初の国際産業博覧会が開催され、最新の蒸気機関、水圧機、印刷機などが展示され、延べ 600 万人もの観客を動員したと報告されている¹²⁷。また 1853 年にはニューヨークで、1855 年にはパリで国際的な産業博覧会が開催された。これらの博覧会にドイツも出展して注目されており、ドイツのバイエルン出身のギリシャ王室もこれらの事を認識していたと思われる。

2. 第一回オリンピック競技祭における運動競技の規定

オリンピック委員会は、委員長と幹事名のもとに、運動競技としてのオリンピック競技会(ΟΛΥΜΠΙΑΚΟΙ ΑΓΩΝΕΣ)についての規定を 1859 年 9 月 30 日に発表した。多くの先行研究では、この規定が、ギリシャのオリンピック競技祭の規定として取り扱い、前述の「オリンピック規定」は、それとは関係ない規定と扱っている。しかしながら、それらの両方にオリンピック委員会は関わっているので、両者の関係を見ながら分析して行く方が、オリンピック競技祭の性格と特徴を把握できるものと考えられるのである。

具体的な内容は次のようになっている¹²⁸。

第 1 条：第一回オリンピック競技祭において、跳躍、競走、円盤投げ、レスリングを実施する。

¹²⁷ Mandell,R.(1976) The First modern Olympics. University of California Press: California. p.42.

¹²⁸ Chrysafis, I.(1930) *ibid.*, pp.31-32.

- 第2条：競技はオリンピック競技会の開会とともに始められ、閉会とともに終了し、出席者は限られた者とする。
- 第3条：勝者の賞は、第一位には100ドラクマの賞金とオリーブの葉冠、第二位には50ドラクマの賞金とオリーブの枝が授与される。
- 第4条：競技の勝者は次回のオリンピック競技会において有給の体育指導者(ΓΥΜΝΑΣΤΕΣ)または体育長官(ΓΥΜΝΑΣΙΑΡΧΟΣ)に就任する。
- 第5条：競技委員(ΕΛΛΑΝΟΔΙΚΕΣ)が競技の審判を務める。
- 第6条：競技会はオリンピック委員会に任命された体育長官によって管理され、そのもとに必要な体育の専門家がつき、競技の進行を司る。
- 第7条：競技会の秩序は、オリンピア委員会より名づけられ、競技委員に任命された役員がその任に当たる。
- 第8条：各競技の開始と終了は布告官により宣言される。布告官は各競技の勝利者を二輪戦車に乗せ、彼の氏名、父母の氏名、年齢及び故郷の名を宣告する。
- 第9条：オリンピア競技祭における競技の志願者は、オリンピア委員会に直接申し出ること。地方委員会当局との話し合いを通して、優れているか否かを調査し、彼の申請についての専門家の意見を聞いた後に出場を許可し、その証明書を配達し、競技の練習が認められる。
- 第10条：許可された競技者はアテネに来て証明書を体操長官に呈示し、名簿により証明を受けなければならない。
- 第11条：競技者はそれぞれの競技に出場するため、アテネに11月15日まで滞在しなければならない。
- 第12条：旅費と滞在費については、各地方の行政が支払うものとする。
- 第13条：競技のためのユニフォームと靴はオリンピア委員会より支給されるものとする。
- 第14条：競技者は規則に基づいて1ヶ月間、体育長官と体育指導者のもと、練習を行わなければならない。
- 第15条：全競技者は競技委員の前で、競技の期間中、競技規則の条項に違反したり、対戦相手を欺いたりする不正をはたらかない旨を宣誓する。
- 第16条：競技会の開会前にこれらの競技者の宣言文は決められた印刷物に載せて公表する。
- 第17条：宣誓の場に出席しない者は登録を許可しない。

これらの規定の特徴は次のように言える。

ア. 競技種目が跳躍、競走、円盤投げ、レスリングと、古代オリンピア競

技祭の種目を取り入れている。そして優勝者には、オリーブの葉冠と賞金の両方を与えていることも特徴的である。葉冠も、産業製品では月桂樹であったが、運動競技の場合はオリーブである。オリーブは古代のオリンピアでの競技祭において、勝者に授与された葉冠であり、その意味で、古代オリンピア競技祭にならったと言ってよいであろう。因に、月桂冠が授与されたのはデルフォイで行われていたピュティア競技祭においてであり、ここでは詩歌、演劇や音楽などの競技も行われていたもので、そこにならったものと思われる。

イ. 上記の点もそうであるのだが、古代オリンピア競技祭の習慣を導入したという事も大きな特徴である。競技者の出場の方法が、各郡・都市の代表であること、競技会の1カ月前からのトレーニングや宣誓、競技委員の権威の重さなどにその事実が見られる。古代オリンピア競技祭においても、出場競技者は各都市（ポリス）の代表として選出され、祭典の始まる3カ月前には到着していなければならなかった。

また、競技役員名も、古代で使われていた役職名をそのまま使用している。この点も古代とのつながりを重視しようとした現れと言える。

ウ. 古代の習慣にならう一方で、現実的な対応もなされている面も特徴であろう。競技者に競技用の靴とユニフォームを支給し、滞在費と旅費も保証するなど、競技者に配慮した現実的な対応がなされている。さらに優秀な競技者への賞金の授与や次回のオリンピック競技会での役員への就任の約束も古代の場合とは異なり、興味深い点である。

いずれにしても、これらの諸規定からすると、ギリシャのオリンピア競技祭は、その開催に向けて周到な準備がなされていたようである。しかしここで確認しておかなければならないので、やはり、この第一回オリンピア競技祭については、重点が産業博覧会に置かれていたということである。それは、このオリンピア競技祭の報告書に色濃く表れている。

3. 第一回オリンピア競技祭における産業博覧会の開催

オリンピア競技祭の開会は1859年10月18日に、国王と王妃、閣僚、種々の自治体の公的な代表の参列のもと行われたが、この産業博覧会について、当

時の外務大臣 Rangavis が、彼の回想録の中で次のように述べている¹²⁹。

「最初のオリンピアの開会はこうして完成した。いずれにせよギリシャの製品は取るに足らないというものでもなかった。…（中略）…

この博覧会の開会の際に、中央オリンピア委員会会長の Theohapis が Othon 国王に次のように挨拶した

「何と素晴らしいのでしょうか。新しい祖国を実感します、なぜなら国王陛下の加護と寛大で勇敢な市民、Evangelis Zappas の援助に満ち溢れているからです。聖なる民族主義を意図して、すなわち農業、技術、工業のコンクールが、新しい国家の文明に発展をもたらす必要な要素として実施されたのです。」

Rangavis の回想では、産業博覧会に力を入れて行ったオリンピア競技祭は、オリンピア委員会会長の言を引いて、農業、技術、工業のコンクールこそが、新しい国家の文明に発展をもたらすと、確信していたのであった。

1860年6月に、1859年のアテネでの博覧会についての報告書「1859年におけるオリンピア-総合展示会-、オリンピック委員会会長より王室に提出」が出されている。Othonの展示会の報告書には、TheohapisとSpiliotakisの署名が入っている。この報告書には、次のように記されている¹³⁰。

「私は産業とその懸賞競技会との関連をどうするかを出来る限り調べて、主要な任務を実現し、最初の期間のオリンピアに関する壮大で総合的な博覧会について述べることのできる名誉を受けた。壮大な博覧会の首尾よい実行は、全く無名で不完全な委員会が走り抜けるよう取りかかり、行政長官の未経験と地方の産業製品の輸送の問題などにより生じた迷信や弱点に基づくすべての障害を乗り越えるよう連帯させることから始められたが、結果的には、彼らは競技会の編成を支持し、壮大で愛国的な仕事に実行を移したのであった。競技会と今日の有名な工場や組織的な工業団体の製品、珍しい製品などがあり、ギリシャの活力を表す製品を作り出せた。…（中略）… この博覧会では、有益な懸賞競技会から成る教育的で有益なものを含んでいた。

¹²⁹ Rangavis, A.P.(1895) Απομνημονεύματα. Athens.p.23.

¹³⁰ Vovolinis, S.A.and Vovolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν. Vol.1, ibid. pp.400-401.

ギリシャの総合的な懸賞競技会はオリンピア競技祭、ピュティア競技祭、イストミア競技祭、ネメア競技祭やその他のものが行われていた。その対象は体育であり、詩であり、優れた技術であった。製品の完成と製品の取引の拡大が市民の榮譽になったのである。」

この産業博覧会には当時のギリシャの国土から 10 県すべてが出展の応募を申し込んだのであった¹³¹。

産業博覧会の表彰

1859 年のオリンピック競技会における産業博覧会の賞は、一方の側面に「Othon 初代ギリシャ国王 オリンピア創設者」と刻まれた特別のメダルと、もう一つは「オリンピアの月桂冠《1 位、2 位》 競技委員 Evangelis Zappas」と書かれた月桂冠で、分類された各クラスの優秀な製品等の制作者に授与された。

表彰された製品と出展者の氏名は以下の通りである¹³²。なお（ ）内は出身地を示す。

Kleanthis(アテネ) : Tinos 島の採石場より出たじゃ紋岩大理石の展示

ヨーロッパへの輸出の努力に対して授与

Oitilos の主教(アレオポリス) : 各種の著名な木材の展示

G. Sakellariadis (エリス) : ビール製造のためのホップのタービン

Th. Orphanidis (アテネ) : 花や植物、国産のレモン、オレンジの特選品

N. Emmanuil (エリス) : スペイン産の羊の倍増と羊毛の特選品

D. Yatras (エルムポリス) : 鉄の巻き上げ機と鑄造所の鉄製品

Iph. Kokkidis (ペロリノス) : 小さい旋盤とそれで製造されたもの

V. Phetikhianis (アテネ) : ローラーシリンダーを用いた印刷機の模型の展示と
その実用化の方策

G. Kalapodopoulos (エルムポリス) : 4 種類のマッチ

P. Kaloutas (エルムポリス) : 大きな革を扱う最初の製革所

Em. Saloustpos (エルムポリス) : 革の製造と靴の裏革のなめし

Kapoutsimadai 兄弟(アテネ) : 革製の服と蠟を塗った帆

L. Gallos (エルムポリス) : 革製の服の製造法の最初の教授と改善

¹³¹ Επιτροπή Ολυμπίων (1860) Ολύμπια του 1859: Α έκθεσις τον ελληνικού προϊόντων εν αθήνας. Ethniki Tipographia: Athens.pp.15-16.

¹³² Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν (1958) Vol.1, ibid. p.399.

- P. Mantzounis (トリポリス) : 種々の色の皮革
- K. Deveziadis (アテネ) : 優れた種々の色の糸
- V.I. Daskalopoulos (ピレウス) : 三種類の石鹼
- G. Georgantas (キフィシア) : 優れた白ワイン
- S. Paulidis (アテネ) : 紙の製造
- Vemper, Chri. Damianos (アテネ) : ビール
- G. Katsaros (アテネ) : 工科大学の計画
- G. Kanas (アテネ) : 金細工製品
- K. Doupoutis (アテネ) : イタリアからの機械、技術と蚕の最初の輸入と
それらの質の向上
- A.G. Doupoutis (アテネ) : 絹織物と最高級の絹、そして紡績の輸入
- L. Rallis (ピレウス) : 1845年の早きにピレウスに蚕を輸入し最高級の絹織物を
製作
- P. Papiolakis (ピレウス) : Pireus で経営管理の技術のもと、最高級の絹織物を
製作
- P. Photinos (パトラ) : パトラで綿紡績の機械を製作し、ヨーロッパの方法での
生産の開始
- E.D. Tolia (ネアペリ) : 鮮やかな色で着色され、価格が適度な絨毯
- Eumorphopoulos, Mustakopoulos (アルゴス) : 木綿の特選品と紡績による織物
- P. Stephopoulos (アテネ) : 良い品質で色合いの良いベルベットの作品
絹の紡績技術と着色技術
- K. Dimidis (アテネ) : 異なる文字の型と鋳型
- I. Kontis (マサリア) : 達筆の原稿の写本
- N.K. Papakostas (アテネ) : ギリシャの衣服、縫い物の作品と気品ある高価な
貴金属
- Tzivoulaki 兄弟 (シロス) : 靴の特選品
- N. Papaioannou (アテネ) : フェルト帽子
- Em. Veloudios (アテネ) : 国内の木材で製作したマンドリン

以上が産業博覧会でのそれぞれの部門での優勝者とその展示の内容である。35の受賞品目の表彰を受けた出展者のうち、アテネ出身者が16人、アテネ近郊のピレウスとキフィシアが3人と1人であった。受賞者のうちの6割が、アテネやピレウスに集中していることがわかる。受賞した出展者は、ギリシャの広範囲からではなく、首都のアテネ中心に限られた地域からの出展者であった。出展作品の内容は、特に手を施したものというよりは、当地にある特産的な産

品をそのまま出展した、というようなものであり、工業製品は極めて少なかったと言える。

その中で、金細工製品や楽器としてのマンドリンに賞が授与されている点も注目すべきである。これらは芸術競技へと発展していくからである。当初から、芸術的な要素が含まれた産業製品の競技会であったといえる。

また、それ以外でも、絵画、彫刻と建築デザインについての賞も授与された。Georgiadis によれば、少なくともこれらの作品で 23 人が受賞していると報告されている¹³³。その中の 1 人、Lytras Nikiphoros は、その後活躍し、アテネ大会のメダルのデザインを担当した。

主催者は誇らしく評価している。それは近代ギリシャにおいて、初めて行われた産業博覧会であり、全ギリシャの全県からの出展がなされたからであった。しかも古代の伝統を引き継いで“ΟΛΥΜΠΙΑ”の名を冠しての開催であり、ギリシャだからこそ実施できた産業製品の競技であった。近代ギリシャは、産業製品まで競技のカテゴリーに入れたと言える。古代オリンピック競技祭の伝統は、独立直後のギリシャ人にとって、古代人が考えつかなかった競技種目を導入したと言える。古代の競技会の遺産から、19 世紀当時にふさわしい競技として、競技種目を近代的に解釈したのであった。

4. 第一回オリンピック競技祭における運動競技の開催

1859 年 11 月 8 日、二頭立て戦車競走が行われた。その一週間後の 15 日、アテネ市内のロードビクー広場で、王室の参列と政治・軍隊の指導者の列席のもと、運動競技の競技会が開催された。その際行われた競技種目（5 競技 11 種目）と優勝者への賞品は次のように決められていた¹³⁴。

ア. 競走種目

- | | |
|-----------------|---------------------|
| a. スタディオン走 | オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ |
| b. ディアウロス走（往復走） | オリーブの小枝と賞金 100 ドラクマ |
| c. ドリコス走（7 往復走） | オリーブの葉冠と賞金 280 ドラクマ |

イ. 跳躍種目

- | | |
|----------|---------------------|
| a. 単純な跳躍 | オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ |
|----------|---------------------|

¹³³ Georgiadis, K.(2003) *ibid.*,p.36.

¹³⁴ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*pp.34-35.

- | | |
|-------------|---------------------|
| b. 溝越え跳躍 | オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ |
| c. | |
| ウ. 円盤投げ | |
| a. 高さを競う投げ | オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ |
| b. 距離を競う投げ | オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ |
| エ. 槍投げ | |
| a. 正確さを競う投げ | オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ |
| b. 距離を競う投げ | オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ |
| オ. マスト登り | マストの頂点に置いてある品物 |

これらの競技種目のうち、競走、円盤投げ、槍投げは古代オリンピア競技祭の競技種目と同じであり、跳躍とマスト登りは明らかにドイツ体育の影響を受けている。この競技会はオリンピア委員会の一部門である専門的な競技委員会により管理されたが、この委員会は、Rangavis (外務大臣), Spiliotakis, Voulange, Landerer, そして G. Pagon (1837年に『体育入門書』を著し、ドイツ体育などをギリシャ語で紹介した体育家) の5人の競技委員から構成された。

この第一回オリンピア競技祭において、発表された運動競技の優勝者は次の通りであった¹³⁵。

- ・スタディオオン走：1位 D. Athanasiou (アスプロポタモス)
- ・ディアウロス走：1位 G. Arsenis (トリポリス)
- ・ドリコス走：1位 P. Velissariou (スミルナ)
- ・円盤投げ(高さ)：1位 K. Christou (アルゴス)
2位 K. Vasilakis (アテネ)
- ・円盤投げ(距離)：1位 K. Christou (アルゴス)
2位 N. Markopoulos (セロン)
- ・槍投げ(正確さ)：1位 K. Christou (アルゴス)
2位 H. Kiprios

上記以外の優勝者は不明であるが、以上から言えることは、アテネ出身の競技者は一人が確認されたのみで、運動競技の競技者については、アテネとその近郊からのみではなく、ペロポネソス半島はじめ、当時のギリシャ国土の広範

¹³⁵ Chrysafis, I. (1930) *ibid.* pp.35-36.

囲から参加し、優勝していることが理解されるのである。さらにスミルナ（現イズミール）はトルコ領であった。運動競技は、産業製品の出品と違い、全県に出場することを義務づけたものではなかったが、広範囲からアテネに競技者が集まったことを示している。

5. 第一回オリンピア競技祭の国内的・国際的反響

5-1. ドイツでの反応

この1859年のオリンピック競技会について、「ドイツ体育新聞」の1860年1月の記事に、次のように報告されている¹³⁶。

「昨年新聞の第5号で紹介したように、古代のオリンピック競技会に基づいたオリンピア競技祭が、11月27日にアテネで開催された。約2万人の人々が、観客として競技会を観戦し、ピレウス通りに近いロードピクー広場で、短距離競走、往復競走、7往復競走、高さと距離を競う円盤投げ、跳躍、溝越えの跳躍、バランスを取りながら、しなやかな体で行う高跳び、そして的投げとマスト登りの競技が行われた。…(中略)…競技者はギリシャ全土の各地から集まった、学生、兵士や船員たちであった。この民族祭は、昼の1時から午後4時まで続けられ、その後、触れ役たちが古代ギリシャの決まり文句であった「民衆よ、故郷に帰れ」と叫んだ。国王と王妃は最後まで出席し、優勝者に祝福と感謝のことばを贈った。多くの障害があるにせよ、次回予定されている1863年の祭典も行われるであろう。競技は洗練され、成熟されていくであろう。観客席が不備であったため、大人数を収容する施設が必要であることが理解された。そして次の競技祭では、その役割を十分に果たすため、完全に復興された古代の競技場で開催されることが決定された。」

この記事の内容は、簡潔ではあるが、概要について書かれてあり、ドイツ体育協会では、第一回オリンピア競技祭の開催に一定の関心を寄せていた事が理解される。特に、次回の競技祭の開催についても記事で言及し、今後の課題として、古代の競技場の復興について取り上げている点が興味深い。彼らは、古代の競技場で行うことが、オリンピック競技会の復興をより確かなものにする、という主張を示唆しているものと受け取れる。

¹³⁶ *Deutsche Turn-Zeitung*. 1860, 5-1, p.8.

5-2.イギリスでの反応

またこの第一回オリンピック競技祭はイギリスにも情報が伝えられていた。

The Times には、このギリシャのアテネで行われたオリンピック競技祭について、開催半年前の 1859 年の 4 月に次のように報道されていた¹³⁷。

「オリンピック競技祭の復興 (Restoration of the Olympian Games)

9 月 4 日付けのアテネからの報告に、次のことが書かれている。

1500 年間、中断されていた古代のオリンピック競技祭を復興することを示した王室条例にギリシャの王室がサインした。この競技会は近い将来、アテネにある古代の競技場で行われるが、その保存状態は完全な状態なので、今以上にきれいにしなくても良いほどで、10 月の最初の日曜日に 3 週連続で行われ、1859 年を第一回にして 4 年ごとに行われる予定である。

競技会には、競馬、レスリング、輪投げ、ほかの陸上競技、歌、音楽、ダンスなどが行われる。それ以外に、花、果物、牛などやギリシャの産物や製造品の展示が行われることになっている。このエクセントリックな考えは、富裕家 **Evangelis Zappas** というペロポネソスの人のアイデアであり、モルダビアのジャシイに住み、ギリシャ蒸気船国営会社の 400 株を処分したのみならず、合計 3000 オランダダカットを、オリンピック競技祭のために寄贈した。この金額はギリシャ政府により、それぞれのオリンピックードで指名された委員会に与えられることになっており、金と銀のメダルと銀の葉冠が作られる。メダルは王の肖像が施され、反対側には、創設者 **Zappas** の名前と日付が、あるいはオリンピックードの回数が刻まれる。勝利者の賞になるメダルは、白と水色のシルクのリボンで吊されて、襟につけることができる。」

この内容は、運動競技の競技種目などの点で、事実とは異なる部分も多少あるが、イギリスでも一定の関心が寄せられていたことを示している。さらに、3 月 31 日付けのアテネからの読者からの手紙には次のような内容で、産業博覧会の内容が紹介されている。

「オリンピック競技会 (**The Olympic Games**) の再興 (**re-establishment**) とギリシャ産の産業や農業製品の博覧会のプロジェクトについて、これまで時折述べてきました。はるか昔の古代に開催されていた競技会のように、

¹³⁷ *The Times* 1859.4.13.Wendsday p.10.

4年ごとに開催されていくこととなります。第一回の博覧会(exhibition)は、1859年10月16日に開催されます。除幕式のあと4週間行われますが、その間に、宗教的な儀式、学術的な催し、劇の上演も行われます。劇は古代ギリシャの悲劇で、ギリシャ人の作曲によるコーラスをつけて行われます。これらの祭典では、国内はもちろんのこと、現在はトルコ領になっている地域からも、人々が集まることでしょう。そして観光客にとっても魅力的なものになるでしょう。

ギリシャの産業と農業の産製品のみが博覧会に出展されますが、外国からのより性能のよい機械製品は、国益にかなうので出展されるでしょう。ギリシャの関税表によれば、機械類をギリシャに輸入する際の関税は無税になっています。このことは国内が平穏である今日において、国内の産業に発展をもたらすことが十分に期待されます。

このような折に不愉快なでき事もありました、それは次の事件です。約60人の兵士が二人の伍長とともにラミスの城塞から脱走してオスマントルコ領内に逃げてしまったことです。しかしながら、翌日ほとんどの脱走者が逮捕され、または自ら囚人となりました。トルコ当局はこの事件を特に重要視はしませんでした。このことはしかしながら、何人かの陰謀者による扇動的なものだろうし、おそらく、ここ何年間、私たちが楽しんできた静けさを打ち破るものではないでしょう。」

ギリシャのオリンピック競技祭に関する情報を "*The Times*" に寄稿していた者がいたということであるが、この内容は詳細を極めており、競技祭の関係者ではないかと思われる。しかしながら、新聞に掲載された内容は、オスマントルコとの敵対関係にありながらも、このようなオリンピック競技祭が開催される事をこの読者は喜びとともに伝えている。

5-3. ウェンロックオリンピックへの影響

19世紀半ばという同時代に行われたギリシャとイギリスのオリンピック競技会の接触は、それぞれの国の駐在大使により始められた。1859年のイギリスの新聞には、次の報告があると Coubertin は述べている。

「ギリシャの大臣がイギリスのコートでマッチウェンロックのオリンピック競技会を見ていた。彼はその祭典の主催者と連絡を取った。¹³⁸」

¹³⁸ Coubertin, P.(1897) A typical Englishman : Dr.W.P.Brookes of Wenlock in Shropshire. *American Monthly Review of Reviews* 15:64-65.

当時のイギリス駐在のギリシャ大使は Johannes Gennadius (1844～1932年)であった。その後、ギリシャ駐在のイギリス大使 Thomas Wyse (1791～1862年)は、1859年のオリンピック競技祭に Brookes を招待したいとの依頼をギリシャから受けた。それを受けてウェンロックのオリンピッククラスは、ギリシャのオリンピック競技祭の優秀選手のために、10ポンドの「ウェンロック賞」を寄贈した。その事は、1859年11月6日にギリシャのオリンピック委員会会長 Theocharis の公文書で確認される。そこには以下のように記されている。

「イギリスのウェンロックの町に所在するオリンピッククラスの委員会より、今回のギリシャのオリンピック競技祭における走競技の優勝者に贈られる英貨 10ポンド (281 ドラクマ) の賞が寄贈された。これはウェンロックのオリンピッククラスの成員の崇高な寛大さにより提供されたものであり、その競技に勝った者が、王室条例の基本条項第 15 条に定められた 100 ドラクマの賞に付加して与えられる。¹³⁹⁾

翌 1860年2月2日、Wyse は Brookes にオリンピック競技祭のプログラムとその英訳を送り、その様子を次のように伝えた。

「同封のギリシャ語とその翻訳の書類を送ることができ、安心しています、それらには、ギリシャで運動競技の復興の試みがなされたこと、およびウェンロックで同じような目的を持つ貴殿と貴殿の協会がなされた貢献の程を示す資料です。貴殿が私に託したギリシャオリンピック委員会への寄贈は既に行いました。馬上槍試合に匹敵するような競技はありませんでしたし、その競技を理解するのは実演しないことには難しいでしょう。資料にある通り、委員会は賞金を長距離走の優勝者に与えることに決定しました。この競技会にはよいスポーツがたくさんあり、ギリシャ人はよく走り、賞を目指して熱く競い合いました。ギリシャのオリンピック委員会と運営当局者より、貴殿と貴殿の関係者の示されたご厚情に対して、懇ろな謝意を賜りましたことをご報告いたします。¹⁴⁰⁾

この賞を受賞したのはスミルナ出身の Petros Velissariou で、1860年にウェ

¹³⁹⁾ Επιτροπή Ολυμπίων (1860) Ολύμπια του 1859. *ibid.*, p.47.

¹⁴⁰⁾ Wyse, T.(1859) Letters to Brookes. Archives in Wenlock Olympian Society : Wenlock.

ンロック・オリンピック協会 (Wenlock Olympian Society) の名誉会員になっている¹⁴¹。

Wyse より送られた 1859 年のオリンピア競技祭のプログラムと競技祭に関する報告は、Brookes の始めた競技会に一定の影響を与えた事が、先述したように確認される¹⁴²。それは Brookes が努めて「オリンピック競技会」という語を用いるようになったことであり、彼の競技会の内容もギリシャ的になった事である。

行列を行った Linden Field は「オリンピック・フィールド(Olympian Field)」と呼ばれ、ギリシャ文字の碑文(常にベストを尽くせ)が旗に書かれた。勝利の式典も月桂樹やオリーブなどの葉冠が授与されるなど、古代を意識したものになった。

さらにウェンロック・オリンピック協会では、競技会の競技種目に変更され、ギリシャの古代オリンピア競技祭を意識していった¹⁴³。五種競技を導入したことはその典型である。古代ギリシャの五種競技は、スタディオン走、槍投げ、円盤投げ、幅跳び、レスリングの 5 種類の競技種目で、走、跳、投に力技という総合的な身体能力を競うもので、調和のとれたアスリートとして尊ばれたのであった。そのような五種競技を何種類か取り入れて、競技種目にしたことは、古代オリンピア競技祭とのつながりを求めたものと解釈できよう。

また、古代オリンピア競技祭の優勝者に与えられたオリーブの葉冠を優勝者に与えたことも、同様に古代とのつながりを求めたものである。これらの契機となったのは、ギリシャのアテネで行われたオリンピア競技祭の影響であることは明らかである。

ここで、ウェンロック・オリンピック協会に取り入れられたギリシャ的な要素を確認しておきたい。

1859 年：槍投げを導入

1868 年：五種競技（綱登り、走り幅跳び、走り高跳び、右手と左手による力石、880 ヤード以上の障害走）を導入

¹⁴¹ Chrysafis, I.(1930) *ibid.* p.35.

¹⁴² 本論文序章 pp. 26-28 参照

¹⁴³ Wenlock Olympian Society (1859-1870) *Minute Books.* : Wenlock.

Rühl, J.K.(1992) *William Penny Brookes : the father of the modern Olympics.*

ΛΕΥΚΩΜΑ 1:94-111.

アマチュア選手の五種競技 (440 ヤード走、障害走、立ち幅跳び、
槍投げ、ハンマー投げ)を導入

1869年：少年五種競技 (地理、文法、歴史、随筆の執筆、綴り方)を導入

1868年：優勝者に、ギリシャの勝利の女神 NIKE の肖像の描かれた銀製のメ
ダルを賞とする

1870年：オリーブの葉冠が五種競技の優勝者の賞になる

これらの名称、競技種目、賞などの変化は、ギリシャのオリンピア競技祭を
意識したものであった。こうして Brookes は、マッチウェンロックにおけるオ
リンピック競技会を、ギリシャ的な要素を取り入れて発展させていくことになっ
た。それ以降も Brookes は、ギリシャとの関係を保っていった。イギリスのマ
ッチウェンロックにおいても、彼らの競技会がギリシャのオリンピア競技祭と
の接点を持ったことで、古代オリンピア競技祭とのつながり、という意識を持
ち始めたのであった。

Brookes の競技会をギリシャ的なものにしようとする試みは、彼のオリンピ
アークラスの名称変更にもつながった。すなわち、1860年、「オリンピアンク
ラス」(Olympian Class) は、「ウェンロック・オリンピアン協会」(Wenlock
Olympian Society) となり、「ウェンロック農業読書協会」(Wenlock
Agricultural Reading Society) から独立した。そして毎年開催する競技会を、
先述したように、「オリンピアン競技会 (Olympian Games)」という名称に変
更した。

さらに Brookes は、ウェンロック・オリンピアン協会とは別に、1865年11
月6日、リバプールにおいて「イギリスオリンピアン協会 (National Olympian
Association)」を設立したが、設立の趣旨には、国際的な競技会の開催をめざ
すことや、専門的な委員会を設立して運営していくこと、身体教育の充実など
が謳われていた¹⁴⁴。

こうして、Brookes は、自身のオリンピック競技会の規模を拡大しつつ、イ
ギリスオリンピアン協会の規定に則り、国際的な規模での競技会の開催を企画
するのであった。

ギリシャのオリンピア競技祭は、イギリスのマッチウェンロック・オリンピ
ックをギリシャ化させるとともに、両者の関係性を深めるなどの影響を及ぼし
たのであった。

¹⁴⁴ Wenlock Olympian Society (1865) Minute Books, p.161.

5-4. ギリシャ国内の反応

多くの観客を集めて第一回オリンピア競技祭は実施された。しかし Zappas の当初の考え通りのオリンピック競技会の復興ではなかったのではないかと、との批判的な意見が知識人から出された。

パリ在住の Minas は、1858 年に Philostoratos の体育論についての文献を著し、その中の「ギリシャにおけるオリンピック競技会の創設」の章で、ギリシャ自身の産業があまり発展していない状況なので、すべての製品が結局輸入品になってしまうにもかかわらず、産業博覧会を実施することは意味がない、と非難していた¹⁴⁵。

また Soutsos は、彼の新聞“ΗΛΙΟΣ”で、政府の政策を批判し、古代の本来の姿から変更させられたオリンピック競技会ではなく、財産の供与者 Zappas の意志を尊重すべきであると主張した¹⁴⁶。

アテネで発行されている新聞でも、批判的な記事が見受けられる。それは、競技場が不備であったため、大勢の観客が集まったことで混乱が起きた事を報じた内容であった。また、寄金の供与者 Zappas の意志に反するという批判記事もあった。

「競技会の終了するまで秩序のなさは続いた。勝利の式典の進行も手際が良くなかったため、馬が走り出してしまい、人々を傷つけてしまった。このような光景の中で、オリンピック競技会が復興されたのである。おそらく競技会の委員会も政府も、こんなにも多くの人々が会場に集まるとは想像していなかったであろう。

オリンピア委員会は会場の選択について非難されるべきである。古代の競技場なら、その丘に 2 万人分の席を確保できる。もしも古代の競技場で競技会が開催されていたら、不平は出なかったであろう。¹⁴⁷」

「オリンピア委員会の委員が各種目を担当していたが、本来 Zappas 自身が競技者に賞を授与するべきであったろう。皮肉を言えば、委員会が新しいギリシャの体育の競技会を創造して葬り去った張本人である¹⁴⁸。」

¹⁴⁵ Chrysafis, I. (1930) *ibid.* p.26.

¹⁴⁶ ΗΛΙΟΣ 1859.12, Athens.

¹⁴⁷ ΑΘΗΝΑ 1859.11.18, Athens.

¹⁴⁸ ΑΥΓΗ 1859.11.18, Athens.

これらの批判は、オリンピック競技祭の運営面に関するものと、競技そのものが、Zappas の意志に反していた、という二つに分けられる。

アテネの新聞などの評価は、競技場が整備されなかったことなど、運営面に対する批判であって、オリンピック競技祭そのものを批判したものではなかった。

Soutsos による批判は、Zappas の本来の意志に反していた、ということであった。Zappas は Rangavis との話し合いで、産業博覧会を含めたオリンピック競技祭の開催に賛成していたのであった。Soutsos も産業博覧会の導入には同意していた。Soutsos が批判した内容は、実は、文学や詩歌の部門が行われなかったからではないかと思われる。というのは、1835 年の Kolettis のメモでは、Soutsos と話し合った結果、次の事がほぼ決められていた。

オリンピック競技祭(ΟΛΥΜΠΙΑ)の復興案¹⁴⁹

- ・ 運動競技 (戦車競走、競馬、競走、レスリングなど)
- ・ 産業製品の展示 (農産物と農耕具、工業製品)
- ・ 芸術競技 (哲学、文芸、絵画、彫刻、合唱)
- ・ 4 年毎に、アテネ、トリポリ、メソロンギ、イドラを巡回して行う
- ・ 各競技の優勝者に賞金を出す、一週間以上の祭典とする

これに基づいて、芸術競技において文芸の競技が行われることを Soutsos は希望していて、Zappas にもその旨は伝えられていたと思われる。しかしながら、1859 年の第一回オリンピック競技祭では、詩歌や文学などの文芸に関する競技は行われなかった。このことを Soutsos は、Zappas の意志に反していたとして、批判したのだと思われる。

従って、古代オリンピック競技祭の復興という言葉には、そのような意味合いが含まれている事を十分、斟酌しなければならないと言える。多くの先行研究では、単に、産業博覧会が行われたことを批判していたと述べているが¹⁵⁰、それは、産業博覧会をオリンピック競技祭には不釣り合いなもの、という先入観が働いている影響だと思われる。

古代オリンピック競技祭の復興という時、作家、政治家、そして体育家、それぞれの立場での復興への思わくがあり、それらが復興の理念として掲げられていた側面がある。運動競技の復興は当然のこととして、作家 Soutsos は、運動

¹⁴⁹ 本論文 第一章 第3節 1-1. Soutsos の提唱 (1835 年) pp.71-72 参照

¹⁵⁰ 本論文 序章 (先行研究の検討) pp.3-9 参照

競技とともに文芸の競技の復興を主張し、政府関係者は、産業振興をめざすために、産業博覧会と産業製品の競技こそ、近代的な競技祭と位置づけていた。そして古代のギリシャ文化に詳しい知識人や体育家は、運動競技に重点を置いた祭典こそ、本来のオリンピア競技祭であると主張した。

こうした多様な古代オリンピア競技祭の近代的展開への解釈が盛り込まれながら、19世紀におけるギリシャのオリンピア競技祭は、始められていったのである。



図版1 Evangelis Zappas (左) と Konstantinos Zappas (右)
(Solomou-Prokopiou, A.(2004) Αθήνα 1896. p.31)

第4節 第一回オリンピック競技祭の特徴-古代オリンピック競技祭と比較して

1859年の第一回オリンピック競技祭は産業博覧会と運動競技の二つの部門からなる競技会が実施された。

その運営は内務省の管轄下に設置されたオリンピック委員会によってなされたが、この委員会は各県、各郡にも設置され、地方オリンピック委員会を通して展示品や競技者が推薦される規定を採用したため、ギリシャ全土より参加があり、オリンピック競技会の開催が隈無く伝えられたと言える。

第一回オリンピック競技祭の開催は、ドイツやイギリスにも知らされ、好意的に受け取られた。その一方ギリシャ国内では、古代の競技場で実施できなかったことは、Zappasの意志に反するとして、多くの知識人や言論界から非難されたのであった。そのことがかえって、競技場でのオリンピック競技祭の開催を目指す動きをギリシャ国内で活発化させ、その後のオリンピック競技祭に影響を及ぼして行くのであった。

いずれにしてもこの第一回オリンピック競技祭は、運営面で多少の問題があったにせよ、多くのギリシャ人にオリンピック競技会への関心を喚起し、その復興運動を促したという、歴史的な評価を与えることができるであろう。全体としては、これまでの先行研究で述べられているような即興の「田舎の娯楽」とは言えない¹⁵¹。

1859年に開催された第一回オリンピック競技祭を、古代オリンピック競技祭と対比して考察したい。両者をオリンピックの理念、組織、規定や種目などの文化要素の点から比較する。

1. 競技祭の理念について

Zappasの財産供与により、国家的規模での競技会の開催を政府主導で企画して1859年にアテネの公園で、第一回オリンピック競技祭が開催されたが、古代のオリンピック競技会と大きく違う点は、産業の振興を目指すという、言わば、近代国家の建設に役立てるという理念に基づいたオリンピック競技会となったことである。

本研究では、19世紀半ばにおいて、古代オリンピック競技祭の、どのような伝

¹⁵¹ Young, D. (1987) The origin of the modern Olympics. The International Journal of the History of Sport 4-4, pp.271-300.

統を抽出して、オリンピア競技祭の精神的な理念にしようとしたのかに主眼を置いて考察したい。そこでまず、競技祭の理念という観点から、古代オリンピア競技祭と対比する。

古代においては、オリンピアでの競技祭の始まりは、ギリシャ内の戦争（エリスとピサの都市国家の争い）の終結を表すために、オリンピアでの競技祭が始められ、その折に休戦の宣言が出されたのが始まりである¹⁵²。戦争を終結して平和になった証として、オリンピック競技会が始められたのであった。エケケイリアという一定の期間、武器を持ってオリンピアの周囲に入る事ができなかった休戦協定が効力を発揮した。なぜならば、オリンピアはゼウスの神域であり、ゼウスに捧げられた祭典であった。したがって、武器を持つことはゼウスを冒瀆することであり、そのような行為をした都市国家はギリシャ中の都市国家から、関係を遮断されてしまうからである。

従って、古代オリンピア競技祭は、それぞれの都市国家の繁栄をめざしてゼウスに捧げられた祭典というのが理念的な特徴と言える。

その意味からすると、オスマントルコから独立した直後の近代ギリシャでは、古代オリンピア競技祭の再解釈がなされたと言える。それは産業博覧会と産業製品の賞を授与することで、産業製品も競技（ΑΓΩΝ Agon）の範疇に組み込んだということである。産業製品の競技を、近代的な新しい競技として位置づけようとしたと言えよう。近代社会においては、産業の振興は、軍隊の整備とともに大きな特徴であり、近代ギリシャにおいても、産業の振興が考えられ、その中にオリンピア競技祭を位置づけたのであった。産業を発展させる事は国家が繁栄することを意味していたのであった。

古代オリンピア競技祭が、戦争終結による平和の証としてゼウスに捧げる祭典という意味を持っていたのに対し、19世紀に行われた第一回オリンピア競技祭は、産業の振興をはかることが国家の繁栄につながる、という考えのもと、産業振興に主眼を置きつつ、運動競技も行われたのであった。このように理念的には、古代の理念を近代的に大きく変容させたと言いうるだろう。

近代国家形成の上で、産業振興とともに重要な要素であった軍隊の整備に関しては、第一回オリンピア競技祭との関連は見られない。行われた運動競技は古代の種目がほとんどで、軍隊で用いられる体操的な種目はほとんどなかった。主催者のオリンピア委員会は、両者の関係性を見いだしていなかったと言える。この点もオリンピア競技祭の理念を考える上で、特徴的な点である。軍隊の整

¹⁵² Pausanias, ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ. 5.4.5-6.

備よりは産業振興のためのオリンピック競技祭であったということである。そしてこのことは、オリンピック競技祭における芸術的な競技種目の発展につながったと言える。

さらに、古代オリンピック競技祭が、宗教的色彩を強く持っていたので、この点について、第一回オリンピック競技祭の関係者は、どのように解釈していたのかについて考察されなければならない。

1858年8月19日におけるオリンピック競技祭の開催の際の宗教的儀式は、王室条例の13条に決められている、そこでは次のように述べられている。

「オリンピック競技祭の初日は、ギリシャの精神的・経済的發展を目指しての宗教的祝祭で始まる。」

実際に式典では、アテネの主教の聖別式が行われ、その後に国王の賛辞の後、オリンピック委員会会長が開会の言葉を発した。ギリシャ正教に則った宗教的儀式が執り行われたのであった。政府の代表の後にギリシャ正教会の代表者も挨拶した。

開会式は、「ギリシャの精神的・経済的發展を目指しての宗教的祝祭」であったのだ。最後にヘラノディカイ委員長とオリンピック委員会会長が挨拶した。ギリシャ正教は、古代ギリシャの神を否定し、異教の祭典を禁止し、異教神殿破壊令を下したローマ時代のキリスト教の正統である。この点を彼らはどのように乗り越えたのであろうか。

一つは、古代オリンピック競技祭を終焉に導いたのは、宗教的な理由によるものではなく、プロ化によるものだという当時のオリンピック史研究において論じられていた論拠に寄っていたため、宗教的な要因に関心をあまり向けていなかった、という見方が成立すると思われる。プロ化により競技選手が墮落し、その結果、終焉を迎えたという論理で、18世紀から今日までも、広く指示されている論理である。アマチュアリズム思想の台頭とともに、プロ化を批判する論拠ともされてきた¹⁵³。

このような論理でとらえていたために、宗教的な儀式での継承という点に、神経質にならなかったのであろう。

さらに、もう一つの理由として考えられることは、古代と近代におけるオリンピック競技祭の捉え方の相違である。近代のそれは、古代の伝統を受け継ぐと

¹⁵³ 本論文 第二章 資料5 「ギリシャ競技の衰退とアマチュアリズム」 pp.147-158 参照

言っても、百パーセントそのまま引き継ぐことはできない。そこに近代社会に
適応するように変容させなければならない。そのため、産業振興を念頭におい
たオリンピア競技祭として創設されたと解釈することができる。産業博覧会は
近代の産物であり、宗教的な観念とは、対照的なものである。

イギリスのリバプールでのオリンピック祭で語られたように、近代社会にお
いては、異教の祭典を「近代」、という説明で乗り越えようとした。

Liverpool Mercury には、オリンピック祭の記事の中で、次のことが書かれて
いた。

「オリンピアードの競技会復興の試みは、古代ギリシャの異教を認めると
いうことに、恐怖心や臆病さを助長したりするものではないことを望む。
そのスポーツは、古代のものと似てはいるが、修正された形になっていて、
その祭典には、もはや、宗教的な意味はない。¹⁵⁴」

このような考えで、産業の振興を掲げることで、異教の祭典の復興と言う観
念をぬぐい去ったと推測されるのである。

ところで、産業については、近現代社会においてはなくてはならないものであ
る。今日までの国際オリンピック競技会について考えても、産業と競技会とは
密接なつながりを持っている。競技場の建設はその国の建築という産業技術の
発現の場であるし、競技場を含む各種の練習場やオリンピック村などの交流空
間の創造は、開催地のテクノロジーとそれを組み入れた産業が支えているので
ある。

放送という産業は典型的で、近代国際オリンピック競技会とともに、放送産
業は発展して来た。例えば、1964年の東京オリンピックでは、スローモーシ
ョン再生を行い、スポーツ映像をじっくり見直すことができるようになった。
また、衛生を介した中継の始まりも1964年の東京オリンピックが始まりであ
る。

そうした技術がスポーツ放送を一新し、引いては放送界全体にその技術革新
が影響を及ぼしたのである¹⁵⁵。オリンピックとともに、技術革新や産業振興が
なされた例であろう。

また、競技場を含めたオリンピック競技の会場では、開催地の国の文化的な

¹⁵⁴ *Liverpool Mercury*, 1864. 7.2.

¹⁵⁵ 日本オリンピック・アカデミー監修（2008）ポケット版オリンピック事典. p.66.

側面もアピールするようになってきている。例えば、2016年の開催を目指した東京オリンピックの招致計画では、環境に配慮して、植樹を行いつつオリンピックパークを作成するなど、日本の環境に関する技術を応用してのオリンピックパークの建設が進められようとしていた。このように、産業と近代国際オリンピック競技会とは切り離す事ができないし、それぞれの国や都市の産業技術の競い合いにより、オリンピック競技会の開催地が決定される面も有している。

このようなことから、19世紀の半ばに、産業製品の競技をオリンピック競技会の一部に取り入れて、産業振興に寄与しようとした事は、近代という時代の先取りという側面を有していたと言える。ただし、そうは言っても産業博覧会に比べて運動競技が等閑になっていたことは否めない。これは産業振興のような、国家的な政策として運動競技の振興は考えられていなかったことにもよるが、国家としては、それほどには注目していなかったのであった。オ

また、古代の競技場が整備されなかったことも、運動競技に力を入れていなかったことの証でもある。古代の競技場の復元は、ギリシャ人にとって大きな意味を持っていたからである。

2. 競技祭の運営（オリンピア委員会とヘラノディカイ）

競技祭を運営した組織について古代オリンピア競技祭と比較してみたい。古代では、エリスという都市国家が実質的に祭典を管理・運営していた。そのもとに体育長官（gymnasiarchos）がいて全体の運営を統括し、そのもとにヘラノディカイという役員が、競技の審判を行いつつ、全体の進行を司っていた。

古文獻によれば¹⁵⁶、ヘラノディカイは、当初2人であったのが、徐々に多くなり、前5世紀には9人になり、戦車競走に3人、五種競技に3人、そしてその他の競技に3人が担当していた。やがて前4世紀にはエリス人から10人が任命されるようになった。ヘラノディカイは、競技の始まる10ヶ月前から、ヘラノディケイオンに合宿してトレーニングを受け、試合での管理と審判の任を受け持った¹⁵⁷。彼らは、競技の勝敗の判定はもとより、成人と少年との区別、成長馬と子馬との峻別や、競技規則がきちんと守られているかどうかを調査す

¹⁵⁶ Pausanias, *ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ*. 5.9.4-8.

Pausaniasの記述では9人のヘラノディカイが任命されるようになったのは、前7世紀からとしているが、前後の関係から、記述の誤りで実際には前5世紀からと判断される。

¹⁵⁷ Pausanias, *ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ*. 6.24.3.

ることも含まれていた¹⁵⁸。また古代の競馬や戦車競走では、優勝した場合は、馬主が表彰されるのだが、ヘラノディカイは馬主として戦車競走や競馬に参加することはできなかった。こうして公平なジャッジができるように配慮されていた。

このことと、近代ギリシャの第一回オリンピック競技祭での組織を比較してみると、最上部に内務大臣の意見が反映される中央オリンピック委員会（会長は内務大臣指名）があり、そのもとに各県に地方オリンピック委員会が存在していた。中央オリンピック委員会のメンバー10人で、そのもとにヘラノディカイが任命され、彼らが産業製品の優劣を判断する一方、運動競技の審判の役割も行っていった。

1837年の王室条例において、「国家産業委員会」と銘打たれていた委員会が、「オリンピック委員会」と変更になった点は注目すべきであろう。国家の産業振興を目指しているのは同じであるが、「国家産業委員会」から、「オリンピック委員会」と名称を変更したのは、古代オリンピック競技祭とのつながりをより強く示そうとした現れである。またヘラノディカイや体育長官（gymnasiarchos）という役職名も、古代オリンピック競技祭の役職をそのまま用いていることから、組織的には古代オリンピック競技祭を意識した組織に変更されたと言える。こうした変更は、古代ギリシャの歴史や文献学の研究者たちの意見によるところが大きい。古代オリンピック競技祭の状況に近づける努力を専門家が後押ししたと言える。独立後のギリシャは、さまざまな人々の意見を受け入れながら、オリンピック競技祭を形成していった面も大事な点であろう。

3. 競技種目と出場者

第一回オリンピック競技祭で行われた競技種目と出場者について見てみると、規定上は産業博覧会が主役であった。しかしながら、一般市民の受け止めは、運動競技が行われたことにより、関心が高まった。運動競技の種目を調べてみると、古代の競技種目と同じものを行おうとした事がうかがわれる。

例えば、古代と同じ種目としては、競走種目で、短距離走（200m）、中距離走（400m）そして1500mの3種類の走種目が行われていた。これは、古代オリンピック競技祭において行われていたスタディオン走（約192m）、ディアウロス走（約384m、）そしてドリコス走（約4000m）の3種類に相当する。

¹⁵⁸ Frazer, J.(1899) Pausanias' Description of Greece. Macmilan company, London, vol.4, p.9.

ほかに古代と同様の種目としては、レスリング、ボクシング、そして競馬などが行われた。

パンクラティオンや五種競技は 1859 年のオリンピック競技祭では行われなかった。また、距離を競う円盤投げや槍投げも行われたが、これも古代と同様であった。古代にはなくて、1859 年に行われた種目は、円盤投げと槍投げの的を当てる種目と、マスト登りであった。マスト登りは明らかにドイツ体育の流れである。

このことから、運動競技については、ほとんどの種目が古代オリンピック競技祭で行われていた種目を充てていたことがわかる。また、先述したように、軍隊で用いられていた体操種目は、マスト登りくらいで、あとは基本的に伝統的な種目であった。この意味では、第一回オリンピック競技祭では、古代の種目の復興ということが考えられていたと言える。

出場者については、産業製品出展者は、ギリシャ全土からすべての県から出展された。これは地方オリンピック委員会が設置されて、出展を促されたということにもよるであろう。オスマントルコ領内に住んでいるギリシャ人の作品も多く寄せられた。

産業製品の部門においては、用意周到に行われたが、運動競技については、出場にあたり、細かい調査がなされていなかったようである。古代オリンピック競技祭の出場者が、全ギリシャ的であったと同様に、第一回オリンピック競技祭の産業製品の出展者と運動競技に関しては、アテネ近郊者のみならず、全国からの出場者であったし、トルコ領に住むギリシャ人の出展もなされた。これは、中央オリンピック委員会と地方の自治体にオリンピック委員会を設置したことによるものと思われる。

また、古代オリンピック競技祭では、競技者は一定の期間、体育教師のトレーニングを受けることが義務づけられていた。第一回オリンピック競技祭では、この点については述べられていない。参加者の資格も、特に述べられていないので、運動競技に出場する競技者たちの事前トレーニングや参加資格については、曖昧であったと言える。

以上のように、第一回オリンピック競技祭は、近代における競技会の意味を、運動競技の復興以上に、産業振興に置いて開催されたオリムピック競技会であったと言える。

古代オリンピック競技祭からすると、1859 年の第一回オリンピック競技祭は、古代の運動競技種目や運営面で古代の伝統を受け継ぎつつも、産業振興をはかる

ために、産業製品の競技という近代的な競技を導入し、それを中心に構築された近代的なオリンピック競技会に変容して行われたといえる。

競技に関しては、産業製品の展示会の方に比重がかけられ、運動競技については、やや不十分な規定や内容であったと言いうる。また、1837年の王室条例に掲載されていた、芸術・文芸部門の競技は、独立しては行われず、産業製品の競技の一部として行われた。とはいえ、後の1896年の国際オリンピック競技会で、メダルのデザインをするギリシャ人が出展するなど、注目すべき点が見受けられた。産業製品の一部として行われたことに、Soutsosらは、批判的であったが、芸術競技が、規模は小さくても行われたことの意義は十分であったのである。芸術競技は知的競技も含ませて、この後に発展していったからである。

その意味では、古代オリンピア競技祭と同様な性格を持っていたと言いうことができよう。

外国の新聞や知識人たちが指摘したように、古代の競技場（Stadion）で開催できずに、公園で開催されたことは、古代オリンピア競技祭の復興という観点からは、不十分であった。古代の競技場で行うことは、古代オリンピア競技祭の復興を強く印象づけることになると期待されたからである。

産業の振興に力点を置き、それを中心に企画されたオリンピア競技祭であったが、全国の行政体に地方オリンピア委員会を設置したことから、オリンピア競技祭のことを、全ギリシャに知らしめることになり、その結果、競技の出場者は、アテネ近郊のみならず、全ギリシャ、さらにトルコに住むギリシャ人も参加したのであった。

資料

本研究においては、古代オリンピック競技祭との比較を行うことから、古代オリンピック競技祭に関する以下の点について、簡潔に示しておくこととする。

- ・ 古代オリンピック競技祭と宗教
- ・ 古代オリンピック競技祭優勝者への賞
- ・ 古代の競技施設（競技場）
- ・ パンアテナイ競技場
- ・ アマチュアリズムとギリシャ競技の衰退

資料1 古代オリンピック競技祭と宗教

古代のオリンピックはゼウス神を祀るという、宗教的な意味を持っていた。

古代オリンピック競技祭における宗教的な儀礼は次のような手順で行われた。祭典の期間は、前5世紀には5日間行われていたが、5日間の日程の中に、その宗教的な儀礼を見いだす事ができる¹⁵⁹。

- 1日目：ブルーウテーリオン（評議会場）の祭壇にある’誓いのゼウス’の像の前で、選手と審判たちが不正を行わない旨の宣誓を行う。選手たちはそれぞれ神域内の祭壇を回って勝利を祈る。触れ役とラッパ手の競技を競技場近くの祭壇で行う。少年の競技（スタディオン走、ボクシング、レスリング）が行われる。
- 2日目：午前中にヒッポドロームにて戦車競走と競馬が行われる。午後はスタディオンに移動して五種競技が行われる。夕方は戦車競走の英雄 Pelops を祀る儀式が行われる。
- 3日目：各国の主賓、役員、選手団一行がプリュタネイオン（迎賓館）から聖域内を行列して練り歩き、ゼウスの大祭壇で犠牲を捧げる。午後は競走が行われる。夕方からはプリュタネイオンで大宴会が開催される。
- 4日目：格闘技（レスリング、ボクシング、パンクラチオン）と武装競走が行われる。
- 5日目：勝利の戴冠式がゼウス神殿で行われる。優勝者一人一人の名前が読み上げられ、オリーブの葉冠が頭にのせられる。

¹⁵⁹ Swaddling, J. (1999) The Ancient Olympic Games. British Museum Press : London, p.53.

ここで明らかなように、古代オリンピア競技祭は、宗教的な儀式を伴って進行されたのであった。第1日目に、ゼウス像の前で宣誓の儀式を行い、神域内の祭壇を回って勝利を祈る。2日目には、戦車競走の英雄 **Pelops** に対する宗教儀式が執り行われた。**Pelops** は、古代オリンピア競技祭が始められたことを伝える伝説に登場する英雄であり、ピサを滅ぼしてエリスの都市国家がオリンピアの主宰権を獲得したことを示す物語の主人公でもある。**Pelops** を祀ることで、エリスが古代オリンピア競技祭を主催することを正当化するものでもあったが、古代においては、宗教的な祭儀として行われたのであった。また、戦車競走は非常に危険な競技でもあったため、出場者の安全を祈願する儀式でもあった¹⁶⁰。

¹⁶⁰ Pausanias, *ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ*. 6.20.15-17.

資料2 古代オリンピック競技祭優勝者への賞

1859年に第一回オリンピック競技祭が実施された。どの競技種目に重きを置いていたかは、優勝者への賞に示される。

そこで、第一回オリンピック競技祭の特徴を考察する前提として、古代オリンピック競技祭における優勝者への賞、について提示する。

古代オリンピック競技祭の競技で勝利した者は、出身地名、父親の氏名、そして本人の氏名が布告官から公表されるとともに、競技役員（Hellanodikai）から、優勝した証として、しゅろ（ヤシ科の植物）の枝が手渡され、赤い羊毛のリボンが頭や腕に巻かれた。優勝者に与えられたこれらの賞は、衆目の中で優勝したことをはっきりと示すことに意味があった。そしてこれらを身につけている者が最終日の戴冠式で、オリーブの葉冠が授けられるのであった。これらの賞には、それぞれ神話や伝説のエッセンスが込められている。

羊毛のリボンは宗教儀式に一般的に用いられたもので、犠牲を飾るのに使われた。このことからすると、競技の勝者は、神々に捧げられる犠牲と同様の意味を持っていたともいえる。神に捧げることで神の恩恵をこうむるわけである。その効力は赤い色によって強まると考えられていた¹⁶¹。

エーゲ海東側の島、サモスでは、羊毛は富や豊穡と関係している¹⁶²。そこでは子ども達が「ドアよ開け。プルーツ（富）がやって来た」と歌いながら木の枝に菓子や果実、羊毛をつけて家々を回るのであった。古代ギリシャにおいては、羊毛は一般に豊穡を意味していたのである。

ヒッタイトでは、テリピヌ（神）にまつわる神話があるが、そこには羊の毛皮について次のように語られる¹⁶³。

ある時テリピヌは消えていなくなると、家の火は消え、穀物も小麦も育たないし、牛や羊も子を産まなくなってしまう。神々がテリピヌを帰還させようと試みるがうまくいかない。最後に人間がテリピヌをなだめ、12頭の太陽の神の羊がいけにえにされる。こうしてもとの幸せな生活に人々は戻るが、その際に次のように語られる。「テリピヌは王の世話をした。テリピヌの前に1本の柱が立てられた。この柱には羊の毛皮がつり下げられた。その中に牛と羊があっ

¹⁶¹ Yakouris, N.(1979) The Eternal Olympics. New York. p.134-136

¹⁶² ブルケルト, V.著,橋本隆夫訳 (1985)ギリシャの神話と儀礼. 株式会社リポート p.197

¹⁶³ ブルケルト, V.前掲書, pp.197-198

た。その中に長命と子孫があった。」

ここでは、いなくなった神を人間が連れ戻すことを助け、そして神が王、すなわち人間の世話をするという関係が描かれている。そして豊かな生活の象徴として、羊の毛皮があげられている。テリピヌ神話の内容は、ギリシャの **Demeter** についての神話でも、ほぼ共通したものになっている¹⁶⁴。(ただし **Demeter** の場合、豊かさの象徴である羊の毛皮が、梳いていない羊毛に変化している。) ギリシャにおいて羊毛は豊かさの象徴であること、それはヒッタイトのテリピヌ神話の変容したものであることは明らかである。

一方、優勝者に与えられるしゅろの枝は、英雄 **Theseus** とつながりがある。**Theseus** がクレタ島からの帰途、**Apollon** 神を称えるべくデロス島で競技会を催した際、優勝者にしゅろの枝が与えられている。しゅろの枝は勝利を意味するものでもあった。

Apollon の誕生にもしゅろは関係する。妊娠した **Rete** はデロス島で **Apollon** を産む際にしゅろの木の中にくるまって産んだ。そのときデロス島の底が金色になり、しゅろの木のみならず、デロス島に生えていたオリーブの木が一面に金色になったといわれる。

またしゅろの木は長命と考えられていた。「やかましい鳥は 270 年生き、鹿は鳥 4 羽分生き、渡鳥はさらに鹿の 3 倍生き、しゅろの木は渡鳥の 9 倍、さらに美しい髪ニンフ、**Zeus** の娘たちはそのしゅろの 10 倍も生きる。¹⁶⁵」これはニンフ（妖精）の生命の長さを歌った物であるが、しゅろの木は 3 万年ほど生きることになる。しゅろも長命を示していた。しゅろの木は勝利や長命を象徴していたといえる。

オリーブの葉冠については、**Herakles** がヒュペルボレイオス人の国からオリーブの木を持って来たとの伝説が伝えられている¹⁶⁶。ヒュペルボレイオス人の国は、極北にある理想郷と考えられた地で、そこの人々は何不自由なく幸福に暮らし、空中を飛行し、地中の財宝を発見する力を有していたと信じられていた。**Herakles** が、その地からまだ樹木が生えていなかったオリンピアに、オリーブの苗木を持ってきたということを前 5 世紀の詩人、**Pindaros** が伝えて

¹⁶⁴ Pausanias, *ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ*.8.42.11

¹⁶⁵ ケレニイ, K., 前掲書, p.197

¹⁶⁶ Pausanias, *ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ*. 5.7.7

いる¹⁶⁷。そして、オリンピアにあるゼウス神殿後方の部屋の向かい側に、美しいオリーブの葉冠といわれる神聖なオリーブの木があり、それから競技の勝者の葉冠が作られたのであった¹⁶⁸。

また都市国家アテネでは、戦いと知恵の女神 Athena が、アッティカ地方の守護神の座を海神 Poseidon と争った際、アテナは人々にオリーブの木をもたらすことを約束したため、Athena に軍配が上がったという伝説が伝えられている。アテネでは、Herakles がオリンピアに植えたオリーブの木は、ヒュペルボレイオス人の国の地から持っていったものではなく、実はアテネに育っていたオリーブの若枝で、それを Herakles がオリンピアに持っていったということが信じられていた¹⁶⁹。

葉冠が優勝者の賞として授与されたのは、オリンピアの祭典だけではなく、デルフォイやネメア、イストモスで行われた競技祭でも、同様であった。デルフォイで行われたピュティア競技祭では、月桂樹が優勝者に授与された。月桂樹を授与する由来は、Apollon が愛した最初の少女ダフネ（月桂樹の意）に由来し、彼女は身を隠すために母なる大地に一本の月桂樹に姿を変えてもらう。それ以後月桂樹は Apollon のお気に入りの木になり、その小枝を冠としてつけるようになったといわれる¹⁷⁰。

神が枝を持ってくるという行為は、富を運び込むということ象徴している。古代ギリシャの町では、羊毛、さまざまな種類の果実、菓子、油つぼなどをオリーブの小枝につり下げ、子ども達が一定の日にこれをついで家々を回り、「エイレシオネがイチジクと厚いパン、蜂蜜、体に塗る油、一口のワインを持って来た」と歌いながら、プレゼントを集めて回る習慣があった¹⁷¹。この時の豊かなオリーブの小枝はエイレシオネ (Eiresione) と呼ばれ、家々の戸口に最終的に飾られる。つまり、富を引き寄せることを意味した。

また月桂樹の枝を運ぶ祭りであるダフネポリアというのも、富を運び込むことを意味している。オリーブの木の幹に月桂樹の小枝、きらきら光る金属製の葉、紫色に染められた羊毛などが飾り付けられ、それを Apollon が持ってくる

¹⁶⁷ Pausanias, *ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ*.5.15.3.

¹⁶⁸ Pausanias, *ἙΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ*. 5.15.3.

¹⁶⁹ Frazer, *ibid.*3.p.484.

¹⁷⁰ ケレニイ,K.,前掲書,p.157.

¹⁷¹ ブルケルト,V.,前掲書,p.197.

のであり、神の来迎を意味するものでもあった。祭りを通して神を呼び寄せ、それと同時に富を運び込むことになる。

このようなことから、オリーブの小枝で作られた葉冠と羊毛のリボンをオリンピックの優勝者に授与することは、神の来迎と富、豊穡を運び込むということの意味していたことになる。

さらに、オリーブと羊毛のリボンは平和の象徴でもあった。

Servius はオリーブから取れる油と枝に巻かれた羊毛は、どちらも平和を意味していると述べている¹⁷²。一般に小枝や羊毛は、古代人にとって休息と快適な感覚のための品物であったと解釈される。スティバスという小枝のしきつめられたものに人々が横になったりすわったりする習慣があった¹⁷³。また後に枝は平和を求めるまたは許しを求める人、つまりヒケテス（嘆願者）が儀式的に携えるものになった。彼の持つ枝は嘆願の枝と呼ばれ、オリーブの枝に羊毛が巻き付けられたのである。これは宥和の儀礼の一種とも解釈される。

豊穡、長命、平和などの象徴として、オリーブや月桂樹などの葉冠、しゅろの枝、そして羊毛のリボンが優勝者に与えられたといえる。

しゅろの枝やオリーブという植物は、2週間もすれば枯れてしまうものだが、勝利、豊穡、富裕などを象徴するもので、このような観念のもと、オリンピック勝者を出した都市は、神々から繁栄を約束された都市ということになる。それゆえ、オリンピック勝者の帰国を迎えるのに、破格の待遇でもてなした都市国家が多かった。金銭的な報酬はもちろん、食事をプリュタネイオン（市庁舎）において公費で一生涯とることが保証された。そのほか、兵役や公共奉仕の免除、税金の免除なども出された。親、子、孫と3代にわたって優勝者を出した **Diagoras** という競技者は、この世でこれ以上の幸せは望めない、と人々に絶賛されたのである。

葉冠は優勝者にとって栄誉の象徴であったが、優勝した者にとって自身の勝利を人々の記憶から消えることなく、ギリシャ社会に知らしめ、かつ長くとどめておきたいという願望は当然起こったであろう。そうした思いは、**Pindaros** や **Baccylides** などの詩人による競技の勝利を称える詩歌や彫刻家による彫像の制作などにより、かなえられていくことになる。これはギリシャのスポーツが芸術と密接に関係していたことの証でもある。そしてさらに勝利を長くとどめる別の方法として考えだされたのが、記念となる貨幣の鑄造であった。これ

¹⁷² Serv.Aen.8.128

¹⁷³ ブルケルト,V.,前掲書,pp.66-67

がスポーツの賞としてのメダルにつながっていくのである。

メダル出現以前の注目すべきものに、貨幣があげられる。鑄貨として一定の形状、品位、量目が定められ、刻印を打って造られた最初の貨幣は、紀元前7世紀にリュディアで製造されたエレクトロン（琥珀金鑄貨）である。リュディア王国は前6世紀にペルシャに征服されるが、ペルシャ人も貨幣の使用を踏襲した。

ギリシャでは、前6世紀にアイギナ銀貨が生まれ、のちにアテネでも銀貨が鑄造されたが、その表にはアテナ女神の顔、裏面にはアッティカ地方南部のラウレオン山のフクロウとオリーブの絵がデザインされた。

この銀貨は地中海沿岸の国際貨幣となった。アテネが没落してからも、ラウレオン山のフクロウの銀貨は人気を集めた。

前5世紀には、アテネだけではなく、ギリシャの都市国家のほとんどがそれぞれの貨幣を造り、それが次第に南イタリアや小アジア、シチリアの諸都市にも及んでいった。

前5世紀のシシリー島のシュラクサイでは、Kimon、Evenetos、Eukleidesなど彫金の芸術家により、戦車競走や競馬などの競技の勝利場面が、繊細かつ芸術的に鑄貨に彫られるようになった。それまでの鑄貨よりもかなり大きく、デザインも優れていく。これらは後にメダルの起源とされ、最古のメダイヨンと呼ばれるようになる。古銭学によれば、最古のメダルは、シュラクサイ出土の戦車競走の勝利を描いたものということになる。その表のデザインは、四頭立て戦車が走っていて、勝利の女神が葉冠を差し出している様子が描かれている。裏面にはアレトウーサ（Artemis女神の侍女でシュラクサイのオルテュギア島に住むニンフ）の顔が描かれている。これは、アテネの遠征軍をシュラクサイがアッシナルスという場所で撃退して勝利したことを記念して作られたものであった。この戦勝を記念してアッシナルス競技祭が始められ、その際の賞品になったものと考えられている¹⁷⁴。世界最古のメダルは、競技会の優勝者に与えられ、そのデザインは戦車競走というスポーツであったことになる。古代ギリシャの競技祭がメダルのルーツであり、それは芸術の発達との関連も大きかった。

当初は特定の個人の勝利を記念したメダルではなかったが、やがて、戦車競

¹⁷⁴ British Museum department of Coins and Medals (1959) A Guide to the Principal Coins of the Greeks. Oxford University Press:London.p.30.

走での勝利を貨幣に鑄造した支配者が登場していった。

戦車競走においては、馬主が勝利者になったため、政治的権力者や富裕な人物が勝利することが多く、彼らは、しばしば貨幣のデザインにそのことを刻印するようになった。

レギオンの僭主 **Anaxilaos** が第 75 回オリンピック競技会（前 480 年）で優勝し、戦車の図を刻んだ 4 ドラクマ銀貨を鑄造した。ゴールに向かって走る騎手に、勝利の女神が葉冠を手にして走り寄っている様子が描かれている。マケドニアの **Philippos 2 世** は、第 106 回オリンピック競技会（前 356 年）における、戦車競走での優勝を記念して、表面には月桂樹の葉冠をつけた **Zeus** の顔、裏面にしゅろの枝を手にした馬上の勝者を描いた 4 ドラクマの銀貨を鑄造した。**Philippos 2 世** は、第 107 回オリンピック競技会（前 352 年）と第 108 回オリンピック競技会（前 348 年）でも、戦車競走で勝利をおさめ、金貨を発行した。表面に月桂樹の冠をつけた **Apollon** の頭部、裏面に 2 頭立て戦車と御者が描かれている。支配者はオリンピック競技会での勝利を記念した貨幣を鑄造したが、その意図は自身の勝利を永遠化することにあつた。勝利を意味する葉冠、しゅろ、そして神々が描かれており、明らかに自身の勝利を意味している。実際の葉冠やしゅろは、永遠のものではないが、それを盛り込んだ記念の貨幣は永遠化できると考えたのである。

資料3 古代の競技施設（スタディオン、ギムナシオン、パライストラ）

競技が古代に行われた競技場、すなわちスタディオンで開催することは、ギリシャ人にとって、極めて意味のあることであったと言える。

オリンピックは神に捧げられた神聖なる競技であり、それは古代の競技場も聖地であったからである。

この点について、以下に説明を加えておきたい。

1. スタディオン（ΣΤΑΔΙΟΝ : stadion）

「スタディオン」には古代ギリシャ語では a.距離の単位、b.短距離の競走、c.競走を行う競技場、d.平坦な開けた場所などの意味に使われていた。a の距離の単位としてのスタディオンは、古代人の 600feet の長さであった。この意味では日常会話の中にも使われており、例えば、「Euripides（アテネの悲劇詩人）よりも 1 スタディオンもおしゃべりな女」などという表現が伝えられている¹⁷⁵。

実際の 600feet の長さを、誰が一番速く走れるのかということを競ったのが、「スタディオン走（stadiodromos）」であった。競走にスタディオンの名称を用いるようになったのは、知られている限りでは、前6世紀中頃に作られたパンアテナイア競技祭の賞品であったアンフォーラに刻まれた一文が最初である。そこには「成人のスタディオン走の」賞品である旨が記されている¹⁷⁶。前5世紀になると Bacchylides や Pindaros などの詩人の作品には、スタディオン走や競技場として stadion の語が使われるようになっている。またこの頃には、Herodotos や Thucydides らの歴史家たちも距離の単位としてスタディオンを使っており、Herodotos は、1 stadion = 6 plethra = 600feet であると説明している¹⁷⁷。いずれにしても、スタディオンという語が、定着したのは前6世紀以降と言うことになる。

競技場としてのスタディオンは競走を中心とする競技の祭典の行われた場所であり、それ自体が神聖なものとして当初認識されていた。初期のものは、長方形をしており、何の設備もついていない素朴なものであった。600feet と

¹⁷⁵ 古川晴風,ギリシャ語辞典,大学書林,1989,p.1101

¹⁷⁶ Romano, D.G. (1983) The Ancient Stadium. The Ancient World 7, Nos.1&2,p9

¹⁷⁷ Herodotos, 2.149.

いう走路の長さは都市によって異なり、オリンピアのスタディオンでは 192.27 m、デルフィでは 177.35m、エピダウロス 181.30m、アテネ 184.30m、デロス 167.00m、プリエーネ 191.39mなどであった。この距離の相違は、古代においても種々論争され、オリンピアのスタディオンの走路が長いのは、英雄 Herakles の足で計測したためと考えられたのであった。

1980 年代の研究によれば、走路の長さの相違は、それぞれの主神の神殿の長さを基準にして計測されているためによるとの報告があり、注目される¹⁷⁸。つまり、オリンピアでは、1 スタディオンの距離は Zeus の神殿の基台の長さの 3.0 倍に当たるのである。同じオリンピアのスタディオンにて、女性だけの競走がオリンピアの祭典と時期をずらして行われており、その際に走った距離は男性のスタディオン走の 6 分の 5 の長さであった。この女性だけの競技祭はヘライア祭と呼ばれていたが、この場合の 1 スタディオンの距離は、オリンピアの Hera の神殿の基台のやはり 3.0 倍の長さに相当するのである。神殿の長さを計測した足で、1 スタディオンの距離を決定していたことを強く示唆するものである。また、ハリエイスで行われた祭典では、1 スタディオンの距離は主神 Apollon 神殿の基台の長計の 6.0 倍に相当するのである。ギリシャ時代初期における競技と祭祀の関連を考え合わせると、スタディオンの走路と神殿の間に何らかの関連があるのもうなずけよう。

元来、競技と祭祀は極めて密接な関係を保っていた。Philostratos(3 世紀)によれば、神殿に犠牲獣が用意されてからスタディオン走の競技が始まり、そこでの勝者が祭壇に灯をともしたと述べている¹⁷⁹。誰が速く祭壇に駆け付けられるのかということ競ったのがスタディオンで行われた競技であったという事になる。このことに関連して、近年の人類学の研究では、ギリシャ競技そのものが、本来は神に捧げられる供犠者を決定するための機能をもっていたと報告されている¹⁸⁰。つまり、供犠には最高の物、聖に近いものが献上されるのであり、その意味からすると、スタディオンにて展開された競技の勝者は、身体的に最も優れたものであり、神に捧げられた者という見解が成り立つのである。

初期におけるスタディオンと祭祀との関連は、オリンピアにおけるスタディ

¹⁷⁸ Romano, D.G. (1983) *ibid.*, pp.12-14.

¹⁷⁹ Philostratos, *ΠΕΡΙ ΓΥΜΝΑΣΤΙΚΗΣ*. 5.

¹⁸⁰ Sansone, D.(1988) *Greek Athletics and the Genesis of Sports*. University of California, pp.75-130.

オンの地理的な位置にも反映されている。と言うのは、オリンピアのスタディオンは前 6 世紀後半と前 340 年頃に大きく改修されているが、2 回目の改修工事までは、聖域の部分に一部入り込んでいたのであった。それがヘレニズム時代になると聖域から完全に外側に位置するようになったのである。一方、イストミアのスタディオンも同様に、前 6 世紀半ばに建てられた初期のものは聖域の中、それも主神 Poseidon の神殿からわずか 20m の所に位置していたが、前 5 世紀に建てられたスタディオンは、聖域のはるか外に位置している。これらのことから、初期のスタディオンに関しては、かなり祭祀と密接な関係をもっていたが、徐々にその祭祀的な意味が希薄化していったとすることができよう。

ギリシャ時代のスタディオンの成立の典型をオリンピアに見いだすことができる。前 8 世紀の初期に作られたオリンピアの走路(dromos)は、前 6 世紀の中頃に走路の北側の丘の斜面に手が加えられ、南側にも低い堤が築かれ、見物しやすいように改修されたのであった。こうして前 6 世紀には、走路と観衆が競技を見物する堤を持ったスタディオンが形成されたのであった。

・ヘレニズム時代のスタディオン-給水設備とスタート装置の設置-

前 5 世紀に、オリンピアのスタディオンに、より大きな整然とした観衆のための堤が築かれた。そして周囲に井戸が掘られたのであった。この井戸は、近年の発掘調査の成果によれば、前 5 世紀初期には、全体のかかなりの数の井戸が掘られていることがわかっている¹⁸¹。オリンピアの祭典が催されたのは真夏であったので、全ギリシャ的祭典の名声を得るに従い、水の供給が大事な課題になっていたことがうかがわれる。さらに前 4 世紀には、走路が再び改修され、スタートラインとゴールラインを示す石板がその両端に置かれる一方で、水を流す水路も周囲に取り付けられた。

給水設備については、エピダウロスとネメアとオリンピアのスタディオンにその跡を見ることができる。ネメアでは、スタディオンの周囲一体には、観衆に水を供給するために、石製の水路が巡らされ、約 30m 間隔に水を飲むための石盤が備え付けられている。この水路は水が流れるよう、わずかに傾斜しているのである。オリンピアのスタディオンにも同様の水路が備え付けられている

¹⁸¹ Mallwitz, A. (1988) *Cults and Competition Location at Olympia. The Archaeology Of the Olympics.* University of Wisconsin, pp.79-109.

スタディオンの北側から発掘された井戸の数は、前 7 世紀のものは僅か 3 カ所であるが、前 5 世紀前半のものは 21、前 5 世紀後半のものは 11 カ所である。

が、水路に 6 分の 1 スタディオン(32.045m)ごとに印がつけられており、円盤投げや槍投げなどの競技の際に用いられたものと思われる。

スタート装置については、ヘレニズム時代に一様に 45～50 cm 前後の石板が備え付けられている。スタート装置はたいてい、走路の両端に設置されている。なぜならば、ギリシャの競走はスタディオンの片道を走るスタディオン走のほかに、スタディオンを往復するディアウロス走、さらに数往復するドリコス走などの種類があり、決勝を神殿の側になるように配慮していたからであった。石板には、前後に 2 本の溝が掘られており、スタートの際に両足を溝にかけて行ったものと思われる。

イストミアのスタディオンには、スタートの合図をするために用いられたヒュスプレクス(husplex)と呼ばれた細い綱の跡を認めることができる。このスタート装置は、前 4 世紀の初めから前 146 年のローマ人によってスタディオンが破壊されるまで使用されていたものである。スタート装置はスタートラインを底辺とする二等辺三角形をしていた。三角形の頂点に深さ 1 m、直径 0.53m の丸い穴があり、そこに審判が立っていた。スタートラインには、コースを分けるための垂直棒が立てられ、それぞれの垂直棒から 1 本の細い溝が走り、その全部が審判の穴で一つになり、青銅の止め金で止められていた。垂直棒には横木が備え付けられ、競技者はその後ろに立った。横木には紐が繋がれていて、この紐は垂直棒を伝って下へのびて止め金を通り、審判のもとへ溝に沿ってのびていた。スタートの合図をする審判は、それらの紐をすべて一緒に両手に持っていた。彼がそれらの紐を引くと横木がすばやく下に落ち、競技者たちが一斉にスタートしたのであった。これらは、いかにしたら公平なスタートを切れるのかということ考えた軌跡と言えるであろう。

・ローマ時代における競技場 –観客席の整備–

ローマ時代の典型的なスタディオンの姿は、デルフィ（古代名デルポイ）に見いだすことができる。ここのスタディオンはギリシャのスタディオンの中では最も保存状態が良い。このスタディオンは前 5 世紀に建てられ、その後ローマ時代の後 2 世紀に、Herodes Attikos により、大幅に改修され、観客席が石で作られたのであった。その座席の数は、7000 席であり、貴賓席も設けられた。ギリシャの文化に憧憬を抱いた Herodes Attikos は、アテネのパンアテナイア祭の競技場の観客席も大理石に改修し、46 列の座席の数は、5 万人分にもなった。またオリンピアでは、彼はニュムパイオン(nymphaion)と呼ばれる大きな水道施設を作り、観客への水の問題を解決したのであった。このようにローマ時代には、富裕な篤志家たちにより、観客へのサービスが施され、競技施

設として充実していったことに特徴があると言える。

しかしその一方で、ローマの別の影響も受けざるを得なかった。その形跡は、多くのスタディオンの一端が半円形(sphendone)に改修されていることに表されている。これは明らかに劇場の要素を取り入れたものだが、これはギリシャのスタディオンを、違った型の施設であるローマの円形劇場(Amphitheater)に近づけることにもなった。円形劇場では、後述するように剣闘士たちによる殺し合いや、人間と野獣との闘いを行わせたのであった。その内容はギリシャの競技とはかけ離れたものであった。しかし、ギリシャ時代につくられた伝統的なスタディオンはローマ時代にはオリンピアでの祭典を除いてほとんど利用されなくなり、円形劇場と同等のものとして活用された例が多い。その形跡はロドス島にあるスタディオンに求めることができる。このスタディオンは前3世紀に建てられたものであるが、南西側の端が半円形、スフェンドーネが作られ、劇場としても使われていたのであった。このスフェンドーネの部分で、ローマ時代に、円形劇場としてスタディオンを用いたのである。前列の観客席の前には、剣闘士たちが試合を行ったアリーナと観客席との境を示す壁が作られている。このような形でギリシャのスタディオンがローマ時代に使用されていった経過を見ると、そこにギリシャ人とローマ人との競技観の明らかな相違点を、競技施設の遺跡から引き出すことができる。つまり、前者は自らが競技を行うことに意義を見いだしていたが、後者はそれを見るものとして認識していたということである。

このように、スタディオンは、ギリシャ人にとっても重要な競技施設であったことがわかる。このような歴史のあるスタディオンで、オリンピア競技祭を行うことは、古代オリンピア競技祭の復興の姿を印象づけるものになるであろうことは想像に難くない。

2. ギムナシオン (ΓΥΜΝΑΣΙΟΝ : gymnasion) と パライストラ (ΠΑΛΛΗΣΤΡΑ : palaestra)

古代のギリシャ人は、様々な競技スポーツの練習を、当初は何の建物も備わっていない区画された広場で行っていた。それがやがて広場の周囲に、浴場、マッサージ室、脱衣室、などが備えられていき、それらをギムナシオンまたはパライストラと呼ぶようになった。パライストラとギムナシオンの区別については、これまで次のように考えられていた。つまり、ギムナシオンは公共のもので、年配者が主に練習を行う総合的なスポーツ・グラウンドであるのに対して、パライストラは私的なもので、少年達の身体を訓練するためのものであり、主にレスリングの練習を行う練習場であったなどというものである。しかしこ

これらの区分は時代によってもかなり相違があり、ギリシャ人自身がどれくらいの相違点を両者に見いだしていたのかということも疑問視される。全時代を通じて両者の決定的な相違は、屋根付きの走路(xystos)をもっていたかどうかであった。パライストラはレスリングやボクシングなどの練習を行った広場であったが、ギムナシオンはパライストラにクシストスという屋根付きの走路をもった競技の練習場であったと規定するのが、競技施設の遺跡から最も妥当であると思われる。ここではそのような事を基本として両者の変遷を追っていきたい。

ギムナシオン(gymnasion)は、gymnos(裸体の)と関連している。競技の場で裸体になる風習が定着したのは前6世紀の頃からであり、ギムナシオンも前6世紀の半ばより各都市に建設されるようになった。ギムナシオンの初期においてはスタディオンと同様、宗教との結び付きは強く、ギムナシオンは例外なく、ある特定の神、またはその地方の英雄の聖域に隣接していた。

ギリシャの都市はすべてギムナシオンを有していた。2世紀の旅行家 Pausanias が述べているように、ギムナシオンはアゴラと同様、それなしには都市が不完全になってしまう大事な構成要素であった¹⁸²。大きな都市はパライストラのほかに、二つ以上のギムナシオンを有していた。例えばアテネは、アカデメイア、リュケイオン、キノサルゴスという古くからあるギムナシオンのほかに、後に四つか五つのギムナシオンを建設している。この頃のギムナシオンの跡を見ることは残念ながら不可能である。しかし Pausanias は、エリスにある古いギムナシオンについて詳細に記している。それによれば、そのギムナシオンは競技者がオリンピアに行く前に練習を行った場所で、走路にはスズカケの木が生い茂っていた。レスリングの練習を行った広場や、Herakles やその他の神々の祭壇、Akileus の記念碑も存在していた。また「四角形広場」とよばれるパライストラでは、レスリングの練習が行われ、またもう一つの青年用のギムナシオンでは、しばしば演説や朗読にも使われていたのであった¹⁸³。

アテネのアカデメイアはギムナシオンの中で最も有名なものであり、市の北西門から1キロほど離れた所に前6世紀に建てられたものであった。その名は不詳の英雄 Akademos に由来していた。Athena 女神もここで祀られ、その聖域には12本の聖なるオリーブの樹があった。Zeus や Hermes などの祭壇もあった。Aristophanes はその作品『雲』の中で、木立に囲まれたアカデメイ

¹⁸² Pausanias, 'ΕΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ.10.4.1

¹⁸³ Pausanias, *ibid.*,10.23.1

アの有り様を描いている¹⁸⁴。そこでは、オリーブの木の下で走っている様が述べられている。Plutarchosによれば、前5世紀 Kimon が僭主の時、水の供給を図り、走路を作り、樹木を植え、また壁を改修したということである¹⁸⁵。また Xenophon は、ギムナシオンのかなり細かい描写を残している¹⁸⁶。それらの史料から判断すると、初期のギムナシオンはかなり大きなもので、祭壇や露天の広場、走るための基本的な施設があり、囲いとなる壁が周囲に巡らされていた事がわかる。

さらにギムナシオンの重要な役割として軍事的な要素もあげられるであろう。アテネのリュケイオンは、市の東方にあるギムナシオンであったが、騎兵の演習や、軍隊の召集にも使われていた。アカデメイアも軍事的に使われていたので、公共のギムナシオンは、青年達を軍事的、身体的に訓練する場としても使われていたといえる。ギリシャはポリスという都市単位の共同体国家であったので、市民たちは自ら防衛者であったのであり、その意味からすれば、ギムナシオンでの訓練は Platon の述べるように、防衛者の教育に当たるのであった¹⁸⁷。Xenophon の作品に登場する Sokrates は、青年に対して、「自己をよい健康状態に保ち、緊急の際に自国に役立つよう準備しておくことは、市民としての義務のひとつである¹⁸⁸」と諭している。この軍事的な必要性のもとにギリシャではギムナシオンが各地に作られていった面も見逃すことはできない。

しかし軍事的な意味以上に、ギリシャ人の生活でギムナシオンの果たした社会的な役割は極めて大きかった。アゴラとともに、人々の集まる場所であり、身体的な訓練の場としてばかりではなく、議論したり、演説を行ったりという、身体文化と精神文化の融合した、生き生きした空間であったと言える。事実 Platon の対話篇に登場する Sokrates も、ギムナシオンやパライストラで青年達と対話する場面が多く登場している¹⁸⁹。

前5世紀の後半から、すなわちアテネとスパルタとのペロポネソス戦争を契機として、アテネをはじめとするギリシャの都市では、青年の身体教育が軽視

¹⁸⁴ Aristophanes, *ΝΕΦΕΛΑΙ*.1005

¹⁸⁵ Plutarchos, *ΚΙΜΟΝ*. 3.8

¹⁸⁶ Xenophon, *ΧΙΠΠΑΡΧΟΣ*. 3

¹⁸⁷ Platon, *ΠΟΛΙΤΕΙΑ*. 403 D

¹⁸⁸ Xenophon, *ΜΕΜΟΡΑΒΙΛΙΑ*. 3.12

¹⁸⁹ Platon, *ΔΥΣΙΣ, ΚΑΡΜΙΔΕΣ, ΕΥΤΙΠΛΟΝ, ΕΥΤΙΔΕΜΟΣ*.

されていった。市民たちの共同体意識の低下の現れであり、かつてのように自国の防衛者としての身体訓練に価値を置かなくなったのである。それにとともに、ギムナシオンやパライストラの機能も変化して行かざるを得なかった。アテネのギムナシオンは哲学者たちの活躍する場になったのである。また **Aristoteles** は、その学派をリュケイオンのギムナシオンに置いたのであった。**Aristophanes** は、ギムナシオンにいる若者がかつてのように身体訓練に励まないことを嘆いているが、明らかにギムナシオンの役割は少しずつ変わりつつあったのである。

前4世紀のヘレニズム時代になると、これらの競技施設はまとまりのある建築物になっていった。運動を行う広場の周囲には、講義室を含んだ部屋が多く建築されたり、浴室や脱衣所が備えられるようになってきた。この頃のパライストラの典型をオリンピアのそれに求めることができる。41m四方の中庭の広場の周囲には、パライストラの出入り口にもなっていた脱衣所、その中庭に面した反対側に談話室、そして水浴室があり、そのほかには、練習の前後にオリーブ油を塗る部屋、オリーブ油の貯蔵庫、競技器具の倉庫などが備えられていた。また中庭にはレスリングの練習に適するように細かい砂で敷き詰められていたのであった。

さてヘレニズム時代の典型的なギムナシオンはデルフィに求めることができる。そこには、長さ 180m、幅 7 mの屋根付きの走路(xystos)とそれに平行した屋根なしの走路 (paradromis)が付設されている。それらの走路のある台地の下には、浴室とパライストラが建てられている。パライストラは 14m四方の小さな広場で、いろいろな部屋に通ずる柱廊に囲まれている。これらの部屋には脱衣室、球戯用の部屋などが備えられていた。ここにある浴室は、よく工夫されていて、上方の台地に埋められた水道管から供給された水は、台地の擁壁に埋められた貯水盤にためられ、11 個の噴水口から流れ出るのであった。

ギムナシオンは、青少年たちがトレーニングを行った学校のようなものであったことから、19世紀のギリシャでは、青少年が集まって体育を行う専門の学校を、ギムナシオンと古代の名称を用いた。**Phokianos** はアテネ市内に中央体育学校を設けたが、それは「**Phokianos** のギムナシオン」と呼ばれた。このギムナシオンで、第四回オリンピア競技祭が行われたのであった。そのほか、多くの地にギムナシオンが建てられ、そこで競技のトレーニングに励んだ者が、オリンピア競技祭に参加したのであった。

資料4 パンアテナイ競技場

この競技場が最初に建造されたのは古代ギリシャ時代のことである。古代のアテネでは毎夏アテネの守護神であるアテナ女神の誕生を祝うパンアテナイアと呼ばれる祭典を行なっていたが、紀元前6世紀の半ばから4年に1度スポーツ競技も取り入れた大規模な大パンアテナイア祭が行なわれるようになった。そこで前4世紀に政治家 **Lykurgos** によって体育競技の会場としてこの競技場が造られた。そこでは戦車競技、競馬、レスリング、ボクシング、槍投げ、円盤投げ、競走、跳躍、その他に松明リレーや行列、詩の吟唱なども行なわれ、競技の優勝者にはオリーブ油の入った大瓶（おおがめ）が与えられた。

その後、2世紀にアテネの大富豪 **Herodes Atticus** によって競技場は修復され、アテネ郊外のペンデリ山から切り出された良質の白大理石を使った約5万人収容の総大理石造りの観客席がつけられた。当時の旅行家 **Pausanias** らはその規模の大きさに驚嘆し、その時代の競技場の中でもっとも美しいものの一つと述べている。ローマ時代には剣闘競技といった娯楽的な見せ物を行なうのに使われるようになったが、やがてアテネの衰退とともに競技場は使われなくなり、大理石は持ち去られ、いつしか土中に埋もれた。

再びこの競技場が姿を表すことになったのは、それから10数世紀を経た近代に入ってからのことでドイツの建築家 **Ziller** の発掘（1869～1870年）によってであった。彼の復原した **Herodes** の競技場の図をもとに復原作業はすすめられたが、大理石の観客席を全て復原するまでには至らなかった。それに貢献したのが **Averof** というエジプトのアレクサンドリアに住むギリシャ人である。彼は1896年の記念すべき第1回近代国際オリンピック競技会がアテネで開催される際に巨額の資金を寄付した。しかし修復は間に合わず、4列目までが大理石、残りは木の席のままオリンピックは行なわれた。全てが大理石に戻ったのは1906年の中間オリンピックの時であった。

このようにパンアテナイア競技場は、ギリシャ人にとり、古代の競技場の象徴的な競技場であった。従って、オスマントルコからの独立以来、パンアテナイア競技場でギリシャのオリンピア競技祭を行おうという要望は、**Zappas** はじめ、多くの考古学者や歴史学者などから出されていたのであった。

資料5 ギリシャ競技の衰退とアマチュアリズム

一般に、古代オリンピア競技祭の歴史は、第一回競技会が始められた前 776 年から、文献上確認される最後の競技会、すなわち後 393 年に行われた第 293 回オリンピック競技会までの 1170 年間をその範囲としている。そのうち、競技が健全な形で行われた期間は、前 5 世紀の半ばまでのことで、その後競技が専門化していった後は、競技が墮落し衰退していった過程、と位置づける研究者が 20 世紀前半までは多かった。

この論を決定づけた代表的な研究者がイギリスの E.N.Gardiner (1864~1930 年) である。日本においても、Gardiner は高く評価されている。Gardiner の名著と言われる “*Athletics of the ancient world*” を翻訳した岸野は、その序文で、「Gardiner は古典古代（ギリシャ・ローマ）の競技と祭典競技の領域では第一級の研究者である。¹⁹⁰」とし彼の研究成果はギリシャ競技の歴史研究では進んでいたドイツ圏の学者も注目せざるを得なかった、と述べている。

しかしながら、近年のギリシャ史研究によれば、ギリシャ競技の衰退に関する Gardiner の説に疑問が呈されている。Gardiner はギリシャ競技の衰退について次のように述べている。

「競技の人気そのものが破滅の原因となった。行き過ぎは Nemesis (極端さを憎む天罰の女神) を産み落とす。競技の行き過ぎの Nemesis (天罰) がプロ化であり、それは真の意味のスポーツすべての死滅を意味する。¹⁹¹」

この考えは Gardiner の弟子である H.A.Harris に受け継がれていく。Harris は「金銭が家の中に入ると、スポーツは窓から逃げ出して行く¹⁹²」と述べ、古代ギリシャのアマチュアリズムの崩壊が、競技スポーツを衰退させた結論を下した。この考えは広く支持されたのであった。Gardiner は競技の専門化、プロ化こそがギリシャ競技を衰退させた原因であると主張したが、彼の説に従えば、前 5 世紀後半から後 4 世紀末までのギリシャ競技は墮落と衰退の一途を辿っていたことになり、1180 年間のうちの 850 年間は、ほとんど見る

¹⁹⁰ Gardiner, E.N. 著, 岸野雄三訳 (1981) ギリシアの運動競技. プレスギムナスティカ, 「訳者序文と解説」

¹⁹¹ Gardiner, E.N (1930) *Athletics of the Ancient World*. Clarendon Press: Oxford, p.99.

¹⁹² Harris, H.A.(1972) *Sport in Greece and Rome*. Thames and Hudson: London, p.40.

べきものはないことになる。しかし、古代オリンピック競技祭は一度も欠かされる事なく続けられていたのであり、850年間という長い期間を、競技の墮落と衰退の期間ととらえるのは、極めて不自然である。Gardiner の見解には、古今に渡って、プロ化はスポーツにとって害悪であるとの認識が根底にあり、その視点でギリシャ競技を分析したと思われる。彼がプロ化をどのようにとらえていたか、ということは彼の文献の随所に見られる。

「かつてイギリスの国民的スポーツであったレスリングは、プロ化によってその生命を絶たれてしまった。アマチュアのボクシングは歴史が浅く、陸海軍、大学、パブリックスクールで奨励されたために存立しえたのであるが、それもプロボクシングによって影が薄れ、一種の大衆芸人として稼ぐことのできる莫大な金額のために、アマチュアは次々にプロに転向する気になっている。¹⁹³」

この点からすると、Gardiner の活躍した 19 世紀から 20 世紀初めという時代的な制約の強い影響を受けながら、彼のギリシャ研究がなされたと思われるのである。ここでは、このような視点に立ち、Gardiner に代表されるギリシャ競技の衰退説について考察する。

古典古代に対する近代の偏見

1970 年代半ば以降、古代のギリシャ競技に関するこれまでの研究が、一定の偏見のもとでなされていることを指摘する研究者が現れた。その先駆的な研究者が H.W. Pleket である。彼はこれまでの古典学の問題点として次の事をあげている¹⁹⁴。

- 1) 古典古代の競技スポーツに対する過度な崇拜
- 2) それによって引き起こされる古典学者の偏見

具体的には、アマチュアとは富裕なエリートの出で、スポーツを余暇活動ととらえ、与えられる賞に関心をもたず、スポーツをスポーツのためだけに行い、勝利のためだけに勝利を得ようとする競技者を指し、プロの競技者は、低い階層の出身で、賞金のみに関心を置き、過度に専門化した者を指す、とこれまでの研究では認識されて来たが、これは明らかに、近代的な偏見を古代に挿入したものの、ということである。そのほかの近代的視点による偏見として、貴族が

¹⁹³ Gardiner, E.N. (1930) *ibid.*, p.105.

¹⁹⁴ Pleket, H.W. (1976) "Games, Prizes, Athletes and Ideology." *Stadion* 1, p.51.

レスリングやボクシングなどの競技から徐々に離れて行ったのは、競技が専門化して行くに連れて野蛮になったため、としていることもあげられる。これはフランスで展開された説であるが、Gardiner も同様の事を述べている。すなわち教養ある貴族の競技者たちが、時代とともに競技から遠ざかって行ったのは、専門的な競技者の出現によるためであり、彼らが競技を独占したために、貴族はおろか、アマチュアの市民までもが競技に参加することができずに、観戦する側に回った、とする考えである。これは明らかに階層的な差異を前提として展開された解釈である。

以上のような近代的な偏見が古代ギリシャのスポーツ史に取り込まれた過程を明らかにするには、Gardiner らの生きた時代背景について、まず考察されなければならない。

E.Norman Gardiner は、1864年1月16日にバッキンガムに住む聖職者 Edward Imber Gardiner の一人息子として生まれた¹⁹⁵。父親は1864年にオックスフォードのマグダレン校で文学修士を取得し、1882年には、ラッドウェル区の教区司祭になった。教区司祭とは英国国教会の教区を受け持ち、教会の収入を受領する役割を担うものであり、高い身分であった。Norman Gardiner は奨学金を得て、マルボローのパブリックスクールに通い、その後オックスフォードのキリスト教学校に特待生として進学した。そして彼は1890年までに文学修士号を古典学部にて取得した。その後1925年には文学博士号を得ている。また Gardiner は学生時代に、ラグビーとボートの経験を積んでいる。

彼は1902年にギリシャ研究では権威のある"Society for the Promotion of Hellenic Studies (ギリシャ研究促進協会)"に加盟し、1903年にその協会の機関紙"Journal of Hellenic Study"に初めて寄稿している。彼は1906年と、1930年から1931年まで当協会の理事になっている。

1900年頃より Gardiner は、古代競技史に関する研究に本格的に着手した。彼は"Journal of Hellenic Study"に競技に関する論文を数編、載せている。彼はそれらの論文や著書の中で、Homeros 時代の競技風景を理想的な競技として展開した。Homeros の叙事詩で描かれている競技は、貴族が主役であり、組織的な系統性を持たず、即興的な競技会を開催したのであるが、Gardiner は、

¹⁹⁵ Kyle, D.G. (1991) E.Norman Gardiner :Historian of ancient sport . The International Journal of History of Sport. 8-1, pp.29-32.

即興で行う貴族的な競技を理想的なスポーツと認識していたのである¹⁹⁶。そして Gardiner によれば、オリンピック競技会については、前 500 から前 400 年までが、生まれの良い市民が中心になって競技会を実質的に担った理想的な時代であったとし、その後の前 440 年から前 338 年までが専門化した時代、それ以降 393 年までが競技の衰退の期間であると区分した。

前 440 年の専門化の時代から、大きくは競技の衰退が始まったとしているが、その根拠として、当時の哲学者や文学者たちが、競技に対する批判を行うようになった事、及びペロポネソス戦争によって、汎ヘレニズムの精神がギリシャ社会から消失していった事をあげている¹⁹⁷。しかし Gardiner の競技の衰退の判断基準そのものが、実は近代のイギリスの貴族の価値基準の影響を受けているのである。彼にとっての善なる価値は、自然、アマチュア、貴族的、調和であり、悪なる価値は、贅沢、過渡、職業的、などになる。それ故、専門化した競技者の出現は、競技の衰退につながってしまうのである。ところがこのギリシャ競技の衰退は 800 年間もかけて行われたことになってしまう。その間にスタディオンやギムナシオンなどの競技施設は整備されたし、何よりも多くの観客を集めて競技会が開催されている。Gardiner の価値基準からでは、このような観客数の増加、競技施設の整備、競技技術やコーチ技術の発達などが無視されてしまう点に矛盾があると言える。

Gardiner に近代的な偏見を生じさせた理由について、Kyle¹⁹⁸及び Young¹⁹⁹の研究によれば、19 世紀末から 20 世紀初めまでのイギリスのスポーツ界に大きな影響を与えていた 3 つの理念があげられる。すなわち”アスレティズム”、”アマチュアリズム”、ヴィクトリア時代固有の”ヘレニズム”の理念が、Gardiner をして、古典古代の競技に近代的な視点を投人させてしまったと主張している。以下にそれらの見解を筆者の研究成果を交えて展開したい。

教育とスポーツに関連するアスレティズムの考えは、競技会を通して、男らしさや美徳を磨くことができるということであり、Mangan によれば、1860 年から 1940 年までの間、イギリスのパブリックスクールでは、このアスレティズムの考えの影響を受けていたと述べている。

¹⁹⁶ Gardiner, E.N. *ibid.*, pp.18-27.

¹⁹⁷ Gardiner, E.N. *ibid.*, pp.101-105.

¹⁹⁸ Kyle, D.G. *ibid.*, pp.28-55.

¹⁹⁹ Young, D.C. (1984) *The Olympic Myth of Greek Amateur Athletics*. Chicago, pp.45-88.

「身体訓練は、身体的・道徳的勇氣、忠誠と協同、正々堂々と潔さ、命令と服従という、有効な教育の目的を教え込む手段として、かなり強制的に導人されたのであった。²⁰⁰」

アスレティシズムの考えは、帝国主義のもとで大学からパブリックスクールに広がった。Gardiner は、マルボローのパブリックスクールに通ったが、Mangan によれば、マルボローはアスレティシズムの発展に重要な役割を果たしたパブリックスクールの一つであった。1843年に主に聖職者の師弟たちのために建てられたパブリックスクールだが、1852年から1858年までマルボローの校長を務めた G.L. Cotton は、競技会 (games) を導人し、生徒たちを積極的にグラウンドで活動させ、競技会の道徳的、身体的な価値を生徒に教え諭したのであった。Gardiner の時代に校長であった G.C. Bell(1876-1903年在任) は、競技会には批判的な意見を持った人物であったが、生徒たちの競技会に対する姿勢は十分に情熱的であったと報告されている²⁰¹。

マルボローのパブリックスクールを卒業した後、Gardiner はアスレティシズムの影響をもったオックスフォード大学に通い、後に医者 of 師弟を教育するために新しく建てられたエプソン校で教鞭を執ったとき、アスレティシズムを生徒に教えたと推測される。というのは、彼を雇った校長 Pearse Smith (1889~1914年在任) が古典主義者であり、Gardiner のラグビーの経験も評価して教師に迎えていたからである。実際 Gardiner は、ラグビーの教師 (schoolmaster) としても活躍した。このことは、Mangan の言うパブリックスクールの”循環の因果律 (Process of circular causality)”で説明され得る。パブリックスクールで優秀なプレーヤーは、大学でも活躍して卒業すると、パブリックスクールに戻って、次の世代に教師として指導するというものである。パブリックスクール時代のスポーツマンが大学のスポーツマンになり、そしてスポーツマン教師としてパブリックスクールに戻るのであった²⁰²。

Gardiner 自身がアスレティシズムの考えの影響を受けたであろうことは明らかで、Gardiner は「友好的なライバル」や「努力」そして古典期のギリシヤやイギリスの学校における筋肉的美徳を称賛している。これらはアスレティ

²⁰⁰ Mangan, J.A.(1981) *Athleticism and the Victorian and Edwardian public school.*
Cambridge University Press : Cambridge, p.9.

²⁰¹ Mangan, J.A. *ibid.*, pp.22-28,88,208.

²⁰² Mangan, J.A. *ibid.*, p.126.

シズムの考えに含まれるものであり、古代ギリシャの古典期にその歴史的な根拠を求めたと言える。カロカガティア（善と美の徳）を備えた人間の形成が、古代の競技教育の理想であったとの Gardiner の解釈は、アスレティシズムの考えと符合する。そして Gardiner は、スポーツは教育的であるべきだと主張するが、行き過ぎた準備や訓練された専門家には反対であった。彼は体育から競技を切り離すことに反対しているが、それは古代ギリシャにおける競技の教育が、近代における科学的な体育と同様の価値を持つという認識に基づいていたからである。

5-2.アマチュアリズムの影響

アマチュアリズムと Gardiner の説の関係については Young D.により詳細にとりあげられた。

Gardiner は初期のギリシャの競技者は貴族的かつ理想的で、彼らはすべてアマチュアの競技者であったとしている。しかし既に筆者が明らかにしているように²⁰³、金銭的な報酬とは無関係という意味において、古代の競技者がその全歴史を通して、アマチュアであったという史料は存在しないのである。この点において Gardiner に直接影響を与えた人物として、Young と Kyle はイギリスの古典学者 J.P. Mahaffy と Percy Gardner をあげている。この二人は共に古代ギリシャの競技者をアマチュアの競技者と見なしたのである。

・Mahaffy のアマチュアリズム

Mahaffy は 1879 年の論文で、既にギリシャの競技者はアマチュアであったと規定している。

「競技(athletic)という語は、ギリシャ人の古くからある体育(gymnastic)が、プロ化の方向で変質してしまったものを、蔑んで言うものである。そしてその体育は、公衆の面前で行う競技会(games)を伴うが、その試合にはアマチュアの演技が披露されるのであり、このことは何世紀もの間ギリシャの栄光と誇りであった。こうして競技(athletic)は、“賞のために走る”ことを軽蔑したギリシャ人たちの間で行われる低俗なものになったのである。²⁰⁴」

²⁰³ 真田 久 (1987) 古代ギリシャの知識人による競技批判に関する研究. 福岡教育大学紀要 36, pp. 127-134.

²⁰⁴ Mahaffy, J.(1879) Old Greek Athletics. Macmillan's Magazine 36, p.61.

この Mahaffy の説明は事実と反している。Mahaffy は、“競技(athletic)”という語は“体育(gymnastic)”から変質したものと展開しているが、これは明らかに誤りである。実際には“gymnastic”にあたる語よりも“athletic”に相当するギリシャ語の方が古くから使われている²⁰⁵。また「競技(athletic)は、“賞のために走る”ことを軽蔑したギリシャ人の間で行われる低俗なものになった」と述べているが、ギリシャ時代の人々の文献に、“賞のために走る”との理由で競技者を非難した文章は存在しない。これらはいずれも Mahaffy 自身の個人的な見解を述べたものに過ぎない。Mahaffy のより重大な誤りは、ギリシャの競技者がアマチュアであったと断定してしまった事である。

「長くつらい努力の唯一の報酬が、セロリ、もみや月桂樹の栄誉であったことは、ギリシャ人の名誉に帰すものである...中略...あらゆる歴史上の競技会にその他の賞は出て来ないし、当然の結果として、物質的な賞を廃止したのであろう²⁰⁶」

物質的な賞の競技者への授受を否定したというギリシャ時代の競技会は歴史上存在しない。確かにオリンピック競技会などの四大競技祭では野生の葉冠が勝者に与えられただけであったが、それらの競技者も、故郷に帰れば都市から多大な報酬を得ていたのであり、それ以外の地方の競技会では、勝者への賞は物質的な価値を有するものであった。そして古代ギリシャでは、勝者への賞を制限したり、禁止したりした例は存在しないのである。にもかかわらず Mahaffy はギリシャの競技者をアマチュアの競技者と結論したのであった。

そしてギリシャのアマチュア競技者を、当時のイギリスのスポーツマンと対比し、後者の方が優れているとしたのである。

「きつねの猟や鮭釣り、雷鳥狩りなどを行うジェントルマンたちは、ギリシャの(専門)競技者よりはるかに利点がある、と言うのはギリシャ人が特定の種目の特別な練習により、職業競技者に身を落とす可能性があるからである。運動には次のような危険がつきものである、すなわち、勝利の報酬、大衆の喝采により、より高い探求心をなおざりにさせる職業的考えによって卑しくなり、スポーツが本来備わっている喜びを失ってしまうのである²⁰⁷。」

・ Gardner のアマチュアリズム

²⁰⁵ Liddle and Scott(1982) Greek-English Lexicon. Oxford,pp.32,362.

²⁰⁶ Mahaffy, J. ibid.,p.62.

²⁰⁷ Mahaffy, J.,ibid.,p.63.

この Mahaffy の影響を受けながらも、ギリシャのアマチュアリズムとイギリスのスポーツマンとを同一線上に置いたのが Gardner Percy である。彼はギリシャ人の技術は、イギリスのアマチュアのスポーツマンの技術と同列であるとしたが、その理由は、古代ギリシャの競技者は、ヴィクトリア時代のイギリスのアマチュアスポーツマンそのものであるとの見解による。二つの点で Mahaffy と Gardner は完全に一致する。

第一に、ヴィクトリア時代の貴族的価値観は、どの世界の価値観よりも優れていると考えていたのであり、その意味からすれば、古代ギリシャの競技者の価値観よりも、イギリスのアマチュアスポーツマンの価値観の方が優れていると認識していたことである。

第二に、ギリシャ史の再解釈によりヴィクトリア時代の貴族的価値を確たるものにすることができるということである。こうして Gardner は、Mahaffy の文を引用して、プロ化の考えを批判した。そしてギリシャ競技の衰退は、イギリスの歴史的教訓とされたのである。

「ギリシャの競技スポーツの起こりと滅亡についての章は、短い章で十分である。前途有望なギリシャのすべての制度の最盛期は短かった。成功したものを乱用すれば中庸を越え、競技であろうが他のものであろうが、人々に偉大なものを与えた同じ理由で、衰退と失望をもたらすのである。²⁰⁸」

Gardiner が Gardner の考えの影響を受けたことは、Gardiner の著書が、Gardner に献じられていることから理解される。

「この本は Percy Gardner 教授の援助のもとで作成されたと言うべきである、というのは Gardner は意識していなくても、この作成者であるからである。この課題のわたしの関心は、Gardner の “New Chapters from Greek History” という本の中の、オリンピアについての章を読んで呼び起こされた。私はその本を、オリンピアを訪ねた旅の帰途、アルゴノート号の船上で読んだ。Gardner 教授は草稿と校正の両方を読んで下さり、多くの御教示をいただいた。²⁰⁹」

Gardiner と Gardner は、ギリシャ競技について共通の認識を抱いていた。

²⁰⁸ Gardner, P.(1892) New chapter from Greek history. London,p.266.

²⁰⁹ Gardiner, E.N. (1910) Greek Athletic Sports and Festivals. Macmillan:London, p.11(introduction).

Gardiner はプロ化を Gardner と同様に批判した。

「前 6 世紀における真の弊害は過度の試合であり、それは国家にとってだけでなく、競技者にとっても危険なことであった。試合や賞品が増加するにつれて、スポーツは一種の利益の源泉になっていった。(中略) こうして早くも前 5 世紀には、賞品稼ぎが現れ、彼らは一生の大半をポリスからポリスへ渡り歩き、賞品をかつさらっていった。タソス島出身の Theagenes は、1400 個の賞品を獲得したと言われている。そういう人間にとって、競技はもはやレクレーションではなく、他の仕事にさく時間がほとんどないような一途的な仕事であった。“にせアマチュア”が出現すれば、プロ化もあまり遠いことではない。そうしているうちに、賞品稼ぎを助長した原因自体が一般の者たちのやる気をそいでしまい、彼らはスポーツに、時間とエネルギーを捧げる気持ちもなくなり、試合をすることも無益と思いはじめ、しだいに競技に関する個人的な関心を喪失し、観客としての役割で満足するようになっていった。²¹⁰⁾」

Gardiner によれば、前 8 世紀から前 6 世紀までのアルカイック期こそが、貴族階層の人々によって競技が行われた”真のアマチュア”²¹¹⁾ の時代であった。さらに Gardiner は、貴族階層出身の競技者は、ギリシャの歴史全てを通して、すなわち競技の衰退期においても、よき伝統を保ちながら、“真のアマチュア”として臨んだと述べている。彼はその例としてシュラクサイ出身の競技者 Aratos とメッセネ出身の Gorgos をあげている。

しかしながら、Aratos と Gorgos が、Gardiner の言うアマチュア競技者であったことを立証できる史料は提示されていない。Moretti の「オリンピック勝者目録」によっても、彼らがアマチュアであったことを示す資料は何もない²¹²⁾。

さらにこのような専門化した競技者の出現により、一般の人々が競技から遠ざかり、観客の側に回ったと述べているが、これはあまりに単純化し過ぎている。ポリスの防衛という観点から、競技を行うことは市民の義務だったのであり、競技に関心を示さなくなったのは、ポリスの共同体意識の低下という枠組

²¹⁰⁾ Gardiner, E.N.(1930) Athletics. *ibid.*, pp.100-101.

²¹¹⁾ Gardiner, E.N.(1930) *ibid.*,p.104.

²¹²⁾ Moretti, L.(1957) *Olimpionikai: i vincitori negli antichi agoni olimpici*. Rome, no.573,574.

みの中で考えられなければならないのである²¹³。

以上のことから Gardiner は、当時のアマチュアの理論の正当性を古代ギリシャに作り出したと言える。Gardiner は Gardner に見習った面も否定できない。Gardner は Gardiner の先輩の古典学者であり、オックスフォード大学の考古学教室の教授で、後にケンブリッジ大学の考古学教室の教授になり、*Journal of Hellenic Study* の編集に 1880 年から 1887 年まで携わり、1906 年から 1910 年までギリシャ協会の会長の職に任じられている。Gardiner にとって Gardner は古典学会の権威であり、Gardiner の指導者でもあった。それ故、Gardiner は Gardner のアマチュア思想に容易に共鳴したと思われるのである。もちろん単にアマチュアを信奉する研究者に共鳴したばかりではなく、Gardiner 自身、アマチュアのスポーツマンとしての学生時代の経歴があり、ヨーロッパにおけるアマチュアリズムの始まりとその発展の期間に、彼の生涯が符合している事も大きな要因であったであろう。従って彼は当時のイギリスで起こりつつあったスポーツマンのプロ化の傾向に、強い不満を表明したと思われる。

「プロ化の害については述べるまでもない。フットボールのここ 2 年間の歴史は陰悪である。フットボールクラブを装った株式会社の関心のもとに置かれた、フットボールアソシエーションの専制に反抗しようとする指導的なアマチュアクラブがある一方で、この同様な商業主義の支配から自身を守るために、プロの競技者たちが労働組合を形成しつつある。ラグビーユニオンは、競技会の純粋性を支えるべく勇敢に戦った。(中略)

このような状況の中で、ギリシャ競技の衰退の理由は、教訓に満ちた具体的な実例である²¹⁴。」

Gardiner はフットボールの近代化の過程をプロ化の影響を受けているとして危機感を抱いていたのだったが、その際に古代ギリシャのプロ化の問題を、当時の歴史的教訓に用いようとしたのである。彼のこの言は、彼の立場を適切に物語っていると言える。

5-3. ヴィクトリア時代のヘレニズムの影響

Gardiner に影響を与えたものに、ヴィクトリア時代のヘレニズム観を Kyle

²¹³ 真田 久 (1985) Xenophon “*memolabilia*” と職業競技. 福岡教育大学紀要 34, pp.41-48.

²¹⁴ Gardiner, E.N. (1910) *ibid.*, p.10.

は提示している。この観念は、19世紀における古代ギリシャ研究の知的情熱として広くヨーロッパに見られるものであり、ヴィクトリア時代のイギリスが、その先駆的な役割を果たしたのであった。ヴィクトリア時代の知識人たちは、古代ギリシャを人間的な文明社会であったとして、尊敬を払うようになった。F.M. Turnerによれば、ヴィクトリア時代のギリシャ研究の方法は、あらかじめ規定された結論を導き出そうとした傾向にあり、その視点で史料を選び出して行われた点に特徴があるとしている。

そして「ヴィクトリア時代におけるギリシャの文化的遺産に関する研究は、奨学金や論文の随所に見られる。公平で冷静な批判は、当時にとっては正常なものとは認められなかった²¹⁵」と述べている。ギリシャ研究の学者たちは、古典期の芸術、文学、詩歌や政治の研究を通して、当時の社会に、平和な社会秩序をもたらすであろうと信じたのであった。その意味で、古代ギリシャの優れていた面を当時のイギリスと比較させると共に、過去の誤りを歴史的教訓として認識する傾向にあったと言える。

さて Turner が指摘しているように、Gardiner も当時の他のギリシャ研究の学者と同様、一定の結論に導くために、ギリシャ時代の史料を選択的に用いたと思われる形跡がある。それは前5世紀の後半から前4世紀にかけて活躍した喜劇作家 Aristophanes の次の史料に関するものである。

「(いにしへの教育を施したなら、) お前は花やぐ毎日を体育場で、元気な顔をして過ごすことになるだろう。今時の人間のように、盛場(アゴラ)をうろついて、ひと泣かせの途方もないことを、口にまかせてしゃべりまくることもなく、またつまらない事件に引きこまれて、しつっこい反対弁論のやりとりに、心身を摩りつぶすようなこともなく、むしろアカデメイアの公園でも行って、聖なるオリーブの樹の下で、白盧の冠をかぶって、同年輩の善良な仲間たちと走りっこをしているだろう。²¹⁶」

「どのパライストラ(競技の練習場)も荒れ果ててしまい、人影がない... (中略) ... 競技の時に使う松明を手を持って走る練習をする者など一人もいない。²¹⁷」

²¹⁵ Turner, F. M. (1981) *The Greek heritage in Victorian Britain*. New Haven and London, pp.4-8,16,82,447.

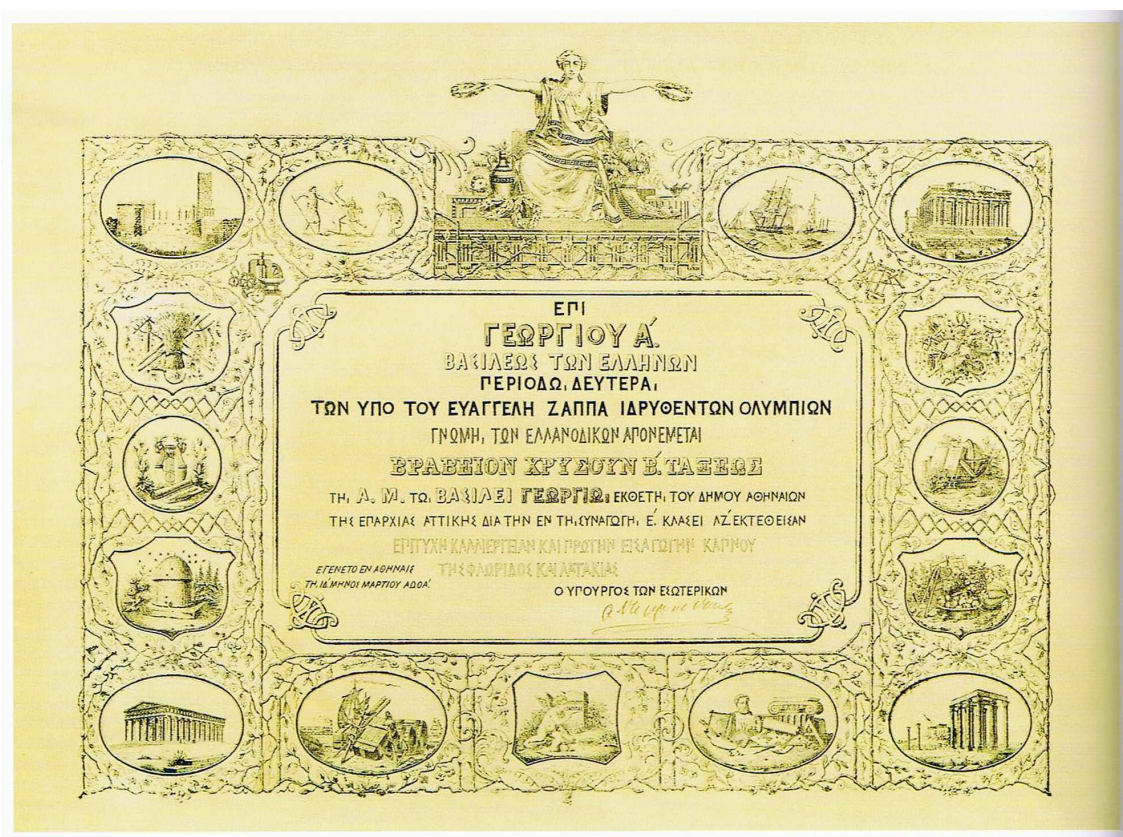
²¹⁶ Aristophanes, *Clouds*. 1002-1008, 高津春繁(1974) *ギリシア喜劇全集第一巻*, 人文書院, pp.263-264.

²¹⁷ Aristophanes, *Frogs*. 1070-1086.

これらの Aristophanes の叙述を根拠にして、Gardiner は競技のプロ化が進んだために、一般市民と専門的な競技者とが区別され、一般市民が競技から締め出されてしまったこと、また競技が金銭まみれになってしまったと論じた。しかしながら Aristophanes の叙述は、教育の荒廃により競技が衰退したと述べてはいるが、競技者に与えられる報酬の是非については言及していないのである。Aristophanes は道徳的退廃と身体的な貧困さについて言及しているのであり、Gardiner はこれらの問題を、プロ化と金銭の授受による弊害と結び付けようとしたのであった。Gardiner は、Aristophanes の叙述を、競技者に対する痛烈な非難の弁と同様の史料として位置付けようとしたのである。そして Aristophanes の叙述から、歴史的教訓を引き出そうとしたと悪われる。Aristophanes の述べる”いにしへの教育”への回顧は、上流階層を中心としたイギリススポーツの斜陽化という Gardiner の時代にも当てはまるものであったと言える。

Gardiner によって唱えられ、ギリシャ競技史に長く通説になっていた、ギリシャ競技の衰退説は、近年の内外の研究成果により、再検討されなければならない。Gardiner の述べる、競技のプロ化による衰退という説は、Gardiner の生きたイギリス社会のスポーツを取り巻く状況に強く影響されて、生じた説だからである。より具体的に言えば、19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて発展した、“アスレティシズム”、“アマチュアリズム”、そしてヴィクトリア時代の固有な“ヘレニズム”などの考えの影響により、Gardiner はギリシャ競技の歴史に神話を作り出し独特の説を展開したのである。

第三章 第二回～第四回オリンピック競技祭の 展開と変容



図版 2 第二回オリンピック競技祭 農作物競技の金メダルに付随した賞状
(Solomou-Prokopiou, A.(2004) Αθήνα 1896. p.34)

第1節 第二回オリンピック競技祭（1870年）

1. 第二回オリンピック競技祭の理念

1-1. Zappas の遺書と第二回オリンピック競技祭開催の王室条例（1869年）

Zappas の財産供与により、1859年に近代ギリシャで第一回オリンピック競技祭（ΟΛΥΜΠΙΑ）がアテネで開催された。この競技会の趣旨は、国家の産業の振興をはかるという事を目指して行われたのであり、産業の部門の競技も取り入れて、運動競技と併せて、行われたのであった。そのことは、第二章で述べたように、オリンピック競技祭に関わる競技規定や、競技種目、そしてオリンピック委員会の構成などに明瞭に現れていた。この点についてギリシャの知識人の中には批判的な者もあったが、産業の競技を導入したことにより、全国の行政体に地方オリンピック委員会が設置され、ギリシャ全土から産業製品の出展と競技者の参加がなされた。しかしながら、運動競技はアテネ市内の公園、ルードビクー公園で行われたため、観客を十分収容できず、一部に混乱を招いたのであった。当時のアテネの新聞やドイツの新聞には、競技場の不備を指摘する記事が掲載された。

「オリンピック委員会は会場の選択について、非難されて当然である。古代の競技場で開催していれば、その丘に2万人分の席を確保できたであろうし、そうすれば人々から不満の声は出なかつただろう。²¹⁸」

またドイツの「ドイツ体育新聞」（Deutsche Turn-Zeitung）でも1859年のオリンピック競技祭について記した際に、競技場の整備が望まれると指摘した。

以上のことから、第一回オリンピック競技祭で示された課題は、第一に競技祭を開催する競技場の整備であったと言える。第二の課題は、Soutsos や Minoidis が指摘したように、Zappas の意志を尊重して、競技会を古代オリンピック競技祭の姿になるべく近づけることであった。それは産業博覧会と運動競技のほかに、芸術や文芸の競技を重視することを意味していた。

しかしながら、Zappas が、財産を献じて行われた1859年のオリンピック競技祭は、決して失敗したものではなかつた。競技場の不備についての不満は多かったが、競技祭そのものについては、古代オリンピック競技祭の復興を称えたものが多く新聞等に見られた。

²¹⁸ ΑΘΗΝΑ, 1859.11.18. Athens.

1860年11月30日、Zappasは遺書を彼の署名入りで作成し、ギリシャのオリンピック委員会に、彼のすべての財産を移譲することを明言した。遺言の内容は、オリンピック委員会の資料の中に掲載されている²¹⁹。Zappasは遺言執行者と受取人にKonstantinos Zappasを指名した。遺言の内容は、4年ごとのオリンピック競技祭のパンアテナイ競技場での継続的開催と、Rangavisによって計画された産業博覧会用の展示ホールを建設する、というものであった²²⁰。

しかしながらオリンピック競技祭は政治的な理由でしばらく開かれることはなかった。ギリシャ国王Othonは1862年に追放されてしまい、1年後にデンマークのGeorge皇太子が、6月6日にギリシャ王への就任を受諾し、10月18日に即位した。若い外国出身の国王によるギリシャ統治は簡単ではなかった。エピロス、テッサリア、マケドニアというトルコ占領下での反乱は失敗に終わったが、1866年にクレタ島で新たな蜂起が始まった。これは1868年の冬に鎮圧されてしまい、ギリシャはパリ条約により、トルコの要求を受け入れなければならなかった²²¹。

ギリシャにとって、戦争の傷はクレタ島だけではなく。イオニア諸島がギリシャに1863年に再統合されたが、これはイギリスによる若いギリシャ国王へのプレゼントであった。

ギリシャの国の人口は、1861年にちょうど100万人だったのが、1870年には150万人にまでなった。貿易と産業面でも大きく発展した。アテネの電話回線が1859年までには国内の他の地域とともに設けられ、ガス灯は1862年までに設置された。1865年の国勢調査では、アテネ市の人口は427,250人であった²²²。

E. Zappasを1863年に襲った重い病気により、彼は1865年に死亡してしまう。晩年の2年間、オリンピック競技祭に彼が関わることはなかった。彼の莫大な遺産をめぐって、遺産の管理者K. Zappasと他の家族との間での法的闘争が起こった。ルーマニア政府もまた、1863年にこれらの遺産に関わること

²¹⁹ Επιτροπή Ολυμπίων (1869) Βασιλ. διάταγματα, εγκύκλιοι, διαθήκη του Ευαγγέλη Ζάππα και κανονισμός των Ολυμπίων δια το 1870. Ethniki Tipographia: Athens. pp.23-27.

²²⁰ Επιτροπή Ολυμπίων (1869). *ibid.*, pp.24-25.

²²¹ Christopoulos, G. and Mbastias, I. ed. (1977) Ιστορία του Ελληνικού έθνους. Vol.13, Ekdotiki Athenon : Athens, pp.233-235.

²²² Christopoulos, G. and Mbastias, I. ed. (1977) *ibid.*, p.250.

を表明した。ブカレストにあるギリシャ領事館は、病気の Zappas を説き伏せて、ギリシャ国籍を断念させ、ルーマニアの国籍のみを認めることにさせた。そしてオリンピック競技会の復興を新聞で訴えた詩人の P. Soutsos もまた、Zappas の死後 3 年後に死没してしまった。

Zappas の死後、彼の遺産を管理するために、1865 年 8 月 11 日付けの「オリンピア・遺産管理委員会」の設立を示す王室の証書が出された²²³。Zappas は 1860 年 11 月 30 日付けで遺言状を書き残していたが、その中で、オリンピア競技祭とそれを実施する競技場と展示ホールの建設のためにすべての財産を充てることを自署入りで明記していて、そのため彼の遺産は、オリンピア委員会に寄贈された。その遺産の適切な管理方法について検討された結果、1865 年 8 月に王室条例「オリンピア競技祭と遺産管理の委員会の設立について」が発布され、内務大臣の管轄下に置かれることになった。これはルーマニアに残る Zappas の遺族やルーマニア政府の遺産管理への要求に対抗して、遺言通りに執行することを考えたものと思われる。

これらの経過について、ギリシャ人のオリンピック研究者の Georgiadis は次のように述べている²²⁴。

「新たな国家の創設から 40 年間のギリシャ人の生活は、自由の夢と 1821 年の革命の理念とはかけ離れたものであったと言える。ギリシャは小国で貧しかったし、過去の偉大なギリシャの建設を阻もうとする、大国の圧力に翻弄される有様であった。このような状況の中で、ギリシャの人々が古典古代に道徳的な活路を見いだしたのは驚くべきことではない。オリンピア競技祭の開催は、日々のギリシャが直面する過酷な現実に対抗する方法でもあった。同時にそれは国の発展を手助けする源泉でもあった。」

ここで示されているように、当時のギリシャ人は、古典古代に活路を見い出そうとしたことが、オリンピア競技祭の開催へつながっていったと Georgiadis は主張する。しかしながら、それよりは Zappas の遺産の確保という課題があったので、遺言通りにオリンピア競技祭を開催する方向に動くことになったことも見過ごしてはならないだろう。

²²³ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1872) Ολύμπια του 1870. Ethniki Tipographia: Athens. p.3.

²²⁴ Georgiadis, K. (2003) Olympic Revival. Ekdotike Athens: Athens, p.37.

・ 第二回オリンピック競技祭開催に関する王室条例

1869年7月22日付けで Georgios 国王は、第二回オリンピック競技祭に関する王室条例を發布した。そこには次のように記されている²²⁵。

「光輝あふれる Evangelis Zappas の提案により、1858年8月19日付けの王室条例で、4年毎に開催するというオリンピック条例が設立された。

1865年8月11日に光輝あふれる Zappas は亡くなったが、1860年11月30日に、遺言が書き残されていて、そこにはオリンピック競技祭を実行することが示されている。

今日の状況はオリンピック競技祭の政策を挙行できるくらいに回復したので、明年の望ましい時期に祭典を行う所存であることを表明する。

この祭典は前回と同様、産業の発展をめざして開催される。内務省の動議により、次の事を命じる。

第二回オリンピック競技祭をアテネにおいて1870年に開催する。

10月の第1日曜日に始まり、第3日曜日に終了する。

内務大臣が政令を公表し実行する。

1869年7月22日 ケルキラにて

Georgios

」

ケルキラにて公表された王室条例に従い、1870年を第二オリンピアドとし、第二回オリンピック競技祭が行われることが発表された。この文書で示されているように、第二回オリンピック競技祭も、前回と同様に産業の発展を目指した祭典であることが、明らかにされていた。ギリシャのオリンピック競技祭は、産業の振興をめざして計画され続けたと言える。

そのことは、第二回オリンピック競技祭の開会式となった1870年11月1日におけるオリンピック・遺産管理委員会副会長、Demetrios Christidis のスピーチにも表れている。

Christidis は、オリンピック競技祭は規則で規定されているように、国を揺るがす異常な状況のもとでは、古代においても、4年ごとに開かれていた訳ではなかったと述べた²²⁶。これはギリシャの国内の政治的な問題と隣国のオスマントルコとの関係のことを意味していた。また同様に、無視できないくらいに大

²²⁵ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1872) ΟΛΥΜΠΙΑ ΤΟΥ 1870. *ibid.*, p.3.

²²⁶ Vonolinis, S.A. and Vonolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν 1. Ekdotis Biomechanikis Epitheoreseos : Athens, p.412.

きな問題になっていたのは、E. Zappas の財産に対するルーマニア政府の主張であった。にもかかわらず、Chrisitidis は、「注目すべきことは、オリンピック競技祭の設立を揺るがすような事態には至っていない」と強調した。その根拠は、「オリンピック競技祭の設立は、ギリシャ人の愛国心から生まれたものであるし、我々の祖先の社会的政治的優秀さを思い起こすことであるからだ²²⁷。」と述べている。

Christidis のスピーチはオリンピック競技祭復興について、新たな局面を示すこととなった。オリンピック競技祭創設当初の目的であった産業の発展という面のみならず、「身体的な活力」、「知性」そして「Muse の崇拝²²⁸」、さらには「優れた社会的援助」という理念が加えられようとしたのであった。そして Christidis は、身体的な競技と知性の論理的トレーニングを通して、社会的な動物である人間の営みの中に、産業をも積極的に組み入れたことで、オリンピック競技祭がより進歩的な段階へと進んだとした²²⁹。

また、Christidis は、1871 年 3 月にもオリンピック競技祭についてスピーチを行い、第二回オリンピック競技祭の産業博覧会と運動競技の成功を祝すとともに、さらに多様な競技を取り入れて、発展していくことを期待した²³⁰。Christidis のスピーチについて、Georgiadis は²³¹、社会の上層階層の人々に広まったスポーツが、ある程度他の分野に影響を及ぼしつつあったことを示唆しているとしているが、それでも、当時の学者は、スポーツを軽視していた、と述べている。しかし Christidis の示した考えは、後の Coubertin の近代国際オリンピック競技会の考えに通じるものがある。それは芸術や文学への尊重ということであり、これらをオリンピック競技会の中に導入しようとしたことである。1912 年から、Coubertin は芸術競技をオリンピック競技の一部として始めた。そこでは、建築、絵画、彫刻、音楽、そして文学の 5 つを「Muse の五種競技」と表現している²³²。Coubertin よりも 40 年前に、ギリシャでは芸術競

²²⁷ *ibid.* p.412.

²²⁸ Muse は芸術や音楽の神であり、芸術や文芸などの文化を尊重することを意味している。

²²⁹ Chrysafis, I.(1930) pp.75-76.

²³⁰ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1871) Λόγος απαγγελθείς υπο του αντιπροέδρου της επι των ολυμπίων και κληροδοτημάτων επιτροπής, Κυριού Δ. Χρήστιδου την 14 Μαρτίου 1871 ημέραν τις λήξεως της Εθνικής Εκθέσεως της Β' Ολυμπιάδος του 1870. Ethniki Tipographia: Athens. pp. 12-13.

²³¹ Georgiadis, K. (2004) *The Revival of the Olympic Games*. *ibid.*,p.39.

²³² Coubertin, P.(1906). *A great marriage*. In Pierre de Coubertin, *Olympism Lausanne*:

技が考えられていたことになる。

Christidis と同様のギリシャ人学者の考えは、アテネ大学で哲学専攻の教授、Philippos Ioannou にもみられる。彼は、ギリシャ国家における知的発展について言及している。Ioannou は、パンアテナイア競技場での審判団の一人として、同僚の Konstantinos Vousakis と Grigorios Papadopoulos らとともに選ばれた。彼らは共に 1870 年のオリンピア競技祭の規定を作成したが、それは、彼らが古代のスポーツの知識に長けていたからであった。

ところで Ioannou は、次の疑問を呈している。

「公開の競技会を開催する理由は何だろうか²³³」。「筋力、機敏さと身体の可動性の展示に代えて、(中略) 人間生活に有益な技術に関する優秀さの展示が好まれる²³⁴」。

このスピーチの中で、彼はオリンピア競技祭に関係して、ギリシャの教育レベルが向上し、図書館も創設され、学術協会が設置され、印刷機能などが向上したことについて言及した。彼はまた、賞の導入にも言及し、ギリシャが独立を果たした後の当時にあっては、国の知的部分の発展に寄与したことに対して賞を授与すべきだと述べた。文学、歴史、考古学、詩、言語学またギリシャの内外における知的な生活について言及したのであった。Ioannou は、産業振興という国の目的はある程度達せられる見通しなので、国民の道徳的向上も、オリンピア競技祭実施の目標として、必要不可欠であると主張した。

Christidis と Ioannou のスピーチから、次のことが明らかになる。

第一に、産業の振興を目指して行われるオリンピア競技祭であることに、当時の学者らに意見の相違はなかったことである。

第二に、運動競技や産業面のみならず、文学、歴史、詩歌、芸術などの知的・芸術分野においても、その発展をめざす必要があるとの主張がなされたことである。産業の発展のみならず、芸術や文芸への尊重が指摘されている点は、古代オリンピア競技祭の伝統とともに、オリンピックの近代的解釈として重要であると思われる。古代の競技祭では、音楽や詩の朗読などの芸術競技が行われていた。オリンピアでは芸術競技は厳密には行われていなかったが、デルフィやイストミア、ネメアなどの他の全ギリシャ的競技祭では、積極的に行われて

International Olympic Committee. 2000, p.632.

²³³ Chrysafis, I. *ibid.*, p.76.

²³⁴ Chrysafis, I. *ibid.*, p.76.

いた。また、オリンピアの聖域に建築されていたゼウス神殿やヘラ神殿などは、当時の建築技術の粋であったし、高さ 8m に及ぶゼウス像をはじめとして、聖域には彫刻家が多数の作品を手がけて展示されていた。さらには Pindaros や Bacchylides など、競技者を称える詩人たちが、作詩を行った。

このように、古代の競技祭は、運動競技のみならず、芸術や文学の発展に大きく寄与したのであった。こうした古代の状況について、Christidis や Ioannou はそれらの知識を持っていたので、彼らは、それを近代ギリシャのオリンピア競技祭でも、次のステップとして、実現させようとしたのではないかと思われる。

Georgiadis の述べるような、古典学者たちがスポーツ競技に重きを置いていなかったとする見解は、正鵠を射ていないように思われる。古代のようすを 19 世紀半ばのギリシャの状況に応じて、古典学者たちは、適応させようとしたと言える。その意味で、彼らの考えたオリンピック競技会の復興は、運動競技と産業製品の競技に加えて、芸術・文芸競技が明確に加えられるようになったのである。

その一方で、第二回オリンピア競技祭では、運動競技への一般の人々の関心がさらに高まることになる。それは、パンアテナイア競技場の復元が進められ、その姿が衆目に晒されたからであった。

1-2. ドイツ人 Ziller による古代の競技場の整備

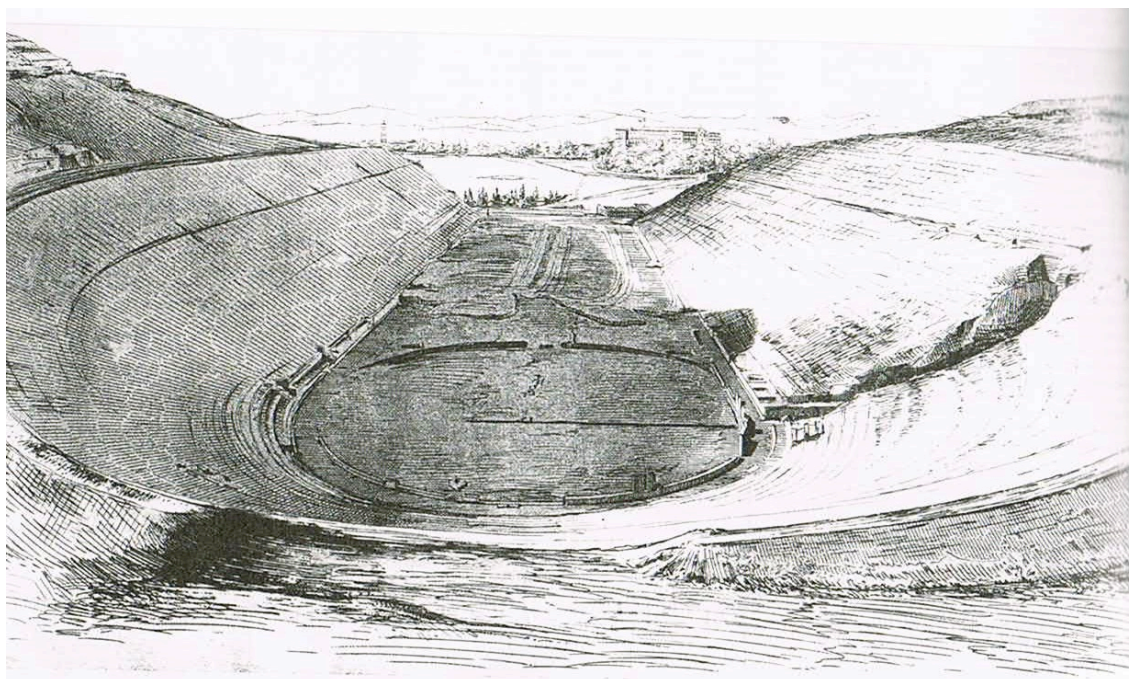
Zappas の莫大な遺産により、競技場の整備計画が実行されるに至った。競技場の復元は、以前にも試みられていたが、継続されなかった。1869 年 7 月に第二回オリンピア競技祭開催の王室条例が發布された翌月に、ドイツ人考古学者 E. Ziller (1837-1923 年)の指揮の下にアテネの古代の競技場の復元が着手された。Ziller の指揮の下に発掘の技術者と兵士 30 人が作業にあたった。

この競技場は古代ではパンアテナイ祭が行われた競技場であり、由緒ある競技場であった。競技場のスペンドーネ（曲線状のアリーナ部分）を 3 メートル掘って発掘し、1870 年 2 月までに競走路と観客席とともに、競技場の全体を発掘することに成功した²³⁵。その後内部の観客席の部分をきれいに復元し、競走路を整備し、折り返しの転向柱を設置した。そして跳躍競技の溝を造り、レスリングの土俵を砂で造り、登攀競技と縄競技のための柱を設置した。スペンドーネの上側の部分には、木製の観客席を取り付け、国王、首相、大臣、内外

²³⁵ Ziller, E. (1860) Ausgrabungen am Panathenaischen Stadion auf Kosten S.M. des Königs von Griechenland. Verlag von Ernst und Korn: Berlin, p.1.

の来賓のための特別席とした。この特別席の下に 300 あまりの予約席を設け、1 席あたり 3 ドラクマにて受け付けるようにし、さらには競技場の両側のスロープを整備して、多くの観客が競技を観戦できるように修復したのであった²³⁶。

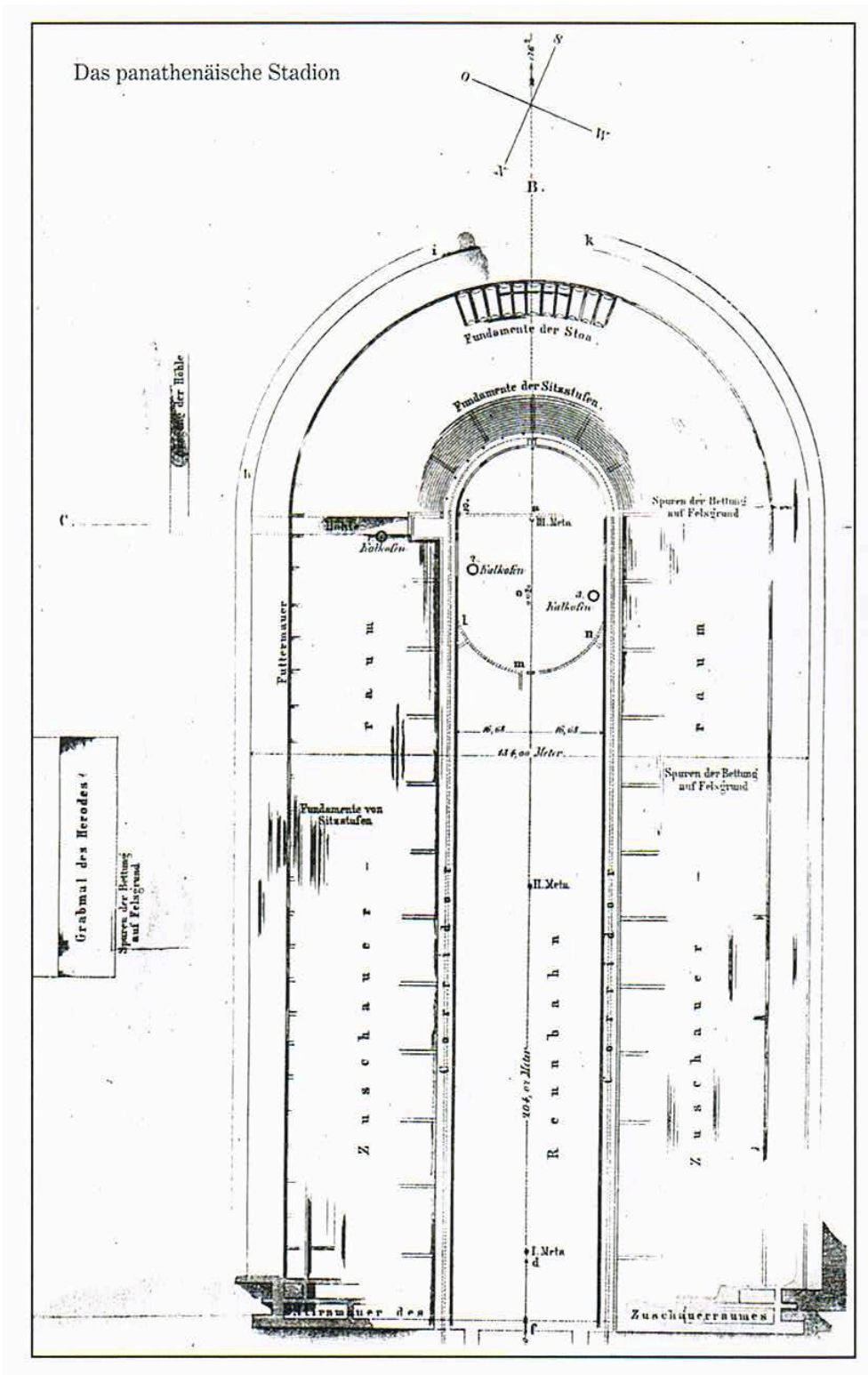
このような競技場の準備に着手したことは、1859 年よりもはるかに大規模に 1870 年の準備がなされたことを示している。古代のパンアテナイ競技場は、地中に埋もれていたが、きれいに磨かれてオリンピア競技祭のために姿を現したのであった。溝が跳躍競技のために掘られ、レスリングの場所が作られ、登攀用のポールが立てられ、短距離用にトラックが作られた。競技場の端には、カーブの上に、木製のロイヤルボックスが設けられた。この場所は後に 3 つに分けられた：王室とその関係者、中央部分には首相と外交関係者、そして政府の大臣や閣僚のボックスが反対側に設けられた。ロイヤルボックスの下には、3 ドラクマで 300 人分の席が用意された。円形劇場になっている片側の端の席は、群衆が競技を見られるように掘り返された。古代競技場の地下室も更衣室に使えるように復興された。競技場に向かう舗装道路が造られた。競技場の前の作り替えられた場所で作業がされた。



図版 3 Ziller によるパンアテナイ競技場復元図

(Lennartz, K.(1996) Die Olympischen Spiele 1896 in Athen. p.30)

²³⁶ Chrysafis, I. (1930),ibid.pp.72-73.



図版4 Zillerによるパンアテナイ競技場復元計画図

(Lennartz, K.(1996) Die Olympischen Spiele 1896 in Athen. p.30)

デンマークよりギリシャの二代目の王位に就いた Georgios(在位 1863-1913年)は復元作業を視察し、作業を継続するのに必要な経済的支援を Ziller に約束した。Zappas の遺言にも書かれてあった、古代の競技場でのオリンピア競技祭の挙行に向けて、大きく前進したのである。ここに、1859 年の第一回オリンピア競技祭の課題であった、観客を収容でき、競技を行える競技場の問題が解決されるに至った。

なおこの復元された競技場は、1875 年開催の第三回オリンピア競技祭、そして 1896 年開催の第一回近代国際オリンピック競技会の競技場としても使用されることになる。古代の競技場でのオリンピア競技祭、なかでも運動競技の挙行は、古代オリンピア競技祭の復興という意味合いを人々に強く認識させることになる。もちろん、古代オリンピア競技祭の競技場は、ペロポネソス半島のオリンピアに眠る競技場であったが、そこはまだ人目にさらされていなかった。古代の競技場として、人々が日常的に目にしていたのは、首都アテネの中心部に位置していた競技場であった。ここは古代アテネの繁栄の象徴であり、盛大な祭典であったパンアテナイ祭²³⁷が行われた会場であった。その場所で、オリンピア競技祭が行われることは、産業博覧会での産業製品の競技に政府が力を入れようとも、人々の関心は古代の競技場での競技に集まっていくのであった。

以上のことから、第二回オリンピア競技祭の理念として、以下のようにまとめられるであろう。

第一に、産業の振興をめざしていたことは第一回オリンピア競技祭と同様であった。

第二に、その一方で、古代オリンピア競技祭との関連性をより求めた、と言える。その最も象徴的なことは、古代の競技場を復元して、そこで運動競技を行おうとしたことである。Zappas の遺言であったとは言え、このことは、市内の公園で行われた第一回オリンピア競技祭からは、格段の進歩であったと言える。古代オリンピア競技祭と同時期の競技場で行おうとしたのであった。

第三に、Christidis や Ioannou の演説にみられるように、知的面での競技も組み入れようとしたことであり、産業製品の競技と運動競技のみならず、詩歌

²³⁷ 古代の都市国家アテネで行われた祭典。アテネの主神アテナ女神の祭典で、毎年行うアテナイア祭とは別に 4 年に一度盛大な祭典が行われ、それがパンアテナイ祭である。競走やレスリング等のほか、リレー形式で行われるたいまつ競走リレーなどが行われた。優勝者には、金銭やオリーブ油が授与された。

などの知的競技を入れ、幅広い文化的な競技祭にしようとしたと言える。

2. 第二回オリンピック競技祭の規定と競技内容

2-1. 第二回オリンピック競技祭の産業博覧会規定と製品の分類

「第二回目のオリンピック競技祭（ΠΑΝΕΓΥΡΕΩΣ ΤΩΝ ΟΛΥΜΠΙΩΝ）の設立のためのオリンピック・遺産管理委員会規定」が 1869 年 9 月 3 日付けで出された。そこには来るべき競技祭の内容について次のように記されていた²³⁸。

1) オリンピア競技祭の開始と委員会の設置

第 1 条：1870 年 10 月の第一日曜日にオリンピック競技祭は始められ、最終日曜日に終了することが望まれる。

第 2 条：オリンピック競技祭の管理と監督権は「オリンピック・遺産管理委員会」に属す。

第 3 条：第二回オリンピック競技祭の委員会は、10 月に各郡の役所または各県の県庁において任命される。この委員会は役割を分担して、オリンピック競技祭に関連する業務をとりしきる。提出された製品を、必要性や専門家の意見を参考にして査定する。またこの委員会には、外国の領事たちや外国賓客にふさわしい席を確保する。この委員会は、必要に応じて専門委員会の設置を行い、またその専門委員会に特使を派遣することもできる。

第 4 条：委員会は各県の住民から 5 人ずつを選んで構成される。

第 5 条：任命された委員の名簿は、県庁で管理されるが、それをオリンピック・遺産管理委員会になるべく早く送らなければならない。

第 6 条：各県の委員会は第二回オリンピック競技祭の規定について、展示会に関する政府と委員会の説明を付して公表することが望まれる。

第 7 条：各県委員会は招待者はともかくとして、工業製品と農業製品の担当者が熱意と競争心を惹き起こすように配慮する。招待者の氏名を公表する。

第 8 条：各県委員会は、展示会に参加するためには、40 日以内に展示品のリストを送付しなければならない。

第 9 条：各県委員会は展示品のリストとともに、展示品についてのコメントや意見を付して送ることが望ましい。

²³⁸ Επιτροπή Ολυμπίων (1869) Βασιλ. διάταγματα, εγκύκλιοι, διαθήκη του Ευαγγέλη Ζάππα και κανονισμός των Ολυμπίων δια το 1870 . Ethniki Tipographia: Athens. pp.7-8.

委員会は、農業、畜産、航海術、機械や技術についてリストを作成し、オリンピック・遺産管理委員会とともに、郡庁にも提出する。オリンピック・遺産管理委員会の指示のもと、制作された作品のうち展示されるものが決定される。

これらの規定は、産業博覧会についての取り決めである。最上位にある委員会は「オリンピック・遺産管理委員会」であり、そのもとに、各県にオリンピック委員会が設置されていた。第一回オリンピック競技祭の運営を担った中央オリンピック委員会の代わりが「オリンピック・遺産管理委員会」になったと言える。各県にオリンピック委員会が設置され、各県 5 人の委員が選出されて地方でのオリンピック委員会が設立された。

これらの地方のオリンピック委員会の任務は明確で、第 7 条で示されているように、「工業製品と農業製品の担当者が熱意と競争心を惹き起こすように配慮する」ことが重要であった。これは第一回オリンピック競技祭と同様の内容でもあった。

2-2. 第二回オリンピック競技祭の運動競技の規定

競技場の復元作業が開始される直前の 1869 年 7 月 22 日にオリンピック・遺産管理委員会は、第二回オリンピック競技祭を、翌 1870 年 10 月に、復元される競技場で開催すると発表した。そこでは、10 月 11 日の第二日曜日に「馬の競技」、10 月 18 日の第三日曜日に「裸体競技²³⁹」、及び 10 月 25 日の第四日曜日に海において、「水泳・漕艇競技」を開催すると発表した。具体的には、次のような内容であった。

・裸体競技の大綱 (ΠΡΟΓΡΑΜΜΑ ΤΩΝ ΓΥΜΝΙΚΩΝ ΑΓΩΝΩΝ)

1869 年 7 月 22 日にオリンピック委員会より出された裸体競技の大綱は以下の通りである²⁴⁰。

第 1 条：1870 年 10 月 18 日正午より、パンアテナイア祭の競技場にて、ディアウロス走(ΔΙΑΥΛΟΣ)、三段跳び(ΑΛΜΑΤΟΣ ΤΡΙΠΛΟΥ ΜΕΤΑ ΡΥΜΗΣ)、幅跳び(ΑΛΜΑΤΟΣ ΑΠΛΟΥ ΜΕΤΑ ΡΥΜΗΣ)、溝越え棒高跳び(ΑΛΜΑΤΟΣ ΕΠΙ ΚΟΝΤΩ ΥΠΕΡ ΤΑΦΡΟΝ)、レスリング(ΠΑΛΗΣ ΟΡΘΗΣ)、円盤投げ(ΔΙΣΚΟΒΟΛΙΑΣ)、槍投げ(ΑΚΟΝΤΙΣΜΟΣ)、登攀(ΑΝΑΡΡΙΧΗΣΕΩΣ)、縄競技(ΕΛΚΥΣΤΙΝΔΑ)などの競技を行う。

第 2 条：水泳競技(ΚΟΛΥΜΒΗΤΙΚΟΣ ΑΓΩΝ)は 10 月 25 日にファリロにて行う。

第 3 条：1858 年 8 月 19 日発表の王室条例の第 15 条²⁴¹に従い、競技の勝者への賞を次のように決定する。

1 位・・・100 ドラクマの賞金とオリーブの葉冠

2 位・・・ 50 ドラクマの賞金とオリーブの小枝

3 位・・・ 月桂樹の小枝と賛辞

第 4 条：競技の勝者は次回のオリンピック競技祭において有給の体育長官(ΓΥΜΝΑΣΙΑΡΧΗΣ)または体育教師(ΠΡΟΓΥΜΝΑΣΤΗΣ)に就任することができる。

²³⁹ 古代オリンピック競技祭では、競馬や戦車競走を「馬の競技」、競走やレスリング、ボクシング、五種競技などは「裸体競技」と呼ばれていた。供養儀を行う際には何もつけずに全裸で行われていたのでこのように呼ばれた。

²⁴⁰ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1872) Ολύμπια του 1870. *ibid.*, pp.55-56.

²⁴¹ オリンピア競技祭の設立を最初に規定した王室条例でその第 15 条には裸体競技を競技場(ΣΤΑΔΙΟΝ)で開催することと賞金を授与することが規定されている。

- 第 5 条：競技審判員(ΑΓΩΝΟΔΙΚΗΣ)は 1858 年 12 月 30 日の競技規定第 42 条に基づいて、ヘラノディカイ(ΕΛΛΑΝΟΔΙΚΑΙ²⁴²)の中から決定する。
- 第 6 条：競技会では、オリンピア委員会の指導のもと、体育長官が体育教師とともにその運営に当たる
- 第 7 条：体育長官の要請に基づいて、競技中の秩序の維持については警備委員(ΑΛΥΤΑΙ)がその任にあたる。
- 第 8 条：各競技の選手の入場の際、布告官が選手の氏名を高らかに公表する。競技の終了に際しては、勝者の氏名、父母の氏名、出身地と年齢が、美しい音楽の調べにのって紹介される。
- 第 9 条：今回のオリンピア競技祭への出場を希望する者は、首都に居住する者はオリンピア・遺産管理委員会に直接申し込みを行い、地方に居住する者は地方オリンピア委員会にできるだけ早く申し込みを行う。後に申請書に基づいて専門家の意見を聞き、審査の上、出場についての判断を下し、出場を許可する場合は、その証明書を配達し、競技することが認められる。
- 第 10 条：競技者はアテネに到着したとき、名簿に基づいて体育長官の証明を受けなければならない。
- 第 11 条：競技者は競技会の終了までアテネに滞在しなければならない
- 第 12 条：競技者の旅費および滞在費は、各自治体より支給される。
- 第 13 条：競技者のユニフォームおよびシューズは、競技の開始前にオリンピア委員会より支給される。
- 第 14 条：競技者は体育長官と体育教師のもと、1 カ月半の事前練習を実施しなければならない。
- 第 15 条：競技者はヘラノディカイの前で、対戦相手に不正行為を働くことなく、規則に則り、正々堂々と競技することを宣誓しなければならない。
- 第 16 条：競技者は競技の開始前に再度、競技役員の前で、右手を挙げて次のように宣誓しなければならない：「対戦相手に不正行為を働くことなく、規則に則り正々堂々と競技することを誓います。」
- 第 17 条：競技者は競技開催について発表された年の 9 月 3 日までに選手登録をしなければならない。それ以降の登録は認められない。

²⁴²古代オリンピア競技祭において競技者の事前の選別、競技の審判、表彰など競技会の管理、運営のほとんどを司っていた権威ある競技役員で 10 人程で構成されていた。

以上の裸体競技の大綱は1859年9月30日に出された第一回オリンピア競技祭の運動競技に関する規定（全17条）とほぼ同様の内容になっている。競技種目に新たに水泳競技について言及されているが、これは実際には実施されなかった。

競技者の申し込みも前回と同様で、各郡に置かれている地方オリンピア委員会に申し込み、その後アテネのオリンピア・遺産管理委員会で審査され、参加の可否が決められたのであった。さらに事前の練習や宣誓の儀式、勝者の告知の方法などに古代ギリシャの風習を取り入れている。また競技者の旅費、滞在費の出処やユニフォームや靴の支給について明らかにし、競技者に対する現実的な対応もなされていたと言える。

オリンピア委員会で参加が認められた競技者は、アテネで事前練習を行うことが義務づけられており、1ヶ月半、毎日午後4時から6時まで体育教師の指導のもと、競技場で行われた。この事前練習には古代オリンピア競技祭と同様、競技の予選の意味も含まれており、各地から集められた競技者の数は最終的には31人に選別されたのであった。

さらにオリンピア委員会は以下に述べる裸体競技についての規定を定め、具体的な競技規定を発表した²⁴³。

b. 裸体競技の競技種目についての規定

(ΚΑΝΟΝΙΣΜΟΣ ΤΩΝ ΕΩ ΤΩ ΣΤΑΔΙΩ ΓΥΜΝΙΚΩΝ ΑΓΩΝΩΝ)

第1項：競技に先行して宗教的儀式を行い、競技会の成功、国家の繁栄と栄誉、競技会の創設者 Evangelis Zappas への賛辞、および身体的健全さのために、神に祈りを捧げる。その後王室の賛歌を合唱隊が奏でる。

第2項：体育長官は体育教師とともに競技会を管理し、競技の対戦順位を決めるための抽選を行う。また競技場における秩序の維持に努め、警備員を指示する。

第3項：3人の競技審判員は、公平に審判することを宣誓する。

第4項：オリンピア委員会会長は、優勝者に楽器の音色とともに、オリーブや月桂樹の葉冠と小枝を授与する。

第5項：各競技の開始と終了は布告官と笛の吹奏者により公表される。競技種目の順序は以下の通りである。

a. スタートラインから列柱を回ってゴールするディアウロス走

²⁴³ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, pp.57-59.

- b. 助走しての三段跳び
- c. 助走して掘り返した土の上を跳ぶ幅跳び
- d. 立位での投げ技レスリング
- e. 円盤投げ
- f. レスリング
- g. 槍投げ
- h. 溝越え棒高跳び
- i. レスリングの2回戦
- j. ロープ登り
- k. マスト登り
- l. 縄競技
- m. マスト登りの決勝戦
- n. ロープ登りの決勝戦
- o. レスリングの決勝戦

第6項：競技を実施する前に競技者の競技順序を決める抽選を行う。

第7項：《ディアウロス走についての規則》

各組5人ずつ列を作り、布告官のコールがあるまで、スタディオンの前に整列する。コールがあった後、スタートラインの綱(ΒΑΛΒΙΔΟΣ)の後ろに並び、発走装置(ΥΣΠΛΗΓΓΟΣ)の落下とともに競技が始まる²⁴⁴。同様にして次の列も競い合い、各組の最初にゴールした者が円盤投げの後に2回目を5人ずつ走る。それでも勝者が決まらない場合は棒高跳びの後に3回目の競技を行う。さらに必要があれば全競技の最後に4回目の競技を行う。

第8項：《三段跳びと幅跳びについての規則》

各競技者は掘り返された(柔らかい)土の上をラインから3回跳躍する。それらの試技のうち、最も長く跳んだ距離を競う。

第9項：《レスリングについての規則》

2人ずつで競技を行う。お互いに引いたり、回したり、転がしたり、ひっくり返したりして、相手を抑えるか、投げ落とす。不正行為を行ったと見なされた者は競技場から追放される。競技者の一方が倒され

²⁴⁴ 公平なスタートを目指した競走についてのこのようなスタート法は、古代のイストミア競技祭で、その証拠が残されている。またネメア競技祭でもこの発走装置が使用されていた。おおよそ前4世紀はじめから後2世紀半ばまで用いられていた方法をそのまま取り入れたものである。

たら、一度競技は中断され、審判の合図で再び競技が再開され、3回相手を倒すまで続けられる。対戦相手は抽選で決められる。審判は優勝した競技者が、一位の賞にふさわしいかどうかを判断し、ふさわしくなければ除外する。二位、三位の者も決定し、それにふさわしい賛辞を述べる。

第10項：《槍投げについての規則》

槍投げは的に向かって3回投げ、少なくとも2回は円形の的の中心に当てて競う、勝利するためには的の4分の1の中に当てなければならない。

第11項：《棒高跳びについての規則》

棒高跳びは棒で溝を跳び越し、最大の高さを跳んだ者を勝利者とする。

第12項：《登攀についての規則》

綱登りとマスト登りは、最も短時間で上端に達した者を勝利者と判定する。

第13項：《縄競技についての規則》

縄競技は、対戦者が柱に向かい、お互いの背中をタッチしようとする競技である。

第14項：布告官の競技開始の声により競技は開始される。

上記の競技種目の規定から次のことが言える。

競技種目は古代オリンピック競技祭の種目（幅跳び、ディアウロス走、レスリング、槍投げ、円盤投げ）、ドイツ体育の種目（溝越え棒高跳び、綱登り、マスト登り）、そしてギリシャの伝統的・民族的な種目（縄競技）とから構成されていた。古代の種目は五種競技を基本に構成されているが、槍投げの競技は、距離を競うのではなく、的を当てて競うように考えられていた。

これらの競技種目を第一回オリンピック競技祭の競技種目と比較すると、ドイツ体育の種目が増加し、古代の競技種目がむしろ減少していることが確認される。第一回オリンピック競技祭ではドイツ体育の種目は、溝越え跳躍とマスト登りのみであった。このことから、バイエルン出身の国王が、反王室派の圧力により、やむなくギリシャを去った後も、ギリシャではドイツ体育の影響が根付いていたと言える。

一方、それぞれの種目の規則を検討してみると、古代の競技規則とほぼ同

様の規則にしていることがわかる。それは次の内容である。

- ・ 3人の競技審判員が、公平な審判の実施について宣誓すること。
- ・ 布告官の競技開始の声により競技は開始されること。
- ・ 優勝者に楽器の音色とともに、オリーブや月桂樹の葉冠と小枝を授与すること。
- ・ 競技者の競技順序を決める抽選を行うこと。
- ・ スタートラインの綱(ΒΑΛΒΙΔΟΣ)の後ろに並び、発走装置(ΥΣΠΛΗΓΓΟΣ)の落下とともに競技が始まる。
- ・ 幅跳びについては3回試技をする。
- ・ レスリングにおいて、3回相手を倒すまで続けられること。

これらのことから、古代の競技に近づけて行おうとした様子がうかがわれる。特に、スタートラインの綱と発走装置を設けたことは、古代の競走の方法をそのまま踏襲したものである。公平なスタートを目指した競走についてのこのようなスタート法は、古代のイストミア競技祭で、その証拠が残されている。またネメア競技祭でもこの発走装置が使用されていた。おおよそ前4世紀はじめから後2世紀半ばまで用いられていた方法をそのまま取り入れたものである。古代の競技の内容が歴史学や考古学などの成果でわかってきたことにより、それらを取り入れて、復興しようとした跡がうかがわれる。

また裸体競技以外に、実際には行われなかった水泳競技、漕艇競技(ΛΕΜΒΟΔΡΟΜΙΑ)そして競馬(ΗΠΠΟΔΡΟΜΙΑ)・戦車競走(ΑΜΑΞΟΔΡΟΜΙΑ)の競技規定も発表されている。水泳競技は、10月25日の日曜日に、ラファリロ湾で、一定のコースを往復する往復泳ぎ(ΔΙΑΚΟΛΥΜΒΗΣΙΣ)、深さを競う潜水(ΚΑΤΑΔΥΣΙΣ)、距離を競う潜泳(ΥΠΟΚΟΛΥΜΒΗΣΙΣ)、湾を周遊する周泳(ΠΕΡΙΚΟΛΥΜΒΗΣΙΣ)、そしてヨット競技(ΙΣΤΙΟΔΡΟΜΙΑ)などの競技種目が示されていた²⁴⁵。

漕艇競技では、水泳競技と同日、同じ場所で人が漕ぐ連絡船の競走と海戦船の競走、連絡帆船の競走と海戦帆船の競走、そして海戦競技があげられていた²⁴⁶。また競馬と戦車競走は、10月11日にファリロからアテネに向けてスタートすることが定められていた²⁴⁷。競馬や戦車競走は古代の競技種目な

²⁴⁵ Chrysafis, I.(1930) ,ibid.pp.59-62.

²⁴⁶ Chrysafis, I.(1930) ,ibid.pp.62-66.

²⁴⁷ Chrysafis, I.(1930) ,ibid.pp.67-72.

ので、やはり、古代の競技の復興という点を考えて、実施を模索したものである。水泳は古代の競技会で行われた形跡はないが、きわめてポピュラーな種目であった。潜水や周回泳ぎなど、今日の競泳種目とは一戦を画しているが、当時のイギリスやドイツなどでは、このような水泳種目が実施されていたようである。1870年の時期に、このような豊富な種目が考えられ、古代の競技種目や近代の競技種目が実施されようとしていた。これらのことは、古代の伝統を1870年当時には、古代のままの種目と近代のもの、両者を織り交ぜて考えられていたことを示しているが、第一回オリンピック競技祭と比較してみると、古代の競技の習慣をもなるべく復興しようとした規則であったと言える。

2-3. 裸体競技の支出見積もり

第二回オリンピック競技祭を主催するオリンピック委員会により提出された裸体競技の支出見積もりは下記の通りである²⁴⁸。

a 人件費		
体育長官	1人 × 3ヶ月	600 ドラク
体育教師	1人 × 2ヶ月	300 ドラクマ
同上 (必要な場合)	1人 × 1ヶ月	100 ドラク
警備長	2人 × 1日	24 ドラク
警備員	6人 × 1日	48 ドラク
布告官	1人 × 1日	15 ドラク
笛吹奏者	1人 × 1日	8 ドラク
更衣室の番人	1人 × 1日	15 ドラク
合唱団	1日	50 ドラクマ
合計		1160 ドラクマ

人件費の項目から、臨時の体育教師の謝礼が100ドラクマであり、競技の優勝者に授与された賞金とほぼ同様であったことがわかる。ちなみに当時の熟練労働者の月収は40～50ドラクマであった²⁴⁹。それ相応の報酬が配慮されてい

²⁴⁸ Chrysafis, (1930) *ibid.*, pp.58-59.

²⁴⁹ Woodhouse, M., (1992) *Modern Greece: A short history*. Faber and faber limited; London, pp.160-161.

たことがうかがえる。

b. 賞

第一位(100 ドラクマ)	11 人	1100 ドラクマ
第二位(50 ドラクマ)	11 人	550 ドラクマ
合 計		1650 ドラクマ

c. 器 具

マスト(20m × 0.4m)の製造と設置	1 本	250 ドラクマ
柱 (15m × 0.2m)	2 本	150 ドラクマ
梁材 (2.5m × 0.2m)	1	8 ドラクマ
白い決勝物(直径 1.25m)	1	20 ドラクマ
スタートライン(1.50m × 0.1m)	2	8 ドラクマ
棒 (4m × 0.04m)	5 本	40 ドラクマ
槍	5 本	50 ドラクマ
つるはし(古代の型)	1	8 ドラクマ
木製の更衣室(6m × 3m)	1	200 ドラクマ
小さい旗	30	45 ドラクマ
綱(15m × 0.04m)	1	35 ドラクマ
ひも(スタート用)	1	4 ドラクマ
縄(縄競技用)	1	2.5 ドラクマ
合 計		805.5 ドラクマ

d. 衣 服(シューズを含む)	30 人分	570 ドラクマ
-----------------	-------	----------

支 出 総 計		4185.5 ドラクマ
---------	--	-------------

上記の支出見積りの競技者の衣服の項目から、予算上登録を許された競技者の数が 30 人で決められていたことが確認される。ギリシャ全土より、地方オリンピック委員会に参加を申し出、そして中央のオリンピック・遺産管理委員会で審査した後、競技者を 30 人に近い数に限定したのであった。彼らは規定どおり、1ヶ月前前にアテネに集まり、体育教師の指導のもと練習を行い、実際には 31 人の競技者が当日の祭典に出場したのであった。

2-4. 第二回オリンピア競技祭の産業博覧会、芸術展示の開催

1870年のオリンピア競技祭は、運動競技のみならず、産業製品の中に芸術展示、すなわち芸術競技が行われたことは注目すべきであろう。芸術競技として行われたものは、彫刻、絵画、建築、詩歌と音楽である。審判団は次のように作品を評定したことを Georgiadis が報告している。

彫刻については、10人が59の作品を出展した。絵画には、16人が48の作品を出展した。建築（デザイン）の部門では、5人が出品していた。これらの出品者31人のうち1人だけが女性で、コンスタンチノーブル出身であった。作品の大部分は国家的なテーマを選んでいて、芸術は古代ギリシャ人の生活と当代のそれとの関係性、特に当時のギリシャ人が認識していた文化的連続性や、独立戦争について表現されていた。賞は彫刻8、絵画10作品、建築プランは1作品のみであった²⁵⁰。

芸術競技のうち、詩歌は多くの人に応募した競技であった。11の劇の詩歌と9の叙情詩が委員会に回されたが、全体で17156行にも及んだことが記されている²⁵¹。これらのうち、3編はオリンピア競技会そのものを歌い上げた、「オリンピア競技会の観客」(149行)、「オリンピア競技会のマーチ(24行)」(24行)、「オリンピア競技会の創設者、Zappas への讃歌」である。

これらと Orphanidis のオリンピック讃歌は、近代のギリシャ人による最初のオリンピック詩歌ということになる。「競技者よ、現れよ。この世には存在しない冠をさがせ。国の花を探せ」という行が含まれている。

11月29日のアテネの劇場での式典で、審査委員会が勝利者となった Angelos Vlachos に金の冠を授与した。彼の作品だけが賞にふさわしいとの判断であった。

12月5日に予定されていた音楽競技は、実施されなかった。第一回のオリンピック賛歌の作曲家 Rafael Parizinos は、1866年にクレタのアルカディ王国のトルコ支配下の間に倒れたギリシャの英雄たちを称えた、ギリシャの交響曲を書き上げた²⁵²。

これらのことから、産業製品や芸術展示の分野で1870年のオリンピア競技祭は、1859年のものよりも発展したといえる。1859年では、60種類の産業製品の展示、コンクールであったが、1870年の第二回オリンピア競技祭では、9つの部門に少なくとも75カテゴリーに分けられて、工業、農業製品が展示

²⁵⁰ Georgiadis, K.(2003) *ibid.*, p.41.

²⁵¹ Georgiadis, K.(2003), *ibid.*, p.41.

²⁵² Georgiadis, K.(2003) *ibid.*, p.42.

された。芸術や詩歌は、一定の地位を獲得したといえる。

1870年のオリンピア競技祭が一定の成功を収めた原因を、先行研究（Georgiadis）は、次のように述べている。

ギリシャ国王と王妃が競技会に列席したこと、よく組織化したこと、観客が大喜びしたこと、競技者の宣誓、コーラスによるオリンピック賛歌の合唱、賞の授与の式典などである。授賞式では、各種目に上位三人の出品者が初めて表彰され、葉冠が授与された。これには2万人を超える観客が観戦し、古代ギリシャとの近しい感覚を感じたのではないかと分析している²⁵³。

しかし最も大きい要因は、古代の競技場が復元され、そこで運動競技が行われたためではないかと考えられる。古代のアテネの競技場が多くの人目の前に姿を現したことで、彼らギリシャ人は、古代についての大きな誇りを感じたに違いないからである。パンアテナイ競技場は、古代と近代を結ぶツールとして極めて重要であったのである。



図版5 第二回、第三回オリンピア競技祭 産業博覧会の会場になったザッピオン
(Solomou-Prokopiou, A.(2004) Αθήνα 1896. p.33)

2-5. 第二回オリンピア競技祭の運動競技の開催

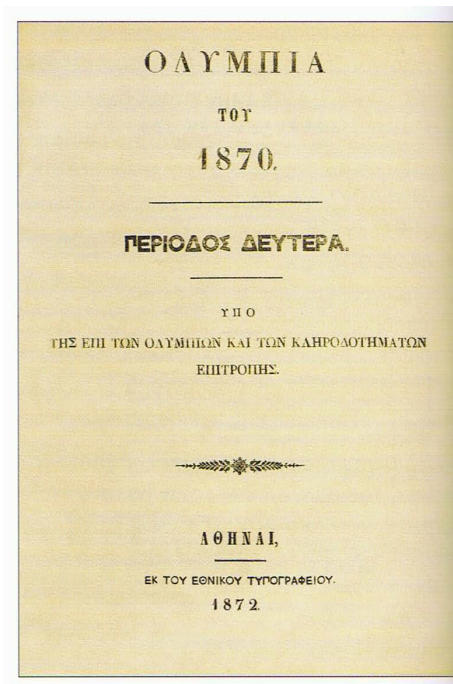
第二回オリンピア競技祭における運動競技は、実際には計画より半月ほど遅れ、1870年11月8日午後に開催された。この日は関係者にとって忘れられない日となり、2万ないし2.5万人の観客が競技場に押しかけた。宗教的な儀式

²⁵³ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.41.

は、当初出席が予定されていたメトロポリタン教会の僧正が参加しなかったが、予定通り行われた²⁵⁴。儀式は polychronion という古いビザンチンの祈りで、支配者の長命を祈ることから始められた。その後に、アテネ大学植物学の教授 T.G.Orphandis の挨拶と Rafael Parizinnis という音楽教師の演奏によるオリンピック讃歌が続いた。この祈りと讃歌は 40 人の女性により歌われた。その後、競技者の宣誓が行われ、競技が始められた。競技者はすべて統一のユニフォームを着て、らっぱにより種目の開始が告げられ、ヘラルドにより、競技の勝者の氏名と出身地が告げられた。勝利者は皆、ロイヤルボックスに出向いて賞を受け取った。



図版 6 第二回オリンピア競技祭 運動競技の入場券
(Solomou-Prokopiou, A.(2004) Αθήνα 1896. p.32)



図版 7 オリンピア委員会報告書
(Solomou-Prokopiou,A.(2004) Αθήνα 1896. P.34)

²⁵⁴ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*,p.77.

3. 第二回オリンピア競技祭の組織と出場者

3-1. オリンピア委員会

第二回オリンピア競技祭を管理したのは、1869年9月3日付けで結成されたオリンピア・遺産管理委員会であった。第一回オリンピア競技祭を運営したのはオリンピア委員会であった。この委員会が、Zappasの遺産を管理することもその任務になったため、この名称になったのである。

また、地方にはオリンピア委員会がやはり設置され、各郡長により各県の県庁所在地において任命された。この委員会は提出された製品を、必要性や専門家の意見を参考にして査定したのであった。こうして産業製品の競技が施行された。

他方で、運動競技は裸体競技と表現されていたが、これを管理したのは、オリンピア委員会の指導のもと、体育長官(ΓΥΜΝΑΣΙΑΡΧΗΣ)と体育教師(ΠΡΟΓΥΜΝΑΣΤΗΣ)がその任に当たった。ヘラノディカイの中から、競技審判員(ΑΓΩΝΟΔΙΚΗΣ)が選ばれ、競技中の秩序を守るためには、警備委員(ΑΛΥΤΑΙ)がその任にあたることになった。

これらの構造をみると、まず、オリンピア・遺産管理委員会が最上部に位置し、そのもとに、各県オリンピア委員会と運動競技部門である裸体競技を統括する諸役員が兼ねていた。そしてその役員は、体育長官、体育教師、ヘラノディカイ、そして競技審判員などと分化していた。

内務大臣がオリンピア・遺産管理委員会を統括し、オリンピア・遺産管理委員会副会長はヘラノディカイ委員会の委員長が兼任で任命されたのであった。国家として取り組んでいたことがこの委員会の構成からもわかる。

このように、豊富な競技を実施するために、それに適した布陣を敷いていたことがうかがえる。そして役員名も古代の役員と同じ名前を付すなど、古代オリンピア競技祭との連続性を意識していたと言える。国家的な関わりと古代との連続性を示したオリンピア競技祭を支えるオリンピア委員会の組織であった。

3-2. 産業製品カテゴリーと出展者

産業製品は次の10クラスに分類され、それぞれのクラスで賞品が出された。第一回オリンピア競技祭と同様、競技として行われたのであった。

10クラス80種に分けられ、それぞれの県の代表作品の説明書が持ち寄られて審査を受けたのであった²⁵⁵。

ここでは、産業製品のカテゴリーの一つとして分、芸術が入っていることが注目される。絵画、彫刻、建築という後の近代国際オリンピック競技会の芸術競技に加わるものも含まれていた。産業製品の中から、芸術競技が誕生していくことになるのであった。これは、産業製品の競技を行う中で、芸術競技が誕生したものと言うこともできよう。

産業製品のカテゴリー毎の製品を示すと次のようになる。

A.芸術（金賞3本、銀賞10本、銅賞20本、佳作30本）

1. 油絵
2. 水彩画
3. 彫刻
4. 建築
5. 石版画と銅版画

B.自由サービス業

6. 印刷の技
7. 製本
8. 木版画作品
9. フレスコ画の模型
10. 写真作品
11. オルガン
12. 地図

C.役に立つ家具

13. 椅子、長椅子、ソファ、テーブル、ベッド、食器棚、書棚、洋服ダ

²⁵⁵ Επιτροπή Ολυμπίων (1869) Βασιλ. διάταγματα, εγκύκλιοι, διαθήκη του Ευαγγέλη Ζάππα και κανονισμός των Ολυμπίων δια το 1870 . Εθνική Τυπογραφία: Athens.,pp.7-11.

ンス、装飾棚

14. 陶磁器
15. じゅうたんや蠟と油を塗布した帆
16. 大フォーク
17. 教会や住居で使う銀細工
18. 照明器具や暖房器具
19. 香水や化粧品、香り入り石鹸
20. かご、くし、煙草入れ

D.服飾など

21. 繊維製品、綿織り
22. 木綿、麻製品
23. 毛織物
24. 帽子
25. 絹織物
26. レース編み
27. スカーフ、手袋
28. 人毛によるかつら
29. 貴金属の装飾品
30. 小銃や弾丸などの鋳物
31. 旅行用品やキャンプ用品

E.海産物

32. 冶金、大理石などの鉱物や金属の採掘、そのほか粘土、硫黄、アスファルト、石油、石炭など
33. 金属の原石、鉛など
34. コーティング用具と銀メッキ
35. 森林 建築と造船の木材
36. 狩猟、漁業、皮革 動物の皮革、綱、角、スポンジ、珊瑚の採取など
37. 食用の農業品、調味料
38. 化学製品、薬品
39. 鉱水とガス
40. 漂白剤や印刷の染料の化学技術
41. 皮なめし工業用の皮革

F. 日常技術

42. 冶金の機器
43. 農業と皮革の機器
44. 狩猟と漁業の道具
45. チーズ工場の機器
46. 薬品や皮なめし工場などの化学技術の機器
47. 機械製品や工学機器
48. 網編みや紡績の機器
49. 木工機器
50. 馬車の用具
51. 馬の鞍やむち
52. 木材、アスベスト、セラミック、石などでできた家具
53. 石工製品、工芸家具と鉄工製品
54. フレスコ画器具と家具の模型
55. 造船の設計図

G. 食料品

56. トウモロコシ、ライ麦、大麦、米などの食用穀物
57. パン工場製品
58. 食用油
59. 肉と魚料理
60. ジャガイモ、にんにく、人参などの野菜
61. マスタードや甘味などの調味料
62. アルコールなどの嗜好品

H. 農業と畜産

63. 馬、ロバ、ラバ、ラクダ（各郡ごとに印をつける）御者、馬術
64. 雄牛、乳牛、子牛、野牛（各郡ごとに印をつける）
65. 子羊、ヤギ
66. 豚、うさぎ
67. 家で飼う鳥、鶏、あひる、モルモット、がちょう
68. 猟、牛飼い
69. 昆虫、ミツバチ、ハチ、養蚕業
70. 農地の模型

I.園芸

- 71. 花と植物の装飾
- 72. 植物園
- 73. 果樹
- 74. 熱帯植物
- 75. 園芸や果樹の用具や容器

J.市民の道徳的、身体的改善のための有用な品物

- 76. 公立小学校の計画
- 77. 小学校教育における有用な物、黒板、読みもの、小冊子、教科書、定期刊行物、文学作品
- 78. 実業家、技術師、農民、水夫などを育てるための専門書
- 79. ギリシャの風土に適した住民の食事、衣裳、住居などの改善をめざした教育
- 80. 地方の民族衣裳

これらの中には、Aの芸術作品のコンテストのほかに、オルガンの演奏、そしてJのカテゴリーには、道徳的、身体的改善のための有用な品物の項目が入っている。身体的改善についての製品は、食事、衣裳、住居、などが相当する。

また、小学校の教育の内容などが、身体的な改善にどのように関わったのかは不明であるが、身体について一定の関心が向けられたということは、大きな特徴の一つであると言える。

・賞とメダル

上記の産業製品の入賞数は次のように決められていた。また貨幣(NΟΜΙΣΜΑΤΟΣΗΜΟΝ)が授与された。金貨はすべて各種の1位か2位に限られた²⁵⁶。これは金、銀、銅メダルと同等の観念であったと考えられる。

- A. 芸術 : 金貨 3、銀貨 10、銅貨 20、佳作 30
- B. 自由サービス業 : 金貨 2、銀貨 20、銅貨 30、佳作 40
- C. 役に立つ家具: 金貨 2、銀貨 25、銅貨 30、佳作 50

²⁵⁶ Επιτροπή Ολυμπίων (1869) Βασιλ. διάταγματα, εγκύκλιοι, διαθήκη του Ευαγγέλη Ζάππα και κανονισμός των Ολυμπίων δια το 1870 . *ibid.*, pp.19-20.

- D. 服飾など: 金貨 5、銀貨 30、銅貨 50、佳作 80
- E. 海産物: 金貨 6、銀貨 60、銅貨 160、佳作 200
- F. 日常技術: 金貨 3、銀貨 20、銅貨 40、佳作 70
- G. 食料品: 金貨 4、銀貨 20、銅貨 40、佳作 70
- H. 農業と畜産: 金貨 3、銀貨 50、銅貨 100、佳作 150
- I. 園芸: 金貨 2、銀貨 10、銅貨 20、佳作 30
- J. 市民の道徳的、身体的改善のための有用な品物:
金貨 2、銀貨 6、銅貨 20、佳作 30

この数値から、農業、畜産、海産物などの第一次産業の製品に与えられる賞が他を圧倒している、ということである。当時のギリシャは機械製品や工学関係の製品は発達していなかったことがわかる。

また、産業製品のみならず、音楽の作曲、射撃、競馬、戦車競走、ボートレース、マスト登攀などにも金貨が賞として授与されることが示されている²⁵⁷。これらの査定はヘラノディカイが行うことが決められていた。

ヘラノディカイは重要な委員で、ヘラノディカイ特別委員会が設置されることが決められていた²⁵⁸。内務大臣がオリンピック委員会を管理し、オリンピック委員会副会長はヘラノディカイ委員会の委員長に任命された。各自治体（郡）は3人のヘラノディカイ委員を必要に応じて選出することができ、この委員会は県庁所在地におくことが望まれた。

ヘラノディカイ委員会が製品の査定を行うのだが、その基準は次のように示されている²⁵⁹。

- ・ その地における製品の歴史
- ・ 1859年から1869年までの進歩の度合い
- ・ その製品の特徴、試行の具合、有益性、利益、価格

以上の点に基づいて報告書を提出することが義務づけられていた。

二項目目の前回のオリンピック競技祭以降の進歩の度合いが評価の対象にしていることは、各大会のオリンピックアードの成長ぶりを確認するという、合理的な考え方であったと言える。

²⁵⁷ *ibid.*,p.15.

²⁵⁸ *ibid.*,p.14.

²⁵⁹ *ibid.*p.16.

賞金の額は次のように規定されている。単位はドラクマ

競馬：1位 500 2位 300
裸体競技：1位 100 2位 50
戦車競走：1位 300 2位 100
射撃：1位 300 2位 100
交響曲：300

また特別の手当が以下のように支給されることが明記されていた。

- ・雨に濡れたブドウを乾燥させるための方法の開発：200～1000 ドラクマ
- ・綿花やブドウ畑の組織的な開発：200～1000 ドラクマ
- ・草原で家畜を飼育し良い種を残すための技術とシステムの開発：
300～1500 ドラクマ

ここからわかることは、機械工業ではなく、ブドウや綿花の栽培や牧畜などの伝統的な産業にも国として力を入れていたことがうかがえる。

3-3. 運動競技の競技者

運動競技の各種目で表彰された競技者の氏名およびその出身地は以下の通りである²⁶⁰。

- | | | | |
|------------|----|-----------------|-----------|
| a. ディアウロス走 | 1位 | S.E. Skopdaras | (アテネ) |
| | 2位 | G. Xideas | (アテネ) |
| | 3位 | Hatzianastasis | (クレタ) |
| b. 三段跳び | 1位 | G. Tsantilas | (エレフシニオス) |
| | 2位 | P. Skoupopoulos | (カリスティオス) |
| | 3位 | D. Pandazidis | (セッサロニキ) |
| c. 走り幅跳び | 1位 | G. Tsantilas | (エレフシニオス) |
| | 2位 | D. Pandazidis | (セッサロニキ) |
| | 3位 | E. Skopdaras | (アテネ) |
| d. レスリング | 1位 | K. Kardamilakis | (クレタ) |

²⁶⁰ Chrysafis, I. (1930), *ibid.*, pp.78-79.

	2位	T. Kokas	(アテネ)
	3位	D. Lipiterakis	(アテネ)
e. 円盤投げ	1位	S. Ioannou	(カリポリティス)
	2位	P. Douros	(ペロポニシオス)
	3位	I. Psyhas	(キメオス)
f. 槍投げ	1位	S. Ioannou	(カリポリティス)
	2位	Tsantilas G.	(エレフシニオス)
	3位	I. Psyhas	(キメオス)
g. 棒高跳び	1位	K. Kardamilakis	(クレタ)
	2位	G. Galifos	(シフニオス)
	3位	D. Kassandris	(ケファロニア)
h. マスト登り	1位	TH. Trougkas	(アテネ)
	2位	P. Kanarelis	(アンドゥリオス)
	3位	Th. Papageorgiou	(ゴルテイニオス)
i. 綱登り	1位	G. Akestoridis	(コンスタンティノポリス)
	2位	I. Venetsanopoulos	(コンスタンティノポリス)
	3位	K. Ntefitzis	(アルギオス)
j. 縄競技	1位	I. Psyhas	(キメオス)
	2位	K. Kardamilakis	(クレタ)
	3位	D. Lipiterakis	(アテネ)

跳躍種目や投擲種目の表彰者から、競技者は複数の競技に参加することができたことが確認される。また競技者の出身地を各県別に分類すると次のようになる。

a. ギリシャ領 (16人)

アッティカ県	7人	アイトリア県	1人
エウボイア県	2人	メッシニア県	1人
キクラデス県	2人	アルゴリス県	1人

アルカディア県 2人

b. オスマントルコ領 (6人)

コンスタンティノポリス 2人

テッサロニキ 2人

クレタ 2人

当時のギリシャは 10 県に分けられていたが、そのうちの 7 県から表彰者が選ばれていることが確認される。首都アテネのあるアッティカ県以外の県出身の競技者が 7 割近く占めており、トルコ領であった地域からもギリシャ人がオリンピア競技祭に参加し、賞を受けていたことの意味は大きい。全競技者の数は 31 人で決して多くはないが、1 ヶ月半に及ぶ予選段階での競技者はそれよりもはるかに多い人数が参加しており、一般の市民も彼らの練習を観戦することができたのであった。以上の事から、アテネ周辺だけからの競技者の参加だけではなく、ギリシャ全土からの参加がなされ、さらにはコンスタンティノポリスなど、トルコ領に住むギリシャ人の参加もみられることから、1870 年のオリンピア競技祭は、競技者の観点から全ギリシャ的、全民族的なオリンピア競技祭であったとすることができる。

4. 第二回オリンピア競技祭の特徴

1870 年 11 月 8 日、復元されたアテネの競技場で開催された第二回オリンピア競技祭は、多くの観客を集めて盛大に行われた。この競技会について、アテネの新聞は第一回のオリンピア競技祭の時とは変わって、こぞってその成功を称え、オリンピア競技祭の創始者 **Zappas** も喜んでいるであろうと述べている。

競技会が終了した際、観戦した数千もの観客はたいへんに満足したようであった。その日の新聞にはその光景をギリシャの人々を称える光景として、「たいへんにユニークであった」、「本当に素晴らしい」と報じた²⁶¹。アテネでこのような光景はなかったとも伝えた。国王 **Georgiades** は、大十字勲章を、オリンピア委員会副会長の **Christidis Demetrios** に、その労を称えて授与することを発表した²⁶²。

²⁶¹ *Aion* 1870.11.16, Chrysafis p.83.

²⁶² Chrysafis, I.(1930)ibid., p.83.

この競技会の企画立案者は、Vousakis, Ioannou, Papadopoulos という 3 人のヘラノディカイ委員で、かつ彼ら教授たちの予想をはるかに超えての大成功であったようだ。彼らがまとめた最終報告書には、運動競技の部門に重きをおいて書かれている。そこには、祖先の偉大な名声を再生させたことで、競技祭の最中、観客が興奮していたようすが伝えられている²⁶³。主催者にとって、社会のあらゆる階層の人々が到来したことは、若者のための競技祭を多くの国民が渴望していたことを表していたと言える。オリンピア競技祭の運動競技に、社会のあらゆる階層の人々が集まってきたことが、その証明となった。

ディアウロス走の勝者 Skordaras は肉屋、レスリングと棒高跳びの勝者 Kardamylakis は労働者、円盤投げと槍的当て勝者の Sotirios は砲兵隊の伍長、ロープ登りの勝者 Drougas は学生、棒高跳び 2 位の Galiphos は大工、Trousas は石屋、Psykhas も労働者であった。

しかし同時にこのことは、警鐘を鳴らすことにもなった。ヘラノディカイ委員たちは、ギリシャに運動施設が欠いている点を指摘しつつ、このように、労働者階層の人々が多く参加した状況は、Zappas により始められたオリンピア競技祭を容易にパロディにおとしめる危険性をはらんでいると警告したのであった²⁶⁴。報告書の著者は、賞金はスポーツとは特に関係のない人々に、短期間練習して幸運を手に入れさせようと駆り立てると述べた。このようなことを将来避けるためには、彼ら自身の古代文化が繁栄した時代がそうであったように、体育の授業 gymnastics が、国の教育のすべてに導入されなければならないし、それはプロイセンの偉業とは関係なく、行われなければならないと結論づけた²⁶⁵。

また、彼らはパンアテナイ競技場を、国家の中心的なギムナジウムにして、ギリシャ全土の都市にギムナジウムを設置すべきであることを進言した。こうすることでのみ、「Evangelis Zappas が復興に精力を注いだオリンピア競技祭が、国民の教育的な関心に貢献することができ、体育の国民レベルでの必要性を満たすことができる²⁶⁶」。

この報告書では、オリンピック競技会復興の理念が、初めてギリシャにおけ

²⁶³ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1871) Λόγος απαγγελθείς. *ibid.*, pp.2-18.

²⁶⁴ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1872) Ολύμπια του 1870. *ibid.*, p.171.

²⁶⁵ 普仏戦争で勝利した後、プロイセン帝国は、軍事的路線を強めていったことを指していると思われる。

²⁶⁶ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1872) Ολύμπια του 1870. *ibid.* p.172.

る体育の振興と結びついたと言える。

ヘラノディカイ委員会は、国家が公的に大衆の運動を提供すべきだと主張した。その理由は、若者の健康と身体的な健全さに対処することにより、それが同時に国家の目的に貢献するとの認識からであった。当時の若者は国外の危険に際して、母国の存続に備えなければならなかったのであった。

またオリンピック委員会副会長の K.D. Christidos は、1871 年 3 月 14 日の閉会式に行われたスピーチで、このオリンピック競技祭について、「裸体競技はパンアテナイの競技場で周知のとおり成功裏に終了した。古代のパンアテナイアの競技場で 11 月 8 日に行われ、国王、王妃ご列席のもとに 3 万人の観衆が集まり、大成功であった」と述べた²⁶⁷。

この講演は、運動競技と二本立てで開催された産業博覧会の閉幕を記念して行われたのであるが、この時の産業博覧会は 4 カ月間もの長きにわたって行われたため、一般市民の関心が薄らいでしまったことに副会長 Christidos は言及し、産業博覧会の期間を縮小する必要性があることを訴えた。

この内容は、市民の運動競技のオリンピック競技祭への関心の高さを対照的に示している。1870 年当時におけるアテネ市内に住む人口は 5 万人程度、近郊のピレウスを含めても 6 万人以下であり、オリンピック委員会発表の 3 万人の観客というのは、誇張があったにせよ、相当の規模の人数である。

しかしながら、1870 年のオリンピック競技祭の一部である産業博覧会でも、ギリシャの各県、各郡より 1200 余りの作品が集められ、コンスタンティノポリスやアレクサンドリアなど、外国に住むギリシャ人の作品が、30 点程出されたことは注目に値する。

1859 年にアテネで開催された第一回オリンピック競技祭の課題は、競技場の整備と古代オリンピック競技祭に近い形での競技会の開催であった。前者については、Zappas の全遺産の寄付によりその道が開かれ、ドイツ人考古学者 Ziller の活躍により、早いピッチで作業が進められた。整備された競技場で開催された第二回オリンピック競技祭には、3 万人もの観客を集めることができ、前回の課題は克服されたと言える。

一方、後者の課題については、オリンピック競技祭の一部である産業博覧会が 11 月から 3 月まで開催され、政府もこの博覧会に力を入れるのみならず、芸術や音楽作品についての賞も取り入れた。これは当時のギリシャのオリンピック委

²⁶⁷ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1871) Λόγος απαγγελθείς. Ibid. pp.10-11.

員会が考えた古代オリンピック競技祭の復興の姿と考えたからであった。さらには詩歌を取り入れ、幅広い競技会を確立しようとした。運動競技のみならず、産業製品、芸術、知的学問での競技などを含めたものが、19世紀にふさわしいオリンピック競技会と考え、実行に移したと言える。

産業製品の競技はオリンピックとは相容れない、とする先行研究は多い。しかしながら、近代19世紀の後半においては、産業振興は国家的な命題であるとともに、オリンピックそのものが、産業の発展を基盤にして展開される素地を、第二回オリンピック競技祭は示していたといえることができる。

また、芸術競技が産業製品の中の一つのカテゴリーとして設置され、絵画や彫刻、建築などが行われたことは、芸術競技への確立に向けて、大きな前進であったと言えよう。これは、Museの崇拜という、新たなオリンピック競技祭の理念が加わったことの現れであった。

古代の競技場を復元して行ったこととも関連して、競技の古代の習慣を取り入れるなどの努力により、一定の成果をあげたと言える。

また一方で、当時の各国の影響を受けた面も指摘される。競技種目は、新たにドイツ体育のほか、実施には移されなかったが、水泳や漕艇などの競技なども計画されていた。さらにはアマチュアリズムの考えがギリシャでも芽生え、次回のオリンピック競技祭の参加資格に、影響を及ぼすのであった²⁶⁸。

1870年開催の第二回オリンピック競技祭は、競技の参加者がギリシャ全土から集まり、さらにはトルコ領のセッサロニキ、クレタ、コンスタンティノポリスからも出場するなど、第一回オリンピック競技祭より、全ギリシャ的、全民族的な競技祭となった。

以上のように、芸術競技などが拡充されたことなども含め、第二回オリンピック競技祭は、競技種目や競技規則、各種委員の名前などに見られるように、古代とのつながりをより強めようとしたオリンピック競技祭であったと言える。

²⁶⁸ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, pp.87-88.

第2節 第三回オリンピック競技祭（1875年）

1. 第三回オリンピック競技祭の理念

1-1. アマチュアリズム的考え

第二回オリンピック競技祭の終了後に、競技者の出自について批判が出された。古典学者であり、第二回オリンピック競技祭のヘラノディカイの一人であった **Phillippos Ioannou** が、報告書の中で、「労働者階級の人々が出場して優勝したことはこっけいだった、彼らは金儲けのために参加した」と非難した²⁶⁹。ディアウロス走の優勝者 **Skordaras** は肉屋、ポール登攀の優勝者 **Troungas** は石切職人、レスリング優勝者 **Kardamylakes** は手仕事の労働者であった。**Kardamylakes** はクレタ島出身であったが、オリンピック委員会が交通費などを手当てした事でアテネに来ることができたのだった。**Ioannou** は、そのような状況は、オリンピック競技祭を無意味なパロディにしてしまったと厳しかった。彼は、オリンピック委員会は、教育を受けた若者を参加させるようにするべきであったと述べた。そして、ギリシャ内の学校や大学に競技の練習を導入するとともに、体育学校 (**gymnasion**) もアテネ市内に設立すべきであると考えていた。この考えは、アマチュアリズムの考えに相当するものである。

労働者階級の人々がスポーツに参加させないようにしたアマチュアリズムの考えは、イギリスで始まり、その考えがギリシャに導入されたためなのかどうかは定かではないが、1870年代のギリシャで、同様の考えが表明されたのであった。

Ioannou は次回のオリンピック競技祭は、エリートたちだけに限定するべきだとした。実は1868年に「アテネ国立体育学校規定」(**KANONONISMOS TOY EN AΘHNAIS ΔΗΜΟΣΙΟΥ ΓΥΜΝΑΣΤΗΡΙΟΥ**) が発布され、これまでの体育場が体育学校として、体育教師の養成にも力を入れ始めた時であった。また、中等学校や小学校では、体育の授業が必修になり、体育学校の指導者と連携して、生徒や学生の体育が、活発に行われようとしていた時であった²⁷⁰。そのようなことを背景として、オリンピック・遺産管理委員会は、**Ioannou** の意見に基づき、学

²⁶⁹ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, p.84.

²⁷⁰ Dimitriou, M. (1995) *Leibeserziehung und Sport in Griechenland 1829-1914*. Sankt Augustin. p.87.

生や軍人などに参加を限定することにした。

アテネの体育学校の校長には、古代の競技や体育にも詳しい Ioannis Phokianos (1845～1896年) が 1972 年に任じられた²⁷¹。

Phokianos は、1845 年 11 月 30 日にアテネに生まれ、アテネ大学自然科学部に学んだ。やがて彼は国立体育学校で、Offendorf や Pagon の指導のもと、体育を学び、1868 年に Phokianos は体育の指導者になり、生徒たちを教えるようになった²⁷²。

そして第三回オリンピア競技祭のオリンピア競技祭の運動競技部門の責任者に Phokianos が就任した。彼は、参加資格を大学出身者か学生などに限定することにした。そして参加予定の競技者はアテネの国立体育学校などに通う事が勧められ、前大会のような労働者階級の者が出場するのではなく、大学や高等学校出身の教養あふれる若者たちによる競技祭にしようとしたのであった²⁷³。

古代のアスリートはアマチュアであったとの論が 19 世紀から 20 世紀にかけて、古典学者や古代のスポーツ史研究者らにより主張された。それは Mahaffy や Gardner などの 19 世紀の研究者が主張し、E.N. Gardiner が後に体系づけた²⁷⁴。1870 年代にギリシャで取り上げられたアマチュアリズム的考えは、スポーツ史研究者らにより批判された。アマチュアリズムは階級差別を前提としていた、との見解からである。例えば、D.Young は、第二回オリンピア競技祭は 3 万人もの観衆が集まったのに、第三回オリンピア競技祭ではその約半分に減ってしまったことは、労働者階級を排除したからとの見解である²⁷⁵。しかしながら、運動競技のトレーニングを日常的に行っている者が、競技祭に出場する、というのは、古代オリンピア競技祭においては重要なことであった。古代の競技者は、祭典の始まる一定の期間（およそ 10 カ月間）、トレーニングに励んだことを宣誓しなければならなかったし、各都市には、ギムナシオン、パライストラという、競技の練習場が完備されていたのである。古代オリンピア競技祭は、青少年を運動競技への興味を喚起したし、そのためにギムナシオンなどでのトレーニングがパイドツリベースやギムナステースという教師やコー

²⁷¹ Georgiadis, K. (2004) *ibid.*, p.43.

²⁷² Dimitriou, M. (1995) *ibid.*, p.86.

²⁷³ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, p.89.

²⁷⁴ 第二章 資料 5 参照のこと

²⁷⁵ Young, D. (1996) *ibid.*, p.47.

チにより、行われていた。オリンピア競技祭をめざしての青少年教育が施されていたのであった。アテネのギムナシオンに通うか大学や中等教育学校などで、一定の練習を積んだ者が出場できるという条件は、古代オリンピア競技祭の継承ということを考えた結果、産み出された規定なのであった。

また、このことは、初等、中等学校などの教育現場における体育の普及にも関連した。ギリシャでは、こうしてオリンピア競技祭とともに、学校における体育の授業が普及していった側面があったと思われる。これはオリンピア競技祭開催の成果の一つであろう。

1875年の第三回オリンピア競技祭は、産業製品のほかに、次の競技が予定されていた²⁷⁶。

射撃、競馬、戦車競走、水泳競技、マスト登攀、
その他の身体競技（ΣΩΜΑΤΙΚΟΥΣ ΑΓΩΝΑΣ）、音楽競技、詩歌競技

ここにあげられている水泳、戦車、競馬は実際には行われなかった。ここで注目すべきは、詩歌競技が加えられたことである。

産業製品の競技の中には芸術的な競技も行われているので、近代国際オリンピック競技会で行われた芸術競技（絵画、彫刻、建築、詩歌、音楽）は、すべて1875年のギリシャのオリンピア競技祭で行われたことになる。但し、近代国際オリンピック競技会のように、スポーツやオリンピックにテーマを限ったのではなく、自由なテーマであった。

芸術競技は、古代ギリシャの祭典では広く行われていたと解釈されていた。実際にはオリンピアでは行われていなかったのだが、詩人や芸術家が祭典の期間中は集まって来たので、古代オリンピア競技祭が、彫刻、絵画、詩歌などの発展に寄与したことはまちがいがなかった。1875年当時のオリンピア関係者は、芸術的な競技を実施することも、古代オリンピア競技祭の復興につながると判断し、導入したことがうかがわれる。この発想は、後のCoubertinと同じ発想であったと言える。

1-2. オリンピア競技祭と若者のトレーニング

第三回オリンピア競技祭は、近代ギリシャにおいて、青少年の教育に資するオリンピック競技会の意味を最初に提示したものであった。このことは、体育

²⁷⁶ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Κανονισμός προς συγχρότησιν της Γ' περιοδικής πανηγύρεως. Athens. p.12.

を奨励し、体育を学校へ導入する手段として効果的であったとも言える。1875年のオリンピア競技祭は、体育を中心的に教えるギムナシオンに対する人々の関心を招いた。当時のギリシャでは、スポーツの開拓に携わる競技クラブなどは、ほとんどなかった。教育に責任のある人々の大多数は、当時の時代精神やイデオロギーに揺り動かされたが、彼らは学校での軍事的な演習や軍事的な体育のみが、民族的な統一を実現する手段であると信じていた。そのような折、Phokianos がアテネに体育クラブを創設し、そこでトレーニングを受けた者がオリンピア競技祭に出場できることが示されたことにより、体育クラブに通う者が急増したのであった。

このことは、1875年のオリンピア競技祭をどのように解釈したのかに大きく影響していた。新聞 *Aeon* には、1875年の競技会について、「劇場的な見せ物」または「我々ギリシャ人自身が、崇高な祖先の名声の厳粛な記憶をけがすような見せ物」と述べている。この論説は、見せ物には威厳があり、崇高でかつ国家的なものでなければならない、競技会は実用的な目的に貢献しなければならない、と主張しているようである。さらに、武器の使い方をよく知っていて、国防意識も高い、よく訓練された子ども達の様子を見てみたい、とも論じていた²⁷⁷。

Phokianos は、運動競技の教育的な価値を認識していたのだが、運動競技のこのような認識に対抗するのには無力であると感じたに違いない。競技会が終わると Phokianos は、新聞での批判に憤慨して、体育クラブの校長を辞任してしまい、故郷に戻ってしまう。当時の論説などから判断すると、オリンピア競技祭の理念について、メディアの支持が形成されていたとは言いがたい状況であった。しかしながら、古代オリンピア競技祭をはじめ、スポーツの競技会について、どのように解釈しようとしていたか、当時のオリンピア委員会関係者の言を辿ることができる。

先述した Phokianos は、一定の教育（体育）を積んだ者がオリンピア競技祭に出場するのにふさわしいと考えていたし、Phillippos Ioannou は、より鮮明に、労働者階級の参加を排除し、エリート階層だけに限ろうとした。オリンピア委員会副会長の Giannopoulos は、オリンピア競技祭を、「強さと知性、・・・平和的な考え・・・、当時の政治的な対立における調和・・・、ギリシャ人の

²⁷⁷ *AION* 5.19 1875. Chrysafis, I.(1930)ibid.,pp.100-101. Chrysafis は Philemon の言葉を引用している。

連帯、自己評価と競争心」などと表現した²⁷⁸。このように、オリンピア競技祭に対する見解は、古代の競技祭への関心が深まるにつれて、多様な解釈が施されていったのである。

2. 第三回オリンピア競技祭の規定と競技内容

2-1. 第三回オリンピア競技祭における産業博覧会規定とオリンピア委員会

「第三回オリンピア競技祭のためのオリンピア・遺産管理委員会による規定」が 1874 年 7 月に、オリンピア・遺産管理委員会副会長 Giannapoulos と、内務大臣 Voulgaris D.G.の名前で公表された²⁷⁹。その内容は次の通りである。

A: オリンピア競技祭の開幕と委員会の構成

第 1 条：委員会は 1875 年の復活祭の後の最初の日曜日に、オリンピア競技祭を開会する事を宣言する。祭典は連続して四週間行われ、4 週目の日曜日に閉幕する。

第 2 条：オリンピア競技祭の監督はオリンピア・遺産管理委員会が行う。

第 3 条：第二回オリンピア競技祭の王室条例の第 4 条に基づき、各郡の出身者から構成される各県オリンピア委員会を設置して、産業製品の出品を奨励する。

第 4 条：県オリンピア委員会は 5 人で構成され、1 人は県庁所在地の市長、経済担当者、他の 3 人は専門家とする。

第 5 条：各県、各郡のオリンピア委員会のリストを中央のオリンピア委員会に送る。

第 6 条：各郡のオリンピア委員会は、第三回オリンピア競技祭に関する現行の規定とプログラム、博覧会についての案内などを公表しなければならない。

第 7 条：委員会は、工業製品や農産物の生産者の熱意を喚起することに注意を払うことが主な任務である。

委員会の活動の結果をオリンピア委員会に至急、報告する。

第 8 条：委員会は、より多くの人たちがオリンピア競技祭に参加して、その目的を多くの人々が理解するように、オリンピア競技祭についての説明

²⁷⁸ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.47.

²⁷⁹ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Κανονισμός προς συγχρότησιν της Γ' περιοδικής πανηγύρεως. *ibid.*, pp.3-14.

や意見を提出する。

B. 製品の承認と分類

第 9 条：展示作品の分類は、後に公表される規定による。

第 10 条：展示として認められる全ての展示品は、製品や産物はギリシャ産の農業、一昨年以降に国内で開発された工業製品で、ギリシャ人またはギリシャ国内に住む外国人が製作したもので、委員会がふさわしいと認めた製品や産物である。

第 11 条：展示される製品は前回のオリンピック競技祭と同様、賞品が授与される。

第 12 条：博覧会の施設における個々の価格は、外国から招聘された機械工具の専門家により査定される。

第 13 条：次の製品は認められない

- a. 展示の期間中、破損しないためのメンテナンスを要するもの
- b. 拘置所にあるような危険が伴う椅子
- c. その他オリンピック委員会がふさわしくないと認めたもの

第 14 条：発酵や燃焼する物は一つ一つを覆うことで展示が認められる。

第 15 条：国家産業博覧会への参加希望者は自身の市庁舎に書類を提出して申し込み、登録された後に博覧会の目録に掲載される。

第 16 条：県または郡ごとの展示品の目録の複製品をオリンピック委員会に送る。

委員会は事務局を構成し、表題をつけて博覧会への申込書をまとめる。オリンピック委員会は、郡や県の県庁所在地に各県のオリンピック委員会の事務局に申込書などを置くことが望ましい。

第 17 条：申し込み書は現在の規定が公表されて以降、1875 年 2 月の初めまで受け付ける。その後申し込みを各委員会で締め切り、署名し、オリンピック委員会に送る。

第 18 条：展示製品は、オリンピック委員会の定める一定の期間内に、県の委員会により配達されることが望まれる。

(第 19 条以下略)

C. 産業製品の送付と保管について

D. 博覧会の安全上の任務

E. 展示作品の審査とヘラノディカイの任命

第 38 条：展示作品の審査は、ヘラノディカイの判定によりなされる。ヘラノディカイは、3 人の特別委員会で構成され、彼らは博覧会の開会の前

日に任命される。彼らは、内務大臣名で出された第二回オリンピック競技祭の王室条例第5条に基づき、オリンピック委員会の提案により決められる。ヘラノディカイ委員会会議に委員長が出席できない場合は、内務大臣により任命されたオリンピック委員会副会長が代理となる。ヘラノディカイ特別委員会は、各産業製品の判定会議を設定するが、その際に、2人まで専門家を採用することができる。ただし彼らは意見を述べるにとどまる。

第39条；オリンピック委員会の構成はよく熟慮し、一人は郡の委員か領事館の者を入れる事が望ましい。

F. 賞について

第47条：オリンピック競技祭では次の賞を授与する

- 1) 一位に金製のコイン（メダル）
- 2) 二位に銀製のコイン（メダル）
- 3) 銅製のコイン（メダル）
- 4) 賞状

また第二回オリンピック競技祭に関する王室条例に基づき、次の競技に賞金が授与される。

作曲、射撃、競馬、戦車競走、水泳、登攀とその他の身体競技

ギリシャ王室

オリンピック・遺産管理委員会²⁸⁰

以上の規定から、第三回オリンピック競技祭におけるオリンピック委員会の特徴がうかがえる。

まず、オリンピック・遺産管理委員会が、オリンピック競技祭すべてを統括する委員会と位置づけられている。そしてこれまでの過去のオリンピック競技祭と同様に、各県と各郡にもオリンピック委員会が設置され、地方の産業製品を積極的に出展することが義務づけられていた。県のオリンピック委員会には県庁所在地の市長が入っていることからわかるように、中央政府と地方政府が関係して、産業製品が提出されるような仕組みになっていた。そのような意味で、国家的

²⁸⁰ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Βασιλείον τις Ελλάδος. Basiliki Tipographia : Athens. pp.1-10.

な産業博覧会であったと言える。

また、出展作品の審査は、全部で3人のヘラノディカイによりなされる。このヘラノディカイの役割は重要で、彼らはオリンピック委員会のメンバーであった。その委員長には、内務大臣により指名されるオリンピック委員会副会長が就任することが決められていた。このことから、ギリシャ国家が直接主導した祭典であることがうかがえる。

また、地方政府に出された以下の畜産製品に関わる出典依頼の規定に見られるように、国家的な政策のもとに、オリンピック競技祭が展開されていたことがわかる。

次の回状は、各地方の自治体に送られたものである。

県知事、郡長、市長へ

一般的に農業は、創設された最初の始まりはずっと人類の生活やすべての経済にとって必要なもので、穀物の耕作や植物や樹木の栽培、園芸などに細分化されている。

オリンピック委員会は、重要な部門である国家の産業製品や産物、牧畜などの発展に関わる義務がある。これらは1859年の第一回オリンピック競技祭の産業博覧会で行われたのに続き、魅力あふれる第三回オリンピック競技祭に、諸氏の出席を招待したい。畜産製品と羊飼、多様な動物、鳥と餌を選択して適切に派遣してほしい。

(略)

1875年2月11日

副会長 P.Emm.Gianapoulos

県知事や代表団、知事などに宛てられたオリンピック・遺産委員会による別の回状には、オリンピック競技祭の目的が、国家の知的、道徳的、物質的発展の成果に基づいた作品を展覧することとしている。同時に、オリンピック競技祭は、地方における貿易のためのものではないし、バザールのような市場でもないとしている²⁸¹。そして、適切に評価するために、政治的な指導者や「地方自治体オリンピック委員会」に対して、ギリシャ蒸気汽船会社より50%割引の、乗船券

²⁸¹ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1878) Ολυμπίων περίοδος Γ' έτος 1875. *ibid.*, p.87.

を準備することにした。この割引の目的は、地方自治体の役人たちがアテネに来て、古代の *theoria*（公式訪問）の制度と同様に、意見や情報を交換するためであった。その回状は同様に、さまざまな町が、オリンピア競技祭を支援するための「地方オリンピア委員会」を設置されていることを示している。

このように、各県、各郡のオリンピア委員会により、各地の産業製品が出展され、アテネにおいてヘラノディカイが審査するという機構であった。ヘラノディカイ、という古代オリンピア競技祭で重責を果たした競技役員名は、そのまま近代のギリシャに引き継がれ、第三回オリンピア競技祭においても、産業製品競技の裁定という重要な役割を果たしたのであった。

2-2. 第三回オリンピア競技祭における運動競技規定

運動競技の規定については、「オリンピア競技祭における運動競技の規定」が 1874 年 12 月に発表された。その内容は次のものである²⁸²。

第 1 条；オリンピア競技祭の運動競技の目的は、来たるオリンピアードの期間中、アテネにおいて、青年たちが放課後にパンアテナイ競技場で身体を訓練するようになるために裸体競技を行うものである。

行われる競技は次のものである。

- 1) ディアウロス走
- 2) 三段跳び
- 3) 溝越え立ち幅跳び
- 4) レスリング
- 5) 円盤投げ
- 6) 的当て槍投げ
- 7) 棒高跳び
- 8) マスト登り
- 9) ロープ登り
- 10) 斜めマスト登り

第 2 条：大学出身者か大学生、またはアテネ市民体育クラブまたは同様の教育を受けた者で 17 歳以上の青年か上流階級の青年が出場できる。

登録には学生であることを示す、大学か公立中等学校またはそれに匹敵する学校の管理者が発行する証明書を提示しなければならない。

²⁸² Chrysafis, I.(1930) *ibid.*, pp.92-93.

その他の若者は競技委員会の専門家の判断により決定される。

登録が認められた者はオリンピック委員会の専門書に氏名、年齢、故郷名、教育機関名が掲載される。

第3条：授業や体育の訓練についての時間は、体育長官が両立をはかりながら決める。学生の規定の授業時間は必要に応じて管理者間の合意のもとで決められる。登録された青年は、一定期間、ギムナシオンに通う義務があり、それぞれの仕上げのための訓練に精を出さなければならない。

第4条：軍の関係者で競技に列席する人は、ギムナシオンにある専門の委員会に翌年4月10日までに申し出なければならない。

第5条：競技委員会の専門家に次いで、体育長官が訓練の発展ぶりがわかるように各書類を提出する。

第6条：競技委員会の専門家は、必要と判断したときはいつでもギムナシオン（体育クラブ）に出向くことができる。オリンピック週間の開幕前に、参加競技者たちの一般的な検査を行い、その結果から優秀な競技者を選んでおく。

第7条：トレーニングは毎回公共のギムナシオンで行われるが、ディアウロス走だけはパンアテナイ競技場で行われる。

1874年12月18日

オリンピック委員会副会長

P.Emm. Gianapoulos

この運動競技の規定から、次の事が言える。

運動競技の目的として、青年たちが放課後に、身体をトレーニングするようになるために裸体競技を行う、ということが明記された。つまり、身体の訓練を行うことが参加するための大きな要素であった。一方、ここでの裸体競技という言葉の中に、心身の調和的な発達という意味が含まれていたとも海佐 h 区することができる。古代の競技を考える場合、裸体競技にはカロカガティイア（善にして美）という観念が盛り込まれていたものであり、1875年の時点で、そのような考えは当然、古代学の専門家であれば理解していたと思われる。調和的発達や身体的強さと知性、平和的な考えなどを、オリンピック委員会副会長 Gianapoulos は表明していた²⁸³。

²⁸³ 本論分 p. 195 参照。

また、17歳以上の若者で教育を受けた者という具合に、出場資格が厳格に決められた。エントリーするには、大学や中等学校が発行する証明書が必要であった。また体育クラブに通って、専門的なトレーニングを積む事が推奨された。

また、古代オリンピア競技祭では、約1ヶ月間、オリンピア近くのエリスのギムナシオンで、ヘラノディカイのもと、トレーニングを受けた。そしてオリンピアでの競技祭に出場するのにふさわしいかどうかを検査したのであった²⁸⁴。このことと同じように、1875年の第三回オリンピア競技祭においても、アテネの公共のギムナシオン(体育クラブ)において、参加する競技者たちは、練習を行う事が義務づけられていた。この規定から、古代オリンピア競技祭と同様にすることで、日常的にトレーニングを行わない労働者階級の人々の競技への参加を阻もうとしたとも考えられる。

2-3. 第三回オリンピア競技祭における産業博覧会と芸術的競技

産業博覧会の産業製品は次のように分類された²⁸⁵。

- A : 鉱物と金属 (1-7)
- B : 農業製品、畜産製品、園芸、狩猟、漁業、林業 (8-16)
- C : 化学技術 (17-20)
- D : 食料品 (21-28)
- E : 機織り、紡績、編み物 (29-39)
- F : 皮なめし業 (40-43)
- G : 加工金属 (44-49)
- H : 加工材 (50-55)
- I : 石製品、セラミック (56-58)
- J : 筆記技術、工業的図面、紙製品の技術 (59-64)
- K : 収集と創作のための道具、器具や機械 (64-76)
- L : 土木工学技術、航海術、軍事技術 (77-79)
- M : 音楽と楽器 (80-81)
 - オルガン、作曲
- N : 芸術 (82-84)
 - 建築 (図面、一般市民の建築業者)

²⁸⁴ Pausanias, ΕΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙ. *ibid.* 6.23.1.

²⁸⁵ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1878) Ολυμπίων περίοδος Γ' έτος 1875. *ibid.*, Athens.pp.3-13.

絵画（油絵、水彩画）

彫刻（彫像、レリーフ、彫像の模型、写真作品）

Ο : 市民の倫理、身体的教育 (ΥΛΙΚΗΝ ΜΟΡΦΩΣΙΝ) (85-94)

85;初等教育、中等教育学校と専門学校における健康面の計画

86;体育 (ΓΥΜΝΑΣΤΙΚΗ) に関するもの

87;音声学、オルガン等の音楽の教師

88;初等、中等、専門教育に関する指導書

農業、牧畜などの生計を立てるための書

市民が利用できる学術雑誌

専門的な分野の学術雑誌

89;教育機関の作品

90;女性用の花びらの作品、娯楽や余暇のための作品

91;専門学校の作品、アテネ工科大学、孤児院学校の作品

92;病院、市役所など公共施設の計画

93;公共施設や会社における一般労働者の賃銀に関する情報

94;市民の衣裳の使用についての考察と見本

p : 古代の道具や器具の使い方の展示

以上のように、産業製品の競技では、16 クラス、95 品目についての競技が行われることになった。それぞれのカテゴリーについて、さらに詳細な分類が施されていた。例えば、A の鉱物や金属製品は、さらに細かく 7 種類に分けられ、それぞれで賞が授与されることになっていた。鉱物や金属製品に関する要綱には、鉱業・金属製品についての歴史が古代ギリシャ時代のコインやメダルについて紹介され、鉱物や金属の含有量や精製方法などについてが記されている²⁸⁶。

第二回オリンピア競技祭における産業製品は 10 クラス 80 種類であったので、さらに増えたことがわかる。土木工学、加工金属や加工技術など、科学技術に関する展示品や産業製品が増えるとともに、身体的教育クラスでは、学校における体育についての展示品も扱われた。

第三回オリンピア競技祭の産業製品競技は、1200 点もの作品がギリシャ各

²⁸⁶ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1875) Περιγράφε διάφορων

μεταλλευτικών προϊόντων του Λαύριου και Ωρωπου εκτέθεντων κατά την 'Γ περίοδον των Ολυμπίων. Typographia adelphon perri : Athens. pp.3-14.

地から集まり、外国からも 72 点が寄せられた。これは当時のギリシャで最も盛大な産業博覧会となった。外国からの出典には、パリ、ローマ、コペンハーゲン、アレクサンドリア、オデッサそしてコンスタンチノーブルより出展があった²⁸⁷。またオスマントルコに支配されていた地域、クレタ、テッサロニキ、スミルナ、ヒオス、セレスなどの地域から、ギリシャ人の派遣団がアテネにやってくる。

産業博覧会の開会式は 1875 年 5 月 4 日に行われた。そこでは、アテネ大学の Andreas Anagnostakis が、4 年間（1871-75 年のオリンピック）における国家の知的発展について演説した²⁸⁸。また歴史学の教授、Tsivanopoulos Sokratis の特別講演もあり、古代ギリシャ・ローマの文学、建築、哲学、歴史、近代ギリシャ文学、詩歌などの研究から、ギリシャ人による科学の進歩について論じた²⁸⁹。Anagnostakis は、第三回オリンピック競技祭において、数学的、科学的な面を扱う競技が加えられることは大きな意味があると強調した²⁹⁰。

二人の学者がギリシャの発展について論じたことは、オリンピック競技祭の意義を確認するという意味で重要な事であったのだろう。オリンピック競技祭における体育や運動競技の面については直接触れられなかったが、しかしながら、1875 年のオリンピック競技祭における競技種目の整備は、着実に進められていた。

・芸術競技

産業製品のカテゴリーの一つに、音楽（作曲）と芸術（建築、絵画、彫刻）がそれぞれ設けられており、芸術的競技が着実に確立しつつあるようすを示している。

音楽競技は、それまでのギリシャ音楽に大きな変化をもたらすこととなった、という点で、特筆すべきことであったようだ。ヘラノディカイ委員が判断したように、ギリシャ音楽、特に教会の音楽は、他のヨーロッパ人からは、ギリシャ人の征服者から発する耳ざわりで陰鬱な音楽と考えられていた。したがって、

²⁸⁷ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.43.

²⁸⁸ Anagnostakis, A. (1875) Λόγος Ολυμπιακός : Εκφωνήθεις κατ εντολήν της ακαδημαϊκής σύγκλητου τη 4 Μαΐου 1875, επι τη' Γ'. Εορτή των υπό του αοίδιμου Ευάγγελη Ζάππα Ιδρυμένων Ολυμπίων. Tipographia adelphon perri : Athens. pp.3-35.

²⁸⁹ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.43.

²⁹⁰ Anagnostaki, A. (1875) *ibid.*, p.17.

これまでの固定観念を払拭して、ギリシャ音楽の多様さを表現することが推奨された。このことは、若い音楽家を勇気づけることになり、多くの作曲がなされ、25人もの作曲家が受賞した。賞を得たのは Andreas というコルフ島出身の航海士で、シンフォニー3曲、そのうち2曲は軍隊音楽ではあったが、彼は後に多彩な行進曲を作曲した²⁹¹。

彫刻と絵画部門は全部で18の作品が受賞した²⁹²。彫刻の銀メダル：第一位には、Halepas というギリシャ人彫刻家で、ミュンヘンに住んでいた。テーマは「サティルスとエロス」であった。本人は故人となっていたので、賞は妻の Ioanna Kossou に渡された。

絵画競技での一位のメダルは、Varouchas Georgios というローマ在住でギリシャの独立戦争の兵士と Paparrigopoulos Ioannis という医師の肖像画の作品に贈られた。作品を選ぶ際に、審査委員の間で問題が生じた。その結果、Lytras Nikiphoros という絵画の教授は、受賞を決める会議から除外された²⁹³。このことは芸術作品の優劣を競うことの難しさを示していた。後の近代国際オリンピック競技会の芸術競技が中止になった理由の一つに、審査の基準が難しいということがあったが、ギリシャのオリンピア競技祭での芸術的競技において、既にその要素が含まれていたと言える。

産業製品の一部ではなく、独立して行われた詩歌競技は応募のしめきりが1874年5月20日であった。しかし応募者がいなかったため、1875年1月31日まで延長された。ザッピオン展示ホールでの開会の日、4年間のオリンピック（1871年から1875年）に作られた詩人による詩歌が、アテネ大学教授、Sokratis Tsivanopoulos により、ギリシャ民族の知的発展への記念として発表された²⁹⁴。知的発展を称えるという、Soutsos らが目指したオリンピック競技祭の理念が、ここで加えられたこととなる。

また、Soutsos や Rangavis が書き残した詩を作曲することも、このオリンピック競技祭で行われた。例えば、Alex. Soutsos による「物乞いの老人」、そ P. Soutsos による「故郷に捧げる頌歌」、A. Rangavis の「詠唱者」などであった。Soutsos の詩の中には、「ギリシャの子どもたちをオリンピアへ、古代

²⁹¹ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.45.

²⁹² Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.45.

²⁹³ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.45.

²⁹⁴ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.45.

の時代へ連れて行こう、ギリシャ、光り輝く未来、すばらしい王宮」という下りがある²⁹⁵。これらの詩を作曲することは、オリンピア競技祭に関わってきた人々の精神を継承しようとした現れととらえることができよう。

また Georgiadis は、オリンピア競技祭によって結ばれる国家同士の平和という考えは、1875年に E. Zappas の記念として書かれた詩の中に、平和の観念が既に表現されていたとする²⁹⁶。

競技会が戻ってきた。さあ平和の大勝利が君臨し
母親たちの子どもらに、もう血を流す事はないと称える
人々のあるところ、今ではもう同胞たちだ
昨日はお互いに見知らぬ者が立っていたのか。
人々を一つにする力は何だろうか
彼らを孤独と結びつける力は何だろうか。

(この詩は 86 行あり、「アテネにあるパナシナイコ競技場での 1875 年のオリンピア競技祭」という名前がつけられている)

オリンピック休戦のことばは出て来ないが、平和を意味する詩歌が登場したのであった。

式典とは別に、Rodokanakis 文学賞という、スポンサー名がつけられた、500 ドラクマの賞金はミュンヘンの文献学の学生、Konstantinidis Georgios に渡された。タイトルは、「ホメロスの文献学」であった。ほかにエッセイでこの賞を受賞した作品が読み上げられた。そのタイトルは「ギリシャ人の間の神性への崇拜」であった。

オリンピア委員会が各地で設立され、それぞれの委員会で中央に出展する作品を選んだことも特徴の一つである。国家的な行事として出発した後、オリンピア競技祭は徐々に、ギリシャ国内の「市の（郡の）オリンピア委員会」のネットワークとして設立されたのではなく、海外に住むギリシャ人の「民族的委員会」としての機能を持たせて設立され、オリンピア競技祭開催のための事業を支援することになった。1875年のオリンピア競技祭は、全ヨーロッパはもとより、東地中海からも参加があり、このことは、オリンピア競技祭が、産業、

²⁹⁵ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων(1875), Ολυμπίων περίοδος Γ' έτος 1875.

ibid.,p.5.

²⁹⁶ Georgiadis, K. (2003) ibid.,p.51.

文芸、芸術、スポーツなどの多分野でのギリシャ人の進歩をはかる機会として、ギリシャ人に植え付けられたといえる。

交易関係の発展、情報交換、芸術の奨励と発展、各地にいるギリシャ人同士の密接な結束を促したことは想像に難くない。その効果は、1896年に行われた第一回近代国際オリンピック競技会においても継承された。エジプトのアレクサンドリアに住む George Averof (1815～1899年) は、アテネでの国際的なオリンピック競技会の開催のために、巨額の資金を提供したが、これはギリシャ独自のオリンピア競技祭の積み重ねのもとに築かれたギリシャ人のネットワークが下地になっていた。

2-4. 第三回オリンピア競技祭における運動競技種目と出場選手

陸上での競技と体操は、当初、5月18日にパンアテナイ競技場で行うことが計画されていた。プログラムでは、ディアウロス競走、三段跳び、幅跳び、レスリング、円盤投げ、的当て槍投げ、棒高跳び、ポール登り、斜めポール登り、棒跳び越し、平行棒跳び越し、バー上での運動、バー上での身体の曲げのばしなどであった。

先述したように、運動競技の祭典に、練習せずに参加することのないように、トレーニングと予選に参加できる人々は、規定により、17歳以上で、公私にわたる教育機関の学生達に限られた。

このことにより、多くの学生達がキフィシア通りのギムナシオン（体育クラブ）に通うようになり、Phokianos(1845～1896年)、彼の助手の Daniel Tziotis、そして Aristidis Ioannidis の指導を受けるようになった。Phokianos は 1868年にアテネ公立高校の体育教師になったが、1875年にオリンピア競技祭の体育長官 *gymnasiarch* に抜擢された。Phokianos は、すべての社会階層の若者は運動競技に共に参加すべきである、と考えていた。オリンピア競技祭への参加は、若者に運動競技のトレーニングをさせることと考えていたので、学生達をして、無料で参加できるように促した。既に 1871年に軍事的な体育は学校や大学に導入されていた。Phokianos は、学生たちが社会で重要な地位について、心身を鍛える運動競技の理念を広めるものと信じていたことは、彼の弟子であった Chrysafis の書の中に認められる。

運動競技の競技会はスケジュール通りに、1875年5月18日の午後にパンアテナイ競技場で行われた。3人の大学教授がヘラノディカイ委員に就いた：Phillipos Ioannou, Makkas Georgios,そして Rouspoulos である。この競技会には国王 George I 世は政治的な難問に直面していたため出席しなかったが、代

理として宮内大臣が出席した。24人の選手が競技した²⁹⁷。

各運動競技の種目と上位入賞者は次の通りであった。

運動競技；射撃、乗馬、戦車競走、ボートレース、ポール登り、マスト登りや他の運動種目についての賞金を用意した。射撃は5月11日の日曜日にカライスカキスにて行われ、34人の市民と軍人が参加した。上位入賞した人物は次の競技者であった²⁹⁸。

- ・ディアウロス走：(往復競走)
 - 1位； Vasilios Tringas (アンフィッサ)
 - 2位； Michael Tzavaras (オリンポス)
 - 3位； Spyros Mekouris (エルミオディス)

- ・棒高跳び
 - 1位； Alexandros Pestalis (プラハ)
 - 2位； Samiotis Ioannis (サモス)

- ・槍投げ (的当て)
 - 1位； Michael Tzavaras (オリンポス)

- ・ポール登り
 - 1位； Konstantinos Soutsos (ナフプリオ)
 - 2位； Pavlos Zahariadis (イスマリア；エジプト)
 - 3位； Alexandros Pestalis (プラハ)

- ・円盤投げ
 - 1位； Zisis Saropoulos (マケドニア)
 - 2位； Michael Tzavaras (オリンポス)
 - 3位； Papageorgopoulos Ioannis (ゴルティナ)

- ・斜めポール登り
 - 1位； A. Ioannis (アテネ)

²⁹⁷ Chrysafis (1930) *ibid.*, p.100.

²⁹⁸ Chrysafis (1930) *ibid.*, pp.108-109.

- 2位： K. Molakidis （スミルナ）
- 3位； Ioannis Samiotis （サモス）

・ロープ登り

- 1位； K. Molakidis （スミルナ）
- 2位： N.Mesios （エピルス）
- 3位； Pavlos Zahariadis （イスマリア；エジプト）

18人の競技者中、アテネ近郊出身の競技者は、ポール登りの A. Ioannis だけであった。また外国在住のギリシャ人は、エジプト、トルコ、チェコから五人を数える。運動競技の競技選手も、出身地から考察すると、第二回オリンピック競技祭と比べて、より全ギリシャ的になっていたことがうかがえる。

賞はオリンピック委員会副会長の P.E. Giannopoulos により、1万5千人の観客の前で授与された。

彼らは皆、同じ白いシャツとズボン、それに青いウエストベルトを身につけて、観客の注目を浴びた。

射撃競技は、5月14日の日曜日に、独立戦争の英雄 **Karaiskakis** の記念碑から遠くないファリロで行われた。全部で35人の市民と軍人が競技に参加した。優勝者は **Konstantinos Kassavertis** という市民で、的の中心を当てて300ドラクマを手にした²⁹⁹。

²⁹⁹ Giannakis Th.(1992) ibod., p.57.



図版 8 第三回オリンピック競技祭の銀メダル

表には「ギリシャ王 Georgios」,裏側には、「オリンピック競技祭 競技役員 Evangelis Zappas」と書かれている

(Solomou-Prokopiou, A.(2004) Αθήνα 1896. p.34)

1875年の競技会は、新聞報道からすると、1870年ほどには成功しなかったように書かれている。

新聞は混乱した様子を取り上げ、特に競技を通じて改善する必要があることを論じた³⁰⁰。それらは、この競技会が真の全ギリシャ的でないとの理由で批判したのであった。というのは、すべての社会的な階層が出場したという訳ではなかったからであり、わずかな学生や生徒の出場という光景は、観客を落胆させた。さらにもう一つの問題として取り上げられたのは、スケジュールが遅れたことであった。そのためにすべての試技ができなかった鉄棒と平行棒の競技は、実際には行われたにもかかわらず、賞の授与は行われないことになってしまった³⁰¹。平行棒の競技は最初の競技として行われていたにもかかわらず、全員終了するまでに至らなかった。鞍馬も初めてギリシャ人の観客の前で行われていたはずであった。

³⁰⁰ ΕΦΗΜΕΡΙΣ 1875.5.20, ΑΙΟΝ 1875. 5.19, Chrysafis,I.(1930) ibid.,pp.100-102.

³⁰¹ ΑΛΗΘΕΙΑ 1875.5.20.

パンアテナイ競技場は、予定通りに整備が進んでいなかったため、観客が満足して競技を見ることができなかったことも批判の対象になった³⁰²。1870年の第二回オリンピア競技祭以来、競技場の復興が進められていなかったのであった。1870年当時は平面であったトラックコースは、1875年にはでこぼこになり、観戦する場所は、草と石で覆われ、落ち着いて競技を観戦する場ではなくなっていた。木製のベンチがいくつか用意されていたが、壊れていて、使えないものも多くあった。

これらの報道を根拠に、第三回オリンピア競技祭は失敗であったとする見解が先行研究には多いが、それは、競技場の整備がなされていなかったことによるところが大きかったのである。学生や兵士など、日常的に運動競技の練習に取り組むことができる人たちに限ったため、観衆の興味が薄れた、と Young は述べているが³⁰³、そのことでオリンピア競技祭そのものを失敗であったと決めるのは、新聞という史料に基づき過ぎていて、史料批判が足りないのではないだろうか。

本研究で論じるのは、ギリシャのオリンピア競技祭関係者が、古代オリンピア競技祭の伝統や価値を、当時の 19 世紀後半という社会に、どのように解釈し、それを生かそうとしたのか、と言う点にある。そのような視点で見て行くと、第二回オリンピア競技祭の時にはなかったことの一つは、青少年の教育、トレーニングという観点である。それを重視したために、参加できる社会階層が限られてしまうのだが、古代オリンピア競技祭の教育的な面を重視した結果とも言えるだろう。

もう一つの重要な新たな解釈は、詩歌などの知的競技を取り入れたことである。産業製品と運動の競技のみならず、芸術的競技、知的競技をあわせておこなったのが、第三回オリンピア競技祭であったと言える。

³⁰² Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, p.104.

³⁰³ Young, D. (1996) *ibid.*, p.48.

3. 第三回オリンピック競技祭の特徴

以上から、第三回オリンピック競技祭の競技理念、競技規定の内容と競技種目、オリンピック委員会の構成などから、特徴としてつぎのことが言える。

理念としては、Soutsos などが当初目指していた、産業振興のみならず、知的競技も含ませて、ギリシャのすべての文化的な発展をうながすことがその目的になったことである。そして運動競技の面而言えば、競技のトレーニングに参加できる 17 歳以上の青少年に限られた。これは運動競技の規定にも示されているように、練習や教育の重要性を促す事にもなった。文化的な発展をうながしつつ、教育の重要性が増した。産業製品の競技においても、学校での体育や教育の内容が盛り込まれたことにもそのことがうかがえる。

オリンピック委員会は、これまでと同様に、各郡、各県のみならず、ギリシャ国外の地域にも民族的委員会として設置され、そこから産業製品や運動競技の競技者のみならず、芸術的競技や詩歌競技などに応募する者が現れた。その意味で、全ギリシャ的な要素が強まったと言える。

古代との接点については、古代とのつながりが、より強く認識していたと言える。例えば、ヘラノディカイの重要性、事前の運動競技のトレーニング、芸術的競技の充実などは、古代との継承を意識したものであった。

実際に行われた競技としては、上記のことを反映させて、芸術競技に詩歌競技が加えられたことが変化した点であった。そして音楽競技、絵画、建築などを合わせると、近代国際オリンピック競技会において、後に実施された芸術競技が行われていたことになる。

産業製品の競技については、前回よりも種目数が増えて、科学技術を競うものと、教育的な内容が新たに加えられた点も特徴である。

運動競技については、古代の競技種目とともに、当時のドイツ体育として行われていた内容も含まれた。

以上のことから、第三回オリンピック競技祭は、産業振興のみならず、芸術、文化の発展と教育的な視点が盛り込まれたことが特徴であり、これらは、近代社会への適用のみならず、古代オリンピック競技祭の研究成果を重ね合わせたものと言える。産業博覧会のみならず、文化的、教育的要素を少しずつ加えていったオリンピック競技祭に変容していったと言える。

第3節 第四回オリンピック競技祭（1888,1889年）

1. 第四回オリンピック競技祭の理念

1-1. ザッピオン博覧会場の建設

ギリシャ政府と、ルーマニアに住む Zappas の遺産相続人との間の訴訟問題は継続されていた。ルーマニア政府の後押しのもと、ルーマニアに住む Zappas の相続人たちが、遺産を請求する裁判を起こしたためであった³⁰⁴。Zappas の遺言では、全財産はオリンピック競技祭の復興に充てると明言されていたが、相続人たちは納得しなかった。そのため、Zappas の従兄弟である Konstantinos Zappas とオリンピック・遺産管理委員会は、裁判が有利に展開するように、E. Zappas の遺言の内容を、忠実に実行しなければならなくなった。

1878年の春、オリンピック・遺産管理委員会は、まず中央体育クラブ（ΓΥΜΝΑΣΤΕΡΙΟ）の建築物を購入した。そこには特別の設備があり、教育省が使用するようになった。この体育クラブは、Zappas の遺志を履行するためのものとして、ザッピオン博覧会場の隣に建てられたものであった³⁰⁵。

遺言の二番目には、古代のパナテナイ競技場の復元とともに、オリンピック競技祭を復興することが書かれていた³⁰⁶。オリンピック・遺産管理委員会は、経済的な理由により、古代の競技場復元よりも、ギムナシオンの建設を選択せざるを得なかった。一方、遺言の中で述べられていた前提としてのオリンピック競技祭のための競技場は、1887年半ばまでに周囲を公園にして、完成させる計画で、少しずつ形を整えてはいた。しかしながら、多くの周囲の土地は個人の所有であったため用地の買収が難しく、この計画は遅れていた。

この難局を処理したのは、最終的に K. Zappas であった。彼は、地主が要求した土地代すべてを支払った。こうしてザッピオン博覧会場の建築が、1874年に始められた。責任者となった建築家は G. Metaxas であった。作業が始まると、考古学的に重要な遺物が発掘されたため、1875年まで作業は停止した。

³⁰⁴ Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.47.

³⁰⁵ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, p.112.

³⁰⁶ Επιτροπή Ολυμπίων (1869) Βασιλ. διάταγματα, εγκύκλιοι, διαθήκη του Ευαγγέλη Ζάππα και κανονισμός των Ολυμπίων δια το 1870. *Ethniki Tipographia: Athens, 1869, p.24.*

建築は1879年まではさしたる進歩はなかった、そしてこの年に、K. Zappas が、ウィーンの建築家でアテネの町の建築物を手がけた Theophilus Hansen を呼び寄せ、ザッピオン博覧会場の新しい設計図を書かせた。Hansen の提案により、ザッピオン博覧会場の建築の代表者に任じられたのは、パンアテナイ競技場の復興にも貢献した Ernst Ziller であった。こうして、Ziller の指導のもと、博覧会場建設計画が進展した。

ザッピオン博覧会場の建物は1888年までに完成した。そのオープニングセレモニーは、第四回オリンピック競技祭の開会式の日：1888年10月22日に行われることになった。

この経過にみられるように、第三回オリンピック競技祭の後、オリンピック競技祭はしばらく行われなかった。それは、政府自身が財政的な危機に陥っていたためであった。トルコとの戦争状態が続いていたため、国の財政が逼迫した。オリンピック競技祭は政府の意向を無視して開催できる状況ではなかった。当時の政府の中枢にいた Trikoupis は経済危機を乗り越えるために、緊縮財政を唱えていたし、オリンピック・遺産管理委員会会長の Stefanos Dragoumis (1842～1923年)も、Trikoupis と同様の立場であった。この状況が大きく変わったのは、Zappas の遺産の海外流出をルーマニア政府が禁止することを主張したことであった。こうした状況によりギリシャ側は、Zappas の遺言通りに、Zappas の遺産が使われていることを主張するために、オリンピック競技祭の再開が、ザッピオン博覧会場の開幕にあわせて行なわれる事になったのである。

1888年1月11日に出された第四回オリンピック競技祭の王室条例は次のものであった。

王室条例「第四回オリンピック競技祭について」³⁰⁷

第1条：1888年10月第二日曜日に国民的寄贈者 Evangelis Zappas と Konstantinos Zappas の基金により、ザッピオン大博覧会場の落成と第四回オリンピック競技祭が開会される。

第2条：オリンピック・遺産管理委員会は、偉大な Evangelis Zappas のオリンピックに関する遺言状に基づいて、各規定に則って第四回オリンピック競技祭を開催する。

第3条：第四回オリンピック競技祭は、次の競技を行う

³⁰⁷ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Κανονισμός Δ' Ολυμπιαδός.

Ethniki Tipographia : Athens. pp.3-5.

- a. ギリシャで製造された農業、畜産、工業、芸術などの作品の博覧会と知的作品の競技会
- b. 競技の祝祭
- c. 古代と近代の劇の上演
- d. 古代から 1829 年までの時代を扱ったギリシャオリジナルの劇作品の競技で、Konstantinos Zappas の意向によるものである。

第 4 条：競技と博覧会は、10 月の最終日曜日に終了することが望ましい。しかし、産業製品の展示は委員会が決定すれば、延期される。

第 5 条：知的競技の賞は委員会により準備される。

第 6 条：以上の任務は委員会に帰せられ、15 万ドラクマの予算が与えられるが、規定に従って不足にならないように努める。

第 7 条：オリンピア・遺産管理委員会は中央実行委員会を組織し、代表の任命と必要な人員の選考を行う。

第 8 条：オリンピア・遺産管理委員会は競技を実施するための詳細な特別規定を別に定める。

(1888 年 1 月 11 日 ギリシャ国王 Yorgios)

以上の王室条例に見られるように、第四回オリンピア競技祭では、Konstantinos Zappas の意見が取り入れられた。K. Zappas は、E. Zappas の遺書で述べられている「古代オリンピア競技祭の復興」の内容について、古代と同様に、古代劇などの芸術競技も運動競技と同様に復興させなければならないと主張したのであった³⁰⁸。オリンピア競技祭の開催とザッピオンの建築に際して、Zappas 兄弟の財産に全面的に依拠していたギリシャ政府とオリンピア委員会は、彼の主張を受け入れた。古代の競技祭に近い形で行う事を K. Zappas は望んだが、それは産業製品の競技と運動競技のみならず、芸術競技、知的競技を充実させることであった。K. Zappas が、古代と同様、オリンピア競技祭は、すべての文化を発展させるものと考えていたかどうかは定かではない。それよりも、現実的な問題、つまり、E. Zappas の遺産をめぐる問題が深刻化した事により、E. Zappas の遺志通りに、遺産が使われていることを、アピールする狙いがあったものと思われる。ギリシャのオリンピア競技祭は、そのようなことから、芸術的な競技が拡充する方向に進んだのであった。

³⁰⁸ Vovolinis, S.A. and Vovolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν 1. Ekdosis Biomechanikis Epitheoreseos : Athens. Vol.1. pp.416-417.

そのことは、王室条例のすぐ後に出された一般規定にも表れている³⁰⁹。

第1条：1888年10月の第二日曜日に国民的寄贈者 **Evangelis Zappas** と **Konstantinos Zappas** の基金により完成した、ザッピオン博覧会場の落成と第四回オリンピック競技祭が開会される。

競技と博覧会の閉会は10月の最後の日曜日に行われる。しかし博覧会は、委員会の決定により、その年の末まで延期されることが望ましい。

第2条：オリンピック競技祭では次のものが行われる。

- a. 農業、畜産、工業、芸術の作品でギリシャ人により創られたもの、また外国在住ギリシャ人の芸術作品や知的作品でも可とする。
- b. 通常の競技の祝典
- c. 古代・近代ギリシャ劇の上演
- d. ギリシャの作曲

第3条：オリンピックの偉大な創設者の遺言状の内容を成就するために、賞金とともに金の冠をオリンピック委員会の決定により授与することを公表する。それは、遺言状に次のように一語ずつ記述されているからである。「故国ギリシャの人々のために、大偉業を実行し、創造するものである。つまり、国家と政府のすべてに喝采を送るために、四年ごとのオリンピック競技祭に関わるすべての費用について、四年ごとの博覧会の支出も含めて、委員会は、国家の名誉と栄光のために、使うものとする。」

余ったお金は、ギリシャへの忠誠と愛のために、冠の制作に使われる。

- a. 地域の森林というテーマでの作品の懸賞競技
- b. 劇の競技が第四回オリンピック競技祭に **K. Zappas** の意向により設立された。劇の内容は、古代ギリシャ時代のものか、近代は1829年までのものを扱うことが前提である。

第4条：博覧会の実行に関わるオリンピック委員会は、アテネに中央実行委員会を結成し、各専門委員会は任命された後に、決められた任務を遂行する。

第5条：各専門委員会の仕事は、博覧会の規定の管轄内にある

上記の内容から明らかなことは、**E. Zappas** の遺言状通りに競技を行う姿勢を示していることである。そのために、**Zappas** の考えたすべての競技を盛り込もうとしたのであった。

³⁰⁹ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Κανονισμός Δ' Ολυμπιαδός.

Ethniki Tipographia :Athens. pp.7-9.

1-2. K. Zappas による知的競技の充実

1888年1月11日付けの王室条例では、10月のオリンピック競技祭の中で、競技が行われることが宣言されていた。やがてオリンピック委員会はそこで行われる種目プログラムについて準備した。そこで注目されるのは、知的競技を産業製品の競技から独立させて行おうとしたことである。そしてそれぞれの競技名に、Zappas の名を冠したのであった。

劇の競技が加えられたことも大きな特徴であった。古代では、劇の上演は競技として行われており、デルフィで行われたピュティア競技祭においても、劇の競技が行われていた。上演された劇の優劣を競ったことが、古代劇の発展に大いに寄与したのであった。劇の競技化は、喜劇、悲劇の作家をつくり、それがギリシャ文化を代表する文化になったのである。

以下に、第四回オリンピック競技祭における知的競技の概観について記す³¹⁰。

- Evangelis Zappas 知的競技：「国家の森林」についてのエッセイ
- Evangelis Zappas 劇の競技：古代から1821年の革命までの間のギリシャの歴史についての劇の詩。賞の授与式は、オリンピック建造物、ザッピオンの大ホールにおいて、オリンピック競技祭の開会式の日、朗読される。
- Christos Nikolaidis –Philadelphus 詩歌競技：この賞の創設者の希望により、400から800行からなる叙情詩に対して1000ドラクマが授与される。勝者はザッピオンで詩を朗読する。
- 二つの音楽競技
作曲（行進曲、舞踊、軍歌、交響曲、オペラなど）と音楽家グループのためのもの（軍隊的楽団やローカルなオーケストラ）

運動競技部門を組織するために委員会は、Phokianos I.と二人の若い体育教師、Nikolaos Pyrgos と Konstantinos Oikonomidis を招集し、運動競技のプログラムを編成することになった³¹¹。当初のプログラムでは、10月の第一日曜日に、次の運動競技が行われることが発表された。

スタディオン走、長距離走、障害走、三段跳び、走り幅跳び、ロープ高跳び、踏切板を使つての高跳び、円盤投げ、石投げ、ロープ登り、両手と片足の重量

³¹⁰ 詳細は本章 2-3. 芸術競技の規定 pp.202-206 参照。

³¹¹ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Διαγώνισματα Δ' Ολυμπιαδός. Ethniki Tipographia : Athens. p.7

挙げ、鉄棒と平行棒での体操。

N.Pyrgos は剣術の教師で、剣術のプログラムを準備しようと考えていて、その旨が競技会の説明書として出版された。そこには二つのフォイル（練習刀）と二つのサーベル競技について説明されている。各勝者にはピストルの止め金（brace of pistol）、フォイルの2位には一対のフォイル、サーベルの2位には一対のサーベルが授与されることになっていた。

ルールは、フェンシング用の正装、使用する武器の詳細などが書かれていた。オリンピア競技祭の説明の中では、「武器好きのギリシャ人」が競技することは、誠にふさわしいと書かれている³¹²。

1-3. オリンピア競技祭と平和の観念

ギリシャ人の知識人の中で、オリンピア競技祭による平和への観念を見いだす事ができる。それは、Lysandros Kaftanzoglou の『永遠なる Rhigas Pheraios の国家プログラムへのサプリメント』の作品の中にみられる。Kaftanzoglou は、アテネ工科大学の理事長、建築家であった。

彼が 1879 年の 12 月に著した『ファリロにおけるオリンピアとザッピオンの改修』という寄稿の中で、ファリロというアテネ近郊の地域に、オリンピア競技祭を開催するための競技場と、射撃場、大競走場、それに博覧会会場を建築することを提案している。この頃、ザッピオンの改修の話しがもち上がり、そのことについて、Kaftanzoglou は、彼自身の意見を述べ、ファリロへのザッピオンの移設を主張した。ファリロのライバルは古代のオリンピアの聖地のみであると述べ、アテネの町中よりも広々として海に近く、きれいなファリロが古代オリンピア競技祭の聖域（Ἱερόν τῶν ἀρχαίων Ὀλυμπίων）のようである、としている。

「古代の競技に代わって新たな競技会を行おうとする意志こそ、不滅の栄光である。ギリシャの小さな産業製品に賞を与えることのみならず、これは、それ以上に大きな目標があり³¹³」

「オリンピア競技祭は、国外に散らばったギリシャ人を結びつけることのみならず、同じ信仰と艱難をもったすべての民族を、平和的な労力の精神（πνεῦμα τῆς εἰρηνικῆς ἐργασίας）を伝える事で、出会えた人々すべ

³¹² Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Διαγώνισματα Δ' Ολυμπιαδός. *ibid.*, p.10.

³¹³ Kaftanzoglou, L.(1880) Τα Ολυμπία εν Φάληρω και το νυν μεταρρυθμιζομενον Ζάππειον. Tipographia Ermou : Athens., p.12.

てを結びつける。これらの競技会は、愛と連帯を通して自由を祝福する偉大な目的を用意し、東方のキリスト教徒たちの親善と友好（*σύμνοια καὶ ὁμόνοια*）が徐々に誘発され、同時にオリンピック休戦（*ἐκεχειρία*）とともに、競技会に参加した人々の間で、憎しみを減退させることになるだろう³¹⁴。」

Kaftanzoglou のこの考えは、オリンピア競技祭の実施によって、人々の平和への思いを涵養することができることを説いたのであった。近代ギリシャにおいて、オリンピア競技祭にちなんで説かれた民族を越えての平和の観念と言える。同じ東方のキリスト教徒たち、という限定された範囲での平和の観念であるが、Coubertin が近代オリンピックを着想するより十年以上も前のことであつた。この論文はオリンピア・遺産管理委員会の報告書と一緒に留められていたのであり、当時の委員会が保管していたのであり、この平和の考えが、後のオリンピア競技祭にどの程度伝えられたのかについては、不明であり、今後の課題の一つであるが、1879年という時期に、オリンピア競技祭が行われていたギリシャ人の中から、民族を超えての平和の意識の涵養という考えは、ギリシャ人のオリンピック理念の発展ととらえることができよう。

Kaftanzoglou のオリンピックの目的についての考えは、それまでのものより広いものであつた。国家的な行事としての、国外のギリシャ人が参加した競技祭が国家と地理的な国境の枠を超えて、「同じ信仰と艱難をもったすべての民族」にまで広げられたといえる。アテネで行われた産業製品の競技は、他のヨーロッパで行われていた博覧会に比べると規模の小さなものであつたが、運動競技や芸術競技を一緒に行う事により、同じ宗教意識を共有する異民族の間で、連帯感を養うことができ、それは古代オリンピア競技祭の時に施行されたオリンピック休戦につながると考えたのであつた。

近代のオリンピック競技会の実践において、古代のオリンピック休戦を取り上げたのは、彼が最初の人物であると思われる。

オリンピア競技祭による平和の観念が表明された後に、第四回オリンピア競技祭が開催された。このような考えは、詩歌競技にも表れた。第四回オリンピア競技祭における詩歌部門で受賞した Palamas の『アテナ女神に捧げる唄』にも、平和の観念が表現されていた³¹⁵。

³¹⁴ Kaftanzoglou, L. (1880) *ibid.*, pp.9-10.

³¹⁵ 本論文 第三章 第3節 3-1. 産業博覧会、芸術競技の開催と出場者 pp.227-229 参照。

2. 第四回オリンピック競技祭の規定と競技内容

2-1. 産業製品競技会の分類

産業製品競技の分類は次のようになっていた³¹⁶。()内はその中で取り上げられている種類の番号である。

A. 鉱業製品 (1-2)

B. 冶金 (3-6)

C. 林業 (7-8)

D. 木材加工 (9)

E. 農業、園芸 (10-14)

F. 住居、家具 (15-18)

G. 動物、飼育 (19-21)

H. 服装 (22-25)

I. 化学 (26-36)

J. 皮革 (37-38)

K. 機械 (39)

L. 造船 (40-42)

M. 教育 (43-50)

43.教育計画と家具、給食、孤児の食事、幼稚園、学校組織、オルガンの教え方、図書など。農業、牧畜、技術の専門書、雑誌、農業の絵本
体育クラブの計画

体操の器械と方法、フェンシング

友だちのスケッチ作品

44.専門学校の作品

思想と印刷の作品としての 1875 年の産業製品競技会の図書

45.製本技術

46.スケッチの応用、彫刻の技術

47.写真

48.楽器

49.科学の道具

³¹⁶ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) ταξινόμησις των τη έκθεσαι της Δ'ολυμπιάδος . pp.19-29.

50.医学的健康、人類愛的社会福祉、医学的・外科的器具
治療の器具、医学や外科、さらに体育の器具
孤児院の設計図

N. 芸術 (51)

- ・ 建築：建物の図面やスケッチ
- ・ 絵画：スケッチ、油絵、水彩画、銅版画、石版画
- ・ 彫刻：彫像、彫刻の原型、彫刻の写真作品

第四回オリンピック競技祭の産業製品競技は、完成したばかりのザッピオン博覧会場で行われた。全部で 14 クラス 51 種類の製品や作品が出展された。

前回のオリンピック競技祭よりも、分類項目は少ないが、一つの種目に、かなり多くのもが含まれているので、全体の数は、むしろ増加している。

また、教育も一つの種目になっており、その中に、体育館の計画や体操の器械と方法、などが含まれているのは、体育に対する関心が深まっていることを示していると思われる。

2-2. 運動競技規定 (1888 年)

1888 年 3 月に、オリンピック・遺産管理委員会は、「パンアテナイ競技場における競技」(ΑΓΩΝΕΣ ΕΝ ΤΩ ΠΑΝΑΘΗΝΑΪΚΟ ΣΤΑΔΙΩ) と「射撃競技」(ΑΓΩΝ ΤΗΣ ΕΠΙ ΣΚΟΠΟΝ ΒΟΛΗΣ) において、次の活躍に応じて優秀な者に賞を授与する旨を発表した³¹⁷。

A. パンアテナイ競技場における競技

1) スタディオン走 (短距離走) の

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

2) ドリコス走 (長距離走)

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 180 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

³¹⁷ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, pp.114-115.

3) 障害物競走

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

4) 三段跳び

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

5) 走り幅跳び

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

6) ロープ高跳び

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

7) 棒によるロープ高跳び

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

8) ボードを使っての高跳び

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

9) 円盤投げ

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

10) 助走しての石投げ(ΛΙΘΟΒΟΛΙΑ)

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

11) マスト登り

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

12) 太綱登り

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

13) 両手と片手での重量挙げ

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 50 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 25 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

14) 鉄棒と平行棒での体操

- 一位；オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
- 二位；オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位；月桂樹の小枝

以上の賞金は合計で 1500 ドラクマになる。上記の賞以外に、優秀な者には賞状が授与されることが書かれている。

上記の競技の規定から、運動競技の種目については次のように言える。

前回の第三回オリンピア競技祭の運動競技種目（ディアウロス競走、三段跳び、幅跳び、レスリング、円盤投げ、槍投げ、棒高跳び、ポール登り、斜めポール登り、棒跳び越し、平行棒跳び越し、鉄棒での体操）と比較すると、ほぼ同様の種目が行われていたことがわかる。ヨーロッパで行われていた種目も多く取り入れられている。古代の種目は、スタディオン走、ドリコス走、幅跳び、円盤投げなどである。また石投げは、近代以前のギリシャ人の間でよく行われ

ていた運動である³¹⁸。重量挙げも、古代のオリンピック種目には入っていなかったが、奉納された石塊が残されていて、古代ギリシャ人が行っていた種目の一つであった。登攀、平行棒や障害物競走などはヨーロッパの体育の種目であるが、ギリシャ人が古代に行っていた種目も多く取り入れられていたことがわかる。

また、これらの運動競技は、パンアテナイ競技場で行われることが決められていた。古代の競技場を復元、整備して、そこでオリンピア競技祭を行うことは、E. Zappas の遺言の中で、重要な意味を持っていたからであった。しかしながら、実際には、競技場の整備は進まなかったのであった。

B. 射撃競技についての規定

1) 兵士による距離 200m の射撃

- 一位;オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
- 二位にはオリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位には月桂樹の小枝

2) 市民による距離 200m の射撃

- 一位;オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
- 二位にはオリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位には月桂樹の小枝

3) 兵士による距離 400m の射撃

- 一位;オリーブの葉冠と賞金 150 ドラクマ
- 二位にはオリーブの小枝と賞金 75 ドラクマ
- 三位には月桂樹の小枝

4) 市民による距離 400m の射撃

- 一位 ; オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
- 二位 ; オリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
- 三位 ; 月桂樹の小枝

5) 兵士と市民による距離 200m の射撃

³¹⁸ 第一章、第1節、1-1 独立前のギリシャ人の身体活動 p.41 参照

一位；オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
二位にはオリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
三位には月桂樹の小枝

6) 兵士と市民による距離 400m の射撃

一位;オリーブの葉冠と賞金 150 ドラクマ
二位にはオリーブの小枝と賞金 75 ドラクマ
三位には月桂樹の小枝

7) 兵士と市民による距離 200m の射撃（本物の銃）

一位;オリーブの葉冠と賞金 100 ドラクマ
二位にはオリーブの小枝と賞金 50 ドラクマ
三位には月桂樹の小枝

上記の賞の合計は 1200 ドラクマになる。これらの賞以外に、賞状が授与されることが書かれている。

射撃競技は、当時のヨーロッパで盛んに行われていた競技の一つである。この射撃競技がギリシャで早くから行われているのは、ドイツ出身の政府関係者が多くいた事によるものと思われる。

射撃競技では、兵士と市民の種目があり、別々に行われるものばかりではなく、両者が一緒に行う種目が存在していたことは、プロとアマチュアが一緒に競技していた、という意味で、注目すべきことである。第二回オリンピック競技祭の後に主張された、エリートや学生に競技を限定するべきだとする考えは、金銭の授受を問題視してのものではなかった。階層的な差別という面のみならず、教育的なトレーニングの必要性を重視しての発言であった面がうかがえる。

2-3. 知的競技の規定

新たに設けられた知的競技の規定は、種目ごとに、大要、次のことが書かれている³¹⁹。

1) 思想競技 (ΔΙΑΝΟΗΤΙΚΟΝ ΔΙΑΓΩΝΙΣΜΑ ΕΥΑΓΓΕΛΗ ΖΑΠΠΑ) に関する規定 (1888.3.4)

論文テーマ「ギリシャの森林について」の応募内容と、選考方法、賞金などについて述べられている。

テーマ：ギリシャの森林について

- a. 森林の利用と土壌の形成
- b. ギリシャの森林と岩盤に関する植物学的調査
- c. 森林の状況

森林の面積、描写、破壊のようす

競技参加者は、1888年の7月20日から8月1日に作品を提出すること。

2) 劇の競技 (ΔΡΑΜΑΤΙΚΟΝ ΔΙΑΓΩΝΙΣΜΑ ΚΩΝΣΤ.Χ.ΖΑΠΠΑ) に関する規定 (1888.3.4)

内容、脚本の量、選考方法、上演と賞金などについて、以下のように定めた。オリンピア・遺産管理委員会は、民族的劇作品についての競技を、第四回オリンピア競技祭の規定に基づいて実施する。

- a. 劇の内容について重要なことは、古代、中世、1821年以前の近代などのギリシャの歴史が含まれていなければならない。
- b. 劇は韻文で3から5幕、300行以上のものでなければならない。
- c. 原稿は読めるように書かれていなければならない、変更は認められない、提出はオリンピア委員会委員長宛で7月20日から8月1日までの間に到着すること。
- d. 競技は3人の委員により審査され、1888年8月1日以降に選別され、結果は第四回オリンピア競技祭の開会の際に大ホールで公表される。
- e. 優れた作品についてはすべて表彰される。
- f. 最も優れた作品には1000ドラクマが賞金として授与され、オリンピア委員会により祭典中に上演される。

³¹⁹ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Διαγώνισματα Δ' Ολυμπιάδος.

Ethniki Tipographia : Athens, pp.1-7.

g. 提出された作品は返却されない。

1888年3月4日アテネ 委員長 S.Dragoumis

3) 詩歌競技 (ΠΟΙΗΤΙΚΟΝ ΔΙΑΓΩΝΙΣΜΑ Χ.ΝΙΚΟΛΑΙΔΟΥ ΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΣ) に関する規定 (1888.4.19)

内容、文体と量、朗読と賞金などについて、以下のように定めた。

この詩は、芸術愛好家 Philadelfias Nikolaidis が、ギリシャの大学学長に宛てた書簡の中で、「善人たちの過酷な人生を永遠に追悼するため、詩歌競技を再設立させて、真のギリシャ人の精神を実現させたい³²⁰」という提案により創設された賞であった。フィラデルフィア詩歌競技と呼ばれることになる。

- a. この競技は言葉の意味を追求した叙情詩に限定され、劇や叙情詩的なものは除外する。
- b. 詩の原文は 400 行以上 800 行以下とする。
- c. 文体は文語調のカサレブサでも、一般的な民衆語でも良い。
- d. 作品は 1888 年 8 月 15 日までにオリンピック委員会委員長まで到着しなければならない。
- e. 原稿は読めるように書かれていなければならない、提出後の変更は認められない。
- f. 競技はオリンピック・遺産管理委員会にて選出された 3 人の委員により審査され、結果は決められた日にザッピオンの大ホールで公表される。
- g. 送付された詩歌のうちで最も優れた作品に 1000 ドラクマの賞金が授与される。
- h. 提出された作品は返却されない。

1888年4月19日 委員長 S. Dragoumis

4) 音楽競技 (ΜΟΥΣΙΚΟΝ ΔΙΑΓΩΝΙΣΜΑ) に関する規定 (1888.5.17)

作曲と演奏、選考方法などについて記されている。

ここでは、二種類の競技が行われることが明記されている。一つは作曲(行進曲、舞踊、軍歌、交響曲、オペラなど)で、勝者の作品は公の場で演奏されることが決められていた。

もう一つの音楽部門は、軍隊的なバンドや地方のローカルなオーケストラ

³²⁰ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Διαγωνίσματα Δ' Ολυμπιάδος.

Ethniki Tipographia : Athens, p.4.

などの音楽家団体の競技で、各団体はそれぞれ二曲演奏し、一つが委員会により選択される。

これらの規定から、知的競技の性格について考察すると次のようになるであろう。

- ・ 劇の規定に見られるように、古代、中世、1821年以前の近代などのギリシャの歴史や民族性が重んじられていることである。
- ・ 最優秀の作品には、それぞれ1000ドラクマという大金が授与されることになっていて、オリンピア委員会や関係者らが、芸術競技を重視していたことが示されている。
- ・ これらは、運動競技のみならず、知的競技も近代において重要な要素であるとした、Soutsosらが当初目指していた、オリンピア競技祭の姿に近いものであったと思われる。

3. 第四回オリンピア競技祭の開催と出場者

3-1. 産業博覧会、芸術・知的競技の開催と出場者

1888年10月20日にザッピオンの落成式と第四回オリンピア競技祭の開会式が行われた。新たに加えられた芸術競技については、若い作家、詩人、作曲家などが活躍できる機会を与えられたとして、一定の評価を得たことが当時の新聞に記されている³²¹。

1835年のSoutsosの案から考えると、第四回オリンピア競技祭において、知的競技が加えられて開催されたことは、彼のオリンピック競技会復興の案（産業博覧会、運動競技、芸術・知的競技の開催）がそのまま実行されたといえる。つまり、ギリシャのオリンピア競技祭は、産業博覧会、運動競技、芸術・知的競技の部門で構成されるように構想されていたのであり、それがすべて実現されるのが、第四回オリンピア競技祭であった。

オリンピア・遺産管理委員会は、前回のオリンピアン競技祭の折にはなされていたヘラノディカイ委員会などの報告書を出版しなかった。産業製品の競技についての詳細はわからないが、知的競技については、ギリシャ人研究者Georgiadisが、中央オリンピア委員会の会議報告書に基づいて報告している。

³²¹ ΑΚΛΟΠΟΛΗ. Athens, 1888.10.24.

それによると、次のことが指摘されている³²²。

展示品の目録からは、少なくとも 26 人の音楽家が作曲をしたことがわかっている。

ザッピオン博覧会場で行われた絵画の競技には、多くの出展があり、ヨーロッパに住むギリシャ人から、少なくとも 288 作品が出展された。それらの中には、Lytras, Gyzismlakovidis, Volonakis など著名な芸術家が含まれていた。

Byron の彫像のための彫刻の賞には、8 人の彫刻家から 88 の作品が寄せられた。音楽の作曲競技には、どの作品に賞が授与されたのかについては、不明である。

劇については、24 の劇の詩が応募に寄せられ、12 月 11 日に、完成したばかりのアテネ市立劇場 (Athens Municipal Theatre) において、上演された。劇の競技はオリンピア委員会により発表された。

フィラデルフィア賞の叙情詩には 55 の応募作品が寄せられた。この競技の審査委員会はザッピオンで 1889 年 4 月 16 日に結果を公表した。

『アテナ女神に捧げる唄』という作品で、Kostis Palamas (1859~1943 年) という詩人に授与された。彼は、文学において、古典古代の様式に近い文体を支持するアテネ派の中の著名な詩人であった³²³。Palamas は、作品の中に、ギリシャの全ての伝統的な要素 (古代、ビザンティン、近代) を統合しようとした詩人で、1888 年の『アテナ女神に捧げる唄』の中で、祖国へのギリシャ人たちの賛歌、つまり自国の美を称えつつ、古代の異教の名残りが自身の中に甦ることを感じている、と評されている³²⁴。

Palamas は、当時のギリシャ人が信奉していたギリシャ正教と古代のギリシャ人の異教とを、文化の視点から統合しようとしたのであった。ヘレニズムの統一をはかろうとしたともいえる。

数年後に Palamas は、当時のギリシャ最大の詩人に文学者たちのアンケートで選ばれた。そして、1896 年の第一回オリンピック競技会開催の折に、「オリンピック賛歌」を作詩することが委託されたのであった³²⁵。

³²² Georgiadis, K. (2003) *ibid.*, p.49.

³²³ Chrmouziadis, G.D. 著, 谷口勇訳 (1989): ギリシャ文化史; 古代・ビザンティン・現代。而立書房, p.224.

³²⁴ Chrmouziadis, G.D. (1989), *ibid.*, p.225.

³²⁵ Chrmouziadis, G.D. (1989), *ibid.*, p. 228.

1888年の芸術競技の絵画部門で優勝した N.Gyzis (1842-1901年)は、後の1896年もアテネ大会の賞状やポスターを手がけることになった。音楽部門に出場した作曲家 J.Kaisaris はアテネ大会の行進曲を作曲した。このように、第四回オリンピック競技祭において実施された芸術競技は、国際オリンピック競技会に関係した一面が存していた。

またこの競技祭を機会にして、演劇の全国組織が結成されることにもなった。芸術競技は、国外のギリシャ人によるオリンピック競技祭への共感をより多く得ることにもつながった。

ギリシャ内や外国でオリンピック競技祭は、国外のギリシャ人の間で知られて行き、競技会を観戦することのみではなく、以下にあげるような、オリンピック競技祭を支援する人々が現われたのである。

彫刻の部門では、Byron 卿の彫像のためのコンテストが行われた。この基金提供者は、Stefanovik Skylitsis という人物で、コンスタンチノーブル在住のギリシャ人であった。彼はこのような彫像で、アテネの隅々まで美しくしようと考えていたようだ³²⁶。

多くのギリシャ人が Zappas の例にならって、オリンピック競技祭の賞を提供した。エジプトのアレクサンドリアに住む Ioannis Pesmatzoglou は一定の金額を芸術部門の絵画や作品の賞に提供した。オリンピック委員会はそれを適用した³²⁷。オリンピック委員会は外国在住のギリシャ人の画家に授与することを決定している。

トリエステのギリシャ共同体は、5000 ドラクマを寄付し、音楽競技の勝者のために寄附すると申し出た³²⁸。個人ではなく、共同体として寄附を申し出る声明は、第四回オリンピック競技祭にして初めてのことであり、産業製品よりも知的競技に、人々の関心が集まったことを示している。

³²⁶ Georgiadis K. (2003), *ibid.*, p.48.

³²⁷ Georgiadis K. (2003), *ibid.*, p.48.

³²⁸ Georgiadis K. (2003), *ibid.*, p.48.

3-2. 運動競技の開催と競技出場者

運動競技については、1888年には開催されなかった。その理由は、先行研究では、Dragoumis を会長とするオリンピア・遺産管理委員会が、財政難を運動競技に対して、理解がなかったためであるとしている³²⁹。

直接的には、ザッピオン博覧会場の建設に資金を投入したために、運動競技を行うパンアテナイ競技場の整備が進められなかったためであろう。1875年の第三回オリンピア競技祭の時でも、競技場は石と草に覆われてしまい、観客は不自由な思いで競技を観戦したのであった。それからさらに十数年を経たパンアテナイ競技場は、人が入る事すらできないほどに、荒れ果ててしまったと想像される。従って、「パンアテナイ競技場での競技」を実施するタイミングを逸してしまったといえる。それは元をただせば、オリンピア・遺産管理委員会の競技に対する認識の低さではあるが、競技場が確保できない以上は、実行を決断できなかった。

当時のオリンピア・遺産管理委員会は、運動競技よりも、産業製品の競技た知的競技を優先していたと考えられる。つまり、古代オリンピア競技祭の伝統について、オリンピア・遺産管理委員会は、その運動競技を等閑視していたのであった。

運動競技が行われない状況に対して、Phokianos は、彼の経営する中央ギムナシオン（体育クラブ）において、ドイツ体育を中心とした運動競技を実施することを表明した。「ヨーロッパではドイツ体育が好まれている。他のすぐれたものが少なければ少ないほど、勝利者の価値は大きくなる³³⁰。」

そしてこの競技は 1889 年の 4 月 30 日に行われた。競技者の多くは、Phokianos の体育クラブの生徒であった。しかしながら、多くの観客が詰めかけて、混乱が生じたために、さらに延期されて 5 月に実施された。

競技の種目と上位に入賞した競技者は次の通りであり、Chrysafis が、コメントを付しているので、それを付記する³³¹。

1) 競走

一位 ; Ioannis Kritikos (パトラ) 学生、後にパトラとパナハイコ体育協会を創設する体育教師となる。

³²⁹ Young,D. (1996) The modern Olympics. *ibid.*, pp.63-64.

³³⁰ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, p.123.

³³¹ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, p.125.

二位 ; Chr. Chondromitros 学生

三位 ; D. Tsiknis 学生

2) 円盤投げ (鉄の輪が周囲についた木製の円盤で直径約 25cm、地面から高さ 10cm の踏切板から投げる)

一位 ; Spyros Arvanitis (アテネ) 医学生、体育大学の創設から経営と指導にかかわる。

二位 ; Lazaros Mousiou (スペツェス) 美容師

三位 ; Georgios Tsepetakis (クレタ) 画家

3) 溝越え棒高跳び (助走あり)

一位 ; Spyros Alfaropoulos

二位 ; Ioannis Kretikos (パトラ)

三位 ; Demetrios Melenkoglou (小アジア) 数学の学生

4) 跳び箱

一位 ; Apostolos Pikikos (コロニ : メッセネ) コロネの体育クラブの学生で後に体育大学の有名な教授になる。1897 年から勇敢な兵士としてウクライナ遠征に参加した。

二位 ; Christos Brisimitzakis (クレタ) 法律の学生で、ボーイスカウト事務局長を務める。

三位 ; Themistoklis Karakostas 自然科学の学生

5) 石投げ (およそ 10 オカの重さのあるバランスの悪い石を使用)

一位 ; Georgios Tsepetakis (クレタ)

二位 ; Ioannis Oikonomou (カラブリタ) 木版画家、後にアテネの学校の図画の教授になる

三位 ; Apostilos Pikikos (コロニ : メッセネ)、
Anastasios Philadelphus (アテネ)

6) 棒高跳び (溝を越えるのに対して、当時のはやりである棒を使用する跳躍、ぴんと張ったロープを木製の棒で越える)

一位 ; Epaminondas Drossiou (アテネ)、彫刻家

Lazaros Mousiou (スペツェス) 美容師

二位 ; Apostolos Pikikos (コロニ : メッセネ)、Spyros Alfaropoulos

三位 ; Demetrios Melenkoglou (小アジア)、Spyros Alfaropoulos

7) 平行棒

一位 ; Theophanis Theodotou (キプロス) 法律の学生、後に大ギリシャ主義の政治家になる

二位 ; Ioannis Painesis (クレタ) 法律の学生

三位 ; Nikolaos Rousopoulos (アテネ)、30歳の体育の教授

Konstantinos Antoniadis (アテネ) Demetrios Melenkoglou (小アジア)、Ioannis Oikonomou (カラブリタ)

8) 片手重量挙げ (重さ約 40 オカの鉄皿鈴)

一位 ; Anastasios Philadelphus (アテネ) アテネ Γ 体育クラブの生徒でアテネの専門家の家系

二位 ; Lazaros Mousiou (スペツェス) 美容師

9) 両手重量挙げ (約 55 オカの重さ)

一位 ; Lazaros Mousiou (スペツェス) 美容師

二位 ; Ioannis Tsepetakis (クレタ)

10) 高跳び

一位 ; Apostolos Pikikos (コロニ : メッセネ) 今回の最多勝利者

二位 ; Ioannis Sakellaridis

三位 ; Konstantinos Antoniadis (アテネ)、Spyros Lorentziadis

11) ポール登り (高さ 12m)

一位 ; Ioannis Painesis (クレタ)

二位 ; Petros Thevaios

三位 ; Themistoklis Karakostas

12) ロープ登り

一位 ; Sotirios Versis (アテネ) アテネ Γ 体育クラブの生徒

二位 ; Anastasios Philadelphus (アテネ)

三位 ; Anastasios Pikios (コロニ : メッセネ)

規模は小さかったが、Phokianos の主導権と根気により、中央体育クラブに

において、運動競技の実演が行われた。

これらの種目は、1888 年に出された運動競技の種目と比べると、競走種目が 2 種目から 1 種目に減らされたぐらいで、ほぼ同じである。

Phokianos の体育クラブには、競走できる長い走路がなかったため、競走種目が限定されたものと考えられる。

成績が上位だった競技者の出身地から、次のことがいえる。

31 人のうち、アテネ出身者は、10 人と全体の三分の一を占めた。アテネ出身者の割合が増したといえる。また、ギリシャ以外の国から出場した競技者は 7 人で、クレタ島など、オスマントルコ領内からの参加者であった。ギリシャ領内、それもパトラやスペツェスなど、アテネ近郊の地域からの参加者が多かったといえる。

これまでのオリンピック委員会の規定によれば、旅費は各地方のオリンピック委員会が負担し、滞在費は中央のオリンピック委員会が支給していたために、参加することも可能であったが、Phokianos 自身が開催した運動競技の規定には、そのことが明記されていないため、経済的な面でも、参加が困難になったためと思われる。その一方で、国外からの参加者は、以前、一定の割合を占めていたといえる。

また、競技者の多くは、学生であった。そしてその中には、後にパトラとパナハイコ体育協会を創設する体育教師となる学生はじめ、体育大学の教授になる学生、体育大学の創設から経営と指導にかかわる学生など、体育の専門家に育つ者が含まれている。このことは、オリンピック競技祭を経て、体育についての考え方が、定着していきつつあることを示していよう。Phokianos が考えた、青少年のトレーニングの場を提供する、というオリンピック競技祭の意味が、体育の専門家を育てるという点で、広がりを持ったと言えよう。

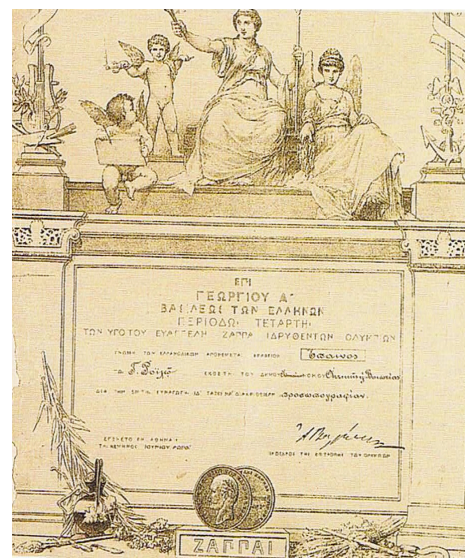
第四回オリンピック競技祭の開催が、オリンピック・遺産管理委員会による最後のオリンピック競技祭になるのであった。



図版9 第四回オリンピア競技祭の産業博覧会場ザッピオンに並ぶ人々
 (Solomou-Prokopiou,A.(2004) Αθήνα 1896. p.37)



図版10 第四回オリンピア競技祭
 産業博覧会のプログラム表紙
 (Solomou-Prokopiou,A.(2004) Αθήνα 1896.
 p.36)



図版11 第四回オリンピア競技祭
 芸術競技の賞状
 (Lennartz, K.(1996) Die Olympischen
 Spiele 1896 in Athen. p.13)

4. 第四回オリンピア競技祭の特徴

第四回オリンピア競技祭の特徴は、芸術競技のみならず、詩歌や思想という知的競技が開催されたことであろう。これらの知的競技開催までの経過をまとめると次のようになる。

1870年 Phillipos Ioannou (アテネ大学教授)「オリンピック競技会についての演説」で、古代オリンピア競技祭と同様に、弁論、演劇、詩歌などの知的・競技を導入すべきであると提唱した。

1887年 オリンピック委員会に財産を寄贈した Konstantinos Zappas が、E. Zappas による、古代オリンピア競技祭の復興の遺言に基づき、古代劇などの知的競技も復興させてほしいと要望した³³²。

この背景には、ルーマニアに住んでいた E. Zappas の子孫(遺産相続人)による、Zappas の遺産をめぐる裁判とルーマニア政府の施策が影響していた。そのために Zappas の遺言に書かれていることを実施しようと K. Zappas やオリンピア・遺産管理委員会は考えたのであった。そのような経過で知的競技を復興する事になったのである。

この点は、見方を変えれば、古代のオリンピックを近代にどのように解釈し、またつながりをもたせようとしたのか、という視点でとらえることができる。古代オリンピア競技祭において、弁論、詩歌などの競技が行われていた形跡はない。しかしながら、Pindaros は Bachylides などの、競技に優勝した競技者の頌歌を作成する詩人や、歴史家などの弁舌家が集まってきたので、オリンピアの地は、ギリシャ文化の発展を象徴する祭典になっていたのである。

このような解釈を 1880 年代に施したことは、オリンピア競技祭を、総合的な文化・芸術の祭典として考えていたということができる。

また、さらに重要な役割を果たしたのは Phokianos の存在である。彼が当時アテネに存在していなかったならば、第四回オリンピア競技祭において、運動競技が行われることはなかったであろう。第二回オリンピア競技祭から関わってきた Phokianos は、第三回オリンピア競技祭において、生徒や学生のトレーニングの場を確保しつつ、オリンピア競技祭の継続を大事にしたと言いうる。アテネに複数の体育クラブが存在していたのは、オリンピア競技祭の遺産であ

³³² Vovolinis, S.A. and Vovolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν 1. Ekdotis Biomechanikis Epitheoreseos : Athens, pp.416-417.

り、それが運動競技を継続させる原動力になっていたといえる。体育についての考えが定着したともいえる。そのことは、第四回オリンピア競技祭で実際に行われた運動競技の上位入賞者の中に、後の地方の体育協会を背負う人間や、体育の教授に育つ学生たちが含まれていることでも、証明されよう。

Phokianos は、この後、全ギリシャ競技祭を開催し、1896 年の国際オリンピック競技会とも接点をもつのであった。

以上のことから、第四回オリンピア競技祭の特徴は、理念的な面では、Kaftanzoglou に示されるように、オリンピア競技祭の開催を通しての人々の平和の観念を育成することができるという考えが芽生えたこと、そして、さらには、青少年の身体のトレーニングを行うという意味での体育という視点から、オリンピア競技祭をとらえる視点が定着した、ということであろう。

組織については、国内のオリンピア委員会のみではなく、国外のギリシャ人たちの関心を高め、オリンピア競技祭への寄金を集めることになったこと、つまり、祭典の担い手が、オリンピア委員会のみではなく、多くのギリシャ人の支持によるものになったといえる。

競技種目では、平和への産業製品の競技の中に芸術競技が確かな地位を得るとともに、知的競技が誕生した。これは後の近代国際オリンピック競技会にも受け継がれていくことになる。また、体育的な分野での製品の競技が行なわれたことも、体育の発展を示す特徴の一つであろう。



図版 12 第四回オリンピア競技祭 運動競技の出場者とクラブ員
(Solomou-Prokopiou, A.(2004) Αθήνα 1896. p.37)

第4節 第二回から第四回オリンピック競技祭の特徴と変容

1859年に第一回の競技祭が行われた近代ギリシャのオリンピック競技祭は、政治的な不安定な問題もあったため、第二回が1870年と10年以上の間隔があいて、アテネ市内で開催された。

ここでは、古代との接点を象徴する試みがなされた。その筆頭は、古代のアテネの祭典が行われた競技場、パンアテナイ競技場を復興し、運動競技の会場として使用したことであった。

さらには、ヘラノディカイやギムナステースなど、古代の競技役員のギリシャ語名をそのまま踏襲して使われたことなども、古代との接点を求めたことを示している。古代の競技場での開催は第三回オリンピック競技祭でも使用された。しかし、1888年に開催予定であった第四回オリンピック競技祭の運動競技は、パンアテナイ競技場の整備が財政上の問題で進まなかったため開催できず、その代わり、Phokianosが自身の経営する体育クラブのグラウンドで翌年に開催した。

1. 競技理念の変容

競技理念について見てみると、近代ギリシャ国家の経済的な発展に寄与する、という理念から、徐々に、近代ギリシャの文化的な発展に変容していったと言える。そしてそこには、競技にいる青少年の育成という視点を盛り込んだ競技の実施、さらには、オリンピック競技祭による民族を超えての平和意識の醸成ということが考えられたことも大きな特徴である。

2. 競技種目の変容

運動競技の競技種目は、古代オリンピック競技祭で行われていた競技種目、スタディオオン走、ディアウロス走、ドリコス走、レスリング、跳躍、槍投げ、円盤投げ、戦車競走、競馬などであった。こうした古代の種目以外に、中世のギリシャ人たちの祭りで行われていた三段跳びや石投げなども行われた。そして、ヨーロッパで行われていた体操種目、マスト登りやロープ登り、また水平棒や平行棒運動なども行われた。競技種目を見る限り、古代の種目を中心にしつつも、中世から親しんでいた競技や、近代の体育種目を取り入れるなど、柔軟な種目であったといえる。さらには別の会場で、射撃競技が行われたが、これも近代ヨーロッパの影響である。水泳競技や漕艇競技なども計画はされたが、実際には行われなかった。これらを見ても、競技種目については、ドイツを中心として、近代ヨーロッパ諸国の体育の影響を受けていたことがわかる。

産業製品の競技種目は、農業、鉱業、工業、牧畜などが中心であった。それらの種目は、1870年には10クラス80品目であったのが、1875年には、15種目95品目へと増加した。その中で、教育に関する内容や、学校での体育に関する製品の出典などが行われるようになっていったことも注目される。単に産業製品のみならず、教育や文化への拡大していったことがうかがえる。

産業製品競技の会場は、Zappasの遺産により新設されて1888年にザッピオン博覧会場が完成した。これを機会に開催された第四回オリンピック競技祭では、産業製品とともに、絵画、彫刻のほかに、詩歌や音楽の譜面も競技種目になった。

産業製品の競技の中で、独立して発展したのは芸術競技である。これは産業製品競技の中の1つのカテゴリー（種目）として行われるようになった。絵画、彫刻、建築がそれに匹敵した。

1888年の第四回オリンピック競技祭においては、知的競技（思想、詩歌、作曲、劇）が加わり、それらは独立して行われるようになった。E. Zappasが生前に求めていた、古代オリンピック競技祭の状況に近いオリンピック競技祭を創り上げたいとするE. Zappaasの義弟、Konstantinos Zappasの強い意向によるものであった。その背景には、E. Zappasの遺産をめぐる裁判も影響していたと思われる。いずれにしても、第四回オリンピック競技祭においては、詩歌や思想という知的競技が、絵画、彫刻、建築という芸術競技とともに実施されるようになった。後の近代国際オリンピック競技会における芸術競技は、Coubertinにより、1912年より始められるのだが、それよりも数十年早くから、ギリシャにおいては、オリンピック競技祭として行われていたことになる。芸術競技は、1870年の第二回オリンピック競技祭では、産業製品の中に項目として入れられるなど、早い時期に導入されて発展したのである。出展者もギリシャ全国からのみならず、コンスタンティノープルやアレクサンドリアなど、国外に住む者も出展するなど、全民族的な色彩を帯びていた。オリンピック競技祭は、ギリシャ国内と国外に住むギリシャ人とのネットワークを作りあげたのであった。

運動競技の競技者の出身については、1870年と1875年以降では大きく変わった。それは、学生などの日頃から体育クラブやクラブなどで、競技のトレーニングが行える人たちに制限したことである。それ以前は、あらゆる階層の人々が参加できたのだが、古代にならい、トレーニングを積んだ者が競技場に集う事が望ましい、とする考えであった。これはイギリスのアマチュアリズムと同様の考え方であるが、直接、移入された形跡はない。ギリシャ人独自で考えられた発想であったと言える。この考えのため、アテネ市内で、複数の体育

クラブが創られたのをはじめ、各地方においても体育クラブ、体育クラブが創設された。大学や体育クラブに所属していないと、オリンピア競技祭に出場できなくなったため、結果として、青少年に対して体育を教授する機会が増えたのであった。また、各体育クラブの生徒たちで、後に、ギリシャの体育に貢献して行く人材を輩出したことも、オリンピア競技祭の成果といえよう。

競技者については、学生などに参加を制限しても、競技の参加者がギリシャ全土から集まり、さらにはトルコ領のセッサロニキ、クレタ、コンスタンティノーブルからも出場するなど、全ギリシャ的、全民族的な性格を維持した。

運動競技に関しては、参加資格が特に制限されていなかったのが、一定の時間をトレーニングに費やすことができる学生などに限定されたことが、大きく変容した点である。

3. オリンピア委員会

オリンピア競技祭を運営する委員会は、第二回と第三回オリンピア競技祭では、オリンピア委員会により運営された。これは内務省に置かれた組織で、アテネに置かれた中央委員会と、各地方自治体にも地方オリンピア委員会が設置されて、産業製品の出展に機能した。これらのオリンピア委員会の構成は、国家的な祭典であることの象徴であった。また、国外に置かれた民族的なコミュニティを通して、出展するケースも現れて来た。さらには、スポンサーとして賞を提供する人も現れた。オリンピア委員会のみならず、国外のコミュニティがオリンピア競技祭を支援するようになった。オリンピア競技祭の運営組織は、オリンピア委員会、そしてその中に設置されたヘラノディカイ委員会、さらには、国外のギリシャ人コミュニティにより支えられることになった。

このように、経済的な発展をめざしてのオリンピア競技祭から、経済的な面のみならず、文化的な発展を視野に入れたオリンピア競技祭という性格に変容して発展したといえる。それは、芸術競技や体育の発展、さらには平和意識の芽生え、ということに、その特徴を見いだす事ができる。

第四章 近代国際オリンピック競技会の受容と Coubertin との対立

第1節 Brookesによる国際オリンピック競技祭開催計画と全ギリシャ競技会

1.アテネでの国際オリンピック競技会開催の計画

1-1.Brookesによる国際オリンピック競技会開催の計画

国際的なオリンピック競技会を開催しようとの計画は、フランスの **Pierre de Coubertin** が表明した 1892 年が最初ではない。それより以前の具体的な計画は、イギリスのウェンロック・オリンピック協会に見いだされる。

1875年に、ギリシャでは第三回オリンピア競技祭が開催されると、その後、イギリスのウェンロック・オリンピア協会会長の **Brookes** はギリシャとの関係をさらに深めていった。

1877年7月、駐英ギリシャ大使 **Gennadius** を「イギリスオリンピック協会名誉書記」に就任させた。その肩書で **Gennadius** は、1877年8月15、16日に行われる第五回イギリスオリンピック競技会に、10ポンド相当の銀杯を寄贈するよう、ギリシャ国王 **Georgios** に要請した³³³。8月7日、国王の許可を得て、**Gennadius** は **Brookes** の望み通り、五種競技の優勝者に10ポンド相当の銀杯を用意した。

1880年、**Brookes** は、アテネでの国際オリンピック競技会を開催する計画を発表した。それは1881年のウェンロック・オリンピック協会の年次報告書に示されている。そこでは1880年のウェンロック・オリンピック協会の活動について記した中で、**Brookes** が次のように述べている。

「・・・ウェンロック・オリンピック協会の委員会は、ロンドンのギリシャ大使 **J.Gennadius** 閣下が当協会の名誉会員に就任され、委員会のアルバム用の写真を送ってもらうという栄誉に浴した。また委員会は、現在のギリシャの危機的な状況が終結したら、速やかに、そして満足の行くように、アテネにおいて国際オリンピック競技祭 (**International Olympian Festival**) を開催することを提案した。この提案はイギリス在住のギリシャ人に好意的に受け入れられているし、間違いなく、アテネの当局や主なイギリスの競技協会から誠実な反応が寄せられるであろう。彼らは喜んでギリシャの古典的な土地への旅行に参加することでしょう、そこには当地の人々との交流があり、

³³³ Young, D. C.(1996) *ibid.*, p.57.

ドイツ政府とドイツ国民による多大な経費を要した、興味深く重要な近年の考古学的な発見を視察でき、そしてアテネの神聖な競技場で他の国々の競技者も参加する多くの競技が見られるのである³³⁴」

一方、ギリシャでも Brookes の国際オリンピック競技会の計画が紹介されている。1881 年 6 月 13,25 日付けのアテネの新聞 “ΚΛΕΙΩ” に「イギリスにおけるオリンピック競技会」と題して S.Parasarakes が次のように執筆している。

「イギリスの最も古い町、マッチウエンロックにあるウエンロック・オリンピック協会は、運動競技(ΑΘΛΗΤΙΚΗ ΑΣΚΗΣΙΣ)の奨励をめざしてに、31 年前に設立され、イギリス全土からの参加希望者の間で、年に一度、競技会を開催している。勝者にはオリーブの冠が戴冠され、またウエンロック・オリンピック協会の銀や銅のメダル、または銀杯が授与される。この協会の創設者は高名な Brookes 博士で、協会の崇高な目的のために根気よく努力され、協会の名誉会員には多くのイギリス貴族や我々のイギリスの代表 J.Gennadius 閣下らが名を列ねている。1859 年のアテネでのオリンピア競技祭の折、ウエンロック・オリンピック協会の委員会は、走競技の勝者の賞として 10 ポンドを提供され、1877 年には、ギリシャ国王陛下が、10 ポンド相当の銀杯をウエンロック・オリンピックの五種競技の勝者の賞として寄贈されている。マッチウエンロックの定例の競技会は、ボロー州の議員列席の下、多くの観戦者を集めて今年 7 日に開催された。

ギリシャびいきの Brookes 博士は、国際オリンピック競技祭(ΔΙΕΘΝΙΣ ΟΛΥΜΠΙΑΚΗ ΠΑΝΗΓΥΡΙΣ)を、多くの点で善意が生まれるアテネで開催しようと努力されており、ギリシャ政府がその実現のためにあらゆる便宜をはかることは疑いのないことだろう。³³⁵」

この記事にあるように、ギリシャと Brookes との交流が続けられていたことが確認される。また Gennadius により、アテネでの国際オリンピック競技祭の開催計画がギリシャで推進されていた節がある。

1883 年 10 月に Gennadius は、Brookes にギリシャで良い反応があるであろうと手紙を書いたが³³⁶、最終的にはこの計画は実現に至らなかった。それは

³³⁴ Wenlock Olympian Society (1881) The Minute Books.10-2.p.59.

³³⁵ Parasarakes, S. (1881) Ολυμπιακοί αγώνες εν Αγγλία. ΚΛΙΩ.1881.6.13,23. Athens.

³³⁶ Gennadius, J.(1883) Letters to Brookes. Archives in Wenlock Olympian Society,

当時のギリシャの政治状況の問題であった。1875年にギリシャで第三回オリンピック競技祭が開催された後、ギリシャの政権は反王室派が担った。その状況は1895年まではほぼ続き、王室が推進に積極的であったオリンピック競技祭の開催は、財政上の困難さを理由に、中断されてしまうのであった。さらに当時のギリシャのオリンピック委員会会長 Dragoumis も内閣の外相になるなど、反王室派の首相 Trikoupis（在位 1875-1895年）に近く、ギリシャにおけるオリンピック競技祭の運動が後退してしまう時期に、アテネでの国際オリンピック競技祭開催の案がギリシャに持ち込まれたのであった。このような国内事情により、Gennadius の後押しにもかかわらず、イギリスのウェンロック・オリンピック協会の主導による国際オリンピック競技祭のアテネ開催は実現には至らなかった。

1-2. Brookes と Coubertin の邂逅

Brookes と近代国際オリンピック競技会の創設者 Coubertin が接触するのは、1889年の事である。それは、Coubertin がイギリスの新聞に1889年のパリ国際博覧会の関連で体育の会議を行うと表明した際、Brookes が Coubertin に、ウェンロック・オリンピックの新聞記事と1872年の学生たちの競技会の招待状を送った事が Coubertin 自身により報告されている。

1890年7月、Brookes は Coubertin に、小学校の体育必修化を目指すイギリスの「身体活動協会 (National Physical Recreation Society)」の報告書とウェンロックへの招待状を同封して送った³³⁷。

1890年10月の Brookes と Coubertin の両者はウェンロックの地で邂逅した。この時の Brookes は82歳、Coubertin は27歳であり、オリンピック史研究家の Young は、両者の邂逅を「オリンピック運動の父と子の出会い」と表現している³³⁸。このウェンロック・オリンピックを観戦した感想を Coubertin は、その年の12月に、「ウェンロックのオリンピック競技会」と題して次のように述べている。

「マッチウェンロックはどこにあると思いますでしょうか。古代の記憶にある

:Wenlock.

³³⁷ Wenlock Olympian Society (1890) The Minute Books.p.173.

³³⁸ Young, D.(1984) The Olympic myth of Greek amateur athletics. Ares publishers inc.:Chicago,p.59.

未開人の名前と混同されるかもしれませんが。マッチウエンロックはウェールズと境する、シュロップシャーにある小さな町であり、近代のギリシャが未だにその復興を成し遂げていないオリンピック競技会が、今日生き残っているとすれば、それはギリシャ人ではなく、**Brookes** 博士に帰せられる事でしょう。40年前にオリンピック競技会を始めたのは彼であり、82歳になっても、それを注意深く、精力的に組織し、広げようとしているのも彼であります。³³⁹」

ここでは、ウエンロック・オリンピックが古代オリンピア競技祭の継承であり、**Brookes** が高齢でありながら、なおオリンピック競技会の組織化と拡大に努力していることが明確に述べられている。**Coubertin** がウエンロック・オリンピックを観戦した際、**Brookes** から彼のオリンピック復興の足跡と構想について聞かされた事を示唆している。当然、**Brookes** が精力的に進めていた国際的なオリンピック競技祭のアテネ開催の計画についても、**Brookes** は若き**Coubertin** に語ったことだろう。

1891年2月に**Coubertin** はウエンロック・オリンピック協会名誉会員になっているように³⁴⁰、**Brookes** は**Coubertin** とその後も親しい関係にあり、1894年、パリのソルボンヌ大学で行われる会議の内容を**Brookes** に知らせて参加を促す書簡を出したのであった。

それに対して、1894年5月22日付けで、**Coubertin** に、87歳の**Brookes** が、返書の書簡を送った。その書簡の内容は以下の通りであった。

「**Coubertin** 男爵殿、・・・参加者の多くは会議(筆者注:オリンピック競技会の復興を決議する同年6月の会議のこと)の結論を留保するかもしれませんが。しかしながら私は確信していますが、国際的なオリンピック協会を設立して、その運動に参加するすべての国の首都や周辺都市を持ち回りにして競技会を開催するという点については、心から賛同されるでしょう。ギリシャをその運動の中心にしようというのが私の長らくの願望でしたが、すべての国に広げようとするあなたの会議の案は優れているし、すべての国の積極的な支援を得られることでしょう。しかしながら、それはできるだけ速やかにしなければなりません、なぜなら私の経験から、熱意のある短期間のうちに、適切で積極的な行動をとらなければ、成功しないからです。私の助言通りの行動をして後悔することはないでしょうし、私の影響力の及ぶあらゆる方面

³³⁹ Coubertin, P.(1890) Les jeux olympiques a Much Wenlock. La Revue athlétique 12:705

³⁴⁰ Wenlock Olympian Society (1891) The Minute Books,p.90.

で、あなたの運動が厚く支援されることを期待されて下さい。

私たちの第 44 回の定例の祭典の報告書とともに、三つの論文をあなたにお送りしました。そして木曜日の後、できるだけ早く国際的なオリンピックの祭典に関するウェンロック・オリンピック協会の見解をお送りします。私がおもった若くてあなたの会議に出席できたなら、私自身とウェンロック・オリンピック協会は、あなたが成功するよう熱烈に働けたでしょうに。敬具

Coubertin 男爵殿

ウェンロック・オリンピック協会 Dr.P.Brookes」

この書簡は、Coubertin により 1894 年 6 月 16 日から 24 日まで開催され、オリンピック競技会の復興を決議した「パリ・アスレティック会議」の直前のものであり、以下の点を確認する上で重要である。

第一に、Brookes は国際的なオリンピック競技会の開催を考え、行動していたことを Coubertin に伝えていたこと。

第二に、Brookes が、Coubertin の考える国際オリンピック競技会の構想を会議前に知らされていたこと。それほど両者は親密であったこと。

それらの点は、1894 年 6 月 13 日付けで Brookes より Coubertin にあてられた書簡からも読み取れる。そこには、87 歳という高齢のため会議に出席できぬ無念さが述べられた後、アマチュア問題やオリンピック競技会の運営資金などの Coubertin の質問に資料を添えて答え、Coubertin への熱烈な支援を重ねて表明していた³⁴¹。

2. ギリシャにおける全ギリシャ競技会の開催

2-1. Phokianos によるギリシャ体育協会の設立

ギリシャにおいては、体育クラブの指導者 Arvanites S.により、中央体育クラブとオモニア体育クラブが合併して、1891 年 3 月に、体育教師や体育クラブの会員を集めて、全ギリシャ体育協会(ΠΑΝΕΛΛΗΝΙΟΣ ΓΥΜΝΑΣΤΙΚΟΣ ΣΥΛΛΟΓΟΣ)を結成した。第四回オリンピア競技祭の運動競技を実際に管理して行った Phokianos (1845-1896 年)が、その後全ギリシャ体育協会の会長となり、没するまで務めた。この協会の創設当初の目的は、構成員に体育の完璧

³⁴¹ Brookes, P.(1894) Letters to Coubertin (6.13). Archives in Olympic Museum: Lausanne.

な技術を習得させることと、ギリシャにおける体育の促進および体育教師の養成であった³⁴²。

協会として体操クラブの充実をはかっていたが、設立一年目には、アマチュアの体育競技の連合であることを宣言した。そして、全ギリシャ体育協会は、王室の後援のもと、全ギリシャ競技会（ΑΓΩΝΕΣ ΤΟΥ ΠΑΝΕΛΛΗΝΙΟΥ）を開催（1891,1893年）した。

体育協会の活動により、ギリシャ全土における体育クラブが協力し合って、体育教育の発展にも貢献していくのであった。

一方、オリンピア・遺産管理委員会は、国際博覧会と連携を保ちながら進んでいった。第四回オリンピア競技祭を終了した後、オリンピア・遺産管理委員会は、各国で行われる国際博覧会に関与していった。1889年パリ国際博覧会および1893年シカゴ国際博覧会には、ギリシャのオリンピア・遺産管理委員会会長兼内務大臣の S.Dragoumis はじめ、数人の委員が出席した。こうして委員会は、運動競技から離れ、国際博覧会のみに関わるようになり、パンアテナイ競技場の復興整備の作業や運動競技には、関わらなくなってしまうのであった。

1903年には、オリンピア遺産管理委員会主催で、アテネ国際博覧会をザッピオンで開催した。オリンピア・遺産管理委員会は、この時、ザッパス委員会（ΕΠΙΤΡΟΠΗ ΖΑΠΠΕΙΟΝ）と名称を変更した。それは、K. Zappas が病気で1902年病没したことによる。彼の遺産はオリンピア・遺産管理委員会に移されたが、ルーマニアに住む Zappas 家の遺産相続人 Petro Zappas が法廷に持ち込み、結果としてギリシャ政府は、288000フランを Petro に支払わなければならなくなった。さらにほかの遺産相続人にも和解金を支払うことになった³⁴³。そのためオリンピア・遺産管理委員会は、財政的に一段と厳しくなり、名称を変更し、活動の規模を小さくしたのであった³⁴⁴。

運動競技部門は、Phokianos を中心とした全ギリシャ体育協会が専ら関わるようになり、運動競技のみ、全ギリシャ競技会として行われることになった。

³⁴² Chrysafis, I.(1930) *ibid.*,pp.134-135.

³⁴³ ΑΚΡΟΠΟΛΗ (1941.9.21), Georgiadis,K. (2004) *ibid.*, p.51.

³⁴⁴ 1894年にCoubertinは国際オリンピック競技会のアテネ開催への支援をザッパス委員会に持ちかけるが、委員会は拒否してしまう。このことは、ギリシャ人のオリンピック競技会への関心の低さとしてCoubertinは後に述べるが、当時のザッパス委員会は既に、運動競技との関連を持たない組織になっていたためだからであった。

これは不幸なことではあったが、国際オリンピック競技会が開催されると、アテネの組織委員会は、オリンピア競技祭の経験を生かして、芸術競技も行うのであった。

第一回の全ギリシャ競技会は、Phokianosの中央体育クラブで1891年5月30日と31日に開催された。この競技会では、まず初めに、N. Kotzelopoulosによって指導された垂鈴体操とPhokianosの指導による棍棒体操が行われた。その後に、次の15の種目が行われた³⁴⁵。

- ・ 円盤投げ
- ・ 棒溝越え
- ・ 平行棒
- ・ 跳躍
- ・ マスト登り
- ・ ポールによる障害飛び越し
- ・ ボクシング
- ・ ランニング
- ・ ロープ登り
- ・ 水平棒
- ・ 走り幅跳び
- ・ 石投げ
- ・ 片手重量挙げ
- ・ 両手重量挙げ
- ・ 綱引き

この全ギリシャ競技会には、1870年のオリンピア競技祭以来、参加していなかった国王Georgiosが出席し、この競技会の後援者になることを約束した。また当時の首相Th.Deliyannis(在任1891-1893,1895-1897年)も政府として後援することを申し出た。この首相は1895年に再選され、翌年の第一回近代国際オリンピック競技会(アテネ大会)の開催に積極的に取り組んだのであった。

1893年に第二回の全ギリシャ競技会が開かれるが、この競技会は1896年の第一回近代国際オリンピック競技会にとっても重要な意味を持つことになる。皇太子Konstantinosが全ギリシャ体育協会に加わり、後援者になったのであ

³⁴⁵ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, pp.136-137.

った。彼は 1896 年のアテネ大会では、その開催に尽力し、組織委員会会長としても活躍した。また 1893 年の第二回全ギリシャ競技会に参加した競技者は、少なからず 1896 年のアテネ大会にも出場し活躍している³⁴⁶。全ギリシャ体育連盟会長の Phokianos も、アテネ大会の組織委員会副会長になるのであった。

2-2. 全ギリシャ競技会の開催とその特徴

全ギリシャ競技会は Phokianos とギリシャ王室、特に Konstantinos 皇太子の尽力のもと開催された。これは第四回オリンピック競技祭の運動競技を担当した Phokianos 自身が、主催した競技会であった。第四回オリンピック競技祭と同様に、日常的にトレーニングを実践している者に参加を限定したが、実際の参加者は、各地の体育クラブの生徒がほとんどであったことから、第四回オリンピック競技祭の運動競技の理念と同じであったと考えられる。競技会を開催することにより、若者をトレーニングする動機とし、結果的に心身の発達が達成されるという考え方であった。

会場も Phokianos の経営するアテネの中央体育クラブであった。こうして、若者のトレーニングと心身の教育という考えのもと、全ギリシャ競技会が開催された。

そして重要なことは、このような競技会の経験者が、1896 年開催の第一回近代国際オリンピック競技会にもかかわっていたことである。競技選手や役員のみならず、Konstantinos 皇太子という、後のオリンピック・ムーブメントに大きな貢献を果たす人物が全ギリシャ競技会以降、ギリシャの体育・スポーツに関わるのであった。

³⁴⁶ Chrysafis, I. (1930), *ibid.*, pp.245-256.

第2節 近代国際オリンピック競技会（アテネ大会）の受容

1. 近代国際オリンピック競技会開催の背景

1-1. ヨーロッパにおける国際博覧会の発展

19世紀半ばよりヨーロッパでは、国際的な規模での博覧会が各国の都市で開催されるようになった。19世紀におけるこれらの博覧会は、産業製品や機械類の展示が主で、その意味で産業博覧会としての色彩が強いものであった。国際的な博覧会において主導的な役割を果たしたのはフランスとイギリスであり、両国の国家的威信をかけた開催は、その規模を次第に拡大していきながら、周辺諸国のみならず、全世界に博覧会への出展を強く促していった。

一方、博覧会と近代国際オリンピック競技会との関連について見てみると、第二回大会（パリ）、第三回大会（セントルイス）、第四回大会（ロンドン）は、博覧会の一部として開催されるなど、両者の関わりは深い。両者の関連、つまり国際的な博覧会の開催を背景として、国際的なオリンピック競技会の開催が考えだされたことがうかがえる。中でも、博覧会に近代国際オリンピック競技会が接近した要因を1889年のパリ万国博覧会に見いだすことができる。

1797年にパリで王立工場の監督官が、管轄する工場の製品を中心に、工業製品を展示・販売するという工業製品の展示会の開催が、ヨーロッパの博覧会の起こりであるとされている³⁴⁷。この展示会の会期はわずか4日間であったが、革命後、工業を振興する必要に迫られていた政府が注目し、国家規模の産業博覧会の開催が決定された。その最初の産業博覧会は、パリで1798年に開催された。国家の支援を受けた産業博覧会には、軍隊のパレードや舞踏会、花火などの余興が行われるなか、百を超える産業製品が5日間にわたり、展示・販売された。この産業博覧会の成功を受けて、フランスは定期的にパリを中心に博覧会を開催していくのであった。その規模は次第に拡大し、1849年開催の産業博覧会は、会期6カ月、出品数も4千点を超え、参加地域もアルジェリアなど当時のフランスの植民地にも拡大していった。

一方で、この産業博覧会は周辺諸国にも波及し、ヨーロッパ各国で行われるようになり、1851年ロンドンで開催された博覧会を皮切りに、国際的な性格を帯びていった。ロンドンの博覧会には「原材料」「機械」「工業製品」「彫刻・造形美術」の4部門に分類されて展示され、延べにしてロンドンの人口の3倍

³⁴⁷ 吉見俊哉（1992）博覧会の政治学.中公新書,pp.29-31,182-186,198-199.

にあたる 600 万人もの観客が集まり、盛況を極めた。この博覧会以降、国際的な博覧会、すなわち万国博覧会が各国で行われるようになるが、フランスでは、イギリスの博覧会を凌駕すべく、国家主導で大規模な国際博覧会をパリで開催していくのであった。すなわち、1855 年、1867 年、1878 年、1889 年、1900 年という具合に、ほぼ 10 年毎に開催され、入場者数も、520 万人、680 万人、1600 万人、3240 万人と増え続け、第二回近代国際オリンピック競技会がその一部として行われた 1900 年の万国博覧会では、4810 万人もの入場者を集めた。

1880 年以降、フランスは首相 J. Ferry (1832~1893 年)のもと、植民地拡大政策が押し進められていく。1889 年のパリ万国博覧会の展示品は、美術・学術・原材料・家具・服飾・工業製品・機械・食品・農業・園芸が主な部門であり、中でも工業製品や機械製品の出展数が圧倒的に多かった³⁴⁸。このことから、1889 年のパリ万国博覧会は、帝国主義時代における工業重視の国家的な意志が反映された産業博覧会的な性格を引き継いだものであったと言える。

・産業博覧会とギリシャのオリンピック競技祭

ギリシャ独自のオリンピック競技祭は、国際的な産業博覧会を意識していたことがうかがわれる。1859 年のギリシャのオリンピック競技祭の規定によれば、優秀な製品はパリの国際的な博覧会に出展されることが明記されていた³⁴⁹。これは、ヨーロッパ各地で行われた博覧会の影響がヨーロッパの東端に位置するギリシャにまで及んでいたこと、そしてパリの博覧会が各国の博覧会の中で、重要な地位を得ていた事を示している。

ギリシャのオリンピック委員会は、1888 年開催のギリシャ独自の第四回オリンピック競技祭に、詩歌、音楽、古代劇などの芸術競技を導入しつつ、さらに国際的な博覧会との関連も強めていった³⁵⁰。ギリシャのオリンピック委員会は、委員長で内相も努める Dragoumis を団長として 1889 年のパリ万国博覧会と 1893 年シカゴ開催の万国博覧会に視察団を派遣した。その際、彼らの活動内容について、すなわち、産業博覧会とともに行われたギリシャ独自のオリンピック競技祭などについて、その報告書などにより宣伝している³⁵¹。パリからの

³⁴⁸ Picard, A.(1889-1992) Rapports du jury international:de l'exposition universelle de 1889., Paris.

³⁴⁹ Chrysafis, I.(1930) *ibid.*, p.33.

³⁵⁰ Επιτροπή Ολυμπίων και κληροδοτημάτων (1888) Κανονισμός Δ' Ολυμπιαδός. Ethniki Tipographia : Athens, pp.1-3.

³⁵¹ Vovolinis, S.A.and Vovolinis, K.A. (1958) Μέγα ελληνικόν βιογραφικόν λεχικόν (1962),

帰国後、Dragoumis は、アテネにおいてオリンピック委員会主催で、国際的な博覧会を計画し、1902年にアテネの国立公園で開催した。

・欧米で行われた国際的な（産業）博覧会（19世紀後半～）

1851年	ロンドン	入場者数 600 万人
1855年	パリ	入場者数 520 万人
1862年	ロンドン	入場者数 620 万人
1867年	パリ	入場者数 680 万人
1873年	ウィーン	入場者数 730 万人
1878年	パリ	入場者数 1600 万人
1889年	パリ	入場者数 3240 万人　オリンピック遺跡を復原(ドイツ)
1893年	シカゴ	入場者数 2750 万人
1900年	パリ	入場者数 4810 万人
		第二回近代国際オリンピックを会期中に開催
1902年	アテネ	入場者数不明
		ギリシャのオリンピック委員会が主催
1904年	セントルイス	入場者数 1970 万人
		第三回近代国際オリンピックを会期中に行う

1-2. オリンピア遺跡の復元

1889年のパリ万国博覧会とオリンピック競技会との関連を特徴づけるものの一つに、ドイツの考古学者たちによるオリンピック遺跡の復元があった。初代のギリシャ王がバイエルン出身であったことから、ギリシャの独立以来、ドイツ人考古学者は、こぞってオリンピック遺跡を訪れ、考古学的な調査をしたのであった。アテネ大学の教授の任に就いて早くからオリンピック競技会の開催を提唱した Ross や遺跡の発掘を提唱した Curtius らの働きにより、プロイセン政府とギリシャ政府との交渉の結果、その成果を定期的に公表することと、すべての遺跡の財産をギリシャに帰属させることなどを条件に、1875年から1881年まで、オリンピック遺跡の発掘（第1次）が行われた。発掘に関する年次報告書は、当時の欧米の考古学者、古典学者の間で「最大の成果」として、常に熱狂的な話題となったことが当時の関連の学会誌などからうかがえる。そしてドイツの考古学者は、1889年のパリ万国博覧会において、オリンピックの

遺跡の精巧な復元模型を作成し、展示した。そこにはゼウスやヘラの神殿を初めとして、パラストラやギムナシオンやスタディオ（競技場）などの復元が展示され、オリンピア遺跡の発掘の成果を、視覚的に公表した。この展示については、ヨーロッパを席卷していた新古典主義様式に象徴されるような、ヨーロッパ人のギリシャ文化への憧憬から、会場を賑わした。

一方、Coubertin もこの博覧会場で、「身体運動に関する会議」を催し、人類の進歩が象徴的に表現されているとして、この博覧会に感銘を受けたことが報告されている³⁵²。このように 1889 年のパリ万国博覧会においては、エッフェル塔や産業製品、機械製品の展示の傍らで、ギリシャでの独自のオリンピア競技祭の試みが紹介され、またドイツによるオリンピア遺跡が展示されるなど、近代国際オリンピック競技会の前史としての視点からも、極めて重要な要素が含まれていたのである。

Coubertin により設立された近代国際オリンピック競技会も、第二回オリンピック競技会（パリ）では、国際博覧会の一部として行われているし、第三回オリンピック競技会（セントルイス）も、ルイジアナ州併合百周年の国際博覧会の一部として行われた。国際的産業博覧会は、近代を象徴するイベントであった。ギリシャ独自のオリンピア競技祭とともに、近代におけるオリンピック競技会も、産業博覧会と関連をもったのであった。

2.近代国際オリンピック競技会のアテネ開催の決定

2-1. 1894 年のオリンピック復興会議の開催

第一回近代国際オリンピック競技会の開催地にアテネが選択されたのは、1894 年 6 月にパリのソルボンヌ大学で行われたパリ・アスレティック会議においてであった。この会議はオリンピック復興会議と呼ばれており、主催者は Coubertin であった。

ところで Coubertin は、第一回近代国際オリンピック競技会を 1900 年パリ開催の万国博覧会と同時開催して出発させたいとの意向を、パリ会議の直前まで持っていた。Coubertin 自身後に次のように回想している。

「私は最初の競技会を 20 世紀の始まりになる年にパリで開催しようと考え

³⁵² MacAloon, J (1980) This great symbol: Pierre de Coubertin and the origin of the modern Olympic Games. The University of Chicago Press, pp.132-138.

ていた。その考えを 1894 年 6 月 15 日付けの“Revue de Paris”に書き、競技会がヘレニズムの精神で貫かれるように強調した³⁵³」

オリンピック競技会の復興を決定するパリ会議は、1894 年 6 月 16 日から 24 日までソルボンヌ大学において開催された。初日の 16 日に開会式、24 日には閉会式が行われ、晚餐会にはヨーロッパ諸国を中心に 12 ケ国 49 団体の代表が集い、総勢 2 千人余りが出席した。実際の協議はその後、19 日から 23 日の間に開かれた。

会議の出席者は 2 つの専門部会に別れて議論に参加した。第一部会では、アマチュア問題について話し合われ、フランス・レーシングクラブの M. Gondine が議長の任を務めた。一方、第二部会では、オリンピック競技会の復興について話し合われ、全ギリシャ体育協会の Demetrius Vikelas (1835~1908 年) が議長に選ばれた。それぞれの専門部会は 30 人余りの委員で構成されていた。

2-2. 第一回近代国際オリンピック競技会開催地のアテネ決定

オリンピック競技会についての専門部会で、第一回近代国際オリンピック競技会の開催地について審議されたのは、オリンピック委員会の会議議事録によれば、一回目の専門部会の会議が行われた 19 日と会議の最終日 23 日の二回である。19 日の会議の議事録には以下のように記述されている。

「開催年についての疑問は、解決されねばならない重要な問題である、つまり複数の人々が第一回の競技会を 1896 年にロンドンで行い、第二回をパリで 1900 年に行うべきであると主張した、と言うのは最初に表明された 1900 年開始という案は、開催までの期間が長すぎるためである。しかしながらそれに対する異議が出された、それはこの会議は、イギリスを利する決定を下す権限を有していないし、イギリスにはすべてのスポーツクラブを統括する連合体や、スポーツの観点から完全な自主を維持できるような大学も存在しない、というものであった。³⁵⁴」

ここで明らかなのは、Coubertin の 1900 年パリ開催案に対して異議が出され、1896 年ロンドン開催案が参加者の中から提出されていたという事である。

³⁵³ Coubertin, P.(1942) Olympische Erinnerungen.Sportverlag: Berlin, p.21.

³⁵⁴ International Olympic Committee(1894) Commission for the Olympic Games.Lausanne,pp.1-4.

その後の議事録を追うと、この問題については一旦休止し、賞や選手の道徳的適格性や選手登録の方法、国際オリンピック委員会の権限について話し合い、Coubertin の次の声明を満場一致で可決している。

「委員会はオリンピック競技会の復興に向けて前進することについて、スポーツと道徳性や国際化の視点から、一致した。これらの競技会は近代的な生活の現実在即して復興されるべきである³⁵⁵。」

この後、開催の周期を四年と決定し、第一回の競技会を 1896 年に行うことも決定したのであった。

原案の 1900 年開催を 4 年早めるという修正案が可決された後、開催地の問題に立ち返っている。

「第一回の競技会の開催地の問題 について Coubertin は、ロンドンでの開催を表明するには困難が予想されると述べた。彼はアテネが選ばれるべきであると提案した³⁵⁶。」

この時に初めて Coubertin は、アテネ開催を口にした。彼の提案したアテネ案については、アテネは第一回の競技会を行うにはヨーロッパの中心から遠いので、ロンドンで開催すべしという参加者の意見が出された。Coubertin は、イギリスアマチュア競技協会の代表、Herbert が会議に来るまで結論を延期する事を提案した。

Coubertin は、アテネ案を提出して結論を先送りにすることで、ロンドン案の決定を阻止しようとしたとも思われるのである。

次のオリンピック競技会に関する委員会の会議は 21 日、22 日にも開催されたが、開催地については議論されていない。そして 23 日の会議でアテネ案が再度提出され、満場一致で可決されたのであった。19 日の会議終了後から 23 日までにアテネ案を決定すべく、Coubertin らが活動したことは想像に難くない。

Coubertin はギリシャ人、Vikelas の説得により、アテネ開催に傾いていったと述懐しているが、Vikelas に関する史料には、そのような形跡は認められない。

³⁵⁵ International Olympic Committee(1894) *ibid.*,p.4.

³⁵⁶ Vikelas, D.(1895) *Οι διεθνείς ολυμπιακοί αγώνες*. ΕΣΤΙΑ 19,p.147.

オリンピック競技会に関する専門部会の議長を務めた Vikelas は、この会議についての回想を 1896 年 5 月発行の雑誌に、「国際オリンピック競技会」という題目で載せている。そこには、1894 年 6 月のパリ会議への出席の経緯について次のように述べている。

「昨年の 6 月のある晩に郵便が届き、全ギリシャ体育協会の会員証が入っていた。私はそのような協会について何も知らなかったし、会員証を依頼したこともなかった。翌朝、大きな封筒が配達され、代表として国際的なスポーツの会議へ出席してほしい旨の協会からの書簡が入っていた。それは公式文書であり、私の友人で当協会のメンバーの手紙もつけられていた。そしてその会議は数日の内に開催されることを電報で知ったのである³⁵⁷。」

当時の Vikelas はパリで活躍したギリシャ人作家であった。全ギリシャ体育協会の名前を知らない Vikelas が、パリでの国際会議に出席するようになった。そして専門部会の議長に指名された。しかし Vikelas は、オリンピック競技会については、かなりの情報をもっていた。というのは、アテネでオリンピック競技祭が行われていたことを、1875 年の論文に書いている。1894 年の会議中に、Vikelas は Coubertin と会議の進行についてその都度話し合い、Coubertin の意に従うように運営したであろう。アテネ案を提案したのも、彼自身の判断ではなく、Coubertin の指示によるものと想像される。アテネ案は、基本的には Coubertin 自身の腹案であったと考える方が妥当であろう。

アテネ案支持を表明した Coubertin は、ギリシャ国王からのアテネ開催の電報を取り付けた。さらに彼は第一回近代国際オリンピック競技会の開催地を決定する 6 月 23 日の会議の日、採決する前に Vikelas が、アテネでのオリンピック競技会開催のための演説を行った。その内容については、後に次のように回想して述べている。

「ギリシャの制度の復興については、ギリシャにその権利が有るということを私は主張しました。実際、Victor Hugo も指摘しているように、すべての文明化された世界は、共通の祖母の姿を古代ギリシャに見いだすことができるのでありますが、私たちギリシャ人は、母の姿を古代に見いだしているのであります。従って私たちは他の人々の伯父になる訳であります。これこそが私たちの強みであります。復興されるオリンピック競技会は私たちギリ

³⁵⁷ Vikelas,D.(1895) *ibid.*,p.146.

シャの地で始められるべきであるという私の要請の根拠もその点にあるのであります。^{358]}

Coubertin はアテネ案可決を目指して、アテネ開催の保証を得るべくギリシャ国王からの電報を送らせ、そして採決の直前に Vikelas の招致演説を行わせた。こうしてロンドン案は退けられ、満場一致で 1896 年の第一回近代国際オリンピック競技会の開催地にアテネが決められたのであった。

何故に Coubertin はロンドン案を阻止したのかについては推測の域を出るものではない。しかしながら当時のイギリスは Coubertin にとってスポーツの先進国であったし、Coubertin 自身が 1890 年の 10 月に観戦して感激したウェンロックのオリンピア競技祭も、創始者 Brookes のもとで開催されていた事などを考え合わせると、オリンピック競技会やスポーツの先進国イギリスでの開始は、Coubertin 自身の思い描いていた近代的なオリンピック競技会の方向性に悪影響を及ぼすとの危機感を抱いていたものと思われる。

3.近代国際オリンピック競技会へのオリンピア競技祭の影響

3-1. オリンピック組織委員会と財源

Vikelas は当時パリに住んでいたが、アテネでの近代国際オリンピック競技会開催が決まるとアテネに出かけた。1894 年 10 月にザッピオン委員会とオリンピック競技会の開催に向けての交渉を行うが、彼らは競技会に否定的な立場を取っていた。当時のギリシャ政府（首相 Trikoupis 在任 1882-1885 年,1893-1895 年）は、国家財政の破綻のため、競技会開催の余裕はないとの立場であり、それに委員会は同調していたからであった。同年 11 月に Coubertin もアテネでザッピオン委員会の Dragoumis に会うが、はっきりとオリンピック競技会の開催を財政難という理由で拒否された。

Coubertin がパリに帰った後、Vikelas はオリンピック競技会の開催に積極的な王室の一員、Kontantinos 皇太子に接することができ、その実現に向けての組織委員会を結成することができた³⁵⁹。

一方 Coubertin は、アテネ大会の準備にあまり関与していなかった。Young

³⁵⁸ Vikelas,D.(1895) *ibid.*,pp.145-149.

³⁵⁹ Young,D.C.(1998)DEMETRIOS VIKELAS:First President of IOC. Stadion 14-1 pp.85-102.

によれば、この頃の Vikelas の Coubertin 宛の書簡には、競技会の運営について指示を仰いだもの、アテネへの来訪を要請したものが多くあるが、Coubertin からの返答がなかったため、1895年1月31日の書簡には、ギリシャ人で準備を開始する旨が述べられているのであった³⁶⁰。

同年1月13日のオリンピック競技会の組織委員会が開かれ、Konstantinos 皇太子のもと、次のような特別委員会が組織された³⁶¹。

- a. 水上競技委員会 (委員長 Yorgios 皇子)
- b. 射撃委員会 (委員長 Nikolaos 皇子)
- c. ギリシャ競技委員会 (委員長 A.Fillas)
- d. 体操競技委員会 (委員長 Phokianos I.)
- e. フェンシング委員会 (委員長 M. Athanasiou)
- f. 自転車競技委員会 (N.Vlankalis)
- g. ローテニス等競技委員会 (委員長 F. Serpieris)
- h. 競技場準備復興委員会 (委員長 A. Theofilas)
- i. 接待委員会 (委員長 I. Kokkidis)

これらの委員会は1895年2月1日にザッピオンにて、皇太子のもと総会を開催し、具体的な準備を開始した。

この組織委員会の中で、体操競技委員会の委員長に、1870年、1875年、1889年のオリンピア競技祭に中心的に携わった Phokianos が就任している。また彼の理解者としてオリンピア競技祭を後援したギリシャ皇太子 Konstantinos も近代国際オリンピック競技会に積極的にかかわった。Phokianos はギリシャ体育協会の第二代会長を務めるが、Chrysafis をはじめ Phokianos の弟子たちも、1896年の近代国際オリンピック競技会の役員に就任したのであった。

財源の確保

1894年7月3日、Vikelas はギリシャの Konstantinos 皇太子より、国際オ

³⁶⁰ Young,D.C.(1996) *The Modern Olympics*.,*ibid.*,pp.286-287. Coubertin がアテネに入ったのは大会開催の10日前であった。このことについて MacAloon や Mandell は、パリでの執筆活動、結婚、そしてギリシャ人が Coubertin の来訪を妨害していたと述べている。MacAloon,J. (1980,*ibid.*,pp.401-404, Mandell,R.,*ibid.*,p112. しかしながら、そのことを示す証拠はない。

³⁶¹ Chrysafis, I. (1930) *ibid.*, pp.212-213.

オリンピック競技会のアテネでの開催決定を祝福する電報を受け取り、ギリシャ王室がオリンピック競技会の開催に対し、援助を惜しまないことが伝えられた。

Konstantinos 皇太子を会長とする組織委員会が発足したが、Trikoupis 率いる政府は、財政支援しないことを決定した。Konstantinos は窮地に立たされるが、組織委員会を強化し、事務局長に T. Philemon（前アテネ市長）を就任させた。大会のための寄付を一般市民に呼び掛けたところ、33 万ドラクマが集まった。Konstantinos は資金集めにも奔走し、海外在住のギリシャ人に寄付を要請し、コンスタンチノーブル、ロンドン、マルセイユ、アレクサンドリアに住むギリシャ人から多額の援助を取り付けたのであった³⁶²。

さらに皇太子はアレクサンドリアの富豪、Averof に手紙で、パンアテナイ競技場の復興費用（58 万ドラクマ）を請願したところ、92 万ドラクマが送られて来た。記念切手は 40 万ドラクマ売れた。入場券は 20 万ドラクマの売り上げであった。ギリシャ人建築家 Metaxas A. がパンアテナイ競技場の整備を担当した。一般市民はオリンピック開催を熱烈に支持し、資金を確保することができた。

このような財源確保の方法は、ギリシャ独自のオリンピア競技祭の方法を受継いだものであることは明らかである。Konstantinos 皇太子を中心として王室の支援を受けたことは、第四回オリンピア競技祭と全ギリシャ競技会と同様であった。

3-2. 近代国際オリンピック競技会の競技種目

第一回近代国際オリンピック競技会は、1896 年の 4 月 6 日から 15 日まで開催され、水泳、陸上競技、フェンシング、射撃、自転車、体操、テニス、ウェイトリフティング、レスリングの 9 競技 43 種目が競われた。14 ヶ国から 241 人が参加した。陸上競技はアメリカの競技者が強かったが、マラソン競技でギリシャ人の Louis Spiridon（1873～1940 年）がトップでパンアテナイ競技場に入ってくると、大歓声の中、2 人のギリシャ皇子が並走してゴールし、大観衆の声援を浴びた。

この近代国際オリンピック競技会においては、競技種目の面でもギリシャの

³⁶² MacAloon, J. (1980) *ibid.*, pp.388-391. アレクサンドリアの富豪 Averof は、競技場を古代の栄光の姿に復元するための費用 100 万ドラクマを寄付すると申し出た。

オリンピア競技祭の関連を見いだすことができる。

運動競技では、ギリシャ独自のオリンピア競技祭で行われていた槍投げと円盤投げが近代国際オリンピック競技会にも引き継がれた。これは今日でも行われている競技だが、当時の他のヨーロッパ人には知られていなかった。この競技をギリシャ人が近代国際オリンピック競技会に導入したことは、古代からの競技種目を遺産として引き継いだことを意味している。と言うのは、古代オリンピア競技祭において行われていた投擲の競技は、的を当てることを競うのではなく、飛ばした距離を競うので、このことは、実用的な武器をスポーツ的な要素に変容させたことを物語っている。その象徴的な競技を近代国際オリンピック競技会に導入したことにより、古代から近現代までを、実用性から離れたスポーツ的な考えで結んだといえる。ギリシャ人の間でのみ、中世から近代へ引き継がれていた投擲という種目が、第一回近代国際オリンピック競技会において、彼らの努力でオリンピック種目として行われたことにより、今日のオリンピック競技大会においても、継続して行われているのである。その意味で、槍投げや円盤投げは、ギリシャのオリンピア競技祭の遺産といえる。

ギリシャのオリンピア競技祭において行われた芸術競技は、1896年開催の第一回近代国際オリンピック競技会においても、引き継がれた面を見いだすことができる。音楽競技が、組織委員会の計画に入っていた。音楽競技は、大会7日目午後各楽団によるコンクールが予定されていた。しかし海上の悪天候により、地方からの楽団の到着が遅れたため、当日になり中止になってしまった³⁶³。そのため、その夜に7つの楽団が市内の大通を演奏しながら行進して終わったのであった。7つの楽団はラウリオン、セントモウラ、ケファロニア、ザンテ、コルフの楽団とアテネフィルハーモニー楽団、それに王室海軍の楽団であった³⁶⁴。

閉会式でのメダルの授与式では、オックスフォード大学の学生 G. Robertson が、大会10日目にオリンピック競技会を賛嘆した自作の詩を観衆の前で朗読し、国王よりオリーブの小枝が授与された³⁶⁵。古代のデルポイで行われたピュティア競技祭の音楽競技などでは、月桂樹が勝者に授与された³⁶⁶。また1888

³⁶³ Politis, N.G., Anninos, Ch. (1897) *The Olympic Games*; B.C. 776-A.D. 1896. Charles Beck, Athens, pp.99-103.

³⁶⁴ Politis, N.G. (1897) *ibid.*, p.103.

³⁶⁵ Politis, N.G. (1897) *ibid.*, pp.111-112.

³⁶⁶ Kyle, D.G. (2007) *Sport and spectacle in the ancient world*. Blackwell Publishing: Oxford,

年の第四回オリンピック競技祭の詩歌競技では、ザッピオンの大ホールで、優勝者の詩歌が朗読された。これらは、オリンピック競技祭などにおける芸術的競技の習わしを踏襲したものと言える。

すべての競技を通じて、優勝者には銀メダルとオリーブの小枝、2位には銅メダルと月桂冠が授与された。古代劇は市内の劇場で上演された³⁶⁷。

このように、アテネで開催された第一回近代国際オリンピック競技会においても、音楽競技がギリシャ人自身の手によって計画されたことに象徴されるように³⁶⁸、ギリシャのオリンピック競技祭の遺産（レガシー）をそこに見ることができる。

3-3. 近代国際オリンピック競技会の理念

国際オリンピックの理念の中には、アマチュアリズムの考えが大きな要素を占めていた。これは賞金目当ての競技選手を排除しようというもので、競技の純粹さを守る上で、重要な要素と考えられていた。これとほぼ同様の考えは、ギリシャ独自のオリンピック競技祭においても、確認される。競技への参加者を、学生や軍人など、一定のトレーニングを日常的に積み重ねて来た者のみが、参加できるような競技規定は1870年以降に導入された。そして、1875年の第三回、1889年の第四回オリンピック競技祭、そして1891年と1893年の全ギリシャ競技会においてもこの規定が継承された。若者をトレーニングすることが大事で、競技場へと向かわしめ、古代と同様に教育に資するという考えであった。

1900年の第二回近代国際オリンピック競技会（パリ大会）、1904年の第三

pp.138-139.

³⁶⁷ Ministry of Culture(1989) Mind and body;the revival of the Olympic Idea 19-20th century. Athens, pp.110-112.

³⁶⁸ 第1回近代国際オリンピック競技会における射撃委員会委員長 Nikolaos 皇子のもと、各国の武器に関する展示(exposition)が開催された。

在英ギリシャ代理公使 D.G.Metaxas より在英特命全権公使の加藤高明を通して、日本で使用されている武器の出展依頼が1895年8月になされた。外務省から連絡を受けた陸軍省(大山巖陸軍大臣)は村田連発銃1挺と擬製実包30発を1896年1月にギリシャに送付した(中川隆編(1997)近代日本オリンピック競技大会資料集成1. 紫峰図書 pp.4-5.)。

第1回近代国際オリンピック競技会の準備委員会は、水上競技・射撃・体操競技・剣術・自転車競技・ローンテニス・競技場・競技力向上・接待など9つの専門委員会のうちの射撃委員会の管轄で、武器製品の展示会が開催された。

回近代国際オリンピック競技会（セントルイス大会）は、いずれも、産業博覧会と共催してオリンピック競技会が行われた。これは、単独での開催に比べて経済的な負担が少なくなるということ以上に、産業博覧会が近代社会を象徴する人類の文化を象徴するものであったからである。世界の最先端の技術と製品が一堂に並べられ、人類の文明の発展の軌跡を認識でき、世界のようにその場で体験できたからであった。近代国際オリンピック競技会の近代性をアピールするには、格好の場であったと関係者は思っていたに違いない。

Coubertin は、1896年の近代国際オリンピック競技大会の報告書の中で、通信・輸送の発達により、様々な民族がお互いのことを知るようになり、芸術、産業、科学などの分野で、より偉大な功績を競争するようになったのが当時の社会であるとして、国際博覧会は世界の最新のものを一カ所に集約したと述べている³⁶⁹。オリンピック競技会の開催により、人類を連帯させようと考えた Coubertin にとって、国際博覧会の一部としてオリンピック競技会を開催することは、理想的な方法と考えたのであった。

産業博覧会とオリンピック競技会との連携は、近代ギリシャにおいては、1830年代から考えられていた。第一回から第四回オリンピア競技祭まですべて、産業製品の競技と産業博覧会が開催されたのである。古代の競技を近代社会に適応させたものの一つと考えられていた。ギリシャの場合は、産業振興を目的としてオリンピア競技祭が始められたためでもあったが、近代における競技のあり方を模索して考えられた近代国際オリンピック競技会も、産業博覧会との関連を着想したことは興味深い。

さらに、近代国際オリンピック競技会において Coubertin は、芸術競技に力を入れた。これは肉体と精神の結合をめざすもので、1906年にパリで芸術競技導入の会議を開催し、1912年の第五回オリンピック競技会（ストックホルム大会）から、オリンピック種目として、絵画、彫刻、建築、文学、音楽の5部門の芸術競技が始められた。Coubertin はこれらを「Museの五種競技」と名付けた。

芸術競技はギリシャ独自のオリンピア競技祭においては、早くから導入されて行われていた。ギリシャ人の考えた芸術競技の理念も、Muse神の崇拝のもとに行われた。

近代国際オリンピック競技会の目的の一つとして、スポーツによって鍛えら

³⁶⁹ Coubertin,P., Philemon,T., Politis,N.G., Anninos,Ch. (1897). The Olympic Games ; B.C.776-A.D.1896. Second Part. Athens: Charles Beck,. Athens.p.3.

れた青少年が交流することにより、平和な社会の創造に寄与する、ということがあげられる。平和への観念もギリシャでは考えられ、表明されていた。規定には盛り込まれてはいないが、知識人たちの講演などを収めた報告書の中に、見いだすことができた。競技会への参加者間で、平和の観念が確立され、それぞれの国々の間で、城内平和が達成される、という考えであった。

一方、近代国際オリンピック競技会とギリシャ独自のオリンピア競技祭の決定的な相違は、前者が開催都市の持ち回り制による国際性を主張したのに対し、後者はギリシャ中心のオリンピア競技祭を志向していたという点である。ギリシャのオリンピア競技祭は、全ギリシャ的、全民族的な競技祭であったのに対し、Coubertin は、国際的な展開という考えをもっていたことが大きな相違点である。

この点での相違は、Coubertin とギリシャとの対立をもたらしたのであった。

第3節 近代国際オリンピック競技会のギリシャでの継続開催の要求

1. ギリシャ国王による近代国際オリンピック競技会継続開催の発言

1-1. ギリシャ国王の挨拶とその波紋

ギリシャ人にとって、近代国際オリンピック競技会の開催は、ギリシャ的なオリンピック競技会の国際版であり、彼らの考えたオリンピア競技祭の延長線上にあった。

ギリシャの **Georgios** 国王は、第一回アテネ大会の晩餐会（1896年4月12日）で次のようにあいさつし、国際オリンピック競技会のアテネでの継続的な開催を要望した。

「全ギリシャの古代の競技会の母であり、乳母でもあるギリシャは、ヨーロッパと新世界の人々が見守る中、祭典を復興する事業に着手し、予想以上の大成功を収めることができた。ギリシャを訪れてくれた諸外国の皆様が、各国の平和な集いであるオリンピック競技会の永遠の故郷として、ギリシャを指名して下さることを切に希望したい³⁷⁰。」

アテネ大会は成功裏に終わったこともあり、ギリシャ国王としては、当然にして国際的なオリンピック競技会も、ギリシャの地で行うべきであるとの考えを表明したのであった。

ギリシャでの近代国際オリンピック競技会の継続開催の根拠は、1894年のオリンピック復興会議における **Vikelas** の招致演説にもあらわれている。ここでは、ギリシャこそ、オリンピック競技会の故郷であるとの主張であった。

これに素早く反応したのはアメリカ人であった。アメリカ選手とアテネ在住のアメリカ人たちが、ギリシャでの継続開催を支持する声明を発表した（1896.4.14）

「アテネ国際オリンピック競技会に参加した私達アメリカ人は、滞在中に受けたあたたかいもてなしに対して、組織委員会やギリシャ国民の皆様にご心からお礼申し上げます。競技の運営についても満足するものであった。理想的な建造物であるスタディオンが存在し、運営能力もすばらしく、オリンピック競技会の発祥の地という事実から、私たちはオリンピック競技会

³⁷⁰ Coubertin, P., Philemon, T., Politis, N.G., Anninos, Ch. (1897). *The Olympic Games* ; B.C.776-A.D.1896. Second Part. Athens: Charles Beck, 151.

が、その本来の地を離れて行うべきではないと確信する³⁷¹。」

さらに、”*The Times*”にも、同様にギリシャでの継続開催を支持した。その内容（1896.4.16）は次の通りである。

「こうして祭典は成功裏に幕を閉じた。数日の悪天候にもかかわらず、水上競技以外のすべてのプログラムは首尾よく実施され、皇太子（筆者注：ギリシャ皇太子 Konstantinos）や彼と共にはたらいた人々は、彼らの仕事が成功裏に運んだことに満足した。来訪者たちは皆、祭典のすばらしい秩序正しさ、大観衆の模範的な態度や、勝利した外国の競技者たちへの称賛に見られる騎士的な態度に感動していた。

将来アテネはオリンピック競技会の恒久的な場所になるであろうと広く望まれている。既に国際競技委員会により、1900年の競技会の開催地にパリが選ばれているが、公式の決定は出されていないので、アテネ市民たちの要求は十分に認められるであろう。文明国家間の平和と友好は、いろいろな大きな都市で開催することで促進される、と会議で広く出された考えは注目に値する。しかしアテネには特別の魅力があり、他の場所にはスタディオンがないのである。最善の方法は、競技会を2年毎にし、アテネと、他のヨーロッパやアメリカなどの都市とで、交互に開催することであろう。このようにすれば、委員会の計画を進めながら、競技会はヘレニズムの特徴を維持することができるであろう³⁷²。」

ここでは、IOCの決定とギリシャの要求の折衷案として、オリンピック競技会を2年毎の祭典とし、古代の競技場を持っているギリシャと、他の都市とを交互に開催する、という提案が出された。アテネで開催された第一回国際オリンピック競技大会の成功は、外国人やマスコミをして、ギリシャでのオリンピック競技会の継続的開催を支持させたのであった。

1-2. Coubertin とギリシャとの対立

この事態に Coubertin は反撃に出た。もともと、Coubertin は、第一回オリンピック競技大会のためにギリシャに入ってから、あまり心地よく思っていなかったことが確認される。Coubertin がアテネに到着した日に“*ΑΣΤΥ*”紙のイ

³⁷¹ *New York Times*, New York, 1896. 5.3.

³⁷² *THE TIMES*; London, 1896.4.16.

インタビューを受けた Coubertin は次のように応じた。

「今日の多くの人々はオリンピック競技会の復興はギリシャ人自身の手によるもの、と主張している。しかしながら、ソルボンヌで私がオリンピック競技会の復興を提唱した 1892 年 11 月 25 日より以前に、その考えを表明した者はない。その考えを想定した多くの意見はあっても、それを表明しなかったという事実において、明らかな相違がある³⁷³。」

Coubertin はギリシャの世論に当初から挑戦的であった。大会の表彰式の中で、アテネでの継続開催の要請がギリシャの王室より出された際³⁷⁴、Coubertin は孤立したが、席上「何も解らぬ愚者を装うことにし」て、無視したのであった³⁷⁵。その後 Coubertin は、“*The Times*”ではっきりと彼の見解を述べた。それは大会の開催に尽力したギリシャ人を驚かせるような内容であった。メディアやアメリカ選手団などに支持されたギリシャでの継続開催について、Coubertin はただちに反論した。ギリシャで続けて開催することを支持した“*The Times*”に対して、次のような抗議文を送った。

「タイムズ編集者殿； ヨーロッパの新聞では、今後オリンピックは、ギリシャに固定して行くと伝えている。そのようなことはない。2 年前のソルボンヌに招集された国際会議で決定された通り、オリンピックは世界各地を回ることになっている。1900 年にはパリで開催され、1904 年には、ニューヨーク、ベルリン、ストックホルムのうちいずれかが、委員会で選ばれることになっている。わたしたちの計画は始められたばかりなのに、ギリシャ人がそれを、彼らの計画によって、独占しようとしているのは明らかである。しかし我々は、そのような計画に同意することはできない。

4 月 24 日 Pierre de Coubertin ³⁷⁶」

Coubertin は、第一回近代国際オリンピック競技会に引き続きアテネでオリンピック競技会を開催することに強く反対した。その根拠として、もともとギリシャ人は、オリンピック競技会の復興など考えもつかなかったばかりか、反対さえしていたのだと彼は述べている。そしてギリシャ人が、オリンピック競

³⁷³ Tarassoules, Ath. (1988) Olympic Games in Athens. Athens, p.22.

³⁷⁴ MacAloon, J(1998), ibid., p.489., D.C.Young, VIKELAS., ibid., p.92.

³⁷⁵ Diem, C., ibid., p.44.

³⁷⁶ *THE TIMES*:1896.4.30

技会の復興という大事業を、独占しようとしていると、強い口調で反論した。

この Coubertin の見解は、オリンピック競技会の運営に携わったギリシャ人を驚かせた。なぜならば、オリンピック競技会は当然アテネで行われるべきであるとする歴史的根拠を持っていたからである。すなわち、1859 年以来、4 度アテネで行われたギリシャ独自のオリンピア競技祭開催の経験であった。

Vikelas は、ギリシャの立場から盟友 Coubertin に理解を求めた。彼は、1896 年 6 月 4 日に次の書簡を Coubertin に送った。

「始められたばかりの事業の進展を妨げるような性急さは、ともかく慎みましよう。それ以外の事は、ご存じのように、これまで通り声高に叫び続けていきます。つまり、Coubertin 男爵なくして、いかなる国際オリンピック競技会もあり得ないということです。しかし私は最初に話したではありませんか。Zappas によってここで始められたオリンピック競技会のことを。……(中略)…… 国際オリンピック競技会の確立の名声はあなたのものであります。しかしギリシャにおいてオリンピック競技会が行われていたという事実はそれでも残るし、何人もその名前を消し去ることはできないのです。誰もアテネの競技会から“オリンピック”の名を否定する権利はないのです³⁷⁷。」

Vikelas は Coubertin に、19 世紀に行われていたギリシャ独自のオリンピア競技祭について伝えていた。Coubertin はそのことについて正しく理解していなかったか、取るに足りないものとしてしか扱っていなかった。

Coubertin がオリンピック競技会の復興を着想した背景には、Brookes によって知らされたウェンロック・オリンピックとギリシャのオリンピア競技祭の二つのオリンピック競技会が存在していた。少なくとも、最初に古代オリンピア競技祭の復興を着想したのは、Coubertin ではなかった。イギリスの Brookes やギリシャ人は、既に彼らなりの古代オリンピア競技祭の復興を行っていたのであった。

これ以降、Coubertin は、ギリシャの動きに対して警戒を強めた。彼の考えるオリンピック競技会の構想、すなわち各都市の持ち回りによる大会の開催が薄められることは、オリンピック競技会のギリシャ的な性格が強くなり、近代的なオリンピック競技会にはふさわしくない、と考えたのであった。そして Coubertin は、ギリシャ的な要素を薄めるために、古代オリンピア競技祭の復

³⁷⁷ Vikelas,D.(4 June,1896) Letters to Coubertin. Archives in Olympic Museum, Lausanne.

興ではなく、新しい近代国際オリンピック競技会の創設であることを訴えていくのであった。それは1896年の秋に著した、「1896年のオリンピック競技会」という論稿に示されている。

「アテネで行われたオリンピック競技会は、近代的な性格をもったものであった。それはプログラムで、例えば戦車競走が次点者競技に代わり、残忍な殴り合いがフェンシングに代わったというばかりではなく、その規定に示されているように、国際的で普遍的、その結果競技が今日の時代に発展してきた状況に適応したということである。古代の競技会は、排他的なヘレニズムの特徴を有していた。つまり常に同じ場所で行われ、ギリシャ人の血を受け継いでいる者のみしか参加できなかった。実際には外国人に対して寛容ではあったが、オリンピアにおいては、民族の平等に対してよりは、ギリシャ文明の優秀さに賛辞がおくられていた。近代の競技会はそれとは全く性格は異なる³⁷⁸。」

ここで明らかのように、Coubertinは、古代のオリンピア競技祭と新たなオリンピックとを対比して、両者の相違を際立たせている。前者はギリシャ人中心で、排他的であったこと、一定の場所でのみ開催されていたこと、ギリシャ文明が他の文明より優れていたと認識されていたこと、などであった。1896年のアテネでのオリンピック競技会が始まる前までは、オリンピック競技会の復興（revival of the Olympic Games）という表現を頻繁に使用していた。それが、オリンピック競技会の開催後は、古代オリンピア競技祭の継承という面を薄め、近代における新たなオリンピック競技会の創設として、オリンピック競技会を位置づけたといえる。

この背景の一つに、ギリシャ人とその支持者による国際オリンピック競技会の継続的なアテネでの開催に対する動きがあり、それに対抗して、Coubertinは近代という点を、さらに強調するようになったものと思われる。Coubertinにとっての近代とは国際性であり、それを象徴するのが開催都市の持ち回り制であったのだ。

³⁷⁸ Coubertin, P. (1896) The Olympic Games of 1896. The Century Illustrated Monthly Magazine Vol.53, p.39.

2. 中間オリンピック競技会開催案

2-1. 中間オリンピック競技会開催の構想

Vikelas は、ギリシャ国王が言及したような、近代国際オリンピック競技会のアテネでの継続開催の提案をそのまま支持したわけではなかった。また Vikelas は初代 IOC 会長として、開催地の持ち回り制を決定した 1894 年の会議の決定を覆すことはできなかった。そこで Vikelas は、近代国際オリンピック競技会から 2 年ずらした中間年に、ギリシャにおいて近代国際オリンピック競技会を開催する案を Coubertin や他の IOC 委員に提案した³⁷⁹。つまり、“*The Times*” に掲載されたものと同じ案を提出したのである。後にこの大会は、関係者から中間オリンピック競技会 (Intermediate Olympic Games) と呼ばれるようになった。中間オリンピック競技会の開催が IOC で認められるに至った経緯は次のようであった。

第二回オリンピック・コンGRESS (1897.7.23～31) がルアーブルにおいて、Vikelas の IOC 委員への強い要請により会議が開催された。ギリシャでの近代国際オリンピック競技会開催の要求が提出されようとした。Vikelas の案は、近代国際オリンピック競技会の 2 年後の年に、アテネでギリシャオリンピック競技会を開催するというものであった。しかし、Coubertin IOC 会長は、そのような議題は時期尚早であるとして、議論しなかった³⁸⁰。Coubertin は、議題にあげることをしなかったのもであった。

一方、当時の IOC 委員たちの中には、ギリシャの提案を支持する者も多かった。1901 年にパリで開催された IOC 総会 (1901.5.21～5.23) において、Gebhardt W. を初めとする 3 人のドイツ出身の IOC 委員が、正規の期間の中間年ごとに、アテネでオリンピック競技会を開催する案について協議した³⁸¹。

この提案は議論され、最終的に認められたことが、1901 年の *Revue*

³⁷⁹ Vikelas letter to Coubertin (1896.5.19) Archives of Olympic Museum.

³⁸⁰ Carl-Diem-Institute (1974) Pierre de Coubertin, Einundzwanzig Jahre : Sport Kampagne (1887-1908). Ratingen : Aloys Henn Verlag, p.106.

「オリンピック・コンGRESS」とは、オリンピック・ムーブメント推進のための議題を話し合う会議で、IOC 総会とは区別される。

³⁸¹ Hamer, E. (1971) Willibald Gebhardt: 1861-1921. Durck und Verlag: Köln, p.16.

Findling, J.E. and Kimberly, D.P. ed. (1996). Historical Dictionary of the Modern Olympic Movement. Greenwood Press: Westport, Conn. p.26.

Olympique (March 1901)に掲載されている³⁸²。それによれば、ギリシャの IOC 委員の Mercati の意見に従い、アテネのオリンピック競技会の開催は望ましいことなので、IOC はアテネの当局をサポートすることが満場一致で決められたのであった。

Coubertin 自身も、IOC の会議で中間オリンピック競技会の開催が決議されたことを述べている³⁸³。

「付加的な競技会は 1906 年にギリシャで行われた。国際オリンピック委員会総会において、我々の委員で他国にすでにつくられた組織委員会を、できるだけ支援していくことが決められたのであった。」

さらに、1905 年に開催されたブリュッセルでの IOC コンgressにおいて、1906 年にアテネでオリンピック競技会が開催されることが承認された³⁸⁴。

このように民主的な話し合いの経緯を経て、1906 年の中間オリンピック競技会が開催されるに至った。当時の多くの IOC 委員が、その案を支持していたこと、そして Coubertin 会長もそれを認めたので、1906 年にアテネで開催された競技会は、IOC 公認のオリンピック競技会と言える。

1905 年にはパンアテナイ競技場の整備が完成し、翌年、競技会が開催された。

こうして 1906 年 4 月 22 日から 5 月 2 日まで、アテネでオリンピック競技会が開催された。参加国は 20、選手数は 826 名と 10 年前のアテネ大会の倍であった。イギリス国王と王妃がはるばる観覧に来て、この大会に賛辞を贈った。このことが 1908 年のロンドン大会でのイギリス王室の積極的な支援につながる所以であった。競技は 1896 年の競技に漕艇とサッカーが加わり、テニスでは女性種目も行われ、シングル種目でギリシャ人が優勝した。全体としてはフランスの選手が大活躍した。また、パンアテナイ競技場では、悲劇「オイディプス」が野外で上演され、市内の劇場でも音楽の演奏が行われるなど、多彩な芸

³⁸² Lennartz,K.(2002) The 2nd International Olympic Games in Athens 1906. *Journal of Olympic History*.2002.pp.8-9. *Revue Olympique* (1901) p.35.

³⁸³ Carl Diem Institute (1974) Pierre de Coubertin, *Einundzwanzig Jahre:Sport Kampagne*. *ibid.*, p.136.

³⁸⁴ Coubertin,P.(1987) *Olympische Erinnerungen*. Berlin: Sportverlag.,p.85.

Müller,N.(1994) One hundred years of Olympic Congress 1894-1994. *International Olympic Committee;Lausanne*,p.67.

術的、文化的プログラムも実施された³⁸⁵。古代の風習を受継いだ、たいまつ行列 (torch processions)、ピレウスでのヴェネチア祭、そして考古学的遺跡への訪問、スポーツに関する講演なども行われた。これらの多彩な文化芸術プログラムは、50年ほど前に行われたギリシャ独自のオリンピア競技祭における芸術的競技種目の遺産であった。

このアテネでのオリンピック競技会に Coubertin は出席しなかった。それどころか、「芸術と科学とスポーツのための協議会」という IOC コンgressを同年5月にパリで行うことを計画した。その会議で話し合われた内容は、芸術競技のオリンピック競技への導入についてであった。この会議は、アテネの中間オリンピック競技会に行かない口実をつくるためであったと Coubertin は述べている³⁸⁶。Coubertin は、この会議で、絵画、彫刻、建築、詩歌、音楽の5つの部門にわたる芸術競技の導入を決定した。これらの5種類の芸術競技は、ギリシャ独自のオリンピア競技祭にて、1870年から既に行われていたものでもあった³⁸⁷。

一方、アテネでの中間オリンピック競技会に列席した10人ほどのIOC委員たちは、アテネで、ギリシャ皇太子をIOCの名誉会長に就任させることを決定し、また、1908年の第四回オリンピック競技会の開催地を、ローマからロンドンに変更することを話し合い決定した。また、IOCの改革を求める決議も決議された。これはCoubertinに対するギリシャ寄りの委員たちの要求であったといえる³⁸⁸。この提案に対し、ロンドンへの変更以外の要求は、会長の権限で否決されてしまった。これ以降、Coubertin はアテネでのオリンピック競技会を正式のものとは認めない態度をとった³⁸⁹。

近年の研究者による中間オリンピック競技会の評価は、失墜したオリンピック・ムーブメントへの信頼を回復したという点で一致している。B. Mallon は1900年と1904年に開催されたオリンピック競技会は、国際博覧会の一部として行われたため失敗したが、この1906年のオリンピック競技会は、IOCの中

³⁸⁵ Mallon,B.,(1999) The 1906 Olympic Games:Results for all competitors in all events, with commentary. McFarland & Company;Jefferson,North Caroline and London, pp.168-169.

³⁸⁶ Coubertin,P. (1987) Olympischen Erinnerungen. Sportverlag;Berlin, p.88.

³⁸⁷ Sanada,H.(2009) The artistic competition in the Greek Olympian Games in 19th century. International Journal of Sport and Health Science. Tokyo..

³⁸⁸ Coubertin,P.(1936) Olympische Erinnerungen. ibid., pp.93-94.

³⁸⁹ Coubertin,P.(1936) Olympische Erinnerungen. ibid., pp.88-89.

での低い位置づけにもかかわらず、「これらの成功したアテネ国際競技会（1906年）は、失墜しつつあったオリンピック・ムーブメントの息を吹き返させたのであった」と述べている³⁹⁰。

また Findling も、「このオリンピック競技会は、当時にとっては最も興味深い大会で、最も良く組織された大会であった、さらには、1896年のアテネ大会以来、最も海外メディアの注目を集め大会であった。」と述べている³⁹¹。

さらに IOC 発刊の最新のオリンピック史においても、「公式の歴史の中には入れられなかったが、1906年の中間オリンピック競技会は、ギリシャ人が、1896年のオリンピック競技会の始まり以来、国際オリンピック委員会とオリンピック・ムーブメントに対する信頼を回復させたものとなった。この事実は、Coubertin の仲間たちからも賛同されたのであった。」と述べられている³⁹²。

これ以外の 1906年のオリンピック競技会の意義としては、イギリスの王室と Desborough などのスポーツ関係者が観戦したことにより、彼らがオリンピック競技会の価値を認識したことである。1908年開催予定であったローマ市の返上の後、ロンドン市が開催することを受け入れて成功に導いたのは、1906年の大会の影響であったと言える。

2-2. 中間オリンピック競技会開催の理念

Coubertin の反対にもかかわらず、IOC 総会で、中間オリンピック競技会を開催させることになった背景には、彼らが同意した理念が存在していたと思われる。

先述した”*New York Times*” と”*Times*” の記事から言えることは、第一にギリシャの持っている、古代からの連続性という点である。その象徴は、競技会場となったスタディオン（Stadion）の存在であった。

アテネの競技場は、古代ギリシャ時代に、アテネの最も大きな祭典であったパンアテナイ祭が行われた競技場であった。紀元前の 330 年か 329 年に建設された。その後 Herodes Atticus により、139 年と 140 年 A.D.にかけて大規模に改修され、ローマ式の競技場、すなわち、スペンドーネ（sphendone）というカーブが一方の端に設けられ、観客席にスロープが設けられた。さらに 5 万人分

³⁹⁰ Mallon,B.(1999) the 1906 Olympic Games:results for all competitors in all events with commentary.p.4

³⁹¹ Findling, J.E. and Kimberly,D.P.ed.(1996) Historical Dictionary of the Modern Olympic Movement. ibid.,p.48.

³⁹² Miller,D.(2008) The official history of the Olympic Games and the IOC. ibid.,p.58.

の観客席がすべて、ペンデリコ産の大理石で作られたのであった³⁹³。古代の旅行地誌家 Pausanias は、この競技場を、当時最もきれいな競技場であったと絶賛した³⁹⁴。

この競技場の復元は、1869年にドイツ人 E.Ziller によって一部行われ、翌年の 1870年とその後の 1875年には、ここを競技会場として、ギリシャ独自のオリンピア競技祭が行われた。

その後、1896年のオリンピック競技会を前にして、ギリシャ皇太子 Konstantinos の要請に応じて、アレクサンドリアに住む Averof の寄金を用いて、建築家 A.Metaxas によって整備され、1896年のオリンピック競技会の競技会場として使用された。古代の姿に近い姿で復元された会場は、人々をして、運動競技の聖地を感じさせたのであった。ただし、前数列の観客席が大理石になったのみで、すべてが大理石に復元されたのは、1906年の中間オリンピック競技会の時であった。

イギリス人考古学者 Charles Waldstein (1856-1927)は、この古代の競技場について次のように述べている。

「第一回オリンピック競技会は大成功であった。

何人かのアメリカ人の友人たちは、一日中、パンアテナイア競技場に座っていると、シカゴ国際博覧会と同じような情景であったと話していた。しかしこれらはすべて、人々のエネルギーと情熱を収めるだけの器がなければ、そのようにはならなかったのである。」³⁹⁵

Waldstein は続いてスタディオンについて紹介している。そこでは、文献に基づいて復元され、芸術的な質を維持されたことを称え、さらに次のように述べた³⁹⁶。

「スタディオンの本当に印象的で有益な特徴は、その寸法の大きさと広さであり、若者の努力を観戦する人たちのキャパシティは 50000 人であった。

.....

³⁹³ Travlos,J.(1971) Pictorial Dictionary of Ancient Athens. Thames and Hudson: London. p.498.

³⁹⁴ Pausanias 1.19.6

³⁹⁵ Mallon,B.,Widlund,T.(1998) The 1896 Olympic Games: Results for all competitions in all events, with commentary. McFarland & Company:Jefferson,North Carolina, and London. pp.27-28.

³⁹⁶ Mallon,B.,Widlund,T.(1998) The 1896 Olympic Games.ibid.,p.29.

このスタディオンは、一人の支配者が奴隷たちを使って建てられたものではなく、身体的な強さと技能を平和定な喜びに結びながら、自由で力強い共同体を収容する構造の中で、訪問客にその大きさを印象として伝えられるだろう。」

George Averof が寄金をして、パンアテナイア競技場を復元し、そこでオリンピック競技会が行われたことが、大会を成功させた大きな要因と認識されていた。Coubertin も、競技場の復元について、次のように述べている。

「最高の贈り物はアレクサンドリアから届けられた。この贈り物こそが、競技場をヘロデス・アッティコス時代の状態にまで修復可能にしたのだ。贈り物のねらいは、当初から、各競技を、古代の祭典が間違いなく举行された場所で行うことであった。・・・訪問者たちはいつまでも忘れることのできない光景を見ている³⁹⁷」

そして Coubertin は、2年前には荒れた状態であったパンアテナイ競技場が短期間の間に復元され、完全にとまでは言わないが、やがて「アテネはやがて競技スポーツの神殿 (temple of athletic sports) を所有することになる」と述べている³⁹⁸。

競技スポーツの神殿 (temple of athletic sports) こそが古代のパンアテナイ競技場であった。

この神殿を有しているのはギリシャのみであった。この競技場でオリンピック競技会を行うことは、古代と近代を結ぶ機能があった。

・皇太子への尊敬

ギリシャ王室、特に Konstantinos 皇太子への尊敬の念が、1896年のオリンピック競技会に関わった者には大きかった。Waldstein の報告は、次のようにギリシャ王室を称えている。

「これはギリシャの委員会、特にギリシャ国王とギリシャ王室に感謝は捧げられるべきであろう。大会を通して、すべての国民を結びつけるように行動された。王宮で開催された祝宴のすべての勝利者と外国の代表者を招いて国王はフランス語とギリシャ語で、高貴な一大事業の成功のために貢献してくれたすべての外国人に感謝の言葉を述べた。彼は最後に、Good

³⁹⁷ Coubertin,P.(1896) The Olympic Games of 1896. ibid.,p.40.

³⁹⁸ Coubertin,P.(1896) ibid.,p.40

bye ではなく、また会いましょう、と述べた。その後、彼の息子たちは客の中に入り、一緒に話したり、冗談を言ったりして、すべての人たちをなごませ、自分たちの故郷にいるかのように感じさせた。³⁹⁹」

Konstantinos 皇太子については、**Coubertin** も次のように称えた。

「**Konstantinos** 皇太子は透き通った青い目と色白の肌をデンマーク人の祖先から受け継いでいる。率直で隠し立てしない態度、沈着冷静な判断力、そして知的明瞭さについても、その出所は同じである。しかし、皇太子に意気込みと熱意を与えてきたのはギリシャである。慎ましさと不屈の精神の幸せな結合によって、皇太子は誰よりもギリシャを治めるのにふさわしい人物になっている。組織委員会をうまくまとめる際に用いられた、完璧な寛大さを秘めた威信。細部にまで目を配る厳密さ。そしてとりわけ、周りの者たちが躊躇したり弱音を吐いたりしそうになった時に示した穏やかな忍耐力。これらの資質が明らかにしてくれるのは、皇太子が王位につくことが実り豊かな統治になり、それこそが国を強くし豊かにしてくれるということである。今やギリシャの国民は、未来の君主の真価を見抜くすぐれた見識を持っている。実際に活動する皇太子を見て、彼に対する尊敬と信頼の念を募らせたのだ。⁴⁰⁰」

ギリシャ王室は、オスマントルコからの独立以来、列強諸国によって選ばれてきた。最初の国王 **Othon** は、バイエルン王の出であり、二代目の **Georgios** 王は、デンマーク出身であった。1906 年の中間オリンピック競技会に大英帝国の王と王妃が出席したが、大英帝国の **Queen Alexandria** は彼の妹であった。ギリシャの王妃 **Olga** は、ロシアの貴族の出であるとともに、大英帝国の王、**Edward** 7 世の義理の妹であった。このように、ギリシャ王室は、他のヨーロッパ諸国の王室や貴族と深いつながりがあった。そのようなギリシャ王室によるギリシャの統治は、多くが貴族出身の **IOC** 関係者にとっても、古代ギリシャとヨーロッパとのつながりを感じさせた。そうしたギリシャ王室が力を注いで 1896 年のオリンピック競技会を成功させた。特にオリンピック競技会に対する皇太子 **Konstantinos** の献身的な行動は、際立っていた。彼は全ギリシャ体育協会の後援者であり、彼の二人の弟も名誉会員であった。彼の指導のもと

³⁹⁹ Mallon, B., Widlund, T. (1998) The 1896 Olympic Games. *ibid.*, p.29

⁴⁰⁰ Coubertin, P. (1896) The Olympic Games of 1896. *ibid.*, p.53.

に、組織委員会を結成してアテネ市も準備に賛成させた⁴⁰¹。ギリシャ人はもとより、オリンピックに関わった外国の人々をして、深い尊敬の念を起こさせた。ギリシャ王室により提案されたギリシャでの中間オリンピック競技会開催を受け入れることは、皇太子に対する感謝と敬意の念を示すことであったのだ。

実際、アテネでの中間オリンピック競技会で開催された IOC 委員たちの話し合いで、Konstantinoss 皇太子に、IOC 名誉会長に就任させる案が決められた。この提案は、最終的に Coubertin 会長により否決されて達成できなかったが、このような提案がなされたということは、当時の IOC 委員たちによる Konstantinoss 皇太子に対する敬意の表れであったといえよう。

・近代ギリシャ独自のオリンピア競技祭開催の経験

ギリシャ人にとって、オリンピック競技会の開催を主張する根拠としては、古代のみならず、近代においてもその根拠があった。19 世紀の後半に、アテネにおいて、独自のオリンピア競技祭を四回、開催したことであった。近代の独立以後の競技祭はギリシャ人独自の祭典であった。アレクサンドリアやコンスタンチノーブルなど、海外に住むギリシャ人も参加して、運動競技のみならず、産業博覧会と芸術競技（建築、彫刻、絵画、音楽、詩歌など）も行われた。中でも、1870 年と 1875 年のオリンピア競技祭の会場にはパンアテナイ競技場が使用されるなど、古代オリンピックの復興と言えるものであった。

この近代におけるギリシャ人自身によるオリンピック競技会の復興は、歴史的事実として IOC 委員たちに知らされていた。

ギリシャ体育協会会長 Phokianos は、近代国際オリンピック競技会開催に際して、次のように書き記した。

「オリンピックという崇高な名は、すでにアテネ市民たちの間では蘇生していた。Evangelis Zappas と Konstantinos Zappas という二人のギリシャ人の莫大な財産の贈与により、約 40 年前間、芸術、産業、スポーツの競技会が催されていた。最近の計画は大きなものである。ギリシャの民族的境界を大きく越えて、その影響が広がるであろう⁴⁰²。」

また、在英大使であった Gennadius も、産業博覧会と運動競技が一緒になったオリンピア競技祭がアテネで復興されたこと、そしてその後も、アスレテ

⁴⁰¹ Miller,D.(2008) The official history of the Olympic Games and the IOC: Athens to Beijing, 1894-2008. Mainstream Publishing: Edinburgh and London. p.37.

⁴⁰² Chrysafis, I.(1930) ibid. p.183

イズムの考えとともに、競技祭が行われたことを 1896 年に述べていた⁴⁰³。

ギリシャ人にしてみれば、近代ギリシャで行われていた民族的なオリンピック競技祭が、国際的なオリンピック競技会へと発展したと考えていた。

初代 IOC 会長を務めた Vikelas は、Coubertin に以前からこのギリシャ独自のオリンピック競技祭について知らせていた。5 月 19 日付けの Vikelas の Coubertin 宛の書簡に、1859 年、1870 年、1875 年にオリンピック競技会がアテネで開催されたことが説明されていた⁴⁰⁴。Coubertin は、アテネで行われるいかなる競技会にも「オリンピック」の名前を使用しないように、皇太子に申し入れていた⁴⁰⁵。このことについて Vikelas が 1896 年 6 月 8 日付けの Coubertin 宛の書簡で次のように反論した。

「始められたばかりの事業の進展を妨げるような性急さは、ともかく慎みましょう。それ以外の事は、ご存じのように、これまで通り声高に叫び続けていきます。つまり、Coubertin 男爵なくして、いかなる国際オリンピック競技会もあり得ないと言うことです。しかし私は最初に話したではありませんか。Zappas によってここで始められたオリンピック競技会のことを。……(中略)…… 国際オリンピック競技会の確立の名声はあなたのものであります。しかしギリシャにおいてオリンピック競技会が行われていたという事実はそれでも残るし、何人もその名前を消し去ることはできないのです。誰もアテネの競技会から“オリンピック”の名を否定する権利はないのです⁴⁰⁶」

このギリシャ独自のオリンピック競技祭には、Konstantinos 皇太子も、深く関わり支援していた。

この事実は他の IOC 委員にも知らされていた。Vikelas は、全 IOC 委員に、アテネで独自のオリンピック競技祭が行われていた事を伝えて、中間年における競技会を、「オリンピック競技祭」という名称で行うことは、歴史的根拠がある

⁴⁰³ Gennadius,J.(1896) The revival of the Olympian Games. Cosmopolis 2,p.70.

⁴⁰⁴ Vikelas,D.(1896.5.19) Letter to Coubertin. Archives in Olympic Museum.

⁴⁰⁵ Georgiadis,K.(2003) *ibid.*,p.201.

⁴⁰⁶ Vikelas,D.(1896) Letters to Coubertin (6.8). Archives in Olympic Museum, Lausanne.
Young,D.C. (1988) DEMETRIOS VIKELAS:First President of IOC. Stadion 14-1, p.93.

ことを伝えた⁴⁰⁷。そして少なくとも、Boutowsky (ロシア)、Guth (チェコ)、Kemeny (ハンガリー)、Sloan (アメリカ合衆国)、Gebhardt (ドイツ) から Vikelas の意見を支持する返書が寄せられた。Gebhardt は、2回のオリンピックの後にアテネで競技会を行う方法を考えていたが、基本的な考えは Vikelas のものと同じであることが寄せられた⁴⁰⁸。そして Gebhardt は Coubertin にも、アテネでの中間オリンピック競技会の開催案を書簡で送った。Vikelas の提案に対する Sloane の返信には、次のように書かれていた。

「間違いなく、今回の開催場所と組織が競技会に刺激を与え、おそらくパンアテナイ競技場が世界中で最もふさわしい会場であろう。それ故、世界の競技者たちが集い、パンアテナイ競技場で定期的な競技会が開催されることは、私としては大きな喜びである。

また、愛国的なギリシャ人が、アテネにおけるオリンピック競技会の復興に対して、長い時間をかけて準備されてきたこともよく理解している。

409」

Sloane は、ギリシャ人たちが、近代国際オリンピック競技会の開催以前から、オリンピック競技会の復興に関わっていたことを認識していた。他の多くの IOC 委員たちも、Vikelas の提案に賛同しているのは、同様に、オリンピック競技会復興にかけてきたギリシャ人の長い労苦を

Vikelas や Gebhardt は、中間年でのオリンピック競技会の開催は、近代国際オリンピック競技会の開催と矛盾するものではない、との認識であった。IOC 総会で、ギリシャ的な要素を 1894 年の会議での決定と矛盾しない形で組み入れることが同意されたと言える。彼らの根拠は、古代との連続性、Konstantinos への尊敬、そして近代ギリシャで既に行われていたオリンピック競技会の事実ということであった。

しかしこの決定は、Coubertin にとっては、彼のオリンピック競技会復興の功績を薄めることにつながると認識された⁴¹⁰。

⁴⁰⁷ Georgiadis, K.(2003) Olympic revival:the revival of the Olympic Games in modern times. Ekdotike Athenon S.A.:Athens. p.204.

⁴⁰⁸ Georgiadis, K.(2003)ibid.,p.204.

⁴⁰⁹ Letters by M.Sloane to D.Vikelas.

⁴¹⁰ Carl Diem Institute (1974) Pierre de Coubertin; ibid.. p.101.

第4節 ギリシャ独自のオリンピック競技祭と近代国際オリンピック競技会

ギリシャ独自のオリンピック競技祭開催の経験が、第一回の近代国際オリンピック競技会に一定の影響を及ぼしていた事がうかがわれる。

1889年の第四回オリンピック競技祭とその後の全ギリシャ競技会は、役員と選手の面についても、1896年の近代国際オリンピック競技会（アテネ大会）を支えた。また、競技種目についても、槍投げや円盤投げなどの古代からの種目をそのまま継承して競技種目とし、芸術競技もいくつか行われていた。これらは、ギリシャオリンピック競技祭の遺産であったと考えることができる。

1896年当時のアテネは経済的にも政治的にも決して安定した国家ではなかった。そのような中で第一回近代国際オリンピック競技会をアテネで開催し、成功させた。その後の近代国際オリンピック競技会にもギリシャは積極的に関与していった。それは単なる古代への誇りだけではなく、ギリシャ独自のオリンピック競技祭の開催という近代ギリシャの中にその因を見つけ出す事ができる。ギリシャ独自のオリンピック競技祭はCoubertinらから決して評価される事はなかった。むしろそのようなギリシャ人の誇りがCoubertinとの確執を生じさせた⁴¹¹。それは古代オリンピック競技祭の復興を考えて始められたオリンピック競技会を、近代社会に適応させるために、どのような理念と競技種目、そして組織をつくりあげるのかの相違であったといえる。ギリシャ独自のオリンピック競技祭は、運動競技のみならず、産業製品の競技とそれに伴う産業博覧会が近代的なオリンピックであると認識されて始められ、そこから競技場の復興や芸術・知的競技の開催へと展開した。それに対し、Coubertinは開催都市の持ち回り制による国際性を強調した。古代オリンピック競技祭との連続性は徐々に薄められ、近代としての特徴が前面に押し出されて行った。

これまでの近代オリンピック史においては、ギリシャがアテネでの継続開催

⁴¹¹ 1904年のセントルイス大会に、ギリシャは13人派遣しているが、この人数はドイツの20人に次ぐ代表団である。この時イギリスとフランスは派遣費が出ないとの理由で一人も参加していない。また、1906年の中間オリンピックの大成功は、1900パリ大会、1904年セントルイス大会の失敗によって失われたオリンピック運動への信頼を回復させた。

Lucas, J.(1980)The Modern Olympic Games.NewYork,p.56,

Young, D.C.(1998) VIKELAS.,ibid.,p.96.

を要求したことは、Coubertin の構想を妨害しようとしたとされてきた。しかしながら、ギリシャからすれば、古代の伝統を Coubertin よりも早い時期に、彼らなりに近代的に復興していたのであり、その延長として、1896 年の近代国際オリンピック競技会を受け入れたし、1906 年に開催されたアテネでの国際競技会（いわゆる中間オリンピック競技会）も、その伝統の延長に位置づけられていた。

古代に行われていたオリンピック競技会を、近代社会にどのように適応させたようとしたのか、という視点で分析することが重要であろう。

ギリシャ人は、競技についての近代的な解釈として、運動競技とともに、産業製品の競技を中心に考えていた。産業製品の中から、芸術的競技が独立して発展した。運動競技にはやがて教育的な意味合いを見だし、それとともに学校での体育も発展した。

それに対し Coubertin は、青少年の教育という視点を最初に持ちながら運動競技（スポーツ）の復興を考えた。同時に、国際的な普及を考える上で、早くから国際博覧会と連携して行うことを考えていた。やがて古代との接点（身体と心の調和）を求めて芸術競技を導入した。

ギリシャのオリンピア競技祭が、産業と運動の競技、次に芸術的競技、そして教育的視点の導入、という過程を経たのに対し、Coubertin による近代国際オリンピック競技会は、青少年の教育、運動競技と産業博覧会、芸術競技、という過程を経た。ギリシャのオリンピア競技祭も近代国際オリンピック競技会も、ともに産業博覧会から離れ、独り立ちしていく。

その一方、ギリシャの産業製品の競技の中から生まれた芸術的な競技や文化的プログラムは、オリンピック競技会を彩るものとして、1896 年と 1906 年の近代国際オリンピック競技会と中間オリンピック競技会で展開された。Coubertin も 1912 年から、芸術競技を本格的に導入させた。その意味で、ギリシャのオリンピア競技祭は近代国際オリンピック競技会の先駆的オリンピック競技会という側面も有していたと言えよう。

他方、近代社会において古代オリンピア競技祭を復興することの意味は、産業、芸術・文化、教育と関連して運動競技（スポーツ）を発展させていくことに帰着することを、ギリシャのオリンピア競技祭と国際オリンピック競技会の例から言いうるのではないだろうか。

結 章 ギリシャのオリンピア競技祭の展開と変容

ギリシャ独自のオリンピック競技祭は、トルコからの独立直後から構想が立てられ、競技祭は 1859 年から 1889 年まで 4 回行われた。4 回の競技祭を通して、一貫して変わらなかった点は、全ギリシャ的な祭典であったことである。独立国家ギリシャの領内にとどまらず、トルコやエジプトをはじめ国外に住むギリシャ人たちも参加した競技祭であった。その意味では、古代のオリンピック競技祭と同様に、民族的な祭典であり、古代の復興ということができる。

その一方で、これらのオリンピック競技祭は、その展開とともに、少しずつ理念や競技種目、競技規則などが変容していった。まとめていうならば、産業振興をめざしてはじめられたオリンピック競技祭が、芸術や文化の発展と教育的意味もあわせもったオリンピック競技祭へと移行したということである。それは、産業製品を競技として行われた際に、工業や農業製品のみならず、芸術や教育的なものを産業製品に含ませて行われるようになったからであった。

近代ギリシャにおけるオリンピック競技祭の変容を、競技の理念、運営組織、競技種目と参加者の点から整理すると、次のようになる。

1. オリンピア競技祭の理念の変容

1833 年に、Soutsos が古代競技祭への復興を提案し、内相 Kolettis とともに、その原案が作成され、それを取り込んだ 1837 年の「国家産業振興委員会設立に関する」王室条例が公布された。そこでは、国家の産業振興を促すことに主眼が置かれていて、各地の農業、工業製品の博覧会を、それらの製品の優劣を競う産業製品競技として行われることが予定されていた。

近代国家として出発したギリシャ政府が考えたのは、産業振興を第一義においた競技こそが、当時の社会にふさわしい古代競技祭の復興ということであった。

財政的な理由でこの王室条例に基づく競技祭は行われなかったが、Zappas の財産供与により、国家的規模での競技会の開催を政府主導で企画することになり、1859 年に第一回オリンピック競技祭が開催された。古代のオリンピック競技祭と大きく違う点は、産業の振興を目指すという、近代国家の理念に基づいたオリンピック競技祭となったことであった。

オスマントルコから独立した直後の近代ギリシャでは、古代の競技祭の再解釈がなされたといえる。産業製品博覧会を行うことで、産業製品を競技(ΑΓΩΝ)の範疇に組み入れた。古代のオリンピック競技祭が、戦争終結による平和の証としてゼウスに捧げるという理念を持っていたのに対し、第一回オリンピック競技

祭は、産業の振興をはかることが国家の繁栄につながる、という考えのもと、産業製品の競技を主眼に置きつつ、運動競技も行われたのであった。

1870年にオリンピア委員会副会長 Christidis により、競技祭の目的が、産業振興のみならず、「身体的な活力」と「ミューズの崇拝」が主張され、身体的な競技と知性のトレーニング、それらと産業との統合による社会の発展をオリンピア競技祭の理念としたのであった。

第二回以降のオリンピア競技祭では、古代のオリンピア競技祭の競技の習慣を取り入れ、伝統を追求した祭典に移行した。そして第三回オリンピア競技祭では、競技に参加する青少年の育成という視点を盛り込み、さらには、オリンピア競技祭による民族を超えての平和意識の醸成ということも考えられた。

オリンピア競技祭の理念としては、産業振興から古代の伝統をも取り入れた文化的な祭典へ、そしてそれらに教育的な理念も盛り込んだ理念へと変容したといえる。

こうしたオリンピア競技祭の理念の変容の背景には学者や文化人、そして体育家らによる積極的な意見の発信があった。産業振興のためのオリンピア競技祭ではなく、古代の伝統に立脚したオリンピア競技祭の構築を、学者や文化人は求めたと言える。

古代の理念と近代ギリシャの理念を考える際に、宗教的な観念をどのように解釈したのかは重要である。古代のオリンピア競技祭は、Zeus 神に捧げられた宗教的な色彩を有した祭典であり、それが終焉したのは、ほかならぬキリスト教による異教の祭典禁止令によるものであったからである。

この点については、産業博覧会と産業製品競技という近代性を強調することで、古代と近代社会の枠組みの相違、すなわち、宗教的な影響は古代に比して小さい、という説明をつけたのではないかと考えられる。それに加えて、当時のヨーロッパで普及したアマチュアリズムの考えを強調することで、古代のオリンピア競技祭は、プロ化の弊害で墮落し消滅した、すなわち、宗教的な影響ではない、という見解を援用して自らを納得させたものと思われる。

この宗教的な問題をオリンピア競技祭の復興に際して、どのように克服したかという点についての詳細は、今後の課題としたい。

2. 競技祭を支えた組織の変容

2-1. 運営組織の変容

競技祭を運営した組織について、古代では、エリスという都市国家が実質的に祭典を管理・運営していた。そのもとに体育長官（ΓΥΜΝΑΣΙΑΡΧΕΟΣ）がいて全体の運営を統括し、ヘラノディカイ（ΗΛΛΑΝΟΔΙΚΑΙ）という役員が、競技の審判を行いつつ、全体の進行を司っていた。

彼らは競技の勝敗の判定はもとより、成人と少年との区別、成長馬と子馬との峻別や、競技規則がきちんと守られているかどうかを調査することも含まれていた。

近代ギリシャのオリンピア競技祭の運営組織は、最上部に内務大臣の意見が反映される中央オリンピア委員会（会長は内務大臣指名）があり、そのもとに各県の地方オリンピア委員会が存在していた。中央オリンピア委員会がヘラノディカイを任命し、彼らが産業製品の優劣を判断し、運動競技の審判を行う役割も担っていた。

1837年の王室条例において、「国家産業委員会」と銘打たれた委員会が、1858年には「オリンピア委員会」と変更になった点は注目すべきである。国家の産業振興を目指しているのは同じであるが、古代オリンピア競技祭とのつながりをより強く示そうとしたからである。またヘラノディカイや体育長官という役職名にみられるように、古代のオリンピア競技祭の役職をそのまま用いていることから、オリンピア競技祭の組織は、次第に古代の競技祭を意識した組織に変更されたと言える。

オリンピア委員会は、やがて「オリンピア・遺産管理委員会」となり、Zappasの遺産を管理する色彩が強まっていった。第四回オリンピア競技祭に関しては、産業製品と芸術・知的競技を管理したオリンピア・遺産管理委員会とは別に、中央体育クラブのPhokianosにより運動競技が運営された。Phokianosらにより、全ギリシャ体育協会が結成され、近代国際オリンピック競技会のアテネ開催の受け皿となった。運動競技に関しては、体育・スポーツの専門的な組織で運営されるようになっていった。

オリンピア競技祭の組織は、産業振興から古代オリンピア競技祭との接点を強くしつつ、運動競技の専門的な組織に変容したと言える。

2-2. 競技会場の変容

競技が行われた会場については、当初はアテネ市内の公園で行われたが、第二回オリンピック競技祭では、古代のアテネの祭典が行われたパンアテナイ競技場を復興し、運動競技の会場として使用した。古代の競技場でオリンピック競技祭が行われたことは、古代のオリンピック競技祭の復興を象徴するものであった。

古代の競技場は、第三回オリンピック競技祭でも使用された。しかし、1888年に開催予定であった第四回オリンピック競技祭の運動競技は、パンアテナイ競技場の整備が財政上の問題で進まなかったため、そこでは開催できず、Phokianos が経営する体育クラブのグラウンドで翌年に開催された。

産業製品の博覧会についての会場は、1859年は大学のホールで、1870年と1875年は、展示ホールで行われた。産業製品も回を重ねるごとに増えていき、1888年にはザッピオン展示会場が完成し、第四回オリンピック競技祭は、そこで盛大に行われた。産業製品の競技会場は、次第に充実していったのに対して、運動競技の競技場は、古代のパンアテナイ競技場の復興整備が途中で途絶えてしまったと言える。

しかしながら、1896年の近代国際オリンピック競技会の折に、アレクサンドリアに住むギリシャ人 Averof の寄金により、整備が進んだ。この背景には、ギリシャ独自のオリンピック競技祭の芸術競技に寄金を寄せる外国在住のギリシャ人が増えていったことが歴史的背景にある。そうしたオリンピック競技祭の遺産として、パンアテナイ競技場の整備が再び進められたと言える。

オリンピック競技祭の運動競技の競技場は、市内の公園からパンアテナイ競技場へ、そして体育クラブのグラウンドで行われた。関係者は、古代との接点の象徴として、古代のパンアテナイ競技場での競技を志向していたと言える。

2-3. 競技祭の財政

オリンピック競技祭を支えた財政は、一貫して Evangelis Zappas の寄金と遺産によるものであった。その財源はやがて枯渇してしまう。これがオリンピック競技祭のアキレス腱となった。1888・1889年の第四回オリンピック競技祭を最後に、オリンピック競技祭は行われなくなってしまう。競技祭開催の財政の多くを、ギリシャ人の富豪の寄金に頼っていたことが弱点であった。

Averof などの富豪が一時的には寄金を寄せてくれはしたが、それも永続的なものではなかった。財政が不安定であったことが、最終的には続けられなくなった大きな要因であった。近代国際オリンピック競技会の運動に参加したギリシャは、その後中間オリンピック競技会を 1906 年に実施したが、財政的な窮乏により、中間オリンピック競技会も継続できなかった。今日のオリンピック

競技会と違い、開催都市が全面的に負担を負う開催形式であったため、連続開催は困難なことであった。

競技祭開催の財政は、変容することなく、富豪の寄付に頼るという方法が踏襲された。その意味で、この競技祭を継続することは、財政的に困難であったと言える。

3. 競技種目と出場者の変容

3-1. 運動競技種目の変容

第一回オリンピック競技祭で行われた運動競技の種目を調べてみると、古代のオリンピック競技祭の競技種目とほぼ同じものが行われていたことが理解される。

古代と同じ種目としては、競走種目で、短距離走(200m)、中距離走(400m)そして1500mの3種類の走種目が行われていた。これは古代オリンピック競技祭において行われていたスタディオオン走(約192m)、ディアウロス走(約384m)、そしてドリコス走(約4000m)の3種類に相当する。

ほかに古代と同様の種目として、レスリング、ボクシング、そして競馬が行われた。

パンクラティオンや五種競技は、1859年の第一回オリンピック競技祭では行われなかった。また、距離を競う円盤投げや槍投げも行われたが、これも古代と同様であった。古代にはなくて、1859年に行われた種目は、円盤投げと槍投げの的を当てる種目、それにマスト登りであった。マスト登りはドイツ体育(Turnen)の影響である。

これらのことから、運動競技については、ほとんどの種目が古代のオリンピック競技祭で行われていた種目を充てていたことがわかる。

第二回オリンピック競技祭以降の競技種目は、古代オリンピック競技祭で行われていたものとしては、スタディオオン走、ディアウロス走、ドリコス走、レスリング、跳躍、槍投げ、円盤投げ、戦車競走、競馬などであった。こうした古代の種目以外に、中世のギリシャ人たちの祭り等で行われていた三段跳びや石投げなども行われた。そして、ヨーロッパで行われていたマスト登りやロープ登り、また水平棒や平行棒運動なども行われた。競技種目を見る限り、古代の種目を中心にしつつも、中世から親しんでいた競技や、近代になって盛んになった体育種目を取り入れるなど、柔軟な種目構成であったといえる。さらには別

の会場で、射撃競技が行われたが、これも近代ヨーロッパの影響である。水泳競技や漕艇競技なども計画はされたが実際には行われなかった。これらを見ても、ドイツを中心として、近代ヨーロッパの体育の影響を受けていたこともわかる。

運動競技の競技者については、1870年と1875年以降では大きく変容した。1870年のオリンピア競技祭までは、参加資格の制限はなかったが、1875年には、学生や軍人など、日頃から学校や体育クラブなどで、競技のトレーニングが行える人たちに制限したためである。それ以前は、あらゆる階層の人々が参加できたのだが、古代にならい、トレーニングを積んだ者が競技場に集う事が望ましい、とする考えが識者らにより提唱され、そのように決められたのであった。このため、アテネ市内で複数の体育クラブが創られたのをはじめ、各地方においても体育クラブが創設された。学校や体育クラブに所属していないと、オリンピア競技祭に出場できなくなったため、結果として、青少年たちが体育を習う機会が増えたと言える。体育クラブ出身者が、各地で体育関連の協会を設立する一方、体育の専門家に育っていった。このように、オリンピア競技祭を契機として、後にギリシャの体育の発展に貢献して行く人材を輩出したことも、オリンピア競技祭の成果といえよう。

競技者については、学生などに参加を制限しても、競技の参加者がギリシャ全土から集まり、さらにはトルコ領のセッサロニキ、クレタ、コンスタンティノポリスからも出場するなど、国境を越えて全ギリシャ的、全民族的な性格を維持した。

3-2 産業製品競技の変容

産業製品の競技種目は、農業、鉱業、工業、牧畜などが中心であった。それらの種目は、1870年には10クラス80品目であったのが、1875年には、15種目95品目へと増加した。その中で、教育に関する内容や、学校での体育に関する製品の出典などが行われるようになっていった。単に産業製品のみならず、教育や知的文化の関連へと拡大していったことがうかがえる。

第二回オリンピア競技祭の産業製品競技では、「市民の道徳的、身体的改善のための有用な品物」のカテゴリーが設けられ、第三回オリンピア競技祭では、「市民の倫理、身体的教育」、「初等教育、中等教育学校と専門学校における健康面の計画」、「体育（ΓΥΜΝΑΣΤΙΚΗ）に関する製品」などと、体育や健康に関する産業製品の枠が拡大した。さらに第四回オリンピア競技祭では、体育クラブの計画と体操の器械と方法、フェンシングなどが産業製品競技として取り入

れられた。

これらのことから、産業製品競技を通して、教育現場における体育や健康に関する展示や製品などが充実していったといえる。

産業製品の出展者は、ギリシャ全土のすべての県から出展された。これは地方オリンピック委員会が設置されて、出展を促されたということにもよる。

第四回オリンピック競技祭では、産業製品とともに、絵画、彫刻のほかに、詩歌や音楽の楽譜も展示されて賞を争った。

産業製品の競技は、教育や健康、芸術的な面などへと広がっていき、文化的な要素が強まっていったと言える。

3-3. 芸術的競技の変容

1835年に Soutsos が、古代オリンピック競技祭の復興を唱えた時から、運動競技のみならず、芸術的・知的競技の実施が考えられていた。

1859年開催の第一回ギリシャオリンピック競技祭では、産業製品競技の中に、彫刻や絵画など、芸術に相当する作品が出展されていた。

1870年にオリンピック委員会副会長 Christidis により、競技祭の目的が、「民族の統一」のみならず、「身体的な活力」と「ミューズの崇拜」が主張され、芸術や知的部門での競技にも関心が払われた。身体的な競技と知性のトレーニング、それらと産業の統合による社会の発展をオリンピックの理念としたのであった。それに基づき、第二回、第三回オリンピック競技祭においては、芸術競技（建築、絵画と彫刻）が産業製品競技の一部門として実施され、オリンピック競技祭の中に確立した。また、産業製品とは別に、音楽競技や詩歌競技も実施された。産業製品の競技の中から、芸術競技が徐々に形成され、発展したといえる。

第四回オリンピック競技祭（1888年）では、Konstantinos Zappas が芸術競技のさらなる充実に取り組み、劇の競技や知的分野でも競技が行われた。多様な芸術競技を行うことが、古代オリンピック競技祭の復興に必要なことと認識されたからであった。こうして回を重ねるごとに、芸術・知的競技は充実していった。

芸術競技の開催は、ギリシャ国内の演劇、詩歌、音楽の発展に寄与したのみならず、スポンサーとして支援する外国在住のギリシャ人や共同体が現れたことにより、国を越えて、ギリシャ人同士のネットワークが形成された。これは後の近代国際オリンピック競技会アテネ大会における、経済的支援の基盤となった。

さらに芸術競技は、1896年開催の近代国際オリンピック競技会にも引き継

がれた。実際には天候の関係で地方の楽団の到着が遅れたため行われなかったが、音楽競技が1896年の大会で計画されていた。それ以外にもたいまつ行列や古代劇の公演など、古代文化を継承した文化的なプログラムが開催された。また、1906年のアテネでの中間オリンピック競技会でも、パンアテナイ競技場においての古代劇の上演のほか、たいまつ行列、音楽の演奏、さらには、考古学的遺跡の訪問、スポーツに関する講演などが行われた。これらはオリンピック競技祭において、芸術的、知的分野にも関心が高められた遺産と言えよう。

近代オリンピック史では、1912年の第五回オリンピックから芸術競技が始められたとされているが、既に1896年の第一回オリンピックで計画されていたし、Museに因んだ芸術競技は、1870年のギリシャのオリンピック競技祭から行われていた。ギリシャ人によるオリンピック競技の復興は、運動競技のみならず、芸術競技もあわせて復興されていた。その芸術競技の理念は、身体と知性の融合をめざすものであった。

3-4. 賞の変容

1858年のオリンピック競技祭の設立に関する王室条例では、賞は次のように規定されていた。

畜産製品、農産物、工業製品という産業製品の賞として、葉冠を授与することが決められていた。一方、運動競技（馬の競技と裸体競技）ではその勝者には、賞金が授与されることになっていた。葉冠が授与されるということは、神聖な競技会であった古代の遺産の継承であり、これらの賞の内容から、ギリシャ政府が当初から産業製品の競技を、古代から近代へ継承された競技として、力を入れていたことを示している。

その後、実際に1859年に行われた第一回オリンピック競技祭では、産業製品競技に月桂冠とメダルが、運動競技にオリーブの葉冠か小枝と賞金が授与されている。

月桂冠は古代のピュティア競技祭に賞として授与されたもので、芸術や知性を司るApollonの神を象徴している。それに対して運動競技は古代オリンピック競技祭での賞であったオリーブの葉冠か小枝が授与された。それぞれの特性に応じた葉冠が用意されていたと言えよう。

第二回オリンピック競技祭では、産業製品と芸術競技では金貨、銀貨、銅貨と賞状、運動競技に賞金と賞状が授与され、第三回オリンピック競技祭では、産業製品と芸術競技では一位に金貨、二位に銀貨と賞状、佳作に銅貨と賞状が、運動競技に賞金と賞状が授与された。

第四回オリンピック競技祭では、産業製品に金、銀、銅メダル、芸術競技に賞

金と月桂冠、運動競技にオリーブの葉冠か小枝と賞金が授与されることが決められた。

当初は、産業製品の賞としてのみ葉冠を授与しようとしていたことに見られるように、産業製品競技に重きを置いたオリンピア競技祭であったが、運動競技にも葉冠を授与され、賞の上からは同等の扱いになったと思われる。

また、芸術・知的競技については、第四回オリンピア競技祭では、劇、音楽、詩歌、思想などの競技に 1000 ドラクマが授与された。海外のギリシャ人の寄付によるところも大きかったが、賞金の額が高くなったことは、主催者がその価値に重きをおいたものと受け取れる。

また、第一回近代国際オリンピック競技会における賞は、一位に銀メダルとオリーブの小枝、二位に銅メダルと月桂冠であり、オリンピア競技祭の賞の範疇で考えられていたことがうかがえる。

このように、産業振興という経済的な発展をめざしてのオリンピア競技祭から、経済的な面のみならず、文化・芸術的、さらには教育的な面での発展を視野に入れたオリンピア競技祭に変容して展開されたといえる。特に、産業製品の競技から芸術競技が独立していったことは、産業製品競技の変容ととらえることができよう。また体育関連の展示などが行われるようになったことも、産業製品競技の発展的変容ととらえることができる。

またこれらの経験が、第一回近代国際オリンピック競技会のアテネ開催の基盤となり、ギリシャ人で構成された組織委員会は、古代から続けられている槍投げや円盤投げなどの種目を継続させるとともに、芸術競技も一部行われるべく計画され、また多彩な文化的な行事が行われた。

スポーツを通じた青少年の教育、体育やスポーツの発展、身体・精神・知性の結合、平和な社会の構築という近代国際オリンピック競技会の理念の多くは、ギリシャのオリンピア競技祭においても、強弱の差はあれかかげられていた⁴¹²。

古代のオリンピア競技祭の近代ギリシャにおける復興は、古代の理想や理念

⁴¹² この点について、日本の場合も検討されなければならない興味深いことがある。日本は嘉納治五郎（1860～1938年）が国際オリンピック委員会委員に1909年に就任してからオリンピック運動に関わるが、嘉納も、講道館柔道や東京高等師範学校校長として、青少年に体育・スポーツを課し、青少年の心身の育成と体育のみならず、文化的な発展を期してオリンピック運動に関わった側面がある。また嘉納は、柔道のみならず、長距離走と水泳の国民レベルでの普及を考えて、オリンピック・ムーブメントに参画したのであった。この点の詳細の解明も今後の課題となろう。

を探究しつつ、当該の近代社会に適応するべく考えられ変容していった。そこで示された内容は、近代社会にとって普遍的なオリンピック競技祭の価値を含んでいたと理解される。

ただし、近代国際オリンピック競技会の運動に加わった後にも、ギリシャ人は、ギリシャ民族を中心としたオリンピック競技会の開催という観念から脱却することはできなかった。過去のオリンピック競技会との継続性を掲げて、アテネでの中間オリンピック競技会の開催は達成したが、その継続には、大きな財政的な負担が強いられることになり、四年毎に連続して開催する余裕はなかった。

ギリシャのオリンピア競技祭は、そのような意味で民族的、文化的なオリンピック競技会であり、19世紀と20世紀（近代国際オリンピック競技会）をつなぐ競技祭であったと言える。

年表:近代ギリシャのオリンピック競技祭関連

1822-29	・ギリシャ独立戦争
1832	・トルコ、ギリシャの独立を承認
1833	・バイエルン皇子 Othon、ギリシャ国王に即位
1834	・初等学校令で体操の授業実施を規定
1835	・文筆家 Soutsos、古代オリンピック復興を政府に提唱 内相 Kolettis、産業博覧会を付した内容で了承
1836	・中等学校令で体操や他の運動競技の実施を規定
1837	・「国家産業振興委員会設立」の王室条例で、古代競技祭の復活を法制化 ・Pagon「体育入門書」で古代オリンピック競技祭を説明
1838	・レトリーニ地方で、古代オリンピック競技祭復興宣言
1840	・Othon 国王、オリンピックの遺跡を視察
1851	・作家 Soutsos、古代オリンピック競技祭復興を再度提唱
1852	・考古学者 Curtius、ベルリンでオリンピックの発掘を提唱
1856	・E. Zappas、古代オリンピック競技祭復興のため財産供与を発表
1858	・オリンピック競技祭設立に関する王室条例発布し、オリンピック委員会設置
1859	・第一回オリンピック競技祭（アテネ市内の公園と工科大学にて）開催 産業製品の優劣と運動競技が行われる イギリスの Brookes より賞が届けられる
1863	・デンマーク出身 Georgios 1 世、ギリシャ国王に即位 ・Pierre de Coubertin 生誕（フランス）
1865	・E. Zappas 死去、遺産は古代オリンピック競技祭復興と競技場の復元に 充てると遺言
1869	・パンアテナイ競技場発掘開始
1870	・第二回オリンピック競技祭開催（パンアテナイ競技場） 「ミューズの崇拜」のもと芸術的競技が産業製品競技の一部門として設置
1875	・第三回オリンピック競技祭開催（パンアテナイ競技場） 芸術競技として、建築、絵画と彫刻、音楽、詩歌が行われる
1881	・ドイツによるオリンピックの発掘作業開始（1881 年まで） ・イギリスの Brookes、アテネでの国際オリンピック競技会開催を提唱
1888	・Zappas の遺産によりザッピオン展示会場落成 ・第四回オリンピック競技祭（産業博覧会、芸術競技）開催（ザッピオン） 知的競技（思想、詩歌、作曲、劇）が芸術競技（絵画、彫刻、建築）とともに 行われる
1889	・第四回オリンピック競技祭（運動競技）開催（中央体育クラブ） 運動競技が産業博覧会から独立して行われる
1890	・Brookes ,Coubertin をウェンロック・オリンピックに招待
1891	・第一回全ギリシャ競技会開催（中央体育クラブ）
1892	・Coubertin、オリンピック競技会復興を提案（パリ）

1893	・ 第二回全ギリシャ競技会開催（中央体育クラブ）
1894	・ ソルボンヌ大学において第一回近代国際オリンピック競技会開催を決定 初代 IOC 会長にギリシャ人 Vikelas が就任
1896	・ 第一回近代国際オリンピック競技会開催（パンアテナイ競技場） 音楽競技の計画もあったが、悪天候のため中止。トーチを灯しての行進や古代劇、オーケストラの演奏会などの文化的プログラムも実施 ギリシャ側より中間年でのアテネでのオリンピック競技会開催を要請し、アメリカやマスコミ等が支持を表明
1901	・ 中間年にアテネでオリンピック競技会を開催することを IOC が満場一致で決定
1905	・ IOC、1906 年のアテネ中間競技会の開催を承認
1906	・ アテネで国際競技会（中間オリンピック競技会）開催（パンアテナイ競技場） 古代劇、音楽演奏、トーチを灯しての行進、IOC 委員による講演会など多彩な文化プログラムが実施される
1908	・ 初代 IOC 会長 Vikelas 死去

文献（序章であげた文献以外のもの）

・オリンピック競技会の歴史に関する参考文献

- 1) Anthony, Don(2001) Organic Olympism: Or Olympic Orgy and the mystery of John Hulley: The Roots of Modern Olympism. Journal of Olympic history 2001, pp.15-16.
- 2) Brookes, P.(1894) Letters to Coubertin. Archives in Olympic Museum :Lausanne.
- 3) British Museum department of Coins and Medals(1959),A Guide to the Principal Coins of the Greeks. Oxford University Press: London.
- 4) Burnosky, R.L. (1995) The history of the arts in the Olympic games. A Bell & Howell.
- 5) Carl-Diem-Institute (1974) Pierre de Coubertin, Einundzwanzig Jahre : Sport Kampagne (1887-1908). Ratingen :Aloys Henn Verlag
- 6) Carter, A.(2000) The Olympic glory that was Greece : the origins and history of the Olympic Games. Efstathiadis Group:Athens.
- 7) Cooper, J.A.(1892) An Anglo-Saxon Olympiad. The Nineteenth Century 32, pp.380-388.
- 8) Cooper,J.A.(1908) Olympic Games. The Nineteenth Century 63, pp.1010-1021.
- 9) Coubertin, P. (1896) The Olympic Games of 1896. The Century Illustrated Monthly Magazine Vol.53, pp.39-53.
- 10) Coubertin, P.(1897) A typical Englishman:Dr.W.P.Brookes of Wenlock in Shropshire. American Monthly Review of Reviews 15, pp.62-65.
- 11) Coubertin, P., Timoleon Philemon, Politis N.G., Ch.Anninos(1897). The Olympic Games B.C.776-A.D.1896. Second Part. Charles Beck: Athens.
- 12) Coubertin, P.(1890) Les jeux Olympiques a Much Wenlock. *La Revue Athlétique* 12,pp.705-713.
- 13) Coubertin, P.(1936) Olympische Erinnerungen. Wilhelm Limpert-Verlag: Berlin.
- 14) Coubertin, P. (1987) Olympische Erinnerungen. Sportverlag:Berlin
- 15) Decker, W., Doliantis,G., Lennartz,K.(1996) 100 Jahre Olympische Spiele. Ergon Verlag: Würzburg.

- 16) *Deutsche Turn-Zeitung*, 1859.
- 17) Diem, C.(1960) *Weltgeschichte des Sports und der Leibeserziehung*. Verlag Stuttgart: Cotta.
- 18) Findling, J.E., Kimberly,D.P.ed.(1996) *Historical Dictionary of the Modern Olympic Movement*. Greenwood Press: Westport.
- 19) Findling, J.E., Pelle,K.D. (2004) *Encyclopedia of the modern Olympic movement*. Greenwood Press: Westport.
- 20) Frazer, J. (1899) *Pausanias' Description of Greece* Macmillan Company: London.
- 21) Gardiner, E.N.(1930) *Athletics of the ancient world*. Ares Publishers Inc.: Chicago.
- 22) Gardner, P.(1892) *New chapter from Greek history*. London.
- 23) Gebhardt, W.(June 9,1896) *Letter to Coubertin*. Lausanne: Archives in the Olympic Museum.
- 24) Gebhardt, W.(June 24,1896) *Letter to Vikelas*. Lausanne: Archives in the Olympic Museum.
- 25) Gennadius, J. (1883) *Letters to Brookes*. Archives in Wenlock Olympian Society: Wenlock.
- 26) Gennadius, J. (1896) *The revival of the Olympia Games*. *Cosmopolis 2*, pp. 59-74.
- 27) Golden, M.(1998) *Sport and society in ancient Greece*. Cambridge University Press: Cambridge.
- 28) Guttmann, A.(1992) *The Olympics, a history of the modern games*. University of Illinois Press: Urbana.
- 29) Hamer, E. (1971) *Willibald Gebhardt: 1861-1921*. Durck und Verlag: Köln.
- 30) Henry, B.,Henry, P.Y.(1981 ed.) *An approved history of the Olympic Games*. Southern California Committee for the Olympic Games: Los Angeles, Calif.
- 31) International Olympic Committee(1894) *Commission for the Olympic Games*. Lausanne.
- 32) Jarrett, W.S.(1990) *Timetables of sports history: the Olympic Games*. Facts on File: New York.
- 33) Johnson, W.O.(1992) *The Olympics : a history of the games*. Ox moor House: Birmingham, Ala.

- 34) Koulouri, Ch.(2002) Archives and history of the Hellenic Olympic Committee. International Olympic Academy: Athens.
- 35) Kyle, D.G. (1991) E.Norman Gardiner :Historian of ancient sport. The International Journal of History of Sport. 8-1, pp.29-32.
- 36) Kyle, D.G.(2007) Sport and spectacle in the ancient world. Blackwell Publishing: Oxford.
- 37) Lambros, Sp.P.,Polites N.G. (1896). The Olympic Games ; B.C.776-A.D. First Book. The Olympic Games in ancient times. Charles Beck: Athens.
- 38) Lennartz, K.(1974) Kenntnisse und Vorstellungen von Olympia und den Olympischen Spielen in der Zeit von 393-1896. Verlag Karl Hofmann; Stuttgart.
- 39) Lennartz, K., Teutenberg W. (1992) Die Olympischen Spiele 1906 in Athens. Kasseler Sport Verlag Frankfurter: Frankfurt.
- 40) Lennartz, K. (1996) Die Olympische Spiele 1896 in Athen. Agon-Sport Verlag:Frankfurt.
- 41) Lennartz, K. (2002) The 2nd International Olympic Games in Athens 1906. *Journal of Olympic History* 10, pp.3-24.
- 42) *Liverpool Mercury*, 1863,1864,1867
- 43) Mahaffy, J.(1879) Old Greek Athletics. Macmillan's Magazine 36.
- 44) Mallon, B., Widlund T. (1998) The 1896 Olympic Games: Results for all competitions in all events, with commentary. Jefferson, North Carolina and London: McFarland & Company, pp.27-29.
- 45) Mallon, B. (1999) The 1906 Olympic Games: Results for all competitors in all events, with commentary. Jefferson, North Carolina and London: McFarland & Company, pp.4,168-169.
- 46) Mangan, J.A.(1981) Athleticism and the Victorian and Edwardian public school. Cambridge University Press: Cambridge.
- 47) Martin, D.E., Gynn R.W.H.(2000) The Olympic marathon : Human Kinetics: Champaign, Ill.
- 48) Mallwitz, A. (1988) Cults and Competition Location at Olympia. The Archaeology Of the Olympics. University of Wisconsin.
- 49) Miller, D. (2008) The official history of the Olympic Games and the IOC: Athens to Beijing, 1894-2008. Edinburgh and London: Mainstream Publishing, pp.37,58.

- 50) Minutes of the IOC session at Rome (1949)
- 51) Ministry of culture(1989) Mind and body; the revival of the Olympic Idea 19-20th century. Athens.
- 52) Moretti, L.(1957) Olimpionikai: i vincitori negli antichi agoni olimpici. Rome.
- 53) Müller, N.(1994) One hundred years of Olympic Congress 1894-1994. International Olympic Committee: Lausanne. pp.69-71.
- 54) Müller, N.(2000)Pierre de Coubertin, Olympism; Selected Writings. International Olympic Committee: Lausanne.
- 55) Mullin, S.(1983) Dr.Brookes and the Olympics. Olympic Review 109-1:570-573.
- 56) 中川隆編(1997)近代日本オリンピック競技大会資料集成 1 紫峰図書
- 57) Naul, R.(ed.)(1997) Contemporary studies in the national Olympic Games Movement. Peter Lang: Frankfurt am Main.
- 58) *New York Times*, NewYork,1896. 5.3
- 59) 日本オリンピック・アカデミー監修 (2008) ポケット版オリンピック事典, 株式会社楽
- 60) Papadopoulos, S.A. (1989). Mind and Body ; the revival of the Olympic Idea 19-20th century. Ministry of Culture: Athens, pp.110-112.
- 61) Parasarakes, S. (1881) Ολυμπιακοί αγώνες εν Αγγρεία, *Κλειω*. 1881.6.13,23. Athens.
- 62) Picard, A(1889-1992). Rapports du jury international: de l'exposition universelle de 1889., Paris.
- 63) Pleket, H.W.(1973) Games,Prizes, Athletes and Ideology. Stadion 6
- 64) Politis, N.G., Anninos, Ch.(1983) The Olympic Games of 1896. Charles Beck, Athens. (Reprint)
- 65) Rangavis, A.P.(1895) Απουνέυματα. Athens.
- 66) Raschke, W.J.(1988) †he archaeology of the Olympics; The Olympics and other festivals in antiquity. The University of Wisconsin Press: Wisconsin.
- 67) Romano, D.G. (1983) The Ancient Stadium. The Ancient World 7
- 68) 真田 久 (1985) Xenophon “*memolabilia*”と職業競技. 福岡教育大学紀要 34, pp.41-48
- 69) 真田 久 (1991) 近代オリンピックの形成におよぼした“ギリシャオリンピック”の影響に関する研究. 体育学研究 36-2,pp.97-104.
- 70) 真田 久 : ギリシャ競技の衰退説に関する一考察. 福岡教育大学紀要, 41-5 :

- 177-184, 1992.
- 71) 真田 久(1993)“ギリシャオリンピック”の成立過程に関する一考察-ドイツとの関わりを中心に-. 福岡教育大学紀要 42-5, pp.11-20.
 - 72) 真田 久(1994)1859 年の第一回“ギリシャオリンピック競技会”に関する研究, 福岡教育大学紀要 43-5, pp.45-53.
 - 73) 真田 久(1994)1859 年の“ギリシャオリンピック競技会”における産業博覧会に関する研究. スポーツ産業学研究 4-2 : 7-15, 1994.
 - 74) 真田 久(1996)“ウェンロックオリンピック”に関する研究-“ギリシャオリンピック”との関連に注目して-. 福岡教育大学紀要 45-5, 41-49.
 - 75) 真田 久(1996) 近代ギリシャにおける第二回オリンピア競技会に関する研究, (編) 成田十次郎先生退官記念会, 「体育・スポーツ史研究の展望」, 不昧堂出版, pp.337-350.
 - 76) 真田 久(1998) 初期の近代オリンピックと博覧会の関連に関する一考察. スポーツ産業学研究 8-1, 11-18.
 - 77) 真田 久(2002)近代オリンピック前史-近代ギリシャ人によるオリンピック復興-. 望田幸男, 村岡健次(編) 近代ヨーロッパの探究-スポーツ-. ミネルヴァ書房, pp.245-277.
 - 78) 真田 久, 椿本昇三, 高木英樹(2007) : 嘉納治五郎主導による水術の再編に関する研究. 体育学研究 52-4, pp.315-326.
 - 79) Sanada, H. (2009) Artistic Competitions at Greek Olympia Games in the 19th Century. *International Journal of Sport & Health Science*. 7:23-30. 2009.
 - 80) Sanada, H.(2010) Concept of the Intermediate Olympic Games at 1906 : Continuity with the Past Olympics. *International Journal of Sport & Health Science*. 8:7-14, 2010.
 - 81) Sansone, D.(1988) Greek Athletics and the Genesis of Sports. University of California.
 - 82) Vikelas, D.(1895) Οι διεθνείς ολυμπιακοί αγώνες. *ΕΣΤΙΑ* 19, p.147
 - 83) Ress, R.(1968) The Development of Sport and Recreation in Liverpool in the 19th Century. Diss. Liverpool.
 - 84) Rühl, J.K.(1992) William Penny Brookes: the father of the modern Olympics. *ΛΕΥΚΩΜΑ* 1:94-111.
 - 85) Sloane, M. (June 20, 1896) Letter to Vikelas. Lausanne: Archives in the Olympic Museum.
 - 86) Sinn U.(2000) Olympia : cult, sport, and ancient festival. Markus Wiener:

- Princeton.
- 87) Solomou-Prokopiou, A. (2004) Αθήνα 1896: Α΄ Διεθνείς Ολυμπιακοί Αγώνες. Efesos: Athens, 2004.
 - 88) Swaddling, J.(1992) The ancient Olympic Games. British Museum Press:London.
 - 89) *THE TIMES*, London,1896.4.16
 - 90) Umminger, W.(1969) Die Olympischen Spiele der Neuzeit. DOG: Dortmund.
 - 91) Vikelas, D. (June 8,1896) Letter to Coubertin. Lausanne: Archives in the Olympic Museum.
 - 92) Wenlock Olympian Society(1850-1892) Minute Books.1.2,:Wenlock.
 - 93) Wildt,Kl.(1964) Auswanderer und Emigranten in der Geschichte der Leibesübungen.Verlag Karl Hofmann:Stuttgart.
 - 94) Wyse, T.(1859) Letters to Brookes. Archives in Wenlock Olympian Society: Wenlock.
 - 95) Yalouris, N.(1979)The Eternal Olympics. Caratzas Brothers: New York.
 - 96) Young, D.(1984) The Olympic myth of Greek amateur athletics. Ares publishers inc.: Chicago.
 - 97) Young, D.(1987) The origin of the modern Olympics. The International Journal of the History of Sport 4-4, pp.271-300.
 - 98) Young, D.(1998)DEMETRIOS VIKELAS; First President of IOC. Stadion 14-1, pp.85-102.

ギリシャ（古代と近代）関連、及びスポーツ史関連の文献

- 1) Aristophanes, *Nubes*. 1002-1008
- 2) Aristophanes, *Ranae*. 1070-1086
- 3) *Bell's life in London*, 1862,1866
- 4) Burkert, W.著 橋本隆夫訳（1985）ギリシャの神話と儀礼. 株式会社リブロポート
- 7) Chrmouziadis,G.D.著,谷口勇訳(1989):ギリシャ文化史;古代・ビザンティン・現代.而立書房
- 5) *Daily Post, Liverpool*, 1863,1864,1867
- 6) 古川晴風(1989)ギリシャ語辞典.大学書林

- 7) Glogg, R.(1992) A concise history of modern Greece. Cambridge University Press: Cambridge.
- 8) Gourgouris, A.(1996) Dream Nation: Enlightenment,colonization,and the institution of modern Greece. Stanford university Press: Stanford.
- 9) GutsMuths, J.(1957) Gymnastik für die Jugend. Quellenbücher der Leibesübungen. Wilhelm Limpert Verlag: Dresden. (Reprint of 1793) .
- 10) Jahn, F.L., Eiselen E.(1960) Die deutsche Turnkunst. Sportverlag: Berlin.(Reprint of 1816).
- 11) Kerenyi, K.著 高橋英夫,植田兼義訳 (1975) ギリシアの神話 : 英雄の時代. 中央公論社.
- 12) 高津春繁 (1974) ギリシア喜劇全集.第一巻, 人文書院
- 13) McGrew, W.W. (1985): Land and Revolution in modern Greece, 1880-1881. The Kent University Press:
- 14) Pausanias, *Description of Greece*. Loeb Classical library.
- 15) Platon, *Politeia*. Loeb Classical library.
- 16) Ross, L.(1848) Reisen des Königs Otto und der Königin Amalia in Griechenland, Vol.1, Halle.
- 17) Rydell, R.W.(1984) All the World's Fair. The University of Chicago Press: Chicago and London.
- 18) Travlos, J.(1971) Pictorial Dictionary of Ancient Athens. Thames and Hudson: London.
- 19) Turner, F.M.(1981) The Greek heritage in Victorian Britain. Yale University Press: New Haven and London.
- 20) Winckelmann, J.J.著 中山典夫訳 (2001) 古代美術史. 中央公論美術出版. (Winckelmann, J.J.(1764) Geschichte der kunst des Altertums.)
- 21) Winckelmann, J.J.著 澤柳大五郎訳 (1974) ギリシア美術模倣論.座右宝刊行会. (Winckelmann, J.J.(1755) Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in der Mahlerey und Bildhauer-Kunst.)
- 22) Xenophon, *Memorabilia*. Loeb Classical library.
- 23) Xenophon, *Hipparchos*. Loeb Classical library.
- 24) 吉見俊哉 (1992) 博覧会の政治学.中公新書
- 25) Ziller, E. (1860) Ausgrabungen am Panathenaischen Stadion auf Kosten S.M.des Königs von Griechenland. Verlag von Ernst und Korn: Berlin.

謝 辞

本論文作成にあたり、指導の労をお取り下さいました早稲田大学の寒川恒夫先生、蔵持不三也先生はじめ、多くの方々にお世話になりました。この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

私がアテネに滞在中に、ギリシャ人のクリサフィス (Chrysafis) が著した「近代国際オリンピック競技会」(1930年) というタイトルの本を探していた時、当時国際オリンピック・アカデミーの会長をされていたオットー・シミチェック (Otto Symczek) 氏が、ご自身の所有されている貴重な本を事務所のロッカーから取り出し、サインして寄贈して下さいたことは、今でも忘れません。

その文献との出会いにより、近代ギリシャのオリンピア競技祭の研究が始まりました。アテネにある国立図書館や、アメリカ考古学協会の所有となっているゲナデウス図書館、さらにはドイツ考古学協会、イギリス考古学協会の図書館に足を運び、関連史料を集めることができました。近代ギリシャ語の文献の解読は、思うようにはかどりませんでした。カリフォルニア大学のデイビッド・ヤング (David Young) 氏や、ギリシャ人研究者のコスタス・ヨルギアデス (Kostas Georgiades) 氏にもお会いできたことから、彼らの優れた先行研究を活用しながら、自分の視点でまとめることができたと思います。

ここに改めてご教示いただいた関係各位に謝意を表します。

近代ギリシャのオリンピア競技祭は、スポーツのほか、産業製品の発展を期して始められましたが、これは、いにしへの伝統を、当時の社会にどのように解釈して展開しようとしたのか、ということを示しています。その後の競技種目の変容も、当該社会における古代オリンピア競技祭の解釈の成せる業でした。過去からの伝統を、当該社会にどのように生かしていくのかということ、政府や知識人、そして篤志家たちの視点で取り組んだと言えるでしょう。

ギリシャのオリンピア競技祭が歩んだ過程、すなわち、産業博覧会と運動競技とがともに行われたオリンピア競技祭 (1859年) から、人々の古代オリンピア競技祭における運動競技復興への関心の高まりによる、古代競技と

関連させたオリンピア競技祭（1870年）への移行は、近代国際オリンピック競技会においても同じような経過を辿りました。ギリシャでは、古代に使用されていたパンアテナイ競技場の復元がその象徴的なことであり、近代国際オリンピック競技会では、国際博覧会と共催で行われた大会と決別する1912年以降の競技会は、スポーツ中心のオリンピック競技会になりました。

それでも両者ともに、芸術的成果の尊重を忘れてませんでした。ギリシャでは、1870年の第二回オリンピア競技祭では既に、産業製品の競技の一分野として芸術競技が行われていたし、近代国際オリンピック競技会においても、1912年の第五回オリンピック競技会から、Coubertinの肝いりで芸術競技が導入されました。芸術競技の中身も、絵画、彫刻、建築、音楽、詩歌（文学）というもので、奇しくも両者同じ内容でした。

芸術競技は、ギリシャでは知的競技（思想、劇など）も加わり、1906年にアテネで行われた中間オリンピック競技会では、文化的なプログラムが多く実施されました。近代国際オリンピック競技会においても、第二次大戦後は文化プログラムとして、各大会の開催地を中心に展開されています。

このように、古代オリンピックの復興を近代社会に適応させるために考えた人間の知恵は、運動競技のみならず、芸術や知的文化との関連に行き着いたものと思われまます。

最終的にギリシャ人たちは、芸術・知性、教育などの面をオリンピア競技祭とともに、発展させていくことになりました。古代オリンピア競技祭の復興を真摯に考えていけば、教育、文化、芸術的な側面の発達に行き着くことを示したのかもしれない。人類の文化的な発展に寄与するのが、本来のオリンピック競技会であり、それらを含めて、オリンピック・ムーブメントなのだというのを改めて学ぶ場ともなりました。

今後行われるオリンピック競技会や開催都市から発信されるオリンピック・ムーブメントが、そのことを指し示すものであってもらいたいと思います。

2009年10月2日にコペンハーゲンで行われた国際オリンピック委員会総会にて、2016年に開催される第31回オリンピック競技会は、ブラジルのリオ・デジャネイロで行われることに決定しました。二度目の開催をめざした東京は残念ながら、その夢を達成することはできませんでした。

私も東京オリンピック招致委員会には、さまざまな立場に関わり、オリンピック招致には超えなければならない課題がいくつか発見できましたが、

最も大事なことは、オリンピック競技会を通して、人類の文化をどのように発展させていくのか、という視点ではないかと思います。

2016年の南米初開催となるオリンピックは、人類の文化的な発展という面においても、南米らしさを表現するオリンピック・ムーブメントをいかに発信する祭典になってもらいたいと思います。

最後に、本研究の完成を長い目で応援してくれたわが妻に、感謝の気持ちを捧げたいと思います。

2010年7月3日

真田 久